刀と信念を受け継いだ転生者

グッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刀と信念を受け継いだ転生者

【Ｎコード】
Ｎ１６３３Ｒ

【作者名】
グッチー

【あらすじ】
紀元二世紀末、漢王朝は衰退し、世は乱れに乱れていた。
そんな折、ある一人の武芸者が未来で一度生を終え、この時代に転生した。
過去に犯した過ちを繰り返さぬよう、ある決意を胸に新たな生を歩き出す。
恋姫†無双の二次小説です。原作沿いではなく、アニメ沿いになります。

プロローグ（前書き）

皆様こんにちは。
今後ともどうかよろしくお願いします。

プロローグ

ここは……どこだ……？

俺は……死んだのか……？

『はい。貴方は死にました』

……誰だ？

『私は……貴方方でいう神、ですね』

神……？

『はい。そうなります』

俺は……死んだんだろ？

『はい』

何故死んだ……？

『覚えていませんか？』

……いや、いい。聞きたくはない。

『そうですか』

俺は……これからどうなる？

『転生します』

なんだと・・・？

『もう一度言いましょうか？』

・・・いい。

人間は誰でも転生するのか？

『いえ。貴方は特別に選ばれました。理由を話しましょうか？』

いい。興味はない。

『そうですか。では、転生します。よろしいですね？』

待て。二つ聞かせろ。

『何でしょう？』

俺が転生される目的は何だ？

『貴方は転生した後、貴方にとってかけがけのない人物に出会うでしょう。その人物をお護りして頂きたいのです』

・・・もう一つだ。

“あれ”を寄越せ。

『確認します。“あれ”とは、前世に貴方が望んでいたものでよろしいですね？』

ああ。頼んだ。

『承知しました。では、転生致します』

俺は、光に包まれた。

出会いは黒髪の山賊狩り（前書き）

はい。本編スタートです。
それにしても、戦闘描写難しい……。変になってしまいましてすいません。

とにかく、どうぞ。

出会いは黒髪の山賊狩り

ここは…知らなくて当たり前だな。
俺は転生した、それだけのことだ。問題は俺が転生された目的だな。
いや、考えても仕方ない。俺のかけがけのない人物だ。必ず解る筈だ。
さて…俺が望んだものは、よし、あるな。

スラ…

よし、間違いなさそうだな。俺が望んだものだ。
辺りは…森の中か。俺がするべき行動は何だ?

「行くしかない、か…」

歩き続けた。だいたい一刻くらい歩いたか…?

「どこだ…?」

迷った…。
いや、当然といえば当然だ。知らない場で無闇に歩けば、誰であろうとこうなる。とにかく今は、町か村に出るまで歩くしかないな。

「…っ!き…!」

…何だ?
遠い…が、微かに聞こえた。男と女の声…これほどの山中…追いはぎか?

「行くか・・・」

どうやら俺の勘は外れたようだ。追いはぎではない。が、良いことでもなさそうだ。

見れば、黒髪の女と柄の悪い男三人が対峙している。何だ・・・？

「こいつ、黒髪の山賊狩りですぜ！」

黒髪の山賊狩り・・・あの女のことか？

山賊狩りか・・・、確かに良い得物を持っている。偃月刀か？

「構うこたぁねぇ！やっちまえ！」

男三人が飛び掛かった。

俺は一瞬出る構えをとった。が、

「ふっ！」

一蹴。得物を振り回し、いとも簡単に打ち負かした。が、振り払っただけだ。まだ終わってはいない。・・・行くか。

「待つでござる」

『！？』

俺はゆっくりと姿を現した。

「何だ！？貴様は！？」

「放浪者でござる。それくらいにしておいたらどうだでござるか？」

「貴様！もしや、賊の仲間か！？」

賊。やはり、この男三人は賊か。

「何の誤解かは知らないでござるが、この辺りにしておいてはどうでござる？」

「問答無用！」

黒髪の女が俺に向かって来た。俺は構え、偃月刀を振り下ろすと同時に自分の得物を抜いた。

キィン！

金属音。お互いの得物がぶつかった。

「なっ！？」

初合を止められたことにそれほど驚くか？確かに、かなり腕が立つようだが・・・。

「おい」

俺は女と向き合ったまま後ろの賊に言い放った。

「今回は見逃してやる。早く行け」

「は、はいぃぃ！」

後ろにいた賊が逃げていく気配がする。さて、と‥‥、

「‥‥何の真似だ?」

鍔ぜり合いの中、聞こえた女の声。

「賊とはいえ、殺すことはないでござろう。拙者は止めただけでござる」

「貴様が賊ではないことは解る。相当な腕を持っていることも解る。だが、相手は賊だ!」

最後だけかなり強調されていたな‥‥。

「そうでござるな。とにかく、先ずは貴殿の得物を収めてはくれないでござるか?敵対するつもりはないでござる」

「‥‥」

無言。だが、得物を引いてくれた。

「私の質問に答えろ!返答次第では、ただでは済まさん!」

ふぅ。どうしたものか‥‥?

「殺す必要はないでござろう?」

「‥‥もういい!」

身を翻し、俺に背を向けた。

「待つでござる。どこへ行くでござる?」

「貴様には関係ない!ついて来るな!」

やれやれ。何なんだ?ともかく、俺は去って行く女の後ろ姿を見送った。

しかし、あの女はどこへ行くつもりだ?山を抜けるのか?だったらついて行くべきだったか?

・・・いや、あの女が歩いて行った方向はどう見ても山を下りる方向ではない。だとすれば・・・、

「・・・しまった!」

「けけけ、まさか俺たちを追って、たった一人で俺たちのアジトに来るとはな」

「さっきの借りを返してやるぜ」

「ふん!賊に遅れをとるこの私ではない!」

とは言ったものの、如何せん数が多い。だが、退くわけにはいかん!

「この青龍偃月刀の錆になりたくば、かかって来い!」

宣言と同時に賊共が躍りかかって来た。私は躍りかかって来た賊共に向けて青龍偃月刀を振るう。一人、二人と薙ぎ倒す。

「はあああああっ！」

私は青龍偃月刀を振るい続けた。

～～～～～

「はっ、はっ、はっ・・・」

「へ、へへ。なかなか頑張ったみたいだが、これで終わりだなぁ！」

「くっ・・・まだまだ！」

だが、何度薙ぎ倒しても湧き出てくる。後何人いるというんだ・・・？

「喰らえ！」

「なっ！？くっ！」

ザシュッ！

「くっ・・・弓か・・・」

当たってしまったか・・・。しかも当たったのは足・・・。

「へへ、これで動けねぇだろ？」

「くっ・・・・」

確かにこれでは満足に動くことも出来ん・・・・。

「へへ、じゃあな！」

剣を振りかざしている。ここまでか・・・・。

キィン！

「なっ！？」

「・・・間に合ったようだな」

何故、こいつがここにいる・・・・？

「・・・・間に合ったようだな」

間一髪だったか・・・・。しかし、最期の瞬間まで目を閉じないとはな。大したものだ。

「な、何故お前がここに・・・・？」

「・・・済まないでござる。遅くなったでござるな。ここまでの道順が解らなくて、あちこち駆け回ったのでござる」

だが、今はそれよりも、

「無事で何よりでござる」

「・・・・」

無言か・・・・。まあいいだろう。

「動けない筈でござる。そこでじっとしているでござる」

俺は賊に向かって一歩踏み出した。

「次はてめぇがやるってか！？」

「・・・先に言っておく。無闇に怪我人を出したくはない。怪我をしたくない者は下がれ」

「ふざけんな！出るのは死人だけだ！」

・・・仕方がないな。

俺は自分の得物を振るった。

『ぎゃあ！』

『があっ！』

『！？』

この場に居合わせている者のほとんどが目を丸くしている。だろ

うな・・・。

「な、何だ!?四人五人がいっぺんに・・・!」

「よ、妖術か!?」

「・・・さあな」

賊の問答に興味はない。さっさと片付ける。
俺は自らの得物を振るい続けた。

「な、何だってんだ!?」

「これは妖術ではない・・・。これは、速さだ!身体のこなしの速さ、相手を読む速さ・・・。全てを最大に活かし、複数を同時に相手にしているのか!」

・・・流石に黒髪の女は解るようだな。大したものだ。

「ぐえっ!」

今ので最後か・・・。
いや・・・まだ親玉がいたか。

「・・・お前たちは、昼に会った者達だな?」

「ひぃっ!」

「お、お助けを!」

「…悪いが、一度見逃した筈だ。二度見逃すほど、俺は甘くない」

「ひぃぃぃっ！」

「しばらく延びていろ」

ガン！ガン！ガン！

ぱたっと倒れた。やれやれ…。

ともかく、黒髪の女は無事だ。何よりだな…。

出会いは黒髪の山賊狩り（後書き）

出会いは言うまでもないですね。あの人です。一応まだ名乗っていないので、名前は伏せておきます。

それでは、グッチーでした。

旅立ちは決意から（前書き）

主人公の名前と素性が少しだけ明らかになります。それから、主人公は鈍感です。

それでは、どうぞ。

旅立ちは決意から

さてと・・・賊は倒した。次だな・・・。

「大丈夫でござるか？」

俺は黒髪の女に歩み寄り、声をかけた。

「あ、ああ・・・」

「立てるでござるか？」

「ああ・・・っ！」

矢傷か・・・。立てそうもないな・・・。仕方がない。

ひょい

「なっ／／！？何をする／／！？」

「・・・騒がないで欲しいでござる。ここにいるつもりはないでござろう？」

俺は黒髪の女を抱え、外へ出た。

～～～～

俺は黒髪の女を抱えて山中にある小川まで来た。賊の下に行くまでに見付けておいたものだ。

「…よし。ここなら問題ないでござろう」

「は、早く降ろしてくれ…／／」

顔を赤くしているが…どうかしたのか？

だが、とりあえず足を除けば目立った傷はない。俺は素直に黒髪の女の言に従った。

「足を出してみるでござる。見たところ、それほどの傷ではなさそうでござる」

「ああ…済まぬ」

俺は軽く足の治療をした。やはり大した傷ではなかった。一日安静にしておけば、すぐに治るだろう。

「危ないところを救って頂き、感謝する」

「気にする必要はないでござる。貴殿が無事で何よりでござるよ。それより、日が落ちてきたでござる。これから山を下りるのは危険でござろう」

そもそも、黒髪の女はろくに動けないだろうしな。

「少し待っているでござる。食料を採ってくるでござる」

「いや、私も…っ！」

「動かないでござる。じっとしているでござる」

そう言い残し、俺は小川に歩き出した。

〜〜〜〜〜

取れた魚は六匹。二人で食べるには十分だろう。俺は黒髪の女の傍で火を起こし、魚を串焼きにした。

「済まぬ。何から何まで・・・」

「気にするな必要はないでござる。これは昼の謝罪でござる」

「お主・・・人には殺すなと言っておきながら、自分では斬殺しなかったか？」

・・・気付かなかったのか？

「拙者は誰も殺していないでござる。拙者の得物で殺すことは不可能なのでござる」

「・・・どういうことだ？」

「これを見るでござる」

俺は自分の得物を抜き、黒髪の女に渡した。

「これは？」

「逆刃刀という刀でござる」

「これは‥‥本当に刀なのか？」

「正真正銘、刀そのものでござる。峰と刃が逆になっているでござるがな。それなら普通に使っても人を殺すことはないでござる」

骨の数本は折れるだろうがな。

「お主ほどの武芸者が何故そのようなことを‥‥？」

「‥‥拙者は自らに不殺の誓いを立てているでござる。人が死ぬところを、出来得るだけ見たくないのでござる。救える命があるのなら、なるだけ助けたいのでござる」

「‥‥お主の気持ちは解る。しかし！」

更に何か言おうとしたが、俺は手で制した。

「言わずとも解るでござる。拙者が甘いことを言っていることくらいは、重々承知しているでござる。

拙者は他所から流れて来た者でござる。今の世がどうなっているのか、全く知らないでござる。だが、今日のことで賊が蔓延り、世が乱れていることくらいは解ったでござる。

そんな世の中で、人を殺さずして生きていけるほど甘くはないのでござろう？まして、相手が賊となれば尚更でござる。殺さなければ殺されるということでござる」

「違う！」

‥‥違う？

「私たちはまだ良いんだ！だが、賊に苦しめられる人々はどうなる！？力無き者はどうなる！？」

……成る程。賊の下に一人で行った理由が解った。どうやら、今の世を憂いている者のようだな。

「……貴殿には、何か特別な想いでもあるのでござるか？」

恐らくあるのだろう。半ば確信めいている問だな。

「……ああ。私は家族を戦に巻き込まれて亡くした……」

「……済まないでござる。辛いことを思い出させてしまったでござるな……」

「いや。だが、私はこれ以上私のような悲しい思いをさせない為に戦っている！」

「……そうでござるか」

立派なものだ。その為の武芸なのだろうな。

「お主は相当な武芸者だろう？今日のことを考えれば誰でもそう思う。

お主は何故その武芸を学んだのだ？お主も何かを想い、その武芸を身につけたのではないのか？」

「……そうかもしれないでござるな」

俺がこの剣術を身につけた理由。正確には、あの神とやらに与え

て貰った理由。
前世では傷付き倒れる者、死んでいく者を数多く見てきた。だが、それは俺だけではない。相手も同じだということに、気付いた。気付いてしまった、というべきか。

「貴殿はその悲願を達するべく、何をするでござる？」

「・・・まだ解らない。それを見付ける為に旅をしている」

成る程な。
俺も、前世ではそうだった。力無き者の為、自らの刀を振るった。時には、陰で秘かに手を汚してきた。その方が多いだろう。より多くの幸福を、この目で見たかったからだ。
俺は自らの正義を信じ、当時の乱れた世を変える為、動乱に身を投じた。俺に出来得る限り、その想い一心で・・・。
だが、決して忘れてはいけないことを、俺は忘れてしまっていた。俺が戦う理由を、人々の為と想い刀を振るった理由を、切り捨ててきた者達も同様に持っていたことを俺は忘れていたんだ・・・。

「旅先でそれを見付けたとして、貴殿はその勇を振るうのでござろうな・・・」

やがて、動乱は終わりを迎えた。同胞達が次々と士官する中、俺は刀を捨て、一人旅に出た。宛も無く、ろくなものも食わずに、たださ迷い続けた。
そんな折、一人の同胞を見掛けた。俺と同様に士官しなかった同胞を。
だが、この同胞は俺とは全てが違っていた。帯刀を禁じられた世で、一人刀を振るい続けていた。逆刃刀という、不殺の刀を。新時代を作り、尚振るい続けることで時代を護り、虐げられる人々を護

り続けていた・・・。
その同胞の所業を、俺は何故かこと細かに覚えている。その時、俺が強く望んだことも。
今思えば・・・この記憶と渇望は、あの神に与えられたものなのかも、しれないな。

「・・・どうした?暗い表情をしているが、何か思うことがあったか?」

「・・・いや、気にしなくて良いでござる」

「お主には、人々を憂える想いはないだろうか?もしその想いが僅かでもあるのなら、この荒んだ世を変える為、私と共に戦って欲しい!」

ない訳ではない。いや、あの同胞のお陰でその想いは再び甦った。
俺が神に望み、手に入れた逆刃刀と、あの同胞の剣術、飛天御剣流。
ならば、今一度この刀を手に、立ち上がるべきか・・・?

「・・・良いのでござるか?拙者はまた、昼のように貴殿を止めるやもしれないでござるが?」

「構わぬ。私とて、やり過ぎは良くないだろう」

・・・この者は、俺のように、いや、違うな。俺達のように過ちを犯さなければ良いが・・・。
いや、それも違うな。過ちを犯さないように、俺がいるのだろう。

「・・・拙者は他所者でござる。世の情勢など知らないし、地理も全

く解らないでござる。何かと手にかかるやもしれないでござるが、よろしく頼むでござる」

「ああ！もちろんだ！」

これで、俺の第二の人生が始まったのか……。この黒髪の女……そういえば、まだお互い名乗ってもいないな……。

「失礼ながら、貴殿の名を聞きたいでござる」

「これは失礼した！命を救って貰った身でありながらまだ名乗っていなかったな。
では改めて。我が名は関羽、字は雲長。以後、よろしく頼む」

関羽、雲長……。
日本ではないとは思っていたが、まさか中国とはな……。

「拙者は……」

そういえば、何と名乗ろう？前世の名か？いや、第二の生だ。ここは……、

「拙者の名は剣（つるぎ）でござる」

「剣……。それだけか？」

「拙者は他所者でござるから。自らの名はこれだけでござる」

「そうか。では改めて、よろしく頼む、剣殿」

「こちらこそ、関羽殿」

かの同胞よ……。

どこからか見ているだろうか？

厚かましい話だが、貴殿の剣と信念、遥か遠き地で引き継がせて頂く。

どうか、この俺を見守っていて下され……。

旅立ちは決意から（後書き）

はい。後書きではこれから次回予告をしたいと思います。カモン！

剣「‥‥何だ？」

暗いですね。何故？

関「気が乗らないそうだ」

なんっでですか！？これ程の美女の下に転生したんですよ！？

剣「‥‥何のことだ？」

関「‥‥」

すいません。鈍感でしたね。

剣「‥‥次回予告だ。
共に旅を始めた俺達だが、他人行儀なのは相変わらずだった」

関「しかし、それは止めようということで‥‥」

剣「次回、『真名は友好の証』よろしくな」

無視して最後までいったよ、この二人‥‥。

真名は友好の証（前書き）

まだアニメの1話には入りません。この話は題名通り、真名に関する話です。

短いですが、どうぞ。

真名は友好の証

俺が転生された日から数日。
関羽殿の足はすぐに治り、俺達は山を降りた。それからは各地を転々とし、全国を回るらしい。
旅の途中で、俺は関羽殿に様々なことを聞いた。
今は紀元二世紀末、漢王朝は乱れ、それに乗じて世が乱れ、賊が出没したと。そんな世を変えるべく、天下に志を抱く者が頭角を現しているとか。
聞いたことは様々あったが、まさか俺の生きていた時代の遥か古とは思わなかった・・・。この世界の神秘なのだろう。
それから、もう一つ。聞いたことではないが、改めて思うことがあった。今まさに俺の隣を歩いている関羽殿のことだ。
出会い頭では容姿を注意して見ることなどなかったが、こうして見てみると、なかなかどうして・・・。
端正な顔立ち、無駄のない四肢、特徴的な長い黒髪。それから、豊満・・・で済むか解らぬ胸。前世ではこれほどの美女に出会ったことはなかったな。
しかし、容姿は良くても料理の腕は何とも・・・。食べられなくはないが、進んで食べようとは思わないな・・・。
前世といえばだが、俺自身について気付いたことを少し語っておこう。前世では三十路を越えていたのだが、随分若返っているようだ。およそ二十歳前後、だと思っている。それから、身体能力が増している。恐らく飛天御剣流を使えるようにだろう。
余談であったな。
関羽殿は旅に出て長いらしい。これからどうするか決めあぐねているようだ。

「やはり・・・どこかの大守に士官するべきだろうか？」

「焦ることはないでござろう。自身に合うやり方が必ずある筈でござる。それを見付ける為の旅でもあるのでござろう？」

「・・・そうだな。その通りだ」

しかし・・・士官するとなれば、俺はどうするべきか・・・。

飛天御剣流はその強力過ぎる力故、権力や派閥に属すことを禁じられている。あくまでも自由の剣として、時代時代の苦難から人々を護ること、それが飛天御剣流の理。つまり、俺が士官することはない。

いや、考えるのは止そう。来るべき時に考えれば良い。

「そういえば、そろそろ村に着く筈だぞ」

「そうでござるか。しかし関羽殿、路銀はあるのでござるか？」

「・・・いや」

旅に路銀は欠かせぬもの。それも女となれば特にだろう。断っておくが、俺が原因ではない。元々ないのだ。街に出れば、それなりに働けると思うのだが・・・。

「なに。店の女将に頼み込みば泊めてくれるだろう」

旅は道連れ、世は情け、か。

「そう上手くいくことを願っておくでござる。関羽殿」

「・・・ふむ」

「どうかしたでござるか？」

「いや、共に旅を始めて早数日。そろそろ他人行儀は止めにしないか？」

……成る程な。

「拙者はそれほど遠慮して話しているつもりはないのでござるが」

「……そうか。剣殿は他所から流れて来たんだったな」

「何か拙者が知らないことがあると？」

「真名というものを知っているか？」

「……いや、知らないでござるな」

確か、性、名、字の三つが中国の呼称だった筈だが、それ以外にもあるということか？

「真名とは親しい者同士が呼び合う名だ」

「そうでござるか。それは知らなかったでござる」

「どうだろう？剣殿には、私の真名を授かって欲しいのだが」

「……良いのでござるか？」

「ああ。共に旅をする仲として、是非授かって貰いたい」

「そういうことなら、授からせて頂くでござる」

「では改めて。我が名は関羽、字は雲長、真名は愛紗という。この真名、剣殿に授けたい」

「承知したでござる。改めて、旅の共をさせて頂くでござる。愛紗」

それを聞いてか、優しげに微笑んでくれた。

「しかし、剣殿には・・・」

会話の途中ではあったが、それを遮った。

「剣で良いでござる。そう呼んで欲しいでござる」

「そうだな・・・。剣、で良いのだな？」

「それで、どうしたでござる？」

「いや、本当に名は剣だけなのかと思ったんだが・・・」

「・・・拙者の名は、正確にはない訳ではないでござる。だが、流れる時に他の物と共に置いてきたでござる。剣という名以外は本当に持ち合わせていないのでござる」

「・・・済まない」

「気にすることはないでござる。当然の疑問でござるよ」

俺が持っている物は、腰に差している逆刃刀ただ一つ。それ以外は持ち合わせていないしな。

「…そう暗い表情をしないで欲しいでござる。拙者は愛紗には笑っていて欲しいでござる」

「なっ／／！？」

「…何かいけなかったでござるか？」

「い、いや！そ、そうだな！やはり笑っているのが良いな！」

…何だ？俺は何か可笑しいことをしたか…？

いかん…。

剣の言につい取り乱してしまった…。

しかし、何もあのようなことを言わずとも…／／。

そ、それに、兄者を除けばそんなことを言われたのは初めてな訳で…。

「し、しかし、剣は旅に随分慣れているようだな」

…何を言っているのだ私は！

「…初めてではないからな。しかし、俺より愛紗の方が凄いのではないか？女の身でありながら一人旅とは」

「いや、それほどでも‥‥」

ん?俺?

「剣、お主は先程まで拙者と言ってなかったか?」

「‥‥気に障ったか?他人行儀ではなく、普段の人称で話したのだが‥‥」

「ふふ。いや、それで構わん」

「‥‥ふっ」

「ん?どうした?」

「いや、やはり笑っているのが良い、そう思ってな」

なぁっ//!?

「ん‥‥?」

はっ!

「ど、どうかしたのか?」

「これは?」

「ほぉ、桃か」

「桃……。そうか、綺麗だな」

「ああ。そうだな……」

あれは……！

「村だ。ここを抜ければ村に着くぞ」

「そうか……」

私の旅の共をする、命の恩人である剣。隣にいてくれるだけで、どこか落ち着く。しかし……同時に感じるこの胸の高鳴りは一体何なのだろうか……？

真名は友好の証（後書き）

では、次話予告～。

剣「村に着いた俺達」

愛「・・・何だ、あの悪ガキ共は」

剣「・・・そう機嫌を悪くするな。皺が増えるぞ」

愛「誰がだ！」

剣「・・・次回、『鈴々山賊団』よろしくな」

愛「話を流すな！」

鈴々山賊団（前書き）

アニメ第一話に突入です。
ほぼアニメ通りですけどね。

では、どうぞ。

鈴々山賊団

この道を真っ直ぐ行けば村に着くな。

「これは・・・・」

墓石か・・・・？

「最近はこの辺りまで賊が出るようになってのぅ・・・・」

歩いて来た老人か・・・・。

「身ぐるみ剥がされて殺された者も何人もおってな・・・・。花はそん人等へのせめてもの手向けじゃよ・・・・」

「そうだったのですか・・・・」

愛紗と共に祈祷する。来世で、幸福になってくれ・・・・。

「お役人様がしっかりしとったら、こんな物騒なことは起こらんじゃろうに・・・・」

・・・悲しい背中だ。隣の愛紗の表情も、な・・・・。

とにかく、村に着いた。俺達は門をくぐり、村の中へ入った。が、活気があるとは言えないな・・・・。それだけ乱れた世だということか・・・・。

ん・・・・？

「出たぁー！」

「賊か！？」

愛紗がいち早く反応した。が、

「うわぁっ！」

鳥が愛紗の前を飛んで行った。

「愛紗、前を見て歩かなければ危ない」

「済まん……」

で、今のは……、

「どけどけー！鈴々山賊団のお通りなのだー！」

子供？数人の子供が群れているだけか……？

「うわぁっ！」

愛紗が呆気に取られている隙に、俺達の傍を通り、愛紗が尻餅をついた。

「はうっ！」

同時に履物を隠す。やれやれ……。

「大丈夫か？」

愛紗に手を差しだした。

「す、済まぬ……／／」

俺は愛紗を立たせた。

「何なんだ……？」

「さてな……」

そんな騒動があったが、もう日が暮れかけていた。

俺たちは料亭に入り、飯を頂いた。

「一体何なんだ？あの悪ガキ共は……」

愛紗はまだ機嫌が悪そうだな。

「鈴々山賊団と名乗っていたが……」

「その名の通り、鈴々って子が大将の悪ガキ集団さね」

愛紗の問に、料亭の女将が答えている。

「まあ、やってることといえば、畑荒らしたり、豚に悪戯したりってとこだけどね」

成る程な……。

何かをやりたくて仕方がない、やっていなければ落ち着かない、といったところだろうな……。

「女将、その悪戯に、何らかの原因はあるのでござるか？」

ある。そう踏んでの問だがな……。

「あの子……親がいないんだよ……」

そういう理由か……。

愛紗と同じく、賊に家族を奪われたらしい。あの小さな子が独り身では……羽目を外したくもなる、か……。

「ところで女将、実は、折り入って頼みがあるのだが……」

「頼み？」

「私たちは旅の者で、今晩泊まる所もないのだ。どうか一晩、泊めては貰えぬだろうか？」

頼んだか……。

やれやれ、俺は野宿でも構わぬが、女の愛紗にとっては多少辛いのかもしれないな……。

「ふぅん……。それは別に構わないけど、熱い夜を過ごすのだけは勘弁して欲しいねぇ……」

「なっ／／！？それはどういう……／／」

「いや、それはやっぱり……」

「私たちはそんな間柄ではない／／！」

「そうなのかい？もったいないねぇ、こんな良い男を連れておきながら抱いて貰わないなんて」

「な・・・な・・・／／」

破裂寸前だな・・・。

どこ吹く風と聞き流していたが・・・。

「余りからかわないで欲しいでござるな、女将。拙者達はただの旅の共、そういった感情は持ち合わせていないでござる」

「むぅ・・・」

「へぇ、そうなのかい」

にやにやと笑みを零しながら言う。

「それで、今晩泊めて頂けないでござるか？」

「良いさ。ただし、店の手伝いをして貰うよ」

「承知したでござる。

良かったな、愛紗」

「・・・ああ」

・・・どうかしたのか？

「はぁ。あの女将、何気に人使い荒いなぁ……」

「そう言うな。泊めて貰っている身だ」

……釈然としないのは、剣も同じだ。
た、確かに私たちはそういう関係ではないが、もう少し気にしてくれても良くないか……？

「……どうかしたか？」

「いや。何でもない」

「……？」

しかし、剣は良い男と見られるのか。いや、今はそうではないな。
あの鈴々という者も、賊に家族を奪われたのか……。

「なぁ……剣……」

「……」

返事がない……？
普段はすぐに返ってくるのだが……。

「剣？」

「……スー……」

「って、寝てるのか！？」

本当にもう少し気にしてくれても良くないか！？

「……スー……」

起きない……。

「はぁ……。寝よう……」

翌日。

「ハァッ！」

愛紗が大根を切っている……のだが、何故投げ上げて切る？

「大したもんだねぇ。けど、もう少し普通に切れないのかい？」

「ちゃんとした料理は、余りやったことがないので、つい……」

ついでそんな切り方をするものなのか……？

「あんたは普通みたいだねぇ」

「野菜を切るくらいは普通でござるよ」

「まあいいさ。それが済んだら次は、薪割りと店の掃除、それから山へ行って芝を刈って来ておくれ」

「いや、あの‥‥本当にちょっと人使い荒くないか‥‥?」

愛紗涙目。仕方ないな。

とにかく、愚痴を零しても仕方がないので、山へ。

「はぁ‥‥」

「そう溜息をつくな、愛紗」

「‥‥」

「‥‥どうした?」

ぷいっと、顔を背かれた。まだ機嫌が悪いのか?

「良いですな?相手は子供というても、手の付けられん暴れ者!油断は禁物ですぞ!」

‥‥何だ?

何か役人が兵を連れて騒いでいるように見えるが‥‥?

「何かあったのですか?」

「何でも、今からお役人に鈴々を捕まえて貰うんですって」

‥‥相手はまだ子供だろう?何を向きになっている?

「庄屋様、こないだの悪戯が相当頭に来なさったらしくて・・・」

やれやれ・・・。子供相手に大袈裟なことだ。

「だ、そうだが、どうする？」

「決まっている」

愛紗が歩を進める。そう来なくてはな。

「庄屋殿！話の途中で申し訳ないが・・・」

「何だ、お前達は？」

「私の名は関羽、字を雲長と申す者」

「拙者は剣という者でござる」

「私達は旅の武芸者で、聞く所に依ると、鈴々なる者は大人でも手を焼く暴れ者とか。万が一不覚を取って、怪我をされてもつまらぬでしょう。

ここは一つ、私達に任せては貰えませぬか？」

「あんた等が？本当に強いのか？」

「腕には些か覚えがあります。いくら暴れ者とはいえ、所詮は子供。本物の山賊に比べれば」

「もしや貴様が、最近噂の山賊狩りでは？」

「いや、自分からそう称している訳ではないが・・・・」

何だ？やけに嬉しそうだな。

『ええっ！？』

「黒髪の美しい、絶世の美女と聞いておったが・・・・噂っちゅうもんは当てにならんな」

「え～っと・・・それはどういう意味かな・・・・？」

「・・・俺は噂通りだと思うがな」

「ん？剣、何か言ったか？」

「いや、何でもない」

ともあれ、この件は俺達に任された。どうなることやら・・・・。

～～～～～

「この一本杉を左へ入れば、後は道なりと言っていたな」

俺達はその道なりを歩く。

ん？殺気・・・・？

ではないな。この感じは温過ぎる。怒気、といったところか。木の上からだが・・・・。

ビュッ！

石が投げられてきた。
俺は鞘のまま抜き、石を弾いた。

「何奴!?」

「こっからは鈴々山賊団の縄張りだ!役人の手先は、とっとと帰れ!」

子供か・・・。
鈴々山賊団の一員だろうな。

「鈴々と話がしたい。案内しては貰えないか?」

「うるせぇ!喰らえ!」

石を更に投げてきた。

「こら!止めんか!当たったら危ないだろう」

とはいえ、当たることなく俺一人で石を全て弾く。この程度で当たる筈もないな。

「ええい!めんどくさい!」

愛紗、何もしてないだろう?

「ふっ!」

愛紗が駆け出し、子供がいる木を斬った。その弾みで木が倒れる。
少しやり過ぎではないか?

「うわっ！うわあぁぁっ！」

だが子供が地面に叩き付けられることはなく、愛紗の青龍偃月刀で助けられていた。

「た、助かった……」

「それはどうかな……？」

愛紗の表情が般若と化している。怖いな……。

ゴンッ！

「うわあああっ！」

叫び声が木霊した。

「少々やり過ぎではないか？」

「何、人様に向かって石を投げるような奴だ。あれくらいはせんとな」

厳しいな……。

まあ、懲りずに後ろからついて来ているようだから、問題はないだろう。

「や～い！ブ～ス～！」

「デ～ブ～！」

「年増～！」

「年増～！」

今度は数人か……。

しかも悪口は全て愛紗に向けら「ジャキッ！」……。

「偃月刀を引いてくれないか……？」

冷汗が止まらんのだが……。

「剣……。まさかとは思うが、今私に失礼なことを思わなかったか……？」

「……何のことだかさっぱりだが」

「……まあいい。で、誰が年増だ！誰が！」

「……何だ。自分が言われ「ジャキッ！」……何でもない。忘れてくれ」

俺の命が危ない……。

いや、待て愛紗。その先は……、

「！……なるほど、落とし穴か。子供にしては知恵を絞ったと褒めてやりたいところだが！」

気付いたか。

「はあっ！」

華麗に跳躍し、子供達の前に着地・・・って、待て愛紗！まさか・・気付いていなかったのか！？

「ぷっ！」

子供達が笑う。と、同時に偽物の落とし穴の先にある落とし穴に、愛紗が落ちていった・・・。

「落ちた落ちた！」

「ばっかで～！」

「・・・関雲長、一生の不覚！」

・・・だろうな。

やれやれ、仕方がない。

「どうする？」

「どうもするな」

「って！うわあっ！何で後ろにいるんだよ！？」

「何。愛紗が落ちて、下を見た瞬間、君達の頭上を越えさせて貰った」

その程度の跳躍なら、飛天御剣流の使い手の俺に出来ないことではない。

「ふっふっふっ……」

地獄の底から聞こえてくるような声……。俺でさえ恐怖を覚えずにはいられない……。

「無事か……？愛紗……」

地獄の底……ではなく、落とし穴から愛紗が這い上がってきた……。

『うわあああん！』

先程よりも遥かに大きく木霊した……。

子供達が半泣きになっている。流石にやり過ぎだ……。

「……オヤビンはお前等なんかに負けないからな」

「解った解った。鈴々のことは悪いようにはしないから、お前達は早く村に帰れ」

「……村に帰れば、オヤビンを役人に渡したりしない？」

「もちろん、約束する」

そう言われ、おとなしく帰っていく。が、

『ブ～ス！デ～ブ！年増～！お前等なんかオヤビンにやられちゃえ～！』

と言って、足速に帰っていった。

「はぁ・・・・」

愛紗ががっくりと肩を落とす。やれやれ・・・・。

鈴々山賊団（後書き）

では、次回予告～。

剣「鈴々こと張飛の下に辿り着いた俺達」

愛「私と張飛の決闘が始まった」

剣「俺は特に何もしない。黙って見物させて貰う」

愛「と、言いつつ手を出すんだろう？」

剣「さあな」

張「そして、戦いの後はみんな友達なのだ！」

剣「次回、『義姉妹の契り』よろしくな」

義姉妹の契り（前書き）

地震が酷く気になる中、皆様大丈夫でしょうか？
自然の力は脅威そのものですのでどうかお気をつけて。

戦闘描写が難しい。おかしな所ばかりですが何とぞ。

では、どうぞ。

「全く！確かに、あ奴らに比べれば、年上かもしれんが！」

今だに引きずっているのか？

「そう気にするな。所詮は子供の戯言だろう」

キッ！と俺を睨みつけてきた。

「だいたい、剣も少しはあの悪ガキ共に訂正しても良かったのではないか！？」

「・・・何と言えば良かった？愛紗の名を出そうとしたら、偃月刀を突き付けたではないか」

「ならば、何と言おうとしたのだ？」

「・・・余り気に障ることは言うなと」

「どういう意味だ？」

「愛紗は年頃の娘だろう？まさか、子供達が言うように年「ジャキッ！」・・・失敬。年頃の娘だな」

「解れば良い」

やれやれ。これでは命が幾つあっても足りぬ・・・。

ん・・・！

林を抜けた辺りから感じるこの覇気は。大人でも手を焼く暴れ者と聞いたが、確かに並の大人では手が付けられんだろうな・・・。

愛紗も覇気を感じ取ったのか、心なしか偃月刀を握る力が強くなった。

やがて、俺達はその子供と向き合った。

「お主が鈴々だな？」

「鈴々は真名なのだ！真名は親しい同士で呼び合う名前だから、お前に呼ばれる筋合いはないのだ！」

「成る程。では、改めて聞こう。お主、名は何と言う？」

「我が名は張飛！字は翼徳！寝た子も泣き出す鈴々山賊団の、オヤビンなのだ！」

「お主の手下は、皆村に追い返したぞ」

それを聞き、張飛が絶壁を飛び降りて来る。子供とはいえ、身軽だな・・・。

「鈴々の友達に何をしたのだ！？」

「何、ちょっとしたお仕置きをな」

「おんにょれ～！仲間の仇！十倍返しなのだ！」

「どうやら言っても聞いては貰えぬようだな」

既に張飛は臨戦体勢か・・・。

「どうする？俺がいこうか？」

「何、問題ないさ」

「そうか。子供とはいえ、油断するなよ。かなりの使い手のようだ」

俺はそれだけ言って身を引いた。

「何なのだ？二人纏めてじゃないのか？」

「張飛とやら。俺は手を出さぬ」

「面倒なのだ！纏めてかかって来るのだ！」

「ふっ。余り自惚れるなよ」

子供だから無理もないがな。

「さぁ！来い！」

「うりゃあああっ！」

始まったか・・・。

「はあっ！」

「りゃあっ！」

突けば躱し、掃えば弾く。それが繰り替えされる。お互いに得物

をそつなく繰り出し、激しい抗戦が展開された。

〜〜〜〜〜

日が暮れてきたな・・・・。

「なかなかしぶといな！」

「そっちこそなのだ！」

膂力は張飛が上、技は愛紗が上、総じれば互角か。まだ長引くな・・・・。

「はあああっ！」

「うおおおっ！」

再び、得物を交え始めた。

〜〜〜〜〜

日が完全に落ちたな。月明かりで戦っている状態か。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

「はっ、はっ、はっ・・・・」

お互い、体力も底をついて来た。そろそろ止めるべきか・・・？

「惜しいな・・・」

「は？何がなのだ！？」

愛紗もそろそろ潮時と見たか。

「これ程の強さを持ちながら、やっていることといえば、山賊ごっことはな・・・」

「余計なお世話なのだ！」

「張飛よ。お主、幼い頃、賊に家族を殺されたそうだな」

「そ、それがどうしたのだ！？」

「私もそうだ。賊に、家族を殺された」

「それが鈴々と何の関係があるのだ！？」

「お主は何も思わぬか？弱き者が虐げられるこの世の中を変えたいとは思わぬか！？」

「ううう・・・うわあああっ！」

張飛が愛紗に飛び掛かった。

ギィン！

俺は二人の間に割って入り、逆刃刀を抜いて張飛を止めた。

「何なのだ！？退くのだ！」

「・・・・」

「退くのだ！」

「・・・退かぬよ」

「どうしてなのだ！？鈴々はただ悲しくて、淋しくて！」

「・・・愛紗の言の葉、確かに貴殿の胸に届いた筈だ。だが、貴殿はこれからどうして良いか解らず、ただ暴れているに過ぎない。それではいけないのだ」

「だったら！だったらどうすれば良いのだ！？全然、全然解んないのだ！」

「・・・何を為し、何の為に己が勇を振るうのか、それは自分で考えなければならない。自らで考え、悩めば良い。必ず答は見付かる筈だ・・・・」

「うっ、うっ・・・うわあああん！」

泣き出してしまった。やはり、武芸は成熟していても、精神は子供だな・・・。

「ふぅ・・・・」

久しぶりに風呂の湯に浸かる。妙なことになったなぁ・・・。

～～～～～

「好きにして良いって・・・それは一体・・・？」

「・・・勝負の途中で泣いちゃったから、鈴々の負けなのだ」

「俺が介入したのにか？」

「別にそれは関係ないのだ」

「好きにして良いと言われても・・・私はただ、庄屋殿や村人に詫びを入れてくれれば良い。そうしてくれるか？」

「・・・うん」

「良し！謝る時は、私達も付き添ってやるから、明朝、村の入口で待ち合わせとしよう。では、帰る」

「よ、夜の山道は危ないのだ！だ、だから、今夜は泊まっていけば良いのだ！」

「私は旅に出て長い。これくらいは馴れｔモガッ！」

何だ！？いきなり口を塞がれたぞ！？

「そうだな。今晩、世話になっても良いか？」

剣！お前か！

「剣！何の真似だ！？」

「張飛の表情を見てみろ。淋しそうではないか？」

確かに・・・そうだな。

「気が変わった。今晩世話になっても良いか？」

「にゃは！」

～～～～～

ん～・・・。

気持ちが良いなぁ～・・・。

「湯加減はどうなのだ？」

「ちょうど良い加減だ」

「なら鈴々も入るのだ！」

「ええっ！？」

扉が開き、張飛が飛び込んできた。衝動で水しぶきが起こる。

「こらー！飛び込むんじゃない！」

「やれやれ…賑やかなものだ」

もう夜も更けてきているというのに…。

幸い、辺りに家のない山中。迷惑がる者はいない…いや、一人いるか。眠れん…。

「はにゃ。やっぱり鈴々のじゃ小さかったのだ」

「いや。済まぬな。寝床まで貸して貰って」

私は張飛の寝具を着ている。確かに小さいが、文句を言える立場ではないからな。

「ありゃ？もう寝てるのだ」

剣のことか。片膝を抱え、自分の得物を抱くように寝ている。

「気にするな。眠りにつくのが早いようだからな」

昨日もそうだったからな。

「この人は関羽の何なのだ？」

「何と言われても・・・」

「関羽の伴侶なのか？」

「ぶふっ／／！そうなことあるか／／！」

一体何を言い出すんだ！？

「ほ、ほら。そろそろ寝るぞ」

「うん！枕は使って良いのだ」

「済まぬな」

「しょうがないのだ。勝負に負けたのだから、一晩一緒に寝るくらい仕方ないのだ」

「何か、誤解を招きそうな表現だな・・・」

いろんな意味で・・・。

「それに・・・こんなふうに誰かと一緒に寝るのは、凄く久しぶりで・・・全然嫌じゃなくて・・・」

よっぽど淋しかったのだな・・・。

「なんか・・・母様と寝てるみたいで・・・」

「ば、馬鹿言え！私は、まだお主のような娘がいる年ではない！」

全く！本当に何を言い出すんだ！
それ以前に、私はまだ・・・子供が出来るようなことは一度も・・・。

「せ、精々姉といったところだ」

「姉だったら、お姉ちゃんだったら良いのか！？」

「まあ・・・それなら良いが・・・」

「だったら！今日から関羽は鈴々のお姉ちゃんなのだ！」

「ええっ！？」

次から次へと何を言い出すんだ！？

「いや、待て！姉だと良いと言ったのはそういう意味ではなくて・・・」

「駄目・・・なのか・・・？」

うっ・・・そんな潤んだ瞳で見られては・・・。

「駄目・・・ではないが・・・」

「わ～い！鈴々にお姉ちゃんが出来たのだ！」

「うわっ！」

そんな、飛び付かなくても・・・。
それに、私はまだ認めた訳では・・・。

「これで、これでもう夜は淋しくないのだ……」

……そうか。そうだな。

「解った。お主の、義姉に成ってやろう」

「うん！ずっと一緒なのだ！」

そうとなれば……、

「ならば、私と一緒に、旅に出てくれるか？」

「当然なのだ！」

良し。良い返事だ。

「明日は早い。そろそろ眠ろう」

「うん！」

返事をするや否や、布団を被ってすぐに寝息を立て始めた。安心した顔で……。

「剣……。起きているか？」

「……あれだけ騒がしければ当然だ」

やはり、起きていたか。

「済まぬ」

「これから、騒がしくなりそうだな」

「まあな」

あっさり認めてくれたか。

「愛紗、本当にそろそろ眠った方が良い。張飛との決闘で疲れている筈だ」

「ああ。そうさせて貰おう」

ふっ、と微笑んでから剣は目を閉じた。

そういえば、剣の自然な笑みは初めて見たかもしれないな・・・。

翌朝、俺達は庄屋殿や村人に張飛のことで謝罪に行った。皆、笑って水に流してくれ、笑顔で見送ってくれた。良い人々だな・・・。

そして、村を出て一本杉に差し掛かろうとしている。

「良かったな、張飛。素直に許してくれて。これもお前が、きちんと謝ったからだぞ」

「う、うん・・・」

思った程元気が無い。どうかしたか？

「何か忘れ物でもしたか？それとも、何か心残りがあるのか？」

恐らく、後者だろうがな。

「山賊団のみんなが、見送りに来てくれなかったから……」

成る程な。だが、それは早計だ。

「張飛。小屋の方を見てみろ」

「えっ……ああっ！」

「オ～ヤビ～ン！」

子供達が元気に張の旗を振っている。どうやら、見送りに来たようだな。

「みんな……」

子供の張飛には嬉しいだろうな。瞳が潤んでいる。

「泣くな。旅立ちに涙は不吉だぞ。人は、次に逢う時まで、別れ際の顔を覚えているものだ」

そうなのか。初めて知ったな。

「だそうだ。笑顔で手を振ってやれ」

「うん！」

張飛も自分の得物を振り返した。無論、極上の笑顔でな。

義姉妹の契り（後書き）

次回予告～。

鈴「にゃは！鈴々登場なのだ！」

愛「これで正式に予告の仲間入りだな」

剣「で、次はどこに行く？」

愛「公孫賛殿の治める町だ」

鈴「誰なのだ？」

剣「さあな」

愛「お主等は・・・」

剣「どうせ影が薄いのだ。気にすることはない」

鈴「そうなのだ。気になるのはもう一人のお姉ちゃんなのだ」

剣「次回、『趙子龍と影薄』よろしくな」

「むぅ～……」

張飛が先程から一人で難しい顔をしている。何だ？見当が付かん……。

「どうした？腹でも痛いのか？」

「可笑しいのだ！」

……何がだ？

「可笑しいって、何がだ、張飛」

「そこなのだ！」

「は？」

どうやら愛紗も解っていないようだな。

「関羽は鈴々と義姉妹の契りを結んだのに、どうして鈴々のことを真名で呼んでくれないのだ？」

なんだ。そんなことか。

「それに、お前なのだ！」

俺に指を差すな。

「・・・俺が何か？」

「名前すら名乗ってないのだ！」

・・・俺はまだ名乗っていなかったか？

「それは済まなかった。申し遅れたな。俺の名は剣だ。他所から流れて来たから他に名はないが、よろしくな」

名乗りを終え、隣の愛紗を軽く突いた。

「何だ？」

「真名で呼んでやっても良いだろう？でないと、納得しそうにない」

どこからどう見ても、そういう顔をしている。

「解った解った。

私の名は関羽、字は雲張、真名を愛紗という。お主には、私のことを真名で呼んで貰いたい。

これでいいな、鈴々？」

「うん！」

笑顔が戻った。やれやれ・・・。

「良かったな、張飛」

「だから！鈴々なのだ！剣も、鈴々って呼ぶのだ！」

「・・・真名は親しい同士が呼び合う名だろう？」

俺はまだそんな仲ではないと思うが・・・。出逢って日も浅いしな。

「愛紗は鈴々のお姉ちゃんだから、剣は鈴々のお兄ちゃんなのだ！」

「・・・待ってくれ」

今の一言を一字一句理解出来なかった・・・。

「理由を聞きたいのだが・・・」

「・・・？」

きょとんとするな。困るのは張飛ではなく俺だ。

「駄目なのか？」

「俺は兄という柄ではない。それに、既に義姉がいるだろう？」

「お兄ちゃんも欲しいのだ！」

何だその理由は・・・？

「良いではないか、剣。私も義姉になったのだ。お主も義兄になってやれ」

「そういう問題なのか・・・？」

「そういうものなのだ！」

どういうものなんだ・・・？

残念なことに、何を言っても無駄だと俺の勘が告げている・・・。

「・・・解った。愛紗が義姉、俺が義兄、これで良いのだな、鈴々？」

「うん！大満足なのだ！」

「良かったな、鈴々」

ふぅ。どうやら気苦労が増えたようだな・・・。

私達は次の町に着き、門を潜ろうとした。

「ちょっと待て」

「何か？」

門兵に止められる理由は無い筈だが・・・。

「違っていたら済まぬが、お主は最近噂の黒髪の山賊狩りではないか？」

「そう呼ぶ者もいるようですが、自分から名乗っている訳では・・・」

ふふ。噂にも困ったものだなぁ。

「良かった。黒髪の綺麗な絶世の美女とのことでしたので、危うく見過ごすところでした」

っ！

「そ、そうですか・・・」

「そうと解れば、早速主に知らせねば。しばらくお待ちを」

どういうことだ・・・？

「やれやれ。愛紗に対して失礼だろうに・・・」

「どうしたのだ？」

「いや、何でもない。愛紗、余り気にすることはない」

「・・・慰めてくれるのか？」

「さあな」

・・・どっちなんだ？

～～～～

私達は客間に案内され、大守を待っていた。

やがて、二人の御仁が来た。合わせて、失礼のないよう立ち上が

る。

「そのままで結構」

今の赤髪の者が恐らくは大守。では、もう一人の水色の髪の者は……？

「待たせて済まない。我が名は公孫賛、字は白珪。こちらは、貴殿等と同じく旅の武芸者で」

「我が名は趙雲、字は子龍。お初にお目にかかる」

趙雲殿か。

「お招きに預かり、光栄です。我が名は関羽、字は雲長。こちらは」

「剣でござる」

「鈴々なのだ！」

……お主達はもう少しまともに名乗れんのか？いや、剣はまだ良いが、鈴々はまずい。

「こら！鈴々！ちゃんと名乗って挨拶せぬか！」

「関羽殿」

趙雲殿？

「歳の割に、随分大きなお子様をお持ちですな。隣の御仁と授かっ

たのですかな？」

「ち、違います！鈴々は私の娘ではありません！
そ、それに、剣とはそんな関係ではありません！」

剣も何とか言ってくれ！

「そうでござる。あくまで拙者等は旅の共、そういった感情は持ち合わせていないでござる」

……相変わらずばっさりだな。

「ま、まあ、そういった話はこれくらいにして」

何だ。今まで消えていたどこぞの大守か。何でも、愛紗に頼みがどうと言って語り始めた。

随分長々と語っているが、要は士官の話だ。大抵が愛紗に話していること、俺は適当に聞き流している。鈴々は理解出来ているか怪しいな。

「公孫賛殿、話の腰を折って申し訳ないが、それは些か早計ではないですかな？」

「と、言うと？」

「噂というのは、得てして尾鰭が付きがちなもの」

確かに。いつの世でも、そうなりがちだな。

「故に関羽殿の実力を見極めてから召し抱えになられても、遅くはない筈。
差し支え無ければ、私がその役をお引き受けしますが」

「いかがかな？」

力試し、か。妥当ではある。

「いや、私は別に……」

「臆されましたかな？」

「む……」

愛紗の表情が若干強張った。そんな安い挑発に乗るな。

「そんな訳ないのだ！」

しまった……。もっと安い者がいた……。

「剣はともかく、愛紗はものすっご～く強いのだ！」

思わずずっこけそうになった……。

「鈴々……俺はともかくなのか……？」

「へ？だって、剣の強さは全然知らないのだ」

義兄を少しくらい立ててくれても良くないか？

「ふふ、剣殿、なかなか言われているが？」

「・・・仕方ないでござる」

事実、鈴々の前で刀を振るった訳ではないのでな。

「どうですかな？私と一つ」

「遠慮するでござる」

「貴殿も臆されましたかな？」

・・・上手いな。俺だけでなく愛紗も挑発しているか。だが、

「臆したでござる」

俺には無意味だ。

「おい！剣！」

「そういきり立つな。落ち着け、愛紗」

「自分の武を見せるのが恐いのですかな？」

「・・・拙者、他人に見せる武や誇る武は持ち合わせていないでござる」

第一、臆す訳がない。一度は戦乱の世を乗り越えてきたのだから。

「どうしても力を見せる気はないと？」

「ないでござる。元より、士官する気がないでござる。力を示す必要がないでござる」

「それはどういうことです？」

影の薄い大守か。

「どうということはないでござる。拙者の使う剣術の流派において、あらゆる権力や門派に属すことを禁じられているからでござる」

「そうなのか？」

全員訝し気な視線だな。真実だというのに・・・。

「剣、お主の剣術とは？」

愛紗、お前まで話に入ってくるな。ややこしくなる。

「別に。何でも良いだろう」

「がっかりなのだ！」

・・・全員の視線が鈴々に集まった。突然何だ？

「鈴々のお兄ちゃんがそんな臆病だったとは思わなかったのだ！」

「……鈴々、話を理解しているか？」

間違いなくしていないだろうがな。

「何なのだ！あんなに言われて悔しくないのか！？」

「落ち着け、鈴々。

いいか、別に悔しくない訳ではない。だが、この刀は人を護る刀であって力を誇示する刀ではない。解るか？」

「全然解んないのだ！

とにかく、剣の実力を見せるのだ！」

……頭が痛い。何故、身内に責められている？

「ほら、鈴々。後で詳しく聞かせてやるから、もうその辺にしておけ」

愛紗の援軍か。助かる。

「何でなのだ！？剣とあいつが闘えば万事解決なのだ！」

……万事解決という言葉を知っていて何故理解出来ないのだ？

「それはそうだが……」

認めるな、愛紗。

「ならそれで決まりなのだ！」

・・・何なんだ？
愛紗は苦笑いを浮かべているが・・・。

「らしい、剣・・・」

・・・愛紗。お前だけは信じていた。

「そういうことらしい・・・。
手合わせ願えるでござるか、趙雲殿」

「・・・貴殿も苦労するな」

渋々趙雲殿と向かい合った。趙雲殿の得物は槍のようだな。

「拙者は剣・・・この刀で相手をするでござる」

スラリと逆刃刀を抜き、無形の構えをとった。

「・・・何ですかな？峰と刃が・・・」

「逆刃刀という刀でござる」

「・・・そうですか」

槍をゆらりと構える。来るか。

剣と趙雲殿の立ち合いが始まる。両者とも構えを取っている。

「始め！」

掛け声と共に趙雲殿が間合いを詰め、突きを放つ。剣はそれを紙一重で躱し、趙雲殿の懐へ入り刀を打ち下ろす。

キィン！

趙雲殿も柄で受け、すれ違った。

「そんな刀を使っているものだからどんな武芸かと思ったが・・・どうやら思い違いだったようだな」

「そうでござるか。ならば、頭に乗っていた物は返すでござる」

『っ！？』

確かに、手に趙雲殿の頭に乗っていた帽子を持っている。いつの間に・・・何と言う早業・・・。

「・・・まだ言っていなかったでござるな。拙者の剣は、飛天御剣流という古流剣術。神速と呼ばれる剣でござる」

そう言って帽子を投げ返す。

飛天御剣流とは言っていたが、神速と言われても頷ける早業。賊を倒した剣も、恐らく・・・。

「・・・いかがしたでござる？」

「いや、これが貴殿の実力かと思ってな。大した腕だ。だからこそ、気になる。何故そのような刀を？」

そうか。私は知っているが、他の者は知らぬだろうな。

「この刀が示す通り、拙者は殺人剣を禁じているでござる。それだけでござる」

「殺人剣を…？ならば、何故それ程の武芸を身につけた？」

「悲しんでいる者を放っておけない。一つでも多くの幸福をこの世に燈したい。それだけでござる」

「ふふふ…面白い！はっはっはっはっ！」

趙雲殿が突然笑い出した。

「あいつ、何を笑っているのだ？」

「さあ…？」

～～～～～

「公孫賛殿、山賊の件についてですが」

客間に戻り、趙雲殿がそう切り出した。剣は出された茶を旨そうに啜っている。茶が好きなのか？

「山賊？」

「ああ。恥ずかしながら、山賊退治に少し手間取っていてな。賊の在りかは目星がついているのだが、それらしきものが見付けられないんだ」

「それを聞いて、私が一計を案じたのだ」

ほう。

「して、その策とは？」

「私達が荷物に隠れ、賊に荷物を奪わせ隠れ家に忍び込む。つまり、賊自ら隠れ家に案内して貰おうということだ」

成る程。それは面白い。妙案だな。

「どうだ、関羽殿。私と共に、賊の隠れ家を訪ねてみんか？」

「引き受けた」

「鈴々も行くのだ！」

「お主には無理だ」

確かに。この策は鈴々には無理だろう。

「何でなのだ！？」

「良いか、荷物の中に潜むのだ。それには、ずっと息を殺しておかねばならぬのだぞ？

お主のような根が騒がしく出来ている者には無理だ」

うむ。趙雲殿の言う通りだな。

「そんなことないのだ！鈴々はやれば出来る子なのだ！」

「ほう。では今やって貰おう」

「お安いご用なのだ！」

「……辞めておけ」

剣、茶を飲んでいたのではないのか？

「剣も止めるななのだ！」

「賊の隠れ家を見付けるまで待っているだけだ。二人ともすぐに戻って来る。それまで大人しく待っていろ」

「何でｎ……」

「それに、静かにしていられるのだろう？」

「う……」

成る程。逆手に取ったのか。

「では、決まりだな」

私は趙雲殿と山賊の隠れ家か。剣と鈴々は大人しくしているだろうか……？

趙子龍と影薄（後書き）

次回予告～。

白「白馬将軍参上！」

剣「そして退散」

白「何～！？」

鈴「次の登場を楽しみにしてるのだ」

白「えっ？えっ？」

星「次回は私が活躍しますので」

白「いや・・・今回も私散々だったような・・・」

愛「剣、そろそろ・・・」

剣「ああ。次回、『隠形の業披露』よろしくな」

白「ちょっと待ってくれ！私はｍ（強制終了）」

「これの中に入るのか？」

「うむ。少々窮屈だが、やむを得まい」

しかし、この荷の中に入るとなると・・・、

「相当身体を寄せないと・・・」

「心配するな。私はその気がなくもないので、むしろ大歓迎だ」

成る程。それなら・・・、

「って、ええっ／／！？」

～～～～～

それから、荷の中に入り賊が来るのを待っているのだが・・・。

「趙雲殿」

「賊がいつ現れるやもしれんのだ。声を出されては困る」

それは解っているのだが、余りに密着しているから・・・。

「その、趙雲殿の膝が・・・」

「私の膝が何か？」

「うっ……ん……／／」

駄目だ、どうしても声が……。

「愛紗。愛紗」

いかん……。剣の声の幻聴まで……。

「おい。愛紗」

……あれ？幻聴……じゃない？

「声を出すな。まだ離れてはいるが、賊が近くにいる」

「って、剣／／！」

ゴンッ！

～～っ！頭打った！

「静かにしていろ」

た、確かにそうだ。

「剣、お主何をして……／／」

「ああ、剣殿は荷を運ぶ役を買って出たのだ」

「なっ／／！」

ゴンッ！

〜〜っ！

「趙雲殿、何故それを知らせてくれなかった？」

「おや？知らせる必要がありましたかな？」

「い、いや、別に・・・・」

ないといえばないが・・・・。

「静かに、賊が来た」

・・・来たか。良し、ここからは声を出さずに・・・・。
賊と争う物音が聞こえる。いよいよか・・・・。

「愛紗、趙雲殿。気をつけてな」

剣の声が微かに聞こえた。

〜〜〜〜〜

「どうやらここは地下のようだな」

どうやら、賊の隠れ家に忍び込めたようだな。
しかし趙雲殿・・・あれだけ密着しているのだから、何も無理に動こうとしなくても・・・。声をどれだけ必死に押し殺したか・・・・。
それにしても、まさか剣に聞かれるとは／／。

「地下？」

「恐らく、ここは鉱山だったのだろう」

「鉱道を隠れ家にしたという訳か」

道理で、いくら捜しても見付からぬ筈だ。

「なかなか広そうだな。これでは出口を捜すにも一苦労だ」

趙雲殿と出口を捜して歩いているのだが・・・。

「敵中にあって得物が短剣とは、些か心許ないな」

「仕方あるまい。お主の乳と尻がでかくて入らなかったのだ」

「なっ／／！？」

失敬な！

「しっ！」

っ！賊か！？

・・・何やら声が聞こえてくる。見た限りでは、宴会でもしているのだろう。

なっ！嫌がる女性の胸を掴むとは！

「おのれ！無体な！成敗してくれる！」

「関羽！どうするつもりだ？」

「どうするも何も、助けに行くに決まっておろう！」

「とはいえ、相手は人数が多い。それに」

趙雲殿がまだ何か言っているが、耳に入らん！

女性の下にいた賊に素早く接近し、蹴りを食らわせた。

「大丈夫か？」

「え、あ、はい！」

良し。後は・・・、

「何だ！？てめぇは！？」

「我が名は関羽！地下に巣くう賊共め！この青龍偃月刀の錆に、！？」

そうだった！私、短剣しか持ってない！仕方ない！これでやってやる！

って、あれ？明かりが消えていく・・・。

「関羽！こっちへ！」

趙雲殿が近付き、再び駆け出していく。成る程、趙雲殿が。

私は女性の手を引き、趙雲殿を追って走った。

近くの抜け道に身を潜めた。

「…追っ手は来てないようだな。やれやれ、猪武者なのは義妹だけかと思ったが」

「済まん」

趙雲殿には迷惑をかけてしまったな。

「あの、危ないところを助けて頂き、ありがとうございました」

「いや」

聞けば、この女性は麓に住んでいたらしいが、その時に偶然ここを見付けて捕らえられたとか。

「ここの地下牢に村の子供達も捕まっているのです。もし、私が逃げたと知れたら、あいつらに何をされるか…」

確かにそうだな。ならば、

「どうするつもりだ？」

「無論！助けに行く！」

「何を助けに行くんだ？」

『っ！？』

見付かったか！？

先手必勝とばかりに趙雲殿が飛び出す。

「くっ！」

「趙ｕっ！」

口を塞がれ、って！

「落ち着け。俺だ」

剣！？

「で、何故剣殿がここに？」

やや憮然としている趙雲殿。何故か若干顔が赤い愛紗。そして、少し脅えている女。

「別れた後、俺だけ跡を付けさせて貰った。地下に入るところで別に動いていた」

「・・・剣殿。そんなこと出来たのか？」

「・・・まあな」

転生前、一時は暗躍部隊の隊長をしていた経歴がある。隠形の業は得意だ。

「・・・で、愛紗はどうかしたか？」

「い、いや、何でもない／／！何でもないんだ／／！」

「そ、そうか・・・」

聞かない方が賢明だな。

「それから、貴殿のことは知らぬが、拙者はこの二人の知り合いでござる。心配は要らぬでござる」

「は、はい」

さて、状況が良く解らぬが・・・、

「愛紗。今の状況を・・・」

「はへ！？」

・・・止めておこう。

「趙雲殿」

「うむ。愛紗の顔が赤いりｙ「趙雲殿／／！」・・・今の状況だな」

聞けば、この女は村人で他にも捕らえられている者もいるらしい。

「成る程な。牢らしきものを見た。恐らくそれだろう」

俺が先導して歩き出した。

～～～～～

「ここだな・・・」

隠れて見てみれば、やはり見張りがいる。

「どうする？」

「・・・俺が行く。任せておけ」

「大丈夫なのか？」

「問題ない。少し待っていてくれ」

すたすたと歩き出す。堂々と隠れもせずに。

「ちょっ！？おい！」

愛紗が何か小声で言っているようだが、問題は全くない。何故なら、俺の隠形の業で見張りに気付かれないからだ。

見張りに近付き、手刀で気絶させる。ぎりぎりまで気付かれない、そういう業だからな。

牢の鍵を奪い、牢を開けた。

「もう大丈夫だ」

数人の子供達が出て来る。無事のようだな。

「剣、お主、何をしたのだ・・・？」

愛紗と趙雲殿は納得出来ない、という表情だな。

「この人、いきなり現れたけど、どういうことなの？」

子供の一人がそう言った。

「どういうことなのだ……？」

「……これは俺の隠形の業だ。人に言えることではない」

種は簡単だが、気付かれることはほぼない。
ただ単に意識を俺以外に向けさせる。俺以外を見るようにする。
この業を連続で行い、俺という存在を視界から消すという業だ。

「そんなことは良いだろう。速くここから脱出する」

のんびりしている暇はない。

「こっちだ。走れ！」

俺が先導して走り出す。出口を知っているのは恐らく俺一人。賊と出くわさなければ良いが……、

「いたぞ！こっちだー！」

くっ、もう見付かったか……。俺だけならともかく、連れがいては戦えぬ……。
最後尾にいた愛紗が逆方向に走り出す。その先に俺が知る出口はない。別の出口があれば良いが……。

「出口だ！」

確かに光が差し込んでいる。俺達はその光に導かれ、外に出た。

が、

「なっ……！？」

絶壁。行く先が途絶えている。向こう岸に跳ぶのは俺でも出来るかどうか……。

「さて…どうするか……」

子供達がいる以上、このまま賊と戦うのは危険過ぎる。かと言って、逃げる方法がある訳でもない、か……。

「愛紗ー！剣ー！」

この声は…、

「鈴々！」

何故鈴々がここにいる…？いや、今はこの状況を喜ぶべきだ。

「鈴々！隣にある大木をこっちに向かって切り倒せ！」

そうすれば大木の橋が出来る！

「解ったのだ！」

鈴々が掛け声と共に大木を切り倒す。見事にこちら側まで大木が

引っ掛かり、橋が出来た。

「これを渡って向こう岸まで行くんだ。そうすれば、もう安全だ」

だが、この絶壁。堕ちれば間違いなく逝くな。

「急ぐ必要はない。確実に向こう岸まで渡れ」

のんびりしている暇はないようだがな。現に趙雲殿が追って来た賊を数人のしている。

やがて、全員が渡り終える。

「鈴々！その者達を村まで送ってやれ！」

「剣達も早く渡るのだ！」

「そうだ、剣！早く向こう岸に！」

「無理だ」

大木の橋を軽く突く。すると、脆くも崩れ去った。

「この通りだ。既に人を支えるだけの状態ではなかったということだ」

無理に渡ろうとしても、堕ちて逝くだけだ。

「鈴々！頼んだぞ！」

「で、でも・・・」

「心配するな。賊を蹴散らして帰る」

「へへへ……」

来たようだな。ぞろぞろと……、

「覚悟を決めるしかないようだな……」

「諦めたか、趙雲殿？」

「まさか」

ふっ、その意気だ。

「行くか、剣、趙雲殿」

「星だ」

……それは真名か？

「これから死地へと赴く仲だ。これからお主等には、私のことを真名で呼んで貰いたい」

なるほどな。

「そういうことなら、私のことも愛紗と呼んでくれ」

「俺に真名はないが、好きに呼んでくれ」

「良し。行くか、愛紗、剣」

俺達三人は共に大勢の賊へと向かって行った。

～～～～～

結果を先に言っておこう。

無事に帰還した。

所詮は烏合の衆、群れているだけだ。群れているところを飛天御剣流の神速の剣で乱し、拡がれば槍で突かれる。逃げようとすれば剣に斬られる。

ただでさえ、武芸に優れた三人だ。賊の連携さえ乱してやれば問題ない。

そして翌日、俺達は旅に戻った。

「しかし、良かったのか？私達はまだ士官するつもりはなかったが、星なら士官して一角の将に成れただろうに・・・」

何故か星がついて来たがな。

「公孫讃殿は、決して悪い人物ではない。だが、ただそれだけだ。この乱世を治める人物ではないし、影も薄い」

「全くだ」

その点については賛同する。

「この広い蒼天の下、真に仕えるべき主は、きっと他にいる。それに何より、この先お主達と一緒の方が楽しそうだ」

成る程な。

「特に、剣。お主はな」

「・・・何故俺なんだ？」

「とてつもない腕を持っている癖にその奇天烈な刀を使い、あまつさえ戦場で相手に情けをかけるとはな」

「酷い言いようだな・・・」

確かに俺は昨日、賊の隠れ家に於ける戦闘で誰も殺さなかった。それどころか、殺すことを止めた。結果、死人はほとんど出ていない。

賊は影の薄い大守に任せた。然るべき処分を受けることになるだろう。

「更には、全く理解出来ない現象を体言して見せた」

俺の隠形のことか・・・。

「お主がこれからどんな生を送ることになるのか、少々興味がある」

「・・・俺は変わらない。天に昇るその日までな」

こうして、俺達は旅の共を一人増やすことになった。

隠形の業披露（後書き）

次回予告～。

愛「しかし、剣のあれは一体何なんだ？」

星「それは私も聞きたいな」

ミスディレクションと呼ばれる技術です。

愛「は？みすでぃ？」

鈴「難しくて解んないのだ」

剣「……どうでも良いことだ。次の街は？」

愛「袁紹殿が治める街だ」

剣「次回、『名門袁家』よろしくな」

星「ん？浮かぬ顔だな？」

剣「俺は名門というものが余り好きではないのだがな……」

名門袁家（前書き）

袁紹好きな方、ごめんなさい。少し酷くなりました。

では、どうぞ。

名門袁家

星を加えて旅を続ける俺達は次の領守が治める町に着いた。
何でも、この町を治めているのは名門の出である袁紹だとか。

「町はそれなりに賑わいを見せている。名門だからと自惚れている訳ではないのか……？」

俺は名門と聞いて良い印象は余り抱かないのだが……。

「剣、どうした？」

「何でもない。気にしないでくれ、愛紗。
それより、金はあるのか？」

宿を取ろうにも、金が無ければどうにもならない。

「いや……こんな町に来たのだ。少しは働いて稼がなくてはな」

「全く……良く旅を続けて来られたな」

「そう呆れるな、星。何か良い仕事はないか？」

「そうなのだ！鈴々も頑張って働くのだ！」

「あるにはあるが、これだぞ？」

一枚のチラシを見る。メイド……？

「女専用か……」

「ああ。これが一番給金が良いのだ」

「そうか。ならば、俺は別の仕事を探す。それで良いな？」

「ああ」

「なら、宿で待ち合わせとしよう」

「解った」

愛紗と星がいれば問題ないだろう。……鈴々は解らないが。

「あっ！頭くるくるなのだ！」

思った傍からこれか……。

言った相手は供を連れたお偉い様、といったところか。大通りで馬に乗っていれば、嫌でもそう思う。

「し、失礼した！この者は髪のことを言ったのであって、頭の中身がどうとかではなく……」

それは弁明しているのか、愛紗。

「子供の戯言、咎めるつもりはない」

……なかなか解るようだな。

「子供って……」

「黙っていろ、鈴々」

相手は確かに小柄だが、子供という訳ではないだろう。

「髪といえば」

何だ？まだ何かあるのか？

「貴女もなかなか美しい物を持っているのね」

「いや、これは他人に褒められるような物では・・・」

「下の方もさぞ美しいのでしょうね」

「そうなのだ！愛紗は下の方もしっとり艶々なのだ！」

・・・何を言っている、お前達は。

「それは是非とも拝んでみたいものね」

・・・話に乗るな。愛紗が爆発する。

「けど、今は野暮用があって残念だ。我が名は曹操」

「曹操とやら、野暮用とは何かあったでござるか？」

「・・・貴方は？」

「旅の者でござる」

「そう。貴方の気にすることではないわ。縁があったらまたいずれ」

……曹操か。確か都で頭角を現していると聞いたが、何故ここにいる？

「ここで別れるとしよう。ではな」

そう告げて、俺は仕事を探した。

「何か良い仕事はないものか……ん？」

何やら人が溢れているが……。

「そこの御仁、何かあったのか？」

「ん、ああ。これか？舞踏大会だよ」

茶色髪の槍を持った武芸者が答えてくれた。

「今日開催だってさ」

「何か景品でもあるのか？」

「入賞者には賞金と、豪華副賞有り、だって」

賞金か……。

こんな見世物に飛天御剣流を使うのは些か気が引けるが、愛紗達との旅に支障をきたす訳にもいかぬか……。

「出てみるか・・・」

「おっ、あんた出場するのか？」

「ああ。賞金目当てでな」

「賞金は3位までだけど、1位は無理だな」

「・・・？」

「だって優勝するのは、あたしだからさ！」

大した自信だ。だが、その自信に裏付けされた実力がありそうだな・・・。

～～～～～

「さぁ、始まりました。冀州一舞踏会！」

何やら話し出したな。それから大守の話が始まる。

話を聞いていたが、前言撤回だな・・・。偉そうな女だ。治安は問題ないのだから良いのだろうが・・・。

怠い話が終わり、いよいよ開始となる。

「第一試合は優勝候補との声もある鉄牛選手に対するは、飛び入り参加の張飛選手！」

・・・何故、鈴々がここにいる？

「鈴々、何をしている？」

「愛紗に追い出されたのだ」

・・・何か失敗でもしたか。したのだろうな・・・。

「まあいい。二人で賞金を持って帰るぞ」

「合点なのだ！」

俺と鈴々で入賞すれば、それなりに賞金を貰えるだろう。

さて、鈴々は・・・、

「やりました！張飛選手、優勝候補の鉄牛選手を敗りました！」

一撃で沈めたか・・・。

あのような力だけの男、所詮敵ではないか。

「続いて、鉄牛選手の弟である綱牛選手！対するは、こちらも飛び入り参加！剣選手！」

俺か・・・。

ゆっくりと舞台に上がった。

「貴殿も鉞使いか・・・」

「兄貴の仇は取ってやる！」

そう言って鉞を振り下ろしてくる。しかしな・・・、

「おっと、剣選手。武器も構えずに躱した！」

遅すぎる。当たる訳がない。

「その程度だと言うのなら、大人しく下がれ。無駄に怪我人を出したくはない」

「おのれ！愚弄するか！？」

もう一度鉞を振り下ろしてくる。が、俺はそれを難無く躱す。

「仕方がない。少し眠ってくれ」

逆刃刀を抜き、脇下に叩き込んだ。

「これで終わりだ」

「がっ……ぐっ……」

「脇下は人体急所の一つ。死にはしないが、しばらくは動けぬだろう」

少しやり過ぎたか……。

その後も楽々と勝ち進む俺と鈴々。それからもう一人、馬超。俺に優勝宣言をした者だが、やはり腕は立つようだな。

俺は決勝へと駒を進め、もう一つを鈴々と馬超が争うことになった。

二人が跳躍し、試合が始まる。

お互いの得物を出し合い、一歩も譲らない。

「なかなかやるのだ！」

「そっちもな！」

互角だな。この試合、かなり長引くか……？

ぐう～

……。

「あはははは！」

観客から笑い声が聞こえてくる。

鈴々……よもや試合の最中に腹の虫が鳴るとは……。

ぐう～

「あはははは！」

……どうやら鈴々だけではないらしい。馬超、お前もか……。

「両者そこまで」

……あの袁紹という女か。

「この勝負引き分け。よって両者とも優勝とします」

「……待て」

「何ですの？」

何ですの？ではないだろう。

「拙者はどうなる？」

「ああ、貴方、いましたわね」

・・・・痛い目に合わせても良いか？

「・・・・貴殿が主催でござろう？流石にそれはないのではないでござるか？」

「あら？名族であるわたくしに意見するつもりですの？」

・・・・叩き潰しても良いだろうか？あの高い所にいる黄猿を引きずり落としたい。

「だいたい、そこの二人に勝つ自信がお有りですの？」

「・・・・試合もろくに見ていない貴殿に言われる筋合いはないでござる」

試合の最中では、眠そうにごろごろとしていただけだ。

「良いんですのよ。興味なんてありませんもの」

・・・・もういい。この黄猿とは話すだけ無駄だ。

「解った、もういいでござる。３位の賞金を渡すでござる」

そう言って俺は黄猿に近付いた。

「はい。はした金ですけど」

俺は賞金を受け取った。

この黄猿とはもう関わりたくないな。はっきり言って時間の無駄だ。

「そこの二人、わたくしの城に案内しますわ。付いて来なさい」

鈴々と馬超のことか。

「行くか？」

「なんだかよく解らないけど、誘ってくれてるみたいだから行くのだ」

「・・・そうか。馬超とやら、貴殿はどうする？」

「あたしか？あたしも行かないとな。賞金まだ貰ってないし」

・・・二人共、物好きだな。

「鈴々、遅くならないうちに宿に帰れよ？」

「解ったのだ！」

「馬超殿、申し訳ないが、張飛のことをよろしく頼むでござる」

「良いぜ」

まあ、これで良いだろう。俺は他の仕事でも捜すか……。
鈴々と馬超と別れた後、俺は適当に町を歩き回った。

「聞いたかい？賊の話」

「聞いた聞いた」

……賊？

「もし、そこの御仁」

「何か？」

「済まないが、今の賊の話を少し聞かせて貰えないでござるか？」

賊が近くにいるとなれば、放ってはおけない。まして、ここの大守があんな阿呆では尚更だ。

「なんでも、賊がここら辺に逃げ込んで来たらしいんだよ。んで、その賊を都から曹操が追って来たって話だ」

成る程。曹操がここにいたのはその為か。

「しかし、それなら賊の征圧にはここの大守が行くの筋ではないでござるか？」

俺なら間違いなく任せないがな。

「あの大守様に任せるのはなぁ……」

…どうやら町民も同じようだな。どんな大守だ…。
だが、賊とあっては少し気になるな。

「賊がどこにいるかご存知ないでござるか？」

「確かあっち…って、あんたそこに行く気か？」

「気にする必要はないでござる。では」

あっちか…。少し様子を見に行ってみるか…。

名門袁家（後書き）

次回予告～。

剣「俺はある営舎を無断で訪れた」

愛「その時点で有り得ないな・・・」

剣「間者なら当然のように出来る。俺以外にもな」

愛「・・・？」

剣「次回、『曹孟徳』よろしくな」

「桂花、状況はどうなっていて？」

「はい。今日の征圧で、賊は半分以下になったと思われます。明日にでも賊は全て鎮圧出来るでしょう」

「そう。なら良いわ」

我が軍の圧勝ね。私が出るまでもなかったかしら？

「…そうか。一応気にして来てみたが、余計だったようだな」

『っ！？』

私と桂花しかいない筈の兵舎で、聞き慣れない声が聞こえた。その先には…、

「貴方…」

今朝の…男じゃない。

「くせ者だ！出会え！」

桂花が堪らず叫ぶ。でも、本当にくせ者かしら…？

「華琳様！」

「何だ！？貴様は！？」

春蘭と秋蘭が来たわね。

「……別に何だという訳ではない。賊がどうなっているか気になって来てみただけだ。
問題はないようだな。俺は早々に立ち去らせて貰おう」

「待ちなさい！」

「……何か？」

「何もないってことはないんじゃない？貴方、この兵舎に突然現れたのよ？」

しかも、ここは私がいる我が軍の最も奥にある兵舎。普通に考えれば、部外者が何の干渉も無しにここに来ることはありえない。

「……そうだな。いや、そうでござるな。拙者は兵の目を盗んでここまで来たでござる」

「貴方、ふざけてるの！？そんなこと有り得る筈ないでしょう！？」

「……現に、何の騒ぎにもならずにここまで来たでござるが？」

確かにそうね……。

「兵達は一体何をしていたというのだ！？」

「……そう兵を責めないで欲しいでござる。気付かなかった、というより気付かせなかったのでござる」

「・・・どういう意味かしら？」

興味あるわね。

「・・・そこまで話す義理はないでござる」

「貴様！何様のつもりだ！？」

「・・・そう怒鳴らないで欲しいでござる」

「悪いけど、そこの猪の言う通りよ。貴方、何様のつもり？」

まあ、春蘭と桂花がそう言うのも無理はないわね。この男から殺気は感じないけれど、怪し過ぎるわ。

「・・・済まない。無礼は重々承知しているでござる。拙者がここに来た理由は賊の状況が知りたかっただけでござる。ただ、ここまで入り込み、盗み聞きしたとあっては余りに無礼だと思い、声をかけた次第でござる」

「それが何故か聞いている」

「・・・それは話せないでござる」

結局そうなるのね。

「で、貴方これからどうするのかしら？」

「・・・帰りたいのだが」

「ただで帰すと思っているの？」

少なくとも、何者かくらいは知りたいわね。それでもだんまりというのなら、その時は・・・。

さて、どうしたら帰れるだろうか・・・？

やはり、声をかけずに戻るべきだったか？もちろん、そうしない理由があるのだが・・・。

「貴方、どうしても話す気はないと？」

「ないでござる」

「そう。なら、首を飛ばす」

・・・何だと？

「それは御容赦願いたいでござる」

「なら話しなさい」

・・・無茶苦茶だな。

「ここに来たのは、本当に賊が気になっただけでござる。町の大守があのような者ではな・・・」

「あら。貴方、袁紹に会ったの？」

「今日の舞踏大会で少し」

「で、貴方の感想は？」

「・・・別に」

「正直に話しなさい」

良いのか・・・？

「良いわよ。私は気に入らないもの」

成る程な・・・。

「拙者も同感でござる。だから余計気になったでござる」

「そう。見る目はあるようね。
ここに来た理由は解ったわ。次はどうやってここまで来たかを話しなさい」

・・・逸らせなかったか。

「・・・拙者の隠形の業を使ったでござる」

「と、言うと？」

「兵の気を逸らし、拙者を見ないようにした。それを繰り返しただけでござる」

「貴方馬鹿?そんなこと出来る訳ないじゃない!」

まあ、納得してくれるとは思っていない。

「・・・あれは何でござる?」

全員の視線が一瞬俺から外れる。その一瞬で隠形の業を使う。

「えっ・・・・?」

「あいつはどこだ!?」

「一瞬目を離しただけの筈だが・・・」

「・・・」

こんなところか・・・。

「納得してくれたでござるか?」

「また突然現れた・・・」

喋れば注意がこちらに向くからな。気付くのは当然だ。

「貴方が奇妙なことを出来るってことは解ったわ」

「・・・何か不解なことでもあるでござるか?」

「貴方が何故その業を使って逃げないかということよ」

…成る程。頭の切れる御仁だ。

「本題に入ろう。曹操殿、貴殿は何者かに命を狙われることがあるでござるか？」

「…何故そのようなことを聞く？」

青服の女の疑問は至極当然だ。事実、俺もここに来るまでそんなことは思いもしなかった。

「秋蘭、良いわ。
確かに私はよく命を狙われるわ。都では私を良く思わない輩が多くてね」

権力者のせめぎあいか。

「で、ここでも命を狙われているということか…」

「何？聞こえなかったわ」

呟いてしまっていたか。
まあいい。そろそろ行動に移そう。

「いつまでも隠れていないで出てこい！そこにいるのは解っている！」

兵舎のある一点を見て言い放った。その一点から黒服の者が一人姿を見せる。

キン！

曹操殿と刺客の間に移動し、飛んできた物を弾き飛ばした。針か……。

「春蘭！秋蘭！追いなさい！」

刺客が逃げたと同時に、二人が駆け出して行った。

「やれやれ……」

弾き飛ばした針を拾うと、何かが塗ってある。恐らくは毒……。

「曹操殿。怪我はないでござるか？」

「貴方、今の刺客に気付いていたのね？」

「如何にも。だからここにいたでござる」

「礼を言うわ。この曹操の命を救ってくれたことに」

「お気になさるな。無事で何よりでござる」

しかし、本当に命を狙われているようだな。

「貴方、名もまだ聞いてなかったわね」

「拙者の名は剣でござる」

「剣とやら、何か望みがあるなら言ってみなさい」

「・・・突然どうかしたでござるか？」

「ただ助けて貰っただけでは気が済まないもの」

・・・誇り、という物か？

「では、一つだけ。金を分けて欲しいでござる」

「・・・文無し？」

「旅に連れがいるもので、金が余計にかかるでござる」

食費が特にな。大半が小さな巨人のお陰だが。

「そう。良いわ。金ならいくらでも分けてあげる」

やけに太っ腹だな・・・。

「桂花、手配を」

「しかし、こんな得体の知れない男と・・・」

「行きなさい。桂花」

渋々といった感じで兵舎から出ていく。

「あの者の言は尤もだと思うでござるが」

「貴方に聞きたいことがあるのよ」

俺に聞きたいこと‥‥?

「貴方、私に仕えない?」

「謹んでお断りするでござる」

即答。考える時間などない。

「‥‥そう。なら、客将はどうかしら?」

「謹んでお断りするでござる」

又しても即答。

「‥‥考えもしないのね。私に何か不満かしら?」

「いや、不満は特にないでござる」

見たところ、かなり優れているようだ。不満を見付ける方が難しそうに見える。

「拙者、故有って誰にも仕えるつもりはないでござる。御容赦願いたい」

「どうしても?」

「どうしてもでござる」

「そう‥‥。解ったわ。今日のところは素直に引くことにするわ」

今日のところは・・・という点が嫌に気になるな・・・。

「金をお持ちしました」

あの女が来たか・・・。

「剣、好きなだけ持って行きなさい」

と、言われても困るのだが・・・何せ、金が入っているであろう袋を両手が完全に塞がるまで持って来るとは・・・。

「では、一袋だけ貰うでござる」

一袋だけ掴み取った。

「あら、それだけ？」

「元々、無礼を働いた上、拙者の勝手なお節介でござる。これ以上貰うつもりはないでござる」

全て俺の身勝手だからな。

「では、失礼するでござる。曹操殿」

「ええ。いずれまた会いましょう」

そして、俺は兵舎から出て、曹操軍を後にした。

～～～～

「寝過ぎたか・・・」

俺が曹操軍に入り込んだのは日が落ちきった頃、出たのは真夜中だ。その後、一応賊の様子も見に行った。

あの女は半分程だと言っていたが、それはあくまで多く見積もってだ。俺が見た限り、半分どころかほぼ壊滅状態と言っても良いだろう。

そのことを確認したのが夜明け前。今から宿に帰る訳にもいかないと考え、野宿した。

仮眠を取り、起きたのが今という訳だ。

「しかし・・・今から町に帰れば昼頃になりそうだな・・・」

考えていても仕方がない。行くか・・・。

俺が町に戻ったのは案の定、昼過ぎ。とにかく宿に帰るべきだな・・・。

「帰るべき・・・そう思っていたのだが・・・」

「お兄ちゃん遊ぼ～！」

「お兄ちゃん！」

何故か子供達に囲まれている。理解は全く出来そうにないが、遊んで欲しいようだ。

「親はどうした？」

「袁紹様の見世物に行ってるよ～」

「でもつまんないからお兄ちゃんに遊んで欲しい～」

成る程。あの黄猿の見世物となれば、確かにつまらないだろう。

「遊ぶのは構わないが、少し待っていてくれないか？」

宿に一度顔を出しておきたいのだが。

「剣！こんなところで何をしているんだ！」

・・・どうやらその必要は無くなったようだな。

「良いところに来たな、愛紗。少し手伝ってくれ」

「・・・本当に何をしているんだ？」

まあ、子供達に囲まれている俺の状態を見ればそう思うだろうな。

「何、少しごねられていてな。
良し！何がしたいのだ？」

「鬼ごっこ～」

「かくれんぼ～」

「お姉ちゃんも～」

「わ、私もか！？」

「何をそんなに驚く？ほら、お姉ちゃんも参加してくれるそうだ。

何をするのだ？」

「勝手に決めるな！何故私が・・・・」

「そう言うな。子供達がそう言っているからな。嫌ではないだろう？」

「嫌ではないが・・・・」

何かに渋っているな？

「他の子供達も呼んでくると良い。大勢の方が楽しい」

ワ～ッと子供達が散って行った。すぐに集まるだろうがな。

さて、愛紗だな。

「どうした？」

「別に何でも・・・・」

「何でもあるだろう？子供が苦手という訳でもないだろう？」

「・・・私のような武骨な者が子供達と遊ぶとなるとな・・・・」

成る程な・・・。

同じ武芸者として解らないでもない。

「あの子達は皆、次の時代を担う申し子だ。あの子達には大きく、正しく育って欲しいからな」

その為には、子供達の欲求を少しでも満たしてやらなければな。

「それは解るが……そうだ。鈴々を知らないか？」

「……鈴々だと？」

まだ帰っていないのか……？

だとすれば、あの黄猿のところにいるのか……？

子供達は今日は黄猿主催の見世物が行われていると言っていたな。

後で確認してみるか……。

「まあ、どこにいるか見当は付く。大丈夫だろう」

「そうなのか？」

「ああ。という訳だ、遊んでやれ」

「……結局そこに行き着くのか」

当然だ。俺一人では少々きついものがある。

「何をそこまで渋る？子供達から言ってきたことだ。別に良いだろう？」

「……私は、子供達の信頼を裏切るのが怖いんだ」

それも解らなくはない。もちろん同じ武芸者としてだ。

「心配するな。子供達は正直故に、大人の本質を見抜くことに秀でている。

愛紗は優しい。だから子供達に好かれるのだ」

「なっ／／！何を‥‥／／」

「‥‥どうした？」

正直に言ったつもりだが‥‥。

「な、何でもない！／／」

‥‥まあいいか。

～～～～～

子供達としこたま遊び、夜。

袁紹という名の黄猿の下から戻って来たのだろう鈴々が、愛紗に説教を受けていた。

ついでに、鈴々と一緒に何故か馬超も付いて来ていた。

「あたしはついでか！」

曹孟徳（後書き）

次回予告～。

翠「あたしはついでか！」

鈴「そうなのだ」

翠「はあっ！？」

星「心配するな。次はお主が主役」

翠「よっしゃあ！」

星「の、予定だった」

剣「貴殿はまたしばらく出番がない」

翠「まじかよ！？」

愛「次はアニメの第５席になる」

剣「次回、『化け物退治』よろしくな」

翠「ちょっと待て～！」

化け物退治

俺達は黄猿の町を出て、旅を続けている。馬超とは町を出る時に別れた。

「山があるから山なのだ～」

と、鈴々が気持ち良さ気に歌っている。意味はよく解らないが。

「変な歌を大声で歌うな。恥ずかしいだろう」

「山では、熊避けに歌を歌うって言ってたのだ」

熊避けか・・・。かえって引き付けないか？

「そうそう。いきなり愛紗を見付けたら、熊が驚くだろう」

「そうそう。熊が驚く・・・ってそんな訳あるか！」

いつもの星のボケに愛紗が突っ込む茶番は無視だ。

「きゃー！」

叫び声を聞くと同時に走り出した。賊か？

「剣！待て！」

三人が慌てて後ろから付いてくるが、俺は三人を引き離す。

声がした場に辿り着くと、一人の少女が三人の賊に囲まれていた。

「そこまでだ」

「何だ!?てめぇは!?」

「・・・さあな。その者から離れたらどうだ?」

「あんだぁ!?殺されてぇのか!?」

「・・・怪我をしたくなければ、早く立ち去れ」

「何だとぉ!?」

三人が飛び掛かってくる。逆刃刀を抜き、飛び掛かってきた三人を吹き飛ばした。

「立ち去れ。今なら痛い思いをすることもない」

それを聞き、悲鳴を上げて立ち去っていった。

「剣!」

「・・・来たか。事はもう済んだ」

「助かりました」

「いや。怪我はないか?」

「はい。お蔭様で。

あんな恐そうな人達を何事もなかったように追い払われてしまう

なんて」

「何。大したことではない」

「あ、申し遅れましたが、私はと・・・」

・・・何故名乗ることで戸惑う？

「・・・とんとんと申します」

・・・何か隠しているな。いや、目はそう物語っているが、悪人ではなさそうだ。追求はしないでおくか。

俺達も一人一人名乗った。この少女を一人放っておく訳にもいかないので、同じ目的の村まで共に行くことになった。

鈴々と星のボケは無視だ。

道中、その村に関わる化け物の話を聞いた。愛紗と鈴々がやけに恐がっていたな。

村の庄屋から更に詳しく話を聞いた。化け物の様子がどうだ等とな。

色々と手は打ってみたようだが、上手くはいかなかったらしい。

「こういう時こそ、我等の出番だな」

『ええっ！？』

「・・・何をそんなに驚く？」

「お主達から言い出すと思っていたのだが」

・・・そうは思っていなかったがな。様子を見る限り、化け物が恐

いのだろう。

「お願い出来ますか？」

「い、いや、そんな勝手に決められても・・・」

「そうなのだ。鈴々にも色々都合があるのだ・・・」

「駄目なのですか？」

涙目の上目遣いで、愛紗が堕ちそうだな。

「お願いします。村の方々が困っているのです」

「・・・そういうことなら」

断り切れず、結局受けることになった。

～～～～～

夜、俺達は目的地に向かっていた。念のため、食べ物は持って行っているがな。

しかし、愛紗と鈴々はやはり恐いのだろう。愛紗は少し震えているし、鈴々は俺を少し掴んでいる。

星は面白がって二人で遊んでいたがな。

準備が終わり、村人達が断りを入れて帰って行った。俺達はお堂の中で化け物を待つことに。

「これはまた、如何にも何か出そうな場所だな」

確かにな。暗がりのお陰か、不気味さが増している。

「さて、化け物が出るまで、ここで待つとするか」

「そ、そうだな・・・」

明らかに動揺しているな。

「俺は仮眠を取らせて貰う。化け物が出たら起こしてくれ」

まあ、気配である程度は解るが。

「ね、寝るのか!?」

「ああ。何か問題があるか?」

間違いなく恐いのだろうが。

だが、俺は返答を待たず、浅い眠りについた。

〜〜〜〜〜

「ぅあ・・・」

星が化け物の一撃に気を失って倒れ込んだ。星程の武人を苦もなく倒すか・・・。

「・・・やるな」

「あ・・・」

俺のことには気付いていなかったのか？

「貴殿が化け物でないことは解っている。何者だ？」

「……」

喋れないのか……？

「……何が目的だ？これ程の食料を取って何になる？」

「……ご飯」

と、言うと同時に向かって来た。鋭い一撃を放ってくる。俺は上へと跳躍し、紙一重で躱す。

「待て！ご飯とはどういう意味だ！？」

「……そのまま」

……確かに。

っ！気を抜く余裕はないな。

払い、打ち下ろし、突きを次々と放ってくる。受けているだけではそう長く持ちこたえられないようだな……。

「仕方がない……」

大きく後ろに後退し、距離を取った。

「貴殿が相当な武芸者だということはよく解った」

加減出来る相手ではない。それどころか、受けて時間を稼ぐことも出来そうにない。

「……少し眠って貰おう」

俺は逆刃刀を構えた。

「行くぞ……」

「……（コクッ）」

頷いたことを確認して、一足で距離を詰めた。

「……っ！」

「飛天御剣流！龍翔閃！」

懐に入り込み、逆刃刀の腹で切り上げる。が、のけ反ることで躱される。俺は勢いのまま中空へと飛び上がり、次の状態に繋げる。

「飛天御剣流！龍追閃！」

ギィン！

打ち合った。少しだけ鍔ぜり合いが続いたが、弾き返された。

「……お前……強い」

「……貴殿もな」

この世界に転生して幾分長く経つが、これ程の腕を持つ者と立ち会うのは初めてだ。
だが、殺気は全く感じない。どうやら殺すつもりはないようだな。

キン

俺は刀を鞘に納めた。

「・・・どうした？」

「貴殿、何が目的だ？殺気を全く感じない上、悪人ではないということは解る。
だからこそ聞きたい。何故このようなことをするのかを」

「・・・ご飯。・・・みんなのご飯」

「・・・食料がなくて困っていると？」

「・・・（コクッ）」

・・・そのようだな。

「・・・お前と戦うの、楽しい。・・・もっと、やる」

・・・俺は余りやりたくないが、仕方がないな。

「・・・良いだろう」

抜刀術の構えを取った。

「……行く」

「ああ」

同時に駆け出した。

～～～～～

「はっ……はっ……」

「……ふぅ」

夜が明けてきたな……。

あれから一晩中やり合ったが、結局この様か……。お互いの力は互角。決着は未だに着いていない。

「……あ」

食料を仕切に気にし始めた。

「どうした？」

「……そろそろ起きるかも」

愛紗達のことか？

確かに、そろそろ起きるかもしれない。潮時のようだな……。

「勝負は預けよう。その食料は貴殿の仲間の為に持って行くと良い」

「……良いの？」

「困っているのだろう？」

「‥‥ありがとう」

やはり、根は良い者なのだろう。

「貴殿の名を聞きたい」

「‥‥呂布奉先。‥‥お前は？」

「拙者の名は剣だ。では、呂布殿」

「‥‥恋」

‥‥ん？

「‥‥恋で良い。‥‥真名」

「拙者に真名を授けると？」

「‥‥剣、優しくて強いから」

認めてくれたということか。

「そうか。俺は余所者で真名はないが、好きに呼んでくれ」

既に呼び捨てだったが。

「では、恋。食料は持って行くと良い。ただ、恐らく昼頃にでもま

た来るだろう。その時に事情を聞かせてくれるか？」

「……（コクッ）」

少し考えていたようだが、頷いてくれたな。

その後、恋が食料を運んで行くのを見守り、愛紗達を村まで運んだ。

～～～～～

愛紗達が起き、とんとん殿と朝食を採っている。

「何？化け物ではない？」

「ああ。紛れも無く人間だ」

「おのれ！謀りおって……しかし！そうと解ればもう恐くはない！」

「やはりそうと解るまでは恐かったのだな」

「いや！それは……」

今更隠そうとしてどうなることでもないだろうに。

「と、とにかく！化け物ではないのなら、次こそは成敗してくれる！」

「こてんぱんにしてやるのだ！」

「いや、その必要はない」

『!?』

全員の頭の上に?が浮かんだ。

「あの者とは既に和解した。これから話を聞きに行く」

「どういうことだ?まさか、あいつに勝ったのか?」

「いや。朝方まで戦っていたが、そこで打ち切った」

「というよりお主、寝ていたのではなかったのか?」

「星がやられる前には起きていた」

・・・恐がって気絶したことは敢えて言わずにおく。

「あの者は何やら事情が有りそうだった故、食料はそのまま渡した。もう一度会いに行き、事情を聞くことにも同意してくれた」

「そうですか・・・。では、すぐに行きましょう」

「そうだな。とんとん殿」

俺達はお堂へと赴き、そこから恋が行った跡を追った。予想通りとんとん殿も付いて来ていた。

「おい。あれ」

洞窟がある。恐らく、あそこに恋が・・・っ!

背後から強烈な気を感じる！だが、この気は……。

「待て、恋。俺だ」

「……剣」

やはり恋だったか。

「大丈夫だ。戦う気はない」

恋は得物を下げてくれた。

と、同時に一匹の犬が姿を見せた。

～～～～～

「村人に食べ物を貢がせていたのは、犬の餌にする為だったのですか」

「……自分でお金を稼ごうとしたこともあった」

だが、上手くいかなかった、か。感情表現が乏しそうだからな。

「全然ダメダメなのだ」

「お前が言うな」

そう言うな、愛紗。

「しかし、子犬一匹飼うのに、そこまで……」

「……一匹じゃない」

恋が口笛を鳴らすと、ぞろぞろと犬が洞窟から大量に出て来た。

「……これ程いたのか」

ざっと二十程か。

「……友達……沢山。……みんな、ほっとけなくて……」

やはり、良い者だな。

「月！」

……何者か来たな。

「あ、詠ちゃん」

どうやらとんとん殿の知人のようだな。何やら揉めているようだが……。

「あの、お取り込み中申し訳ないが、貴殿は一体……？」

「我が名は賈駆、字は文和。こちらにおられる大守、董卓様に仕える者だ」

『ええっ！？』

……やはり、とんとんという名は偽名だったか。しかし、大守だったとはな。

董卓殿が治める城に赴き、恋が罪を認め、董卓殿に仕えることで事なきを得た。元々悪心で行っていたことではないことを董卓殿は解ってくれたのだろう。あの犬達も引き取ってくれるそうだ。

「良かったな、恋」

「……ん」

「皆さん、騙すようなことをして申し訳ありませんでした」

「気にすることはないでござる。貴殿の政に対する想い、よく解ったでござる」

「そうです。お気にすることはありません」

「ただ、偽名を用いる時はもう少し上手く用いるべきでござる」

「えっ…あの、もしかして気付いていらっしゃいましたか？」

頷いて肯定する。

間者だった俺は、見抜く力を人より持っていると思う。

「貴殿が大守であるということまでは解らなかったでござる」

と言って少し笑みを見せた。

「恋。董卓殿のこと、よろしく頼む」

「……（コクッ）」

「貴方に心配されなくても私が何とかするわよ！」

・・・思わぬ所から抗議の声が飛んできたが。

「・・・（クイクイ）」

恋が俺を引っ張っているようだ。

「どうした？」

「・・・いつか、決着着ける」

「・・・そうだな」

あの勝負はまだ着いていない。俺も、恋と同じ想いはあるかもしれないな・・・。

剣が呂布の頭を撫でている。随分仲が良いようだな・・・。

「むぅ・・・」

「ん？どうした、愛紗よ」

「・・・何でもない」

「ふぅん・・・」

化け物退治（後書き）

次回予告～。

星「やれやれ。手の掛かる女だ」

愛「‥‥煩い」

恋「‥‥（もぐもぐ）」

鈴「美味しいのだ～！」

剣「‥‥酒は良い。条件が揃えば特に」

愛「剣は酒も好きなんだな」

剣「ああ。次回、『美酒』よろしくな」

美酒（前書き）

今回は全て愛紗のサイドとなっています。

題名通り、酒の話ですね。メインは他にありますが。

では、どうぞ。

美酒

「皆さん、今夜は城に泊まって頂けませんか？」

という、董卓殿からの切り出しだった。

確かにもうすぐ日が暮れる。今から旅立つのは不可能だろう。

「しかし、良いのか？」

「はい。騙していた無礼を詫びたいと思います。城の食べ物を御馳走しますから、是非」

「やた！御馳走なのだ！」

鈴々は嬉しそうだな。私も、今日は久しぶりに風呂に入れそうだな。

董卓殿の言通り、夕食は城の御馳走だった。鈴々が大食いするのを少しだけ嗜めながら、美味しく頂いた。

そういえば、呂布もかなりの大食いだったな。可愛かったが……。剣とも仲良さ気に……。

今は、久しぶりの風呂に一人で堪能している。のだが、いまいち楽しめない……。

ガラッ

ん……？

「邪魔するぞ」

「せ、星っ！？」

何故か唐突に星が入ってきた。

「お、お前！何で・・・？」

「何、風呂の中で飲もうと思ってな」

何かを持っている。酒か・・・？酒だろうな。

「ん・・・。飲むか？」

「・・・いい。そんな気分ではない」

「ふむ。どうした？」

「酔っ払いに語る言葉はない」

「酔っ払いだからこそ、すぐに忘れるぞ」

・・・そうかもしれないが。

「・・・そんなに隠すようなことか？」

「・・・お前は私の何を知っているというのだ？」

「・・・自覚がない訳でもない癖に」

「・・・何だと言うのだ？」

「剣のこと」

バッシャーンッ！

風呂から物凄い勢いで出た。

「な、何を言い出すんだ／／！？」

「おおっ。見事な反応だ」

「嬉しくない！」

「何だ？自覚がなかった訳ではあるまい？」

「・・・／／」

確かに、私は剣のことを思慕しているかもしれない。だが・・・、

「ん？どうした？」

「・・・何故気付いた？」

「大したことではない。普段の行動を思い返せば解る。まあ、今日のことがきっかけだったがな」

普段から行動に出ていたのか・・・。いや、それより、

「・・・今日のことだと？」

「お主、呂布を妬んでいたであろう？」

「なっ！そんなこと・・・」

「ないと言うか？」

う・・・。

「恐らく、昨晩二人は戦い合うことでお互いを認め合ったのだろう。仲は随分良さそうだったからな」

「・・・そうだな」

「で、妬んでいたのだろう？」

「ち、違う！決してそのようなことは・・・」

「やれやれ」

くっ・・・全てを見透かしたようにしおって・・・。

「隠すことはあるまい。女の性として当然だ」

「・・・そうかもしれない」

「つまり愛紗、お主は・・・」

「・・・私は、剣のことが好きだ」

「んふ～！美味しいのだ！」

「・・・（もぐもぐ）」

「あんた達！少しは遠慮しなさいよ！」

「・・・（ズズッ）」

「剣さんはお茶を美味しそうに飲まれるんですね」

「そうでござるか？」

「はい。沢山召し上がって下さいね」

「もう十分頂いたでござる。今は余韻でござるよ」

「そうですか。何かあれば何なりと仰っしゃって下さいね」

「申し訳ないでござる」

「いえいえ。怖い人達から助けて頂きましたし、呂布さんの一件でも剣さんの働きに因る所が大きかったですし」

「では、お言葉に甘えて一つお願いがあるでござる」

「ふむ。ようやく認めたか」

「・・・うるさい」

「やれやれ。で、どうするのだ？」

「……私が好いているとしても、剣が私を好いている筈がない」

「うむ？どういうことだ？」

「……経緯はどうあれ、剣を旅の道連れにしたのは私だ」

あの時、山中で何をしていたのかは知らない。だが、私が旅に連れ出したのは事実だ。

「……私を好いてくれる筈がない」

「ふむ……。それは剣本人に聞いたのか？」

「……いや」

「なら、剣の想いを勝手に決めるな」

「……何？」

「剣は不思議な人間だ。どこか掴み所のない雲のように思える。だが少なくとも、普段無口であるが私達と共にする旅は楽しそうではないか。

無論、私とて確信がある訳ではない。だが、聞いてもいない内から剣の想いを決めつけるな」

「……」

確かに、剣本人に聞いた訳ではない。
だが、旅を続けてそれなりに時間が経つが、黙々と後ろに付いてくるだけ。会話は、相槌は欠かさず打ってくれる。だが、含み笑いをすることはあっても、本心から笑うことは極僅か。これだけ揃っていれば‥‥、

「剣が私を好いてくれる筈がない」

「だから、勝手に決めつけるなというように」

「‥‥」

「お主の方が剣と付き合いが長い。何か思うこともあるかもしれん。正直私も、剣のことはよく解らん。謎めいた男だからな」

「‥‥私にどうしろと言うのだ?」

「さあ?それはお主が決めることだ。私の知ったことではない」

‥‥まあ確かに。

「で、お主はどうしたいのだ?」

「‥‥私は」

「お主は?」

「‥‥」

「‥‥想いを伝えたところで、その後のことを保障してやれん。剣

がどんな色を好いている等、私は知らん。
だが、行動しなければ、そこで終わりだ。何も進展しない」

「‥‥この想いだけでも、伝えたい。出来ることなら、寵愛を受けたい」

「なら、それで良いではないか。そうと決まれば、行動あるのみだ」

「‥‥ああ。済まぬな、星」

「ん？酔っ払いに何を言っている？」

「私はもう行くと言ったのだ」

「ふ、頑張れよ」

そうして、私は風呂から上がった。
寝具に着替え、城を歩く。剣はどこにいるのか‥‥？
食堂は‥‥鈴々が満足げに腹を摩っていた。与えられた部屋を覗いてみたが、いなかった。他に思い当たる場所はない。どこにいるんだ‥‥？
城を歩き回ること約一刻。ようやく剣の姿を見付けた。

「剣」

「‥‥どうした？」

剣がいたのは、どこにでもある城の通路。普通に座り込んでいるが、何をしているんだ？

「何をしているんだ?こんなところで」

「‥‥これだ」

と言って瓶を一つ見せられる。

「‥‥酒か?」

「そうだ」

「茶が好きだと思っていたが、酒も嗜むんだな」

「少しな」

‥‥相変わらず、よく解らないな。

「お主が酒を飲む所等、初めて見るが」

「‥‥旅の最中に酒を買う訳にはいかないだろう。ただでさえ金の無い旅だというのに、好き勝手に酒を買うことは出来ない」

気を使ってくれているのか‥‥星は好き勝手に買っているが‥‥。

「それに、無理をして酒を飲もうとは思わない。飲める時に旨い酒を飲めればそれで良い」

「‥‥?」

どういうことだ?

「……今宵は、月が綺麗だ」

「ほぉ……」

確かに、綺麗な満月を象っている……。

「桜……月……雪……これがあれば、酒は十分旨い」

「……そうか」

杯に酒を注ぎ、煽る。こんな剣は珍しいな……。

「……酌、してやろうか？」

「……良いのか？」

「あ、ああ……」

良かった……断られなかった。

とくとく、と杯に注いでいく。

「ありがとう……」

杯を持ち、一息にぐいっと飲んでいく。

「ん……ああ。旨いな……」

「そ、そうか……」

「……ああ。月……それにもう一つ加わったからな」

「……は？」

「……美しい女に酌をして貰えば、自然と酒は旨くなる」

「なっ……／／！？」

いきなり何を……／／？

「か、からかわないでくれ……」

「……確か、黒髪の山賊狩り、だったか」

「……？」

「……俺は噂通りだと思うがな。黒髪の綺麗な絶世の美女」

「っ／／！？」

顔が朱くなっていくのが解る。止めることが出来ない……。

「た、質の悪い冗談だ……」

「……俺はこんな冗談は言わない。どう思うかは愛紗次第だがな」

「……／／」

「……注いでくれないか？」

「あ、ああ……」

もう空だったな……。

「ん……ふぅ」

また一息に飲んでしまった。

「愛紗……何か悩んでいないか？」

「……いや、大丈夫だ」

お前のことなんだがな……。

「そうか」

深くは追求して来ない。それも剣らしいな。

「あっ……もうないぞ」

「……もう一瓶ある」

「どうしたんだ？この酒」

「董卓殿に少し譲って貰った」

成る程。そういう訳か。

「愛紗、飲むか？」

「いや、酌に専念させて貰う」

「・・・ありがとう」

楽しんでいるんだろう。邪魔をしてはいけない。

「・・・何か聞きたいことでもあるのか？」

「え・・・」

「酌をしてくれている礼だ。好きに聞いてくれて構わない」

核心を突いてくる・・・。

「・・・剣は酒に強いのか？」

「それなりに強い。この程度なら酔いもしないな」

「そうか・・・」

「・・・聞きたいことはそんなことではないだろう？」

誤魔化すことも出来ないか・・・。

「・・・その、私を恨んではいないか？」

「・・・恨む？」

「ああ・・・。私はお主を旅に連れ出した。そして戦いの渦中に巻き込んだ。

本来お主は、卓越した腕を持っているとはいえ、争いを好まない。

私はそんなお主を・・・」

「・・・・」

静かに杯を床に置いた。

「確かに俺は、争いを好まない。出来得るなら、争うことなく全てを終えたい。

だが、現実はそれを赦さない。俺がどんなに願い、望もうとその現実は変わらない」

それ程、世は乱れている・・・。

「俺は甘い。この乱れた世のただ中で、逆刃刀という刀を使っている。誰一人、死ななければ良い等と思っている。

だが、こんな俺にも力がある。今の世に苦しむ弱い人々を護る力が」

「・・・・」

「そのことを思い出させてくれたのは愛紗、お前だ」

「えっ・・・・？」

「初めて出会ったあの日、賊の隠れ家に一人で赴き、弱き人の為にと戦った。

そんな愛紗の姿を見て、俺はかつて抱いていた初心を思い出した。

俺にとって、生涯貫き通すべき想いを。

だから、愛紗・・・・」

「な、何だ……？」

「俺は感謝こそすれ、恨んで等いない。恨むという道理はないんだ」

「……そう、なのか？」

「ああ。愛紗が気にすることではない」

「そう、か……」

私は……恨まれてはいないのか……。

「愛紗……」

「ん？」

「注いでくれないか？」

「ああ」

想いを伝えるのは、まだ先になるかもしれないな。だが、時機を待とう。いずれ、良い機会がある筈だ……。

美酒（後書き）

次回予告～。

剣「旅に戻るぞ」

愛「ああ」

鈴「お昼ご飯は何なのだ？」

星「メンマだ！」

愛「・・・拉麺にでもしようか」

剣「好きにしろ。次回、『諸葛孔明』よろしくな」

諸葛孔明

食べ物の恨みは恐ろしい。
旅を続ける俺達は、昼飯として拉麺を食べたのだが、星が残しておいたメンマを愛紗と鈴々が食べてしまった。
今は山中を歩いているのだが、星は絶賛不機嫌中だ。どうもメンマは好物らしい。

「なあ、星。そろそろ機嫌を直してはくれぬか？」

「・・・・」

「次の店で鈴々のメンマを分けてあげるのだ」

「・・・・」

「そう怒るな。子供ではないだろう？」

「・・・人とメンマは一期一会。どうやってもあの時のメンマは戻らない」

・・・相当御立腹のようだ。食べ物の恨みは恐ろしい。

「ん・・・」

霧が出て来たな・・・。

「霧が出て来た。全くきりがないなぁ」

…それはウケを狙ったつもりか？愛紗。

「……」

今の星にはそんな冗談も通じてはいないがな。

「霧が濃くなってきたのだ」

確かに鈴々の言う通りか。前を見るのも辛いな……。

「逸れるなよ」

逸れれば簡単には見付からないだろう。

「鈴々！一人で前に行くな！」

言っている傍から……。

「星はどうしたのだ？」

「何……？」

ばっ、と後ろを振り返る。まずい……。

「星！」

声を張り上げた。返事は返って来ない。

「星！いい加減怒ってないで返事をしてくれ！」

「いや・・・」

星の気配を感じない。感じるのは愛紗と鈴々だけだ・・・。

「・・・逸れたな」

「捜すのだ！」

俺達三人は星を捜し回った。だが気配を感じることはない。完全に逸れたな・・・。

「きゃ！」

『愛紗！』

愛紗の叫び声が聞こえ、俺と鈴々は慌てて近寄った。

「剣！鈴々！気をつけろ！崖になっているぞ！」

崖から足を滑らせたのか。小さな崖で助かったな。

「愛紗！しっかりするのだ！」

「大丈夫・・・っ！」

「・・・足でも痛めたか？」

「ああ。どうやらくじいたようだ・・・」

「どうしよう・・・」

・・・仕方がないな。

「この霧だ。星を捜そうにも、状況が悪過ぎる。霧が晴れるまで、じっとしていた方が良い」

星は子供ではない。例え逸れて再会出来なくとも、冷静に対処するだろう。

霧が晴れるまで約一刻。ようやく霧が晴れてきた。

「あっ！あそこに家があるのだ！」

「助かった！あそこで少し休ませて貰おう」

今はそうするしかないか・・・。

俺はひょいと愛紗を抱えた。

「つ、剣っ／／／！？」

「・・・静かにしていろ。

鈴々、偃月刀を持って来てくれ」

「合点なのだ！」

「ちょっ／／／！剣／／／！」

「・・・何だ？抱えた方が足に負担がかからないと思ったが、おぶった方が良いか？」

「ぷにぷにのおっぱいが気持ち良さそうなのだ」

「〜〜〜っ／／！」

「‥‥どうする？」

「‥‥このままで良い／／」

愛紗を抱え、見付けた家へと赴いた。

「たのもー！たのもーなのだ！」

「は〜い！」

女の子の声が聞こえてきた。

「はわわわわ‥‥」

門を開けたのは予想通り女の子だったが‥‥どうした？

慌てて家に戻ったと思えば、ある女性を連れて来て家へと招かれた。

「はい。これで良し、と」

その女性に愛紗の足を診て貰った。どうやら良い人のようだな。

「足が治るまでここでゆっくりしていって下さいね」

「忝い。拙者の名は剣。こちらが関羽、そちらが張飛でござる。

貴殿等の名を聞いても？」

「私は司馬徽、水鏡と号しております。そして」

「私は諸葛亮、字を孔明といいます」

「水鏡殿、孔明殿、厄介になって申し訳ないでござる」

「いいえ。ゆっくりしていって下さい」

愛紗のあの足ではどうしようもない。素直に甘えることにした。

愛紗は寝具に着替え、足が動かないように足を吊している。

「水鏡殿、手当して頂いたのは有り難いが、ここまでしなくとも・・・」

「そう言うな、愛紗。早く治す為にも、水鏡殿の言には従った方が良い」

「それはそうだが・・・」

「手を貸して欲しければ言ってくれ。いくらでも手を貸す。な、鈴々？」

「任せるのだ！」

水鏡殿と孔明殿に厄介になり過ぎるのは良くないだろう。そういうことは俺と鈴々がしなくてはな。

その後、孔明殿が作ってくれた夕食を美味しく頂いた。

夕食後、私は関羽さんのお体を拭く為に部屋に行った。

「関羽さん、お体をお拭きしますね」

「何から何まで申し訳ない」

傍に腰掛けていた剣さんが立ち上がった。

「どうかしましたか？」

「・・・拙者がここにいる訳にはいかないでござる。孔明殿、よろしく頼むでござる。
鈴々、孔明殿を手伝ってあげてくれ」

「解ったのだ」

張飛さんは下着以外何も着ていないという凄い格好をしてるけど・・・・。

「よろしくな」

剣さんを見送ってから関羽さんが服を脱ぎ始めた。

「剣さんって、不思議な雰囲気がありますね」

「そうか？」

「はい。どこか、いつでも見守ってくれているような優しい雰囲気です」

「よく解んないのだ」

「きっと今だって、関羽さんの足の具合を気にしていたんじゃないですか？」

「そ、そうだろうか……／／」

「きっとそうですよ」

剣さん……不思議な人だなぁ……。

～～～～～

「う……ん……」

またあの夢……。最近は見てなかったのに、どうして……？

とりあえず外の空気でも吸って来よう……。

「あれ……？」

誰か立ってる……。あれは……剣さん？

「コオオォォ……」

何してるんだろう……？

「オオオオオッ！」

「きゃあっ！」

「っ！」

思わず声を出しちゃった……。尻餅もついちゃったし……。

「……済まない。驚かせてしまったでござるな……」

私に手を差し出して立たせてくれた。

「何してたんですか？」

「……鍛練、といったところでござる」

「こんな夜更けにですか？」

「こんな夜更けだからこそでござる」

何か隠しているのかな？

「孔明殿はこんな夜更けに何を？」

「……いえ。少し目が覚めてしまいまして」

「そうでござるか。もう時間が遅いでござる。早く寝るでござるよ」

「鍛練は良いんですか？」

「もう十分でござる」

「そうですか」

「さ、早く寝るでござる」

「明日、またお話してくれますか？」

「もちろんでござる。

・・・何か思うことがあるのなら、相談に乗るでござるよ」

「え・・・？」

気付かれてる・・・？

「目尻・・・少し濡れているでござる」

「えっ！？」

・・・泣いていた？

「・・・少し踏み入ったことは謝るでござる。大丈夫でござるか？」

「い、いえ！そんなことは・・・」

「・・・明日にするでござるか？それとも今聞くでござるか？」

・・・本当に不思議な雰囲気を持った人だなぁ。

「・・・明日で良いです」

「そうでござるか。それなら早く寝るでござる」

「・・・はい」

「眠れるでござるか？」

「大丈夫、です」

「そうでござるか」

微笑んでぽんぽんと背中を叩いてくれる。

「では、お休みでござる」

「はい。お休みなさい」

剣さんは踵を返して部屋に向かう。

明日、どんなお話できるかな・・・。

翌日、

「孫子曰く・・・」

孔明殿は本を読んで勉学に励んでいる様子、鈴々は屋根の上で昼寝している。愛紗は水鏡殿に足を診て貰っている。

余り人の事情に立ち入り過ぎるのは気乗りしないが、孔明殿の涙が少し気になる・・・。

とにかく、勉学が終わるまで待っているべきだな。

「剣さ～ん！」

終わったか？

「勉学は終わったでござるか？」

「はい！待たせましたか？」

「気にすることはないでござる。
孔明殿は偉いでござるな。しっかりと勉学に励んで」

「えへへ。私、水鏡先生みたいに人の役に立てるようになりたいんです」

成る程。それで努力しているのか。

「あの」

「どうしたでござる？」

「聞いても良いですか？」

「良いでござるよ」

元々そのつもりだったからな。

「剣さんは、この国の人ではありませんよね？」

いきなりそのような質問か。鋭いな。

「そうでござる。他所から流れて来た放浪者でござるから。よく解ったでござるな」

「いえ、珍しい服を着ていますから」

確かに。今まで聞かれなかったことが不思議なくらいだ。俺は紺の袴を着ている。この国には先ずない代物だろう。

「他所の国ってどんな感じなんですか！？」

突然迫力が増したな・・・。

「興味があるでござるか？」

「はい！是非お聞きしたいです！」

どうしたものか・・・。話すだけなら問題ないか。

徳川幕府が権力を無くし、維新へと動き出す。幕末から明治維新に至るまでザッと順を追って説明した。

「はわわ～・・・。この話を剣さんは聞いたんですか？」

体験談、と言いたいところだが、転生した時に若返っているからな。それは言わないのが賢明だろう。

「知人から聞いたでござる」

「・・・あの、宜しければ、何故流れて来たかを教えて欲しいです」

「・・・理由は特になかったでござる。だが今は、孔明殿と同じでござるよ」

「私と同じ、ですか？」

「人の役に立ちたい、でござるよ」

そう思えるようになったのは愛紗のお陰だな。

「剣さんもなんですね」

「旅はそれが目的でござる」

「じゃあ皆さん・・・」

「想像通りでござる」

笑顔になった。同じ想いを持っている者がいることが嬉しいのだろう。

「こちらから聞いても？」

「はい？」

「答えたくなければ答えなくて結構でござる。
昨晩、何かあったでござるか？」

「・・・夢を、見たんです」

・・・答えてくれたか。

「私は、幼い頃に両親を無くし、親戚中をたらい回しにされてたんです。結局、水鏡先生のところまで来て落ち着いています。たらい

回しにされる時に・・・姉妹とも別れ別れになりまして・・・」

「・・・その時の夢を見て、目を覚ましたという訳でござるか」

「はい・・・」

義姉妹の愛紗と鈴々を見てその記憶が蘇ったか。

「辛いことを話させてしまったでござるな。済まない」

「あ、いえ。良いんです」

「申し訳ないが、話を聞いて何が出来る訳でもなさそうでござる。だが、その思いを紛らせる為の話し相手くらいにはなれるでござるよ。

いつまでここに居座るか解らぬが、それまでは拙者で良ければ何でも話して欲しいでござる」

屈んで孔明殿と目線を同じにする。頭を軽く撫でる。

「えへへ・・・。ありがとうございます」

この子も恐らく乱世の被害者なのだろう。少しでも楽にしてあげたいのだが・・・。

「あの、じゃあ早速一つ・・・」

「何でござる?」

「それです」

「…それ、とは？」

「…えっと、私と話す時と関羽さんと話す時の口調が違いますよね？」

そのことか…。

頭は賢いがまだ幼い。同じ口調で話して欲しいのだろう。

「いけませんか？」

「いや、済まない。気が利かなかったな」

「いいえ」

孔明殿はにこやかに笑う。

「あの～、私の真名は朱里っていいます」

「真名？」

「はい。口調を直して頂いたので」

「そうか。俺は他所者で真名はないが、よろしくな、朱里」

「はい！」

～～～～

夕食後、愛紗の容態を確認してから部屋で寛いでいる。

コンコン

・・・誰だ？

朱里は愛紗の体を拭いている頃だ。鈴々はこれ程俺に礼をわきまえたことはしないだろう。

「開いているでござるよ」

「失礼致します」

やはり、水鏡殿か。

「私だと解っていた返事でしたわね」

「思い当たったのが水鏡殿だけだったでござる。どうかしたでござるか？」

「御礼を言いに来ました」

「・・・礼？拙者が言うことであっても、言われることはないと思うでござるが」

「朱里のことです」

・・・朱里の？

「本日昼、朱里と何を話していたのかは存じませんが、あの子はいつも以上に明るかったんです」

「そうでござるか」

俺としては嬉しいことだが。

「あの子があれ程明るいのは、非常に稀なんです」

「朱里は、普段から明るい性格だと思うでござるが……」

「今日はその中でも特別。話しをしていても、話題になるのは貴方のことばかりですよ」

「……拙者の？」

「はい。どんなことを話した、とか、頭を撫でて頂いた、とか。それはもう嬉々として」

「……そうでござるか」

「だから、一言御礼を言いに来ました」

「礼を言われる程のことはしていないでござる。ただ話し相手になっただけでござるから」

「いいえ。あの子が持つ悲しい性を、払拭して下さったのですから」

……悲しい性？

「あの子は本当に良い子です。聞き分けが良くて、我が儘等一言も言わない。

でも、私にはそれが辛い境遇を経験する内に知らずと身についた

性のように思えるんです」

子供らしく甘えることもなく、ただただ安息な生活を送りたい一心で身についたのだろう。誰でも思うことだ。

「…だが、それは拙者がここにいるまでの間。ほんの場凌ぎにしか過ぎないでござる」

「はい。そこで、剣さんにお願いがあります」

お願い？

「何でござる？」

「あの子を、朱里を旅に連れて行ってはくれませんか？」

「…本気でござるか？」

「はい」

「…拙者等は武芸者でござる。それも世直しを志す者、戦となればいの一番に飛び出していくような者でござる。

朱里のことを四六時中見ていられる訳ではないでござる。朱里の身の安全を保障出来る訳ではないでござる」

戦となれば、死ぬことだってある。俺達はいつまでも生きていることはないかもしれない。

「承知しています。ですが、あの子が私に言ったたった一つのおねだり、旅に出て見聞を広めたいという我が儘を、叶えてあげたいん

です」

・・・どうしたものか。

「お願い致します」

深々と頭を下げられた。

「水鏡殿、頭を上げるでござるよ」

「無理を承知で、お願い致します」

頭を上げることなくそう言った。

「・・・明日、朱里と話してみるでござる。それから決めても、遅くはないでござろう？」

「・・・はい。よろしくお願い致します」

もう一度深く頭を下げ、部屋を後にした。

水鏡殿の確固たる意思を組んであげたい気はある。だが、今の乱れた世で俺達と共に旅をすることは危険過ぎる。朱里は賢いが戦える訳ではない。果たして連れて行くべきか・・・？

諸葛孔明（後書き）

次回予告～。

全『星さん次回予告卒業おめでとう～』

星「えっ・・・？ちょ・・・」

鈴「今までお疲れ様なのだ」

朱「私、代わりを務めるべく頑張ります」

星「・・・本当なのか？」

愛「アニメ沿いだからな」

鈴「潮時なのだ」

星「なっ！？私は・・・」

剣「次回、『旅へ』よろしくな」

星「ま、待て！いや、待って下さい！」

剣「五月蝿い。ではな」

「湿布をしてもう三日になるのに、余り腫れが引いてないわ」

水鏡殿は愛紗の足をよく診てくれているが、余り良い傾向ではないな。

「何か良い方法はないでござるか？」

「あります。サロンパ草という草があれば良いのだけれど」

「サロンパ草って何なのだ？」

「こうした腫れによく効く薬草なの」

ふむ。そんな薬草があるのか。

「先生！サロンパ草なら私が取って来ます！」

「え・・・でも、サロンパ草が生えているのは随分山の上の方よ？」

「大丈夫です。先生と何度か行ったこともありますし、場所は覚えていますから」

「私が一緒に行けると良いのだけれど、今日は麓の村までお薬を届けないといけないし・・・。

そうねぇ・・・一人で大丈夫かしら？」

「そういうことなら、拙者が共に行くでござる」

「宜しいのですか？」

「勿論、構わないでござる。
鈴々、留守にしている間、愛紗のことは頼む」

「了解！鈴々に任せておけ、なのだ！」

鈴々にこの場を任せ、俺は朱里について行くことに決めた。

「では、行くか？」

「はい♪」

「気をつけて行くのですよ。剣さん、朱里をよろしくお願いします」

「承知したでござる」

こうして、俺と朱里は山に向かって歩き出した。

「えへへ～♪」

随分と機嫌が良いな。

「どうかしたか？朱里」

「いいえ～。関羽さんの役に立てると思って」

「そうか。朱里は偉いな」

「えへへ～♪」

にこにこと笑っている。悪いことではないな。

「何かお話しませんか？」

「構わないが。そうだな、水鏡殿は医学に随分通じているようだな」

「はい！水鏡先生の作るお薬は本当によく効くんですよ！」

「だから今日も麓の村に薬を届けに行くということか」

「はい！先生と薬草を摘みに行く時は毎回たくさんのことを教えて頂いて」

それを一つ一つ学び覚えているのだろう。やはり勤勉な子だ。

「朱里も医学は学んでいるのか？」

「はい。医学に、兵法、経済に農法を」

ほぼ全てと言って良いだろう。なお学ぶ姿勢、この子は本当に勤勉だ。

「剣さんが腰に差しているのは刀ですよね？」

「そうだが？」

「珍しいですよね。刀はほとんど出回ってなくて、主流は剣なのに」

「そうだな。確かにこの国に来てから刀は見たことがない」

「剣さんがいた国にはよくあったんですか？」

「剣が主流ではなく、刀が主流だったからな」

「はわ～・・・成る程～」

まあ・・・逆刃刀を使っていたのは間違いなくあの同胞だけだったろうがな。

「朱里は麓まで下りることはあるのか？」

「ありますよ。ご本を買いに行く時は頻繁に下りますし、水鏡先生について行くこともしばしば」

「成る程、確かにな」

「旅は楽しいですか？」

「・・・何故そのようなことを？」

「いえ。私もいつか、旅に出てみたいなと・・・」

本人が旅をしたがっているというのは、間違いないようだな。

「旅は・・・そうだな、珍しい物は多い。他所者の俺にとっては特にな」

「ですよね～♪私も見聞を広めたいんです」

「俺は流れて来る前も旅をしていたが、こちらに来てからも貴重な体験は今でも多い。旅をするだけで経験できることは多いということだ」

「わあ～♪」

・・・結果として、旅に出たがらせることを言っているな、俺は。

「橋だな・・・」

しばらく歩く内に橋が見えてきた。

「あれを渡るのか？」

「は、はい・・・」

・・・どうした？急に元気がなくなったな。

「どうかしたか？」

「い、いえ・・・」

・・・妙に怖がっているな。高所恐怖症か？

「高いところは苦手か？」

「は、はい・・・」

まあ、苦手なことの一つや二つはあるものか。

「ほら」

スッと手を差し出す。

「えへへ♪ありがとうございます」

パッと笑顔が戻り、再び歩き出す。

「剣さんは兵法書等は読まれたりしたんですか？」

「いや。俺は軍師という柄ではない。常に前線に赴き、指示に従って動いていたからな。

この国の兵法となると、ますます解らない」

「剣さんの国は違う兵法だったんですか？」

「似通った点はあるだろうが、違うだろうな」

「興味深いですね」

「残念だが、俺が持っている物はこの刀のみ。兵法書は持ち合わせていない」

そんな物は転生する前も大して読んではいなかった。

「う～ん・・・残念です」

「済まないな」

「あ、謝らないでください。剣さんは悪くないんですから」

「・・・朱里は兵法も学んでいるようだが、戦にでも使うのか？」

「それは解りません。いつか役に立つ、そう思って学んだことなので」

「そうか・・・。ならば、いざ戦となった時、その知は使えると思うか？」

「それも解りません。でも、私が学んだことが役に立てばと思います」

驕りはしないか。出世しようと思えば、良い文官、軍師に成れるかもしれない。

「あっ！ありました！」

サロンパ草か？

「どれだ？」

「あれです！あの崖に生えている・・・」

確かに。白い花が一本だけ崖の窪みに生えている。

「解った。少し待っていてくれ」

跳躍して崖を上る。崖の小さな窪みを足場にサロンパ草に近付く。

「……良し」

サロンパ草を掴み、根から引き抜く。それから、同じように崖の窪みを足場に飛び下りる。

「これで良いか？」

「は、はい。剣さんって凄いんですね……」

「……そうか？」

飛天御剣流を会得してからというもの、こうした動きに苦がない。いや、過信してはいけないな。

「さてと、帰るか？」

「はい♪」

反転して帰路を歩き出す。帰り着く頃には夕暮れ時、といったところか。

そろそろ、聞くべきかもしれないな。

「朱里」

「はい？」

「これからは、少し真面目な話だ」

「……何でしょう？」

「昨夜、水鏡殿から朱里を旅に連れて行って欲しいと頼まれた」

「はわわ!?水鏡先生が!?」

「そうだ。朱里、お前はどうしたい？」

「私は……一緒に旅に出たいです」

やはりそうか。

「……解っているとは思うが、今の世は乱れている。危険が伴うぞ？」

「はい。それは、解っています」

それでも行きたい。目がそう語っている。

「俺達が共にいるが、はっきり言って殺されないとは言い切れない。命の保証は出来かねる」

「それなら大丈夫ですよ」

「何……？」

「剣さんが護ってくれますから」

「……大きく出たな」

「違うんですか？」

…本当に賢い子だ。

「そうだな。だが、俺がいなくなったらどうする？」

「剣さんのことです。いなくなる時は、皆さんのことを考えてある程度の保険をおいていくと思いますよ」

…この数日で、俺の性格を完全に見切られたようだ。

「どうしてもついて来るか？」

「…水鏡先生が許してくれているのなら、是非行きたいです」

「…解った」

「…駄目、ですか？」

ふっ、と軽く笑みを零して軽く頭を撫でる。

「少し水鏡殿と話してみよう。結論はそれからだ」

「はわわ…よろしくお願いしますぅ」

それ程心配する必要はないと思うがな。俺が許可を出せば、快く承諾するだろう。

橋を渡り、適当に話をしながら帰る。そして、門前まで帰って来た。

「お帰り、朱里～」

「ただいまです、先生！」

言葉を交わし、サロンパ草を差し出す。

「あら、よく取れたわね～」

「剣さんのお陰なんですよ！」

「剣さん、ありがとうございました」

「いや。ささ、家に入るでござるよ」

「そうですね。どうぞ」

俺達は家に入り、その日は眠りについた。

～～～～～

翌日、サロンパ草を使った治療のお陰で愛紗の足は腫れがすっかり引いていた。

「まあ。すっかり腫れが引いているわ」

「それでは・・・」

「ええ。もう動いて大丈夫」

愛紗はそれを聞き、優しく足を摩る。

「良かったな、愛紗」

「ああ。水鏡殿にはすっかりお世話になってしまって、何と御礼を言って良いか」

「困った時はお互い様。御礼なんて別に‥‥」

「それでは私の気が済みません！私に出来ることがあれば、言って頂けませんか？」

「では‥‥朱里を一緒に旅に連れて行ってはくれませんか？」

「孔明殿を旅に！？」

「はい。そう、お願いしたいのですが‥‥」

水鏡殿が目で俺を伺っている。

「‥‥良いでござる」

「えっ‥‥？」

「良いでござる。朱里もそう望んでいるようでござるから」

「‥‥ありがとうございます」

「‥‥水鏡殿は、本当に宜しいのですか？」

愛紗がそう聞くのも最もだな。

「‥‥あの子が私に言ったたった一つのおねだりを、叶えてあげた

いと思います」

「・・・解りました。この関羽、責任を持って孔明殿をお預かりします」

これで決まりか。

～～～～～

「・・・と、いうことだ」

「はいっ！」

この返事を聞けば解る。行く気のようだな。

俺達は支度を終え、門前で水鏡殿に見送られている。

「では、関羽さん、剣さん、朱里をお願いします」

「はい」

「・・・任されたでござる」

「張飛ちゃんも。よろしくね？」

「鈴々に任せるのだ！」

「朱里」

「はい。水鏡先生」

「気をつけて行くのですよ」

「はい！」

まるで、本当の母親のような心境だろうな。

「では」

「ああ。行くか」

こうして、俺達は新たに旅の仲間として朱里を加え、旅を再開した。

旅へ（後書き）

次回予告～。

朱「旅立ちですね～。これから何があるのか、楽しみです」

愛「浮かれる気は解らんでもないが、余り気を抜くなよ」

剣「朱里にそのような心配は不要だろう」

鈴「違う奴に必要なのだ」

剣「そうだな。次回、『神弓の矢』よろしくな」

「～～♪」

鈴々は鼻歌混じりにご機嫌な様子で歩いている。

「こら、鈴々。そんなに前に一人で行くな」

「逸れるなよ」

「そういえば、霧の中で逸れてしまったお仲間の方、逸れたままでちょっと心配ですね」

星のことか。まあ、多少心配ではあるが。

「きっと、どこかの空の下で、元気にしているさ」

愛紗の言う通りだな。星に余計な心配は不要だろう。

「…鈴々、機嫌が良いようだが、何か良いことでもあったか？」

「良い天気なのだ」

確かに。日光がさんさんと降り注ぐ今日の気候は気持ち良いものだ。

「こんな晴れた日は、何か良いことがあるかもしれ「きゃー！」何だ！？」

やれやれ。ここは一応、往来だ。賊が出るような場所ではないが。

「ちょっと！何すんのよ！離しなさいよ！」

どうやら、子供がオヤジに腕を取られているようだが。

「そこまでだ！」

愛紗が勇んで制止に乗り出す。

「か弱き者を虐げんとする悪党め！この場で成敗してくれる！」

……ふむ。

「悪党って、オラはただ……」

「問答無用！」

愛紗に続いて鈴々も矛を構える。が、

「待て」

俺は割って入った。

「何故止める！？」

「そうなのだ！」

ふぅ、と溜息をついてオヤジを見た。やはり、悪事を働く者の目ではない。

見たところ、このオヤジは茶店の主人といったところだろう。

「突然の御無礼、お許し頂きたいでござる。
主人、何か問題でもあったでござるか？」

「んだ。この娘っ子が飲み食いした後、金も払わずに逃げようとしただよ」

「何と！」

隣で愛紗が驚いている。鈴々も同じだ。

「何が悪いか、そう易々と決め付けるな。状況を把握することから始めるべきだろう」

「・・・大変な御無礼、申し訳ない」

「ごめんなさいなのだ」

まあ、素直なことは良いことだ。

「ちょっと！早く助けなさいよ！」

・・・今の話を聞いていなかったのか、この娘は。

「と、言ってますけど、よく真実を見抜けましたね」

「目だ。目は真実を語る。三人共、覚えておいた方が良い」

「・・・難しいのだ」

鈴々にはまだ早いか。

「ちょっと！聞いてるの！？」

「・・・それはこちらの台詞だ。悪事を働いたのはお前の方だろう。主人は何も間違ったことはしていない」

「それは誤解よ！この小蓮様がそんなことする筈ないわ！」

「・・・と、言っているが。剣、お主の心眼はどうなのだ？」

・・・簡単なことだ。

「娘、ここの代金はいくら払った？」

「うっ・・・」

「・・・勝負有り、ですね」

やれやれ。

「剣、凄いのだ」

「・・・このくらいは見抜けた方が良い。さあ、もうすぐ街に着く。行こう」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

「・・・何か？」

「助けなさいよ！」

「ふぅ」

思わず溜息。自然と出てしまった。

「何溜息ついてんのよ～！」

「‥‥どうします？」

「放っておけば良い。決めるのは主人だ。俺達ではない」

「それはそうですけど‥‥」

「‥‥朱里は優しいな」

朱里の頭を軽く撫でてやる。

「だが、優しさと甘さは違う。悪事を働いたのはこの娘、悪いことをしたのなら、償うのもこの娘だ」

「確かにそうなのだ」

「はい‥‥」

渋々、といったところか。頭では理解しているだろうがな。

「‥‥おい。何か事情でもあるのか？」

人に言えることではないが、愛紗も甘いな。

「旅でもしているのだろう?路銀が尽きたのか?」

「そうよ」

「何故だ?無一文で旅をしていた訳ではあるまい」

「これの為よ」

娘は綺麗な首飾りを見せる。

「これに路銀使っちゃったのよね~」

「主人、この娘のことは任せる。邪魔をして悪かった。行こう」

「行くのだ」

「・・・そうだな」

今回は愛紗も頷いた。当然といえば、当然だろう。

「ちょ、ちょっと!」

「・・・流石にもう庇えません」

「路銀も無しにこれからどうしろって言うのよ!?」

「俺が聞きたい。そんな物の為に路銀を使い果たし、これからどう

するつもりだ？」

何を言っているのだ、この娘は。どんな言い分を通すつもりだ？

「しょうがないじゃない！これだー！って思ったんだから」

「……貴殿、どこの出だ？」

「ふふん。聞いて驚きなさい！江東に覇を唱える孫家の娘、孫尚香よ！」

やはり、どこぞのお嬢だったか。教育が行き届いていないようだな。

「では、孫尚香殿、世間の厳しさを学ぶでござる」

「ええっ！？」

見たところ、護衛はいない。お嬢が何故一人旅をしているかは知らぬが、そんなことに興味はない。

「でも、大丈夫でしょうか？」

「孔明殿？」

「いえ。この人、一人で帰れるのでしょうか？」

『あ～……』

頭を抱えた。朱里の言う通りだ。一人で野放しにしておくのは危

険過ぎる。

「尚香殿、どうやって帰るのだ？」

「家出して来たんだもん。帰る必要なんてないわ」

ここまで来たら、最早呆れる他ないな。

「・・・放っておきたい、と思うのは俺だけか？」

「鈴々もなのだ」

「だがなぁ・・・」

「そうですねぇ・・・」

確かに、このまま放っておきたいのは山々だが、このままにしていれば最悪死ぬだろう。

「・・・愛紗、この娘を連れて行く余裕はあるか？」

「・・・そうするしかないだろうな」

「・・・ふぅ」

もう一度溜息。無理もないと勝手に納得した。

「主人」

「あい、この娘っ子、どうするか・・・」

「尚香殿は私達が預かる。ここの代金は払うから、それで良いか？」

「オラは構わねぇが・・・」

「感謝する」

代金を払い、街に向かって歩き出した。

「ふふん。やっとこの小蓮様の偉大さが解ったようね」

「・・・と、言ってますけど」

「余り突っ込むな、朱里。孫家に送り返した後、この世間知らずをなんとかして貰おう」

「それが良いのだ」

「まあ、鈴々でもここまではないな」

「どういう意味なのだ～！」

鈴々も余り遠慮はないが、限度はわきまえるだろうからな。

「あっ！門ですよ。街に着きました！」

朱里の言う通り、門が見えてきた。

「止まれ！」

「……何か？」

門兵にやけに厳しく止められたな。何かあるのか？

「旅の者か？」

「そうですが」

「変な気は起こすなよ」

と、釘を刺された。何をそれ程警戒している？

とにもかくにも、俺達は街に入った。

「いやぁ、見れば見る程綺麗ね～」

孫尚香殿が首飾りを見ているが、最早気にしたくもない。

「カア！カア！」

その時、烏が孫尚香殿の首飾りを奪って空高く飛び上がって行った。

「ちょっと！何すんのよ！返しなさいよ！」

……出遅れたか。全く気にかけていなかったからな。

だが、まだ方法はある。

「愛紗！偃月刀を貸せ！」

全力で愛紗に向かって駆け出した。

「はあ!?どういうことだ!?」

「剣さんを上空に上げるんです!」

流石は朱里。よく理解しているな。

「わ、解った!思いっ切りいくぞ!」

「来い!」

偃月刀を振る愛紗の力を加佐に、全力で跳んだ。

次第に烏が近付いてくる。届く筈だ……。

その時、不意に風を切る音が聞こえた。別の何かが飛んできているのか?

予想は的中した。

烏の上顎辺りを矢が掠めていった。誰かが矢を射たのか?

俺の手が届く前に烏が落ちていった。命中した訳ではないが、掠めたことで一時的に意識を失ったのだろう。

地上を見ると、鈴々が滑り込んで烏を助けたようだ。烏の命は無事だろう。

だが、一つ問題がある。はっきり言おう。ここは高過ぎる……。

「はわわ!剣さんが墜ちて来ます~!」

「上げ過ぎなのだ!」

「す、済まん……」

「あの高さから墜ちれば、まず助かりません。
関羽さんと鈴々ちゃんで衝撃を出来る限り殺して下さい！」

「どうすれば良いのだ？」

「お二人で、もう一度剣さんを上に上げる感じでお願いします！」

「解った！」

地上が近付いてきた。俺の目には、着地点で偃月刀と矛を構える愛紗と鈴々が見える。
確かに、実行しなければ俺は死ぬ。まだ死ぬ訳にはいかない。
逆刃刀を抜き、水平に構える。折れたらそれまでだが、そう易々とは折れないだろう。とにかく、やるべきことは衝撃を殺すことだ。

「はああっ！」

「りゃああっ！」

偃月刀と矛がぶつかる。
俺は瞬時に力を抜き、体が浮いた感覚になる。だが、一瞬だけ。
高所からの衝撃はそうそう相殺出来ることではない。
こうなることは容易に予測出来た。だからこそ、俺は数少ない持ち物の一つを犠牲にした。
鞘だ。
腰から鞘を取り出し、力の限り偃月刀に叩き付けた。
鞘が鈍い音を出して折れる。しかし、衝撃をいくらか殺せた。だ

が、鞘を叩き付けた故に俺の体勢は整わない。
無理矢理体を曲げ、愛紗に倒れ込んだ。

「くっ……！大丈夫か？」

鈴々は小さいと思い、愛紗に無理矢理倒れ込んだのだが……。
……何だ？柔らかいものが……？

「つ、つつつ剣っ／／！」

「大丈夫か？愛紗」

「は、ははは離れてくれ／／！」

「あ、ああ。済まない……」

抱き着く格好になっていたな。
俺が離れると、愛紗は俺から飛ぶように距離をとった。

「愛紗？どこか痛めさせたか？」

「ななな何でもない／／！何でもないんだ／／！」

……大丈夫か？

「……大きなおっぱいで衝撃を和らげる。見事な策と言えなくも……」

「孔明殿／／！」

「……冗談ですよ」

……何を話している？

「無事で良かったのだ」

「ああ。世話をかけたな」

「あれ？何してんの？」

今の一連の騒ぎを見ていなかったのか？
まあ良い。それより、あの時飛んできた矢は何なんだ？

「朱里。あの矢は何か解るか？」

「えっと、あちらの方が射たと思います」

朱里の指差す方向を見てみると、誰かが部屋の中に戻っていった。
あの矢……もし、狙っていたとすれば、間違いなく神業。果たしてどちらか……。

～～～～～

その後、俺達は店に入り、食事した。

「……愛紗。そろそろ機嫌を直さないか？」

「……／／」

……なかなか直らないな。

「あの、剣さん。時間をおけば直ると思います」

「‥‥そうか？」

「はい」

‥‥そうなのか？もう少し時間をおいておくか。違う話題でも振ってみるとしよう。

「孫尚香殿、貴殿は孫家の娘と言ったが、それを証明する物はあるか？」

「そんなの、こうして本人が言っているんだから間違いないわ」

「‥‥と、言っているが、どう思う？」

「お姫様がこんな所を一人で歩いてるなんて可笑しいのだ」

「そうですね。最近陽気も良いですし、もしかしたら‥‥」

「そこ！聞こえるようにひそひそ話さない！」

鈴々の言い分も朱里の言い分も理解出来るのだがな‥‥。

「ならば何故一人でこのような所にいる？」

「か、堅苦しいお城暮らしにうんざりして、家出当然に飛び出して来たーとかじゃないんだからね！」

堅苦しいお城暮らしにうんざりして、家出して来たのだな…。
鈴々と朱里は悲しい者を見る目をしている。俺もしているだろう。

「おやまあ、綺麗に平らげてくれたもんだねぇ」

店の女将が話しかけてきた。

「お茶のお代わり、どうだい？」

「…申し訳ない」

愛紗の機嫌が僅かだが直ったようだ。朱里の言う通りのようだな。

「あんた達、旅の者みたいだけど、やっぱり明日の行列を見に来たのかい？」

「明日の行列？」

何のことだ？

「おや？知らないのかい？」

「その行列というのは何なのだ？」

「ここの領主の息子さんが婿入りするんだよ。それで、明日はその御結婚の行列って訳さ」

「結婚か…良いものだな」

めでたいことだ。幸福になると良いのだがな。

「それが・・・そうでもないんだよ」

女将が体を屈め、周りに聞こえないように話し始めた。

「・・・今回の婿入りを、良く思わない人がいるらしいんだよ。それで、その一味が暗殺を企ててるんじゃないかって噂になってるんだよ」

「それは物騒な・・・」

「でも、これで理由が解りましたね」

「理由？」

「ほら、門兵にやけに厳しく止められたじゃないですか」

「・・・確かに。それなりの警戒をしているということなのだろう」

「そうだな。大丈夫だ、女将。事前に洩れた陰謀が成功するなど、そうそうないものだ」

「そうだと良いんだけどねぇ。全く、早く平和な世の中にならないかねぇ・・・」

そう呟いて去って行く。それを哀しい表情で見送る愛紗がいる・・・。

「・・・考えていても仕方がない。俺達は俺達以上のことをすることは出来ない」

「・・・ああ」

「さぁ、宿に戻ろう」

その日、俺達は宿に戻り、眠りについた。

神弓の矢（後書き）

次回予告～。

剣「やれやれ。姫君には困ったものだ」

鈴「お臍出してるし、意味解んないのだ」

小「うっさいわよ！」

愛「しかし、あの矢は一体・・・」

朱「偶然・・・じゃないんですか？」

愛「解らない。だが・・・」

剣「次回、『黄漢升』よろしくな」

黄漢升

「全く‥‥何で二人部屋に五人も押し込められなきゃならないのよ！」

「文句を言う割には鼾かいて寝てたのだ」

「ちょっと！この小蓮様が鼾かいてたですって！？」

‥‥仲が良いのか、悪いのか。喧嘩する程仲が良いとは言うが‥‥。

「あの、剣さん」

「‥‥どうした？」

「昨夜は眠れましたか？」

「いつも通りだが？」

「寝台で寝ていないだろう？孔明殿はそこを気にしている」

「俺は大丈夫だ。心配はいらない」

元々、寝台で眠ることは少ない。俺は膝を抱えて眠ることがほとんどだからな。

それより、愛紗が立ち直っているようだ。一日時間を置いて正解だったな。

「愛紗、昨日の矢、どう思う？」

「…もし、狙って射ていたとしたら、正に神業だな」

やはり、か…。

あれ程の神弓は見たことがない。狙って射たとしても、俄には信じられないな。

「…愛紗？」

何か考え込んでいるようだ。どうかしたか？

「っ！」

愛紗が急に進路を変えて走り出した。何か思い当たることがあるのか？

「ちょっと！どこ行くのよ！」

愛紗が向かう先は…成る程。有り得ない話ではないな…。

私は昨日の弓の御仁を訪ねた。

「…そうですか。貴女が昨日の」

「関羽と申します。先日は連れの者がお世話になりました」

「いいえ。根がお節介なものですので、つい余計なことをしてしま

って。

あっ、申し遅れましたが、私は黄忠、字を漢升と申します。すいません、今お茶を・・・」

「それには及びません」

動揺か、落ち着きがないだけなのか・・・。

少し探ってみるか・・・。

「良い天気だ。大通りの方まで、よく見える」

「っ！」

明らかに動揺した。やはり・・・、

「しかし、ここからでは人の頭は豆粒程。更に動くとあっては、生半可な弓の腕ではまず当たらない。警護の連中がその可能性を考えなかったとしても、責めは出来ますまい」

「・・・関羽さん。貴女、何が仰りたいのかしら？」

「いや。もし弓の女将に匹敵するとしたら、不可能を可能にするかもしれない、と」

「くっ！」

偃月刀を掴んだ。それと同時に私は弓を掴む。

「・・・動くな」

「つ、剣！？」

私が弓を構え終わる頃には、剣が黄忠殿の肩を掴んでいた。

「…お主がすることはよく解らんな」

「以前、同じことをしてみせた筈だ。それ程驚くな」

「い、いつの間に…！？」

「…さあな。鈴々、もう入って良い」

扉が開き、鈴々達が入って来た。

黄忠殿が肩を落とす。諦めたようだな。

～～～～～

「数年前に主人を亡くした私は、幼い娘の璃々と二人、静かに暮らしていたのですが…。

ある日、用足しに行って戻ってみると…娘がいなくなっていて、代わりに一通の置き手紙が…」

「…脅迫か」

剣？

「…その置き手紙、もしくはそれに関することで、今回の暗殺をやむなく請け負ったという訳か」

「…はい」

なんと卑劣な！

「娘の璃々は私の全てなんです！娘を救う為には、他にどうしようもなくて……！」

黄忠殿の想いは痛い程解る。だが……、

「ねぇ、これって？」

尚香殿が何か気付いたようだが……。

「それは娘が描いた絵です。娘が無事な証として持って来て……」

「……その絵、誰かに似てると思いませんか？」

今度は孔明殿が何か気付いたようだが……。

「あっ！茶店の髭オヤジ！」

確かに。よく似ている！

「じゃあ、あの茶店の主人が！」

「いえ。それはないと思います。いくら何でも、そんなへまはしない筈。

多分これは、監禁されている場所から見た物を描いたのだと思います」

「……そう考えられるかもな。だとすれば、向かいの小屋か……」

確かに小屋があったな。あそこに捕われているのか！

「娘の居場所に心当たりがあるのですか！？」

「ええ、多分・・・」

「場所を教えて下さい！今すぐ私が行kきゃっ！」

「・・・落ち着くでござる」

勢いで立ち上がった黄忠殿を、剣が肩を掴んで無理矢理座らせた。

「貴殿は行くべきではないでござる。そうだな、朱里？」

「どうして！？」

「顔を知られている黄忠さんが監禁場所に近付いたりしたら、娘さんの身に危険が及ぶかもしれません！娘さんの身を最優先するのなら、黄忠さんは何も知らない振りをして、ここにいてください！」

孔明殿の言う通りか・・・。

「そういうことでござる。ここで大人しくしているでござる」

黄忠殿ががっくりと肩を落とす。

「愛紗」

剣もそのつもりのようだな。

「黄忠殿、あの茶店まで、急げばさほど時間はかからない」

「それでは・・・」

「お主の娘、この関羽が命に換えても救うと約束しよう！」

「関羽さん・・・」

黄忠殿の表情が少しだけ軟らかくなった。

「良し、では行くか！」

「愛紗」

「ん？どうした、鈴々？」

「剣がいないのだ」

「なに～っ！？」

先に行ったのか！？

俺は隠業の技を使いながら屋根の上にいる。

理由はただ一つ。フードで身を隠した者が盗み聞きしていたからだ。

「・・・そこで何をしている？」

「っ！……ふっ」

「……今までの会話を聞いていた筈だ。聞いてどうするつもりだ？」

どうもさせるつもりはないがな。

「……私に言っているのか？」

「他にいるか？」

このような駆け引きは嫌いではないが、生憎今は時間が惜しい。

俺は抜き身のままの逆刃刀に手をかけた。

「ふっ、焦るな。だが、時間がないのは事実か。ならば、私の正体を明かしてやろう！」

来るか……？

「私は、美と正義の使者！華蝶仮面！」

「……何をしている、Ｓ」

「華蝶仮面だ！」

妙な仮面をしてはいるが、間違いなく逸れた知人だ。だが、今は時間が惜しい。下手な追求は時間の無駄になる。

「……美と正義の使者だと言ったな。俺達の協力をするつもりはあるか？」

「勿論だろう！」

「・・・ならば、馬を用意してくれ。頼んだぞ」

愛紗達は先に行っているだろう。

移動手段である馬は星に任せ、俺は愛紗達を追って走った。

～～～～～

「・・・状況はどうなっている？」

俺が追い付いた時には既に茶店にいて、何かを話し合っていた。

「剣！今までどこにいたんだ！？」

「関羽さん！その話は後にしましょう！今は剣さんがいることを喜ぶべきです！」

「そ、そうだな」

朱里の判断に感謝だな。

「では、見張りの目を引き付けますので、剣さんは上から、関羽さんと鈴々ちゃんは下から入って一気に制圧してください！」

「解ったのだ！」

どのように引き付けるのかは聞かない。こういうことは任せるべきだ。

俺は木に登り、葉で身を隠す。上の階にいる見張りは三人か。部屋の隅に小さな子供がいる。恐らくは黄忠殿の娘だろう。

何をしているかは知らないが、見張りの三人の目が一箇所に集中した。朱里の合図が来た！

窓に突っ込む。その衝撃で見張りが気付いたが、もう遅い。こちらに向かって来るより早く、逆刃刀を振るっていた。見張りが気を失い、倒れる。

普段なら怪我をしたくない者は下がれ、と言うところだったが、相手は外道なのでな。省かせて貰った。

「剣！」

「下は全部叩きのめしたのだ！」

愛紗と鈴々も問題ないようだな。

「璃々殿だな？」

「……うん」

少し怯えているか。無理もないが。

「帰ろう。母が待っている」

「お母さん！」

無垢な声が返ってきた。余程、淋しかったのかもしれないな。

「愛紗！この子を頼む。俺はいち早く街に向かう！」

返事を待たず、俺は飛び下りて駆け出した。一瞬、視界に入った馬の姿。星は上手くやったようだな。

俺は馬に乗った経験がほとんどない。愛紗なら乗りこなし、璃々殿を連れて来るだろう。俺は黄忠殿に娘の無事な伝えることが肝要だ。

恐らく、間に合わなければ黄忠殿は暗殺をやる。そのくらいの激しさは秘めている。

俺が全力で駆けぬけて約半刻。後先考えなければ、もう少し早く着くだろう。

駆けぬける内に、背後から馬蹄が聞こえてくる。愛紗が追い付いて来たのだろう。同時に門が見えてきた。

「剣！」

「構うな！駆けろ！」

振り返らず言い放つ。

このままなら愛紗が先に到着するが、門兵に止められるだろう。そこまでは予想していなかった。偶然、運が味方したのかもしれない。

愛紗が門兵に止められる直前、俺は馬の背後に身を隠した。馬に門兵の注意が集中した瞬間、隠業で門兵をすり抜けた。

街をひた走る。行列がある。人の群。すり抜ける。遠目に見える黄忠殿。矢を射る構えは既に終えている。間に合うか？屋根を跳躍して登る。

不意に黄忠殿が矢を引いた。何があったかは知らない。構わず窓から飛び込んだ。

男が一人いる。黄忠殿の肩を掴み、何か言っている。

「おい！何で矢を射ねぇ！？」

悟った。犯人一味の仲間だろう。

「飛天御剣流！龍巻閃！」

飛び込んだ勢いのまま、逆刃刀を叩き込んだ。そのまま気絶する。

「あ、貴方は・・・」

「璃々殿は無事でござる。よく耐えたでござるな」

「はい・・・」

膝をついた。相当無理をしていたようだな。

かく言う俺も息が荒い。些か疲れたな。

「もうすぐ愛紗が連れてくるでござる。笑顔で迎えてあげるでござる」

程なくして、璃々殿を連れた愛紗が入って来た。

～～～～～

「皆さん、本当にありがとうございました」

「ありがとう～」

親子の感謝の言葉で夕飯が開かれた。

今宵は泊まってくれ、ということで、宿を払い、夕飯を馳走になるところだ。夕飯は黄忠殿が腕を振るってくれたそうだ。

「さあ、今日は沢山召し上がってくださいね」

「いただきますなのだ！」

「いっただっきま～す！」

鈴々と孫尚香殿が食べ始めた。釣られて、俺達も箸を伸ばす。

「美味しいのだ～！」

鈴々の言う通りだ。食欲がそそられる。
賑やかな食事だった。悪い気はしない。
黄忠殿は愛紗と何かしらの話をしている。食欲旺盛な二人は一心不乱に食事に向かっている。

「お兄ちゃん」

「どうした、璃々殿？」

「璃々、殿じゃない～」

「なら、改めよう。どうした、璃々？」

「美味しい？」

「ああ。美味しいな」

「えへへ～」

頭を軽く撫でる。

「剣さん、お兄ちゃんなんですね」

「そんな柄ではないのだがな。一応、鈴々の義兄でもあるらしい」

「そうなんですか・・・」

「璃々のお兄ちゃん！」

まあ、勝手に決められているが。

「じゃあ孔明お姉ちゃんのお兄ちゃんでもあるの～？」

・・・鈴々もそうだったが、何故そうなる？

「ええっと・・・」

俺は以前、目は真実を語ると言った。嘘ではない。事実、俺はそう思っている。

さて、今さら何故そんなことを確認するかと言うとだな・・・、朱里の目だ。期待。これしか語っていない。

「・・・朱里？」

「・・・・・・じ～っ」

「・・・俺は朱里の義兄か？」

「はいっ！」

輝く笑顔でその返事が返ってきた。頭を抱えかけてしまう。

「えへへ～」

…止めよう。追求する気にはならない。どうせ無駄になる。
俺は兄という柄ではないと思うのだがな…。

～～～～～

賑やかな食事を終え、俺は与えられた部屋で寛いでいる。無論、一人でだ。

コンコン

扉を叩く音。誰か来たようだな。

「開いている」

「失礼します」

軟らかい物腰。黄忠殿か。

「いかがしたでござる？」

「御礼を言いに来たのだけれど」

「その必要はないでござる。楽しい時間を過ごさせて頂いたでござるから」

「それでは私の気が済みませんので。これはどうですか？」

どこに隠していたのか、酒瓶を持っていた。

「欲しいんじゃありません？」

「……よく解るでござるな」

確かに、美味い飯の後は酒が飲みたくなるが。

「女の勘ですよ」

「……そうでござるか」

杯を二つ用意し、酒を注いだ。

「どうぞ」

「……済まない」

杯を口に運び、酒を飲み干す。

「……美味いでござる」

「ふふ……私の真名は紫苑です」

「……何を言っているでござる？」

突然何を言い出す？俺に真名を教える？

「真名を教えれば、口調を直してくださるかと」

「・・・女の勘でござるか？」

「いいえ。孔明ちゃんが言ってましたよ」

「・・・口調を直せば良いのか、紫苑？」

「ふふ、ありがとう」

そんなことの為に真名を教えるのか？

「不思議そうね。お酒を一緒に飲んでくれる人は余りいないから」

「俺で良ければ、いくらでも相手するが？」

「あら、強いのかしら？」

「さあな」

「でも、残念ね。明日は旅立つもの」

若干控えているように見える。調子に乗って飲む訳にはいかないか。

今宵は月が映えていない。それも残念ではあるが、久しぶりの酒だ。勧められるだけ飲むかもな。

再び、二つの杯に注がれる。またしても一息に飲み干す。

「あら。豪快なのね」

紫苑は上品な飲み方だ。ゆっくりと口に容れていく。その仕草に色香が漂っている。

「酒を飲むことは少ない。もう少し飲む機会があれば、飲み方も変わってくるのだがな」

「ふふ、久しぶりの時は一息に飲みたくなるものね」

解っているようだな。堪え切れなくなるからだ。

「また、杯を交わすことがあるかしら？」

「そのうち、また逢えばな」

「璃々も喜ぶわ。お兄ちゃん」

「・・・兄が母と杯を交わしているのはどうなのだろうな」

「たまには良いわよ」

「・・・そうか」

もう一度杯を交わし、紫苑は部屋を後にした。

翌日、俺達は紫苑と璃々に別れを告げ、それぞれに旅立った。

黄漢升（後書き）

次回予告～。

紫「皆さん、こんにちは」

剣「また、杯を交わすことを楽しみにしている。紫苑」

紫「私もですよ」

愛「……」

剣「……何を難しい顔をしている？」

愛「……別に」

紫「あらあら」

剣「……何だと言うのだ？」

朱「剣さんも罪な人ですね」

鈴「剣は罪人なのか？」

朱「ある意味の話ですね」

剣「……やれやれ。次回、『孫呉』よろしくな」

「これが長江か～！おっきいのだ～！」

鈴々が感嘆の声をあげる。

俺達は孫策が治める域内に着いた。理由は勿論、孫尚香殿を家に帰す為だ。

「しかし、良いのか？家出して来たのだろう？」

「私は孫家で一番愛されてる姫なのよ。帰って来たのを泣いて喜ばれはしても、怒られるなんて有り得ないわ！」

さてさて、どういった結果になるのやら。

～～～～～

「尚香！貴女という人は！」

まあ、解ってはいたが、結果は正反対。当たり前だが、孫尚香殿は説教されている。

俺達も城に招かれ、王の間にいるが、俺達のこと等気にした様子はない。

「まあまあ、もう良いではありませんか」

漸く制止され、俺達に目が向けられた。

「小蓮のことは礼を言うわ。貴女達のことを歓迎するわね」

こうして、俺達は与えられる部屋に案内されることになった。

「先に行ってくれ。俺は少し貴殿等に聞きたいことがある。構わないでござるか？」

「ええ。良いわよ」

少し愛紗と朱里が訝し気な視線を向けてきたが、結局は退出していった。

残ったのは俺と他に数名いるだけだ。孫策殿、周瑜殿、孫権殿、孫静殿だ。表向きはな。

「聞きたいこととは？」

「・・・単刀直入に聞くでござる。この国は戦続きでござるか？」

『っ！？』

皆が皆、驚きの反応を示す。当然ではある。何せ、何も知らないような部外者にいきなり国の大事を言い当てられたのだからな。

「・・・何故そのようなことを？」

「理由でござるか？簡単でござる。民の様子でござるよ」

城に来る前に街を通るのは至極当然なこと。

民は気丈に振る舞っていた様子がほとんどだったが、間違いなく疲弊が窺えた。

「…よく解ったわね」

「他にも言えることはあるでござる。例えば、貴殿の手首。軽いのだろうが、傷を負っているでござろう？」

「…隠してたつもりだったけどね」

包帯が巻かれている。やはりな。

「それで？何が言いたい？」

孫策殿の隣にいる周瑜殿が顔を少しだけしかめて言う。

「言いたいことがある訳ではないでござる。国の方針等、ただの放浪者が意見できることではないでござる。あるとすれば、孫策殿」

「何か？」

「御身には気をつけるでござるよ」

「そうね。そうするわ」

俺の言の深い意味合いまで理解してくれれば良いのだがな。

「話はそれだけでござる」

「そうか。ならば、城の者に案内させよう。誰か」

「おや？呼ぶ必要はないでござろう？」

「なに？」

「そこに控えているではござらんか？」

『っ！？』

二度目の驚きか。

「なん・・・だと・・・？」

「控えているではござらんか。拙者の背後に。貴殿が拙者を案内してくれるのでござろう？」

「は、はい・・・」

姿を現したのは、小柄で刀を背負った女だ。恐らく、この国の間者だろう。間者として接しはしないがな。

「で、では、こちらへ」

賢明な判断だ。

俺は案内に従い、この者の後ろをついていった。

「相当鋭いわね。剣、だっけ？」

「はい‥‥。まさか、周泰まで看破するとは‥‥」

「やるわね‥‥」

私は剣という尚香様を連れ帰った人を案内しているんだけど‥‥、どうして私が潜んでいると解ったんだろう‥‥?

「もし」

「はわ!?な、何ですか?」

「大丈夫でござるか?放心していたでござるよ」

貴方の所為なんだけど‥‥。

「貴殿の名を聞いてよろしいでござるか?」

「周泰と申します」

「では、周泰殿。実は、折り入って頼みがあるでござるよ」

「頼み?」

「ご存知かもしれないが、拙者には今、鞘がないでござる。肩に掛けているような刀の鞘を一本分けては頂けないでござろうか?抜き身のままでは些か辛いのでござるよ」

「‥‥解りました。では、私の行きつけの加治屋に行きますか?」

「感謝するでござる」

剣殿は案内した部屋に入っていった。私はすぐに周瑜様の下に向かった。

「周瑜様」

「来たか、周泰」

やっぱり、待ってたんですね。

「まさか、お前まで看破されるとは思わなかった」

「申し訳ありません……」

「何か言っていたか？」

「鞘が欲しいと」

「刀が抜き身だったと聞いた。そのくらいなら、まあ良いだろう。何か企んでいる様子は？」

「いえ。特に目立つことは」

「ふむ……」

何を考えているんだろう？

「一応、奴を見張れ。怪しい行動は絶対にさせるな。気取られるな

よ」

「はい！」

周瑜様が何を考えているか解らないけど、孫呉に仕える者として、与えられた命を熟すだけ。

私は剣殿の部屋を見張った。さっきはどうして気付かれたか解らないけど、今度は気付かれないようにしないと。

しばらく様子を探る。部屋を出たのは夕食の時だけ。誰かと怪しげな接触は全くなかった。

夜になり、剣殿は寝台に入った。怪しいことはないのかな？そういう行動は結局なかった。

私は一時部下に後を任せ、周瑜様に報告に行った。

「周瑜様」

「戻ったか。どうだ？」

「特に怪しい行動はありませんでした」

「そうか。引き続き警戒を」

「その必要はない」

『っ！？』

突然、背後から声が聞こえた。

周瑜殿と周泰殿が驚く。無理もない。俺が背後に突如現れたのだからな。

「貴様……何故……？」

周瑜殿が声を絞り出す。

「何故？周泰殿を尾けてきた。それだけのことだ」

「わ、私が……」

「……何が目的だ？」

目的、か……。

「俺の台詞だな。俺を見張って何が目的だったか聞きたいものだな」

「く……」

「一つずつ答えようか？

王の間で周泰殿のことは伏せておくべきだったが、鞘が欲しくてな。周泰殿に聞くのが早いと思っただけだ」

「……私のことは気付いていたのですか？」

「王の間にいた時より気付きにくかったが、見張っていることには気付いていた。寝台に入ったのは罠だ。寝台に入れば動きは取りづらい。周泰殿が一度報告に行くと思ったからな」

「……それで、尾けてきたという訳か？」

「なんだ？まさかとは思うが、人のことを散々見張っておきながら、人を尾けるなと言うのではないだろう？」

「くっ・・・」

「・・・茶番は終わりだ。一応、無駄かもしれないが言っておく。俺は何も企んではいない」

「・・・周泰を欺き、ここまで来ておいてか？」

「俺は元間者だ。今回は騙し合いに勝ったに過ぎない。それと、最初に俺を見張ったのは貴殿等だ。これはその当て付けだと思え。では、俺は部屋に戻らせて貰おう。そろそろ周泰殿の部下が起きるかもしれないのでな」

それだけ言い、部屋から離脱した。

～～～～～

翌日、愛紗と鈴々は孫尚香殿と山へ狩りに。朱里は書庫に。俺は街へ出かけた。

俺の目的は言うまでもないが鞘だ。かなり渋ったようだが、逆刃刀は返して貰った。刀を納めなければならないからな。

供には周泰殿が来た。周瑜殿の指示だろう。

「・・・剣殿はどこの間者だったのでしょうか？」

「俺は他所から流れて来た者だ。流れて来る前は間者だったというだけのことだ」

「他所から？」

「ああ。それと、拙者はとある事情で仕えることは禁じられている。これといって心配することはない。何者かの下に仕え、間者として働くことなどないからな」

「そうですか・・・」

何を考えているかは解らないが、警戒を解いて欲しいものだな。言葉を選んで話しているように感じる。素直に話してみるか。

「周泰殿、昨日の行為にこれといった思惑はない。あるとすれば、貴殿に鞘のことを聞きたかっただけだ」

「そう言われましても・・・」

「・・・元とはいえ、間者の言葉か。忘れてくれて構わない」

信じる訳がないな。俺なら信じない。

「・・・一つだけ、約束してくれませんか？」

「・・・と、言うと？」

「孫呉に敵対するのは辞めてください」

なんだ。そのようなことか。

「心配する必要はない。争いは出来るだけ避けたい。俺の刀はそれ

を示している」

持っている逆刃刀を見せる。

「逆刃の刀・・・」

「俺は不殺を自らに誓っている。誰一人として、死ぬ者を見たくない。それが例え、敵対する者であったとしても」

「不殺の誓い、ですか・・・」

「可能な限り、戦いも避ける。孫呉が俺と敵対するようなことがない限り、俺から敵対することはないだろう」

「そうですか・・・」

言ったことは全て真実。これで信じてくれれば良いがな。

「あっ、加治屋ですよ」

少しだけ声色が明るくなった。安心したのか、信じてくれたのかは解らないが。

「ご主人、鞘はありませんか？」

「おう。周泰様じゃねぇか。鞘を探してんのか？」

「はい。こちらの連れの方が」

「済まない。鞘を折ってしまってな。一振り別けてくれないか？」

「刀の鞘か。ああ、沢山あるぜ。好きなもの持って行きな」

「良いのか？」

「ああ。どうせ使わなくなった余りものだからな」

言葉に甘え、逆刃刀に合う鞘を一振り選び、頂戴した。加治屋に礼を告げ、街を歩いて回った。

「良かったですね」

「ああ。やはり、刀は鞘に納めておくものだ」

出来得るなら、抜くことさえないならそれに越したことはないからな。

「あの、聞きたいことがあるのですが」

「何か？」

「よく戦続きだと解りましたね。この街を見る限りでは、余りそういった様子はないように思うのですが」

「確かに、この街を見るだけではよく解らない。だが、孫呉が治める街はここだけではない。

当然だが、この街に来る前に幾つか街を見て来た。その様子と比べてみれば、一目瞭然だ」

「・・・他の街」

「そうだ。この街は城から最も近い。それだけ、孫呉に忠誠を誓っている人々が住んでいるだろう。戦が続いているとしても、孫呉の為と思えば気力は尽きない。
だが、他の街はどうだ？ただ平穏に暮らしたい人々からすれば、戦を好む訳がない。気力も当然ながら尽きる」

無論、戦を好む人間など、いないだろうがな。

「もう一つ。加治屋では鞘が多々余っていた。本来、一振りの刀や剣に一振りの鞘を造る。多々余るなどない。
余っていたということは、刀や剣が使い物にならなくなったということだ。そこから考えられるのは、戦闘があったということだ」

「・・・成る程。よく見ておられるんですね」

「・・・癖だ。自然と目が行ってしまう」

昔からそうだ。まして、苦しんでいる人々がいれば尚更・・・。

「・・・仕えようと思えば、どこでも士官出来そうですね、剣殿は」

「・・・そうか？」

「はい。間者としての腕は、私より遥に上です」

「ふっ・・・俺に気付かれたことを気にしているのか？」

「そんなことは・・・」

「気にすることはない。周泰殿は間者として、立派に役目を果たしている。今回は偶然俺に有利だっただけのことだ。条件が同じなら、どう転ぶか解らない」

「そうでしょうか？」

「そうだ。たまたま運が俺に味方しただけだ。最も、競い合いたくはないがな」

「私もです」

俺と周泰殿が競い合うということは、孫呉と敵対していることに繋がりかねない。

「あっ、城に戻って来ましたよ」

「ああ」

今日は見張られずに過ごしたいものだな。

しかし、なかなか思い通りにはならない。そう考えていた矢先、城に入ろうとしたところを数人の槍を持った兵に取り囲まれた。

「…周泰殿、俺は孫呉に嫌われているのか？」

「い、いえ。そんなことは…。何があった？これはどういうことだ？」

周泰殿が兵に尋ねている。周泰殿も事態を把握してはいないようだな。

「はっ！旅の者、剣を連行せよとの命です！」

俺を連行する？

「だ、誰の命だ？」

「孫権様です」

孫権殿が俺を連行する？周瑜殿ならまだ解るが、孫権殿だと？

「連行するならするで構わないでござるが、その前に事情を説明しなければ納得出来ないでござる」

「孫策様暗殺の容疑だ！」

……孫策殿を暗殺？孫策殿の身に何かあったのか？

「孫策様の容態は！？」

周泰殿が慌てた声を上げる。自分の主君のことだ、当然か。

「一命は取り留めたようですが、未だ意識が戻らず危険な状態だとのことです」

まだ生きているようだな。何よりだ。

「だが、拙者は周泰殿と共にいたでござる。暗殺の容疑を立てられるのはお門違いでござる」

今、慌てている状況だとすれば、決行されたのは数刻前程度だろ

う。容疑者扱いされる謂れはない。

「旅の連れである関雲長を捕らえた。貴様にもそれ故に容疑が掛かっている」

前半の内容が信じられなかった。愛紗を捕らえた…？

「…関羽が捕らえられる証拠はあるのか？」

「証拠はないが、絶好の位置から矢を射ることは出来た。怪しむのは当然だ」

つまり、証拠はないのだな…？

「貴様も十分容疑に掛かる！大人しく縄に付け！」

聞こえなかった。ただ口が動いていたことを確認しただけだ。

今の俺は、体中を何か熱いものが駆け巡っていることが解るだけだった。

孫呉（後書き）

次回予告～。

小「私の出番少ないわよ！」

鈴「鈴々もなのだ！」

小「周泰の方が多いじゃない！」

明「申し訳ありません！」

剣「謝るところではないように思えるが」

朱「そうですね。ただの妬みですし」

鈴「うるさいのだ！」

愛「やれやれ。剣」

剣「次回、『怒り心頭』よろしくな」

怒り心頭

まるで嵐だった。

気が付いた時には吹き抜けていて、何が起きたか理解出来なかった。

兵が剣殿に槍を向け、捕らえようとした時だった。剣殿が消えた。風が吹き抜けた。次に気が付いたことは、兵が全て倒れていたことだった。剣殿の姿はなく、もういなかった。

兵の息はある。死んではいない。恐らくは、剣殿の剣撃に当てられたもの。逆刃刀だから助かったってことかな…？

「って、こんな検分してる場合じゃない！剣殿を追わなくちゃ！」

城の王の間に向けて駆け出した。

手錠を掛けられている。孫策殿暗殺の容疑が、私に向けられた。孫策殿が矢を受けた頃、山の狩場で一人になっていた。それが容疑の原因だと言う。

孔明殿が必死に弁護してくれている。事実、私は何もしてはいない。

「関羽さんから離れた時、甘寧さん、貴女も一人だったってことですね？」

「貴様…何が言いたい…？」

甘寧殿の目が鋭くなった。孔明殿、これは挑発し過ぎだ。

「一人だった関羽さんが怪しいのなら、同じくらい甘寧さんも怪しいということです」

「ふ、ふざけるな！私は孫呉に仕える身だぞ！」

「仕える者、だからじゃないんですか？
毎日のように顔を合わせる主君と臣下であればこそ。日々の軋轢、利害の不一致。
相手を殺したいと思う気持ちは、孫呉とは何の関わりもない旅の武芸者より、ずっと大きい筈。違いますか？」

「言わせておけば……この小娘が！」

甘寧殿が兵の剣を抜き、孔明殿に刃を向けようとした。
その時、城内にも関わらず、風が吹き抜けた。

ギィン！

孔明殿に刃は届かず、刃先が折れて宙を舞っている。視線を元に戻すと、新たに一人立っていた。

「剣……」

剣だった。逆刃刀を既に抜いている。甘寧殿が向けた剣を折ったのは、剣の逆刃刀だろう。

「貴様……！」

「黙れ。何か言わせるつもりはない。俺の問にだけ答えろ」

「なんだと！」

「黙れと言っている」

甘寧殿の圧力を意にも介さず、剣は続ける。

「何故、朱里に刃を向けた？」

「っ！」

甘寧殿が気圧された。

解ったかもしれない。後方にいる私には剣の表情は見えないが、怒っている・・・？

「武人を辱めたからだ！」

「そうか。同じ武人である愛紗に手錠を掛け、辱めている。人のことを棚に上げて、そう言っているのだな？」

「く・・・」

「更に言おうか？

俺も見ての通り武人だが、城に帰って来るなり槍を向けられた。

それも辱めで良いのか？

もっと言うなら・・・どうなのだろうな、周瑜殿？」

周瑜殿が顔を逸らす。何かあったのか？

「まあ、俺のことはどうでも良い。

だが、愛紗に手錠。朱里に刃を向ける。孫呉の諸君、これはどういうことだ?」

孫呉に動揺が見られる。剣たった一人に気圧されている。

「今すぐ、相応しい対応をして頂こう。断るというのなら、この場にいる者全員、それなりに覚悟して貰おう」

「図に乗るな、貴様!」

甘寧殿がもう一度剣を抜いた。今度は自分の得物だろう。
対する剣は何事もないようにただ刀を持っている。それが逆に、怒っているのだと思わせた。

「剣殿!待ってください!」

剣と甘寧殿が切り結ぶかと思ったその時、別の者が飛び込んで来た。その何者かが剣の前に得物を抜いて立った。

「周泰殿、俺は貴殿に刃を向けたくはない。退かないか?」

「私は孫呉の臣下です。退けません」

「退け!周泰!貴様の出る幕ではない!」

「甘寧将軍こそ退いてください!剣殿と剣を交える必要はないんです!」

今の剣を前に、そのようなことが言えるのか…?

「……先ずは、愛紗の手錠を外せ」

剣が静かに告げる。周泰殿の言うことを認めたということか？

「……些か、勇み足でしたね、孫権様。
孫策様が倒れられ、動揺しているのは解りますが、こんな時だからこそ、上に立つ者として皆を引っ張らなければならない。そうではありませんか？」

「……そうだな、周瑜」

孫権殿が歩み寄ってくる。私の手に掛かっていた手錠が外された。

「……済まなかった。関羽殿」

「いや、解って頂いたのなら、私はもう……」

俯く孫権殿を気にしながら、剣に目を向けた。今だに刀を納めてはいない。

「甘寧。お前も得物を納めよ」

「しかし……」

「納めよ」

「くっ……」

周瑜殿に甘寧殿は抗うも、渋々得物を納めた。剣はまだ納めていない。眼前に立っている周泰殿もだ。

「刀を、納めてください。剣殿」

剣は無言で周泰殿に近付いて行く。まさか‥‥？

杞憂だった。周泰殿の頭に軽く手を置き、刀を鞘に納めた。

「‥‥済まない。周泰殿。少し、熱くなり過ぎていたようだ」

「‥‥いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」

剣は振り返り、私達の方に来た。

その時、孔明殿が目を回して、剣に体を預けるようにふらついた。

剣が孔明殿を支える。

「大丈夫か？」

「ちょっと‥‥頑張り過ぎちゃいました～‥‥」

「ああ。よく頑張ったな」

孔明殿も頑張ってくれたからな。

「自室に戻ろう。ここにいても仕方がない。残りは孫呉の問題だ」

「ああ」

私達は王の間を出て与えられていた部屋に入る。剣もついて来た。

「剣って怒ると怖いのだ‥‥」

「そう言うな、鈴々。怒れば誰しも怖いものだ」

「お主でも怒ることがあるのだな」

「・・・少し、熱くなった。反省している」

それだけ、熱いものを持っているということだろう。あれ程の腕前なんだ。当然か。

「朱里。ああいう挑発は辞めておいた方が良い」

「もうしません～。反省してます～」

孔明殿も大分無理をしたからな。

「しかし、孫策殿の容態はどうなのだろうな」

「まだ意識不明だそうです」

何でも、矢に毒が塗ってあったとか。危険な状態だろう。

「あのお姉ちゃんならきっと大丈夫なのだ」

鈴々の言う通り、信じるしかないな。

時は夜が更けた頃。暗闇に包まれている。その暗闇で、一つの陰謀に決着が着こうとしていた。部屋に明かりが点けられる。周瑜殿だ。

「孫策！お主は間違っておる！」

「いくらこの手を汚そうと、手に入れたい物があるのです！」

孫策殿暗殺。同家の孫静殿が仕組んだことだったのだろう。上手く周瑜殿に利用されたようだがな。証拠に、孫策殿に体の不調は無さそうだ。

孫静殿が兵に連行され、孫策殿と周瑜殿が残っている。俺は部屋の明かりを消した。

「騒ぐなよ。騒げば兵が来る」

声をかけ、姿を見せた。孫策殿と周瑜殿は目を丸くしたが、騒ぎはしなかった。

「三文芝居、見せて頂いたでござる。謀ったでござるな」

「・・・貴様がここにいたということは、全く読み切れなかったがな」

「凄いわねぇ。全然気付かなかったわ」

孫策殿は飄々としている。大物だな。

「孫策殿の身を案じ、再び暗殺行為があると踏んでここにいたが、まんまと騙されたでござる」

「ふぅん。私の心配してたんだ」

「言った筈でござる。御身を大切に、と」

「その真意は？」

流石は孫呉を支える名軍師。ここまでくれば、俺の真意はあらかた読んでいるのだろう。

「孫策殿。貴殿が傷付けば、悲しむ者が大勢いるでござる。そのこと、忘れないようにするでござる」

この街に住む人々。孫呉に仕える人々。皆が孫策殿のことを案じている。孫策殿を信頼している。

そのような君主が倒れれば、国は混乱する。今日の孫権殿のようにな。

「…旅の者の貴方が、そこまでこの国を想っているとはね」

「拙者はどのような人であっても、悲しみ、苦しむ者を放っておけないだけでござる」

「綺麗事だな。この大陸に住む人々がそうなれる訳ではない」

「解っているでござる。拙者に出来ることは、この目に映る人々を護ることだけでござる」

「所詮、自己満足か？」

「そうでござる」

「…そこまで即答出来るとはな」

周瑜殿が言ったことは全て正しい。解っている。否定する気にもならない。

そのうえで、俺は刀を振るうことに決めた。恐らく、かの同朋も解っていただろう。

「ねぇ、腕は立つの？」

「さあ」

「甘寧と立ち会うつもりだったのだろう？」

叩き潰すつもりだった、とは言わない。今となってはどうでも良いことだ。

「ふぅん。相当出来そうね」

「もはやどうでも良いでござる」

「それ程の腕を持ちながら、野に置いておくなんてねぇ・・・」

「故有って、拙者は誰にも仕えるつもりはないでござる」

「勿体ないわねぇ・・・」

俺は仕えない。そのことを変えるつもりはない。

「拙者等は明日にでも旅に戻るでござる。世話になったでござる」

「お前が孫呉に刃を向けないことを願っている」

「周泰殿にも言ったでござるが、拙者から刀を抜くことはないでござる。今日のようなことがない限り」

「ま、気をつけるわ」

背を向けた。これ以上は不要だ。静かに部屋を後にした。

～～～～～

翌日、俺達は船場にいた。孫呉が船で陸地まで運んでくれるようだ。

俺達は思い思いに別れを告げている。愛紗は孫権殿、鈴々は孫尚香殿、朱里は陸遜殿、俺は周泰殿だ。

「いずれ、またいらしてくださいね」

「ああ。機会があればな」

「こたびのような無礼はもうしませんので」

「そう気にするな。もう過ぎたことだ」

俺が冷静さを欠いたことも悪い。

「では、いずれまた、周泰殿」

「はい」

船に乗った。汽笛が鳴る。

「旅の無事を願っています！またお会いしましょう！」

今回の事件で最も我を見失ったのは孫権殿だ。だが、今後の糧にすることが出来れば、人として大きく成長するだろう。

船は悠々と進んでいる。先頭で俺達は寛いでいる。朱里だけが難しい顔で何か考えているが。

「船旅は楽で良いな。こうしてのんびりしているだけで、目的地に着けるのだから」

「そうなのだ。楽チンなのだ～」

「……どうした？何か引っ掛かることでもあるのか、朱里？」

「……孫策さん暗殺の事件。全てが上手く行き過ぎたと思いませんか？まるで絵に描いたような……」

……流石だな、朱里。確かにこの件は、周瑜殿辺りが企てたことだろう。

「もし、朱里の考える通りだとして、何が目的だと思う？」

「……そうですね、孫策さんに反発する方は多そうでしたから、その反発者をあぶり出す為ではないかと」

「……俺もそう思う。今回のことを企てた理由が、他に見当たらない」

この見解はほぼ確証に近い。ただ証拠がないから、断言は出来ない。

「剣さんは孫策さんの政策、どう思われますか？」

「俺は良し悪し付け難い」

「関羽さんと鈴々ちゃんはどうですか？」

「難しいことは解んないのだ」

「……私もよく解らないのだが」

話に付いて来れていないか。仕方のないことかもしれないな。この二人を放っておいて、話を進めた方が良さそうだ。

「朱里はどうだ？」

「私も多分、剣さんと同じです」

「……例えば、孫策殿がこの天下に覇を唱えようとしているのなら、戦続きの政策は間違いではない」

「はい。ここで立ち止まれば、江東の地は制圧出来ても、天下に手を伸ばすことは出来ません。

勢いを一度失ってから天下を狙うことも難しいでしょう。中原と江東では、人の数が違い過ぎます」

人の数は兵数に直結する。そこまでは見えていなかった。見解の広さは朱里の方が一枚上手だな。

「逆に、天下に野心を持っていないのなら……」

「下策だ。ただ民を苦しめているに過ぎない」

そのようなことは万に一つもないだろう。周瑜殿が下策を執ることは考えにくい。

まあ、俺達がこうして意見を出し合うのは、単に暇を持て余しているだけ。俺達の船旅はしばらく続いた。

怒り心頭（後書き）

次回予告～。

剣「やれやれ。何故、孫尚香殿を返しに来ただけで、あれ程苦労したのだ？」

愛「お主の業が奇妙だからだろう」

鈴「びっくりなのだ」

剣「ふむ……」

朱「控える気になりました？」

剣「いや」

愛「まあ、そうだろうな」

剣「次回、『義勇軍』よろしくな」

「ううっ・・・・」

この声を聞いて目を覚ました。

俺達は屋根を造る為、洞窟の中に入って夜を過ごした。そして朝、

俺は目を覚ました。この声の主は愛紗だ。うなされているのか・・・？

外から感じる複数の気配、闘気。何かが起こっているのか？

「うっ・・・・」

愛紗が目を覚ました。

「愛紗」

「・・・剣か」

酷く汗をかいている。

「大丈夫か？うなされていたようだが」

「あ、ああ・・・」

応えが曖昧だな。深入りするのは辞めておくべきか。

「顔を洗ってくる・・・」

「いや、辞めておけ。外で何かが起きている」

「何か……？」

「様子を見てくる」

「私も行こう」

揃って外へ行く。光が差し込む方向に顔を出した。

「なっ……！？」

絶句する。漂う血の臭い、転がる人の死体。切り合う兵。ここは戦場か……。

見えるのは劉の牙門旗。疎らな兵装。義勇軍か何かか？だとすると、もう一方には旗も無ければ全く纏まりのない兵装。賊か？

義勇軍と思われる兵が俺達の前に倒れた。同時に賊と思われる兵が止めを刺しに来る。

「止めろ！」

愛紗が割って入った。

「貴様も義勇軍か！？」

どうやら、俺の見解は当たっているようだ。振りかざしてきた剣を俺が割って入り、逆刃刀で受けた。

「愛紗、偃月刀を持って来い。それから、鈴々を起こせ」

頷き、走り去って行く。見送らず、眼前の兵と鍔ぜり合いを続けながら後ろの兵に声をかけた。

「大丈夫か？」

「す、済まねぇ」

「対峙しているのは、賊で間違いないか？」

「あ、ああ・・・」

後ろに目を向けた。眼に偽り無し。それだけ聞ければ十分だ。

「おい」

「あぁ！？」

「怪我をしたくなければ下がれ」

「ふざけんじゃねぇ！」

「そうか。ならば、暫し眠れ」

剣を払い、逆刃刀を振るう。気絶する。様子を見ていた賊が寄って来た。

「怪我をしたくなければ下がれ」

様子は変わらない。血走った目で俺を睨みつけている。

だが、そこへ偃月刀と舵矛が襲う。

「剣！」

「賊だ。助太刀するぞ」

駆け付けた愛紗と鈴々に短く伝え、賊に向かった。
神速の剣で二人、三人と次々に倒していく。この速さに賊は全く付いて来れない。愛紗と鈴々も暴れているようだ。賊の腰が退けてくる。三人でさらに押した。賊が崩れる。潰走を始めた。

「敵が崩れたぞ！押し返せ！」

義勇軍の指揮官らしき者が号令をかける。全軍で押す。
が、潰走を始めている時点で押すことに意味はない。軍を纏め、追撃に移るべきだった。押す時機が違う。
結果、賊が逃げただけだ。追撃してもいない。退却させただけで良いのだろう。最早どうでもいいがな。
怪我人が出ている。軍が各自で休息を取り始めた。

「愛紗。鈴々。何か問題あるか？」

「ないのだ」

無さそうだな。朱里も洞窟から出て来た。隠れていたのだろう。
義勇軍の指揮官が寄って来た。

「いやあ。どこのどなたか存じませんが、ご加勢、大変感謝致します」

「いえ。私達は当然のことをしたまでです」

「私は劉備、字を玄徳と申します」

「私は、関羽。こちらは張飛。そして」

「諸葛孔明です」

「・・・剣でござる」

俺はその場を静かに離れ、怪我人の手当に回った。あのような男に興味はない。それにあの男、目が濁っているように見えるが・・・。

怪我人の手当があらかた済んだところで、義勇軍が創られた桃花村に行くことになった。庄屋に軽い挨拶をし、劉備殿と話をすることになったが、俺に話したいことはない。愛紗達に任せ、村に赴いた。

少し村に疲れが見える。戦に男手を取られ、働き手がいないからだろう。

「おや、あんた、旅の者かい？」

「そうでござる。調子はどうでござる？」

「さあねぇ。戦、負けてまた戦、負けてまた戦。それで豊になる訳もないね」

連戦連敗だったと聞いたな。兵数は互角に見えた。ならば、指揮官の違いだろう。劉備殿に指揮官としての質を問うのは間違いだろうがな。

「今日は勝って帰って来たって聞いたけど、本当かねぇ・・・」

あれで勝利か。形だけを見ればそうだろうが、余り認めたくはな

いな。

「女将、何か手伝うことはないでござるか？」

「ああ、気を遣ってくれるのは嬉しいんだけどねぇ・・・・」

「薪さえ余りがないように見えるでござる。拙者が割るでござるから」

「良いのかい？」

「構わないでござる。
ついでござる。この辺一帯、拙者が薪を割るでござる」

そこら中から薪を集めてきた。始めるか・・・・。

～～～～～

「剣さ～ん！」

朱里の声に、俺は手を止めた。

「どうした？」

「皆さんが捜してます・・・って、何してるんですか？」

「薪割りだが？」

「この量をですか！？」

気が付けば、村中から集めていたからな。朱里が驚くのも無理はない。見上げる程だ。

「おお、あんた、よくこれだけ終わったねぇ」

「済まない。まだ半分も終わっていない。
だが、これだけあれば暫く持つだろう。必要な分だけ各自持って行ってくれ」

俺達はこの村に滞在するだろう。何日になるかは解らないが、その間に全部割れば良い。

「いやあ、ありがたいよ。あんた若いのに偉いねぇ。大したことは出来ないけど、お茶でもどうだい？」

「感謝する」

朱里を連れて、女将が案内する店に入った。
茶が二人分出された。

「あの、剣さん」

「何だ？」

「劉備さんを避けていませんか？」

「・・・表立っては言えない」

周囲を見渡した。女将が遠くにいるだけだ。会話は聞こえないだろう。

「・・・朱里には話しておくべきかもしれないな」

「関羽さんと鈴々ちゃんは？」

「二人は純粋過ぎる」

俺の言葉を真に受け過ぎる。

「他言無用、約束してくれるか？」

「・・・解りました」

朱里なら信用して良いだろう。

「・・・劉備殿には、兵を率いる器量はない」

「と、言うと？」

「連戦連敗。やむを得ない場合は勿論考えられるが、これは酷過ぎる。

賊が跋扈している。故に義勇軍を組織し、討伐しに行く。端から見れば、立派な行為だ。兵数はほぼ互角。それで負け続けるというのなら、指揮官に差があるということだ」

「・・・それ故に、ですか？」

「それだけならまだ良い。指揮官の差など、あって当然だ。

問題はその後だ。せめて二度程度で勝てないと判断し、兵の犠牲を少なくするべきだ」

「そうですね。徒に兵数が減りますし・・・」

「勝てないと悟れば、それなりに別の行為が出来る。義勇軍を周囲に固め、村の安全を確保するなり出来る筈だ」

「解ります。篭城すれば、指揮官の違いはほとんど無くなりますからね」

「・・・そういうことだ」

朱里ならこれだけ言えば解るだろう。いや、既に気付いていたかもしれないな。

「・・・解ってはいました。今日の戦を見ていてもそうでしたから。押す時機が間違いなく違いました。賊が弱腰になった時に押していれば・・・」

「・・・解っているようだな」

「剣さん。ですが、民の為と行動していたのは事実なんです。民を想い、賊を討伐しようと・・・」

「・・・本当に、そうだと良いがな」

「・・・？」

「・・・俺の思い過ごしかもしれないが、あの男の目に曇りが見えた。簡単に信用して良いものか・・・」

「剣さんが言うと、説得力ありますね・・・」

「確証はない。無理に信用することはない」

「・・・胸に秘めておきます」

余り疑い過ぎるのも良くないのだがな。

「これからどうする？」

「暫くは義勇軍の下かと。劉備さんに頼み込まれまして・・・」

まあ、予想していたことだ。

「剣さんは義勇軍に入らないんですか？」

朱里は知らなかったな。

「俺の流儀、飛天御剣流は、どんな派閥に属することを禁じている。俺が義勇軍に入ることはない」

「えっ、でも・・・」

「これはもう決めていることだ。何と言われようとな」

「・・・解りました」

「策は俺抜きで立ててくれ」

「・・・戦には参加しないのでしょうか？」

「俺が黙って傍観するように見えるか？」

「・・・見えませんね」

軽く微笑む。そう、属すことはできないが、手を出すことは可能だ。

「茶は飲んだ。行くか」

「はい」

俺達は店を出て、庄屋の館に赴いた。宿を取る必要はないようだな。

館に赴くと、愛紗に鈴々、劉備殿に出迎えられた。

「剣殿、どこに行ったのかと思っていましたよ」

「申し訳ない。村を散策していたでござる」

「関羽殿等は、我が義勇軍に参加を表明してくれた。剣殿、貴殿の力も是非貸して頂きたい」

「何故？」

「勿論、苦しみ民を救う為でしょう！」

・・・目には相変わらず曇りが見える。どこまで信じて良いものか。

「拙者、故有って義勇軍には入れないでござる。ご容赦願いたいで

ござる」

「なんと・・・・」

「愛紗、ここに泊めて貰うのか？」

「あ、ああ・・・・」

愛紗が困り気味に先導する。何も言わずに後を追った。

～～～～～

翌日、俺は薪割りに行った。時間はかかったが、全ての薪を割り終えた。これでこの村の薪は数ヶ月持つだろう。

「剣さ～ん！」

「・・・どうした？」

「明日、賊の隠れ家を一つ攻めることになりました」

「・・・そうか」

また、戦か・・・・。

「薬草摘みに行きませんか？」

「解った」

戦では、死人より怪我人が多く出る。怪我人の手当を考えている

のだな。
俺に薬草の種類は解らない。朱里が摘む薬草を運ぶだけだ。

「ブルルル・・・」

不意に微かに聞こえた音。いや、これは声か？
人間のものではない。だが、苦しんでいるような、喘いでいるような・・・。

「朱里」

「はい？」

聞こえなかったようだな。

「ついて来てくれ」

訝しみながらも静かについて来た。俺は声が聞こえた方向に歩いて行く。
朱里を連れるのは危険かもしれないが、一人にする訳にはいかない。何もなければ良いが・・・。
杞憂だった。だが、状況が良い訳ではない。

「ブルルル・・・」

馬だ。全身が白く、毛並みは鮮やか。体躯は大きくがっしりとしている。良い馬だ。詳しくない俺が見ても解る。だが、

「この子・・・どうしたんでしょう？」

「……怪我だな」

白い毛並みに点々と赤が見える。傷があるようだ。だが、それ以上に……、

「ちょうど良かったです。薬草があるので、治療を」

「ブルッ！」

「きゃっ！」

近付こうとした朱里を威嚇した。

やはり、この馬は、脅えている。恐れている、俺達人間を。

しかし、このまま傷を放置しておく訳にもいかない。傷が膿むことも考えられる。

「持っていてくれ」

朱里に逆刃刀を預けた。手を拡げ、何も持っていないことを示し、近付く。

だが、警戒が解かれた様子はない。構わず近付いた。

「ブルッ！」

朱里にした威嚇を同様に行う。構わなかった。更に近付き、手が届くところまで来た。

「ブルルッ！」

「ぐっ！」

「剣さん！」

顔面を蹴られた。口内に鉄の味が広がる。だが、俺の手が届く位置だ。軽く毛並みに触れ、優しく撫でた。

「大丈夫だ」

次は頭に触れた。また、優しく撫でる。

「俺は敵ではない。危害を加えるつもりはない」

「ブルル……」

馬が軽く俺を蹴った箇所に触れる。自分が傷付けたことを気にしているのだろう。

「朱里」

朱里を呼んだ。馬の傷を手当しなければな。

怖ず怖ずと朱里が近付いてくるが、馬が警戒を解かない。

「心配するな。朱里も危害を加えたりはしない」

「ブルル……」

理解したように警戒を解いた。賢いな。

「大丈夫でしょうか……？」

「もう大丈夫だろう。傷の手当を頼む」

「剣さんの頬もですよ。腫れてます」

「俺のことは後で良い。先ずはこの馬だ」

「解りました。では、薬草をすり潰しますから、少し待ってください」

朱里が薬草をすり潰し始めた。

この馬の傷は、白い毛並みに隠れているが、所々にありそうだ。

「どうしてあんなに警戒していたのでしょうか？」

「恐らく、人間に虐待か何かされていたのだろう。人間に脅えているようだからな」

「連れ帰って厩に入れれば、もう少し手当が出来ると思いますが」

「ブルルル・・・」

「辞めておこう。嫌がっている」

「よく解りますね・・・」

「何となくな。賢い馬ではあるようだ。俺達が言っていることが少しは理解出来るのだろう」

「あっ、出来ましたよ」

朱里が白い毛並みに触れる。少し反応したが、すぐに順応した。悪意がないことに気付いたのだろう。

傷を探り、薬草を塗っていく。痛いのだろう、たまに声を出したが、抗いはしなかった。丁寧に余さず塗り終えた。

「とりあえず、今出来る処置はしました。後は傷が治るまで繰り返すだけですね」

「そうか」

意味が解ったのだろう。朱里に顔を擦り寄せている。

「あは。くすぐったい」

朱里も悪い気はしないようだな。

もうすぐ日が暮れる。そろそろ帰らなければな。

「俺達はそろそろ行く。ついて来るか？」

「ブルルル・・・」

嫌そう・・・いや、不安そうだな。

「ここにいるか？」

「ブルル」

そのようだな。

「解った。無理はするなよ。また来る」

俺達は帰路についた。

「大丈夫でしょうか……？」

「解らない。だが、出来る限りの処置はした。もし、俺達を信頼していたならあの場を動かないだろう。どうするかはあいつが決める」

「そうですね。あの子、悪い子じゃないのに……」

「そうだな……」

だが、決めるのはあの馬自身。無理強いをするつもりはない。

「それより、明日の戦のことは考えているのか？」

「あ、はい。策は考えています。後は攻勢がどう動くか……」

「完璧ではないのか？」

「完璧な策なんてありませんよ。戦は何が起こるか解らないんですから。むしろ完璧に近い策程、僅かな綻びが出来た時に対応出来ないと思いますが」

俺が朱里に教えてやることは何もなさそうだな。

明日、いや、今後も戦は続くだろう。また人が死ぬ。俺に出来ることは何なのだろうか……？

義勇軍（後書き）

次回予告～。

剣「・・・義勇軍か」

鈴「どうしたのだ？」

剣「いや。気にするな」

愛「・・・」

剣「愛紗は愛紗で、様子が可笑しいな」

朱「そうですね。この村ではいろいろありそうですね。あの子のこともありますし」

鈴「あの子って誰なのだ～？」

朱「はわわ！な、何でもないですよ～？」

剣「やれやれ。次回、『病』よろしくな」

病

戦は連勝だった。
注意すべき点は一つ。攻め込むのではなく、誘い出すこと。敵に地の利を与えず、自らの地の利で敵を制す。
関羽さんと鈴々ちゃんという猛将がいて、かつ虚を衝けば崩れる。当然だった。賊の大将を相手にしても、数合撃ち合えば決着は着いていた。
しかも、戦の最中に劉備さんが賊の拠点を奪う。これで再起を図ることも出来ない。

「いや～、関羽殿、張飛殿、孔明殿が来てから、我が義勇軍は連戦連勝！」

剣さんの名前が出ていない……。

「関張両将軍の武勇は然ることながら、孔明軍司の知謀もなかなか。これで桃花村は安泰ですなぁ！」

皆さんは気付いていない。本当は誰の功績が一番大きいかを。
戦は常に何が起こるか解らない。だから、絶対は有り得ない。私がどれ程考えて策を練ろうと、必ず綻びが生じる。その綻びを直してくれるのは、いつも剣さんだった。
例えば、敵の攻勢が私が考えていたよりも遥に強かった時、埋伏の為の時間を稼ぐ部隊が耐え切れなかった。本来ならその部隊は耐え切れず、抜かれる。そうなれば、埋伏が上手くいかなかったかもしれない。
そこに、剣さんが突然現れて押し返す。一人の武勇は味方を奮い立たせる。結果、埋伏の策は嵌まり、敵軍は敗れる。

こういったことが毎回の戦で起きていた。勿論、私が現場にいた訳ではない。でも、既に何人もの兵から話は聞いていた。

剣さんの桃花村での生活振りは変わらなかった。毎日村の皆さんの手伝いをして、軍には目もくれない。だから、注目されない。

それでも、剣さんとの接点はあった。あの白馬。私と剣さんがあの子に会いに行くと、大人しく待っていた。剣さんが言うには、信じてくれたとのこと。傷はすっかり癒えて、元気に駆け回れるようになっていた。でも、相変わらず厩に入ることを嫌がっているみたい。だから私達も頻繁に会いに行っている。

それ以外の剣さんとの接点はほとんどない。今も宴会が開かれているけど、剣さんの姿はどこにもない。どこにいるんだろう…？

「ふぅ…」

酒を飲む。宴会で貰ったものだ。

「不味い…」

病んでいる。心が病んでいる。

そうだろうな…矛盾の中で生きているのだ。頭では理解していても、心では理解出来ていない。

戦では人が死ぬ。俺がどれ程奮闘しようと、所詮一人の人間。限界がある。俺に出来ることは、せめて犠牲を少なくすることだけ。俺は俺以上のことなど出来はしない。

「こんなところにいたのか…」

「愛紗か…」

このところ、愛紗の様子がおかしい。どこか動きに纏まりがない。気にしてやる余裕はなかったがな。

酒を飲むことを止め、酒瓶を直した。

「どうした?」

「・・・何をしているのかと思ってな」

「別に何も。宴会に出なくて良いのか?主役の一人だろう」

「良い・・・」

「・・・何を悩んでいる?」

「・・・剣、どうしても、義勇軍には入らないか?」

「くどい。変わることはない」

もう何度目だ。愛紗は何かに悩み、俺にそう尋ねる。

「・・・劉備殿は、賊を討伐することで民を救い、更に民の安寧を護ろうとしている。お主は何が不満なんだ・・・?」

俺には合わない。喉まで来ていたその言葉を飲み込んだ。

「・・・愛紗。言葉では何とでも言える。明日早朝、一人で村の門に来てくれ」

そう言って背を向けた。劉備殿が背後にいたからだ。

「邪魔しましたか？」

「そのようなことはないでござる。失礼するでござる」

多くは語らず、立ち去った。

あの目をどうしても信用出来ない。あの濁った目を……。

～～～～～

翌日早朝、一人で愛紗を待っている。愛紗は恐らく、劉備殿に何かを頼まれている。詳しくは解らないが、愛紗を悩ませている原因はそれだろう。

「剣」

来た。偃月刀は持っていない。好都合だ。

「行くぞ」

そう促し、歩を進めた。愛紗は静かについて来る。

「剣……話がある」

「なんだ？」

「劉備殿に、仕えて欲しいと頼まれた……」

「そうか」

「・・・何も、言わないんだな」

「頼まれたのは愛紗だ。俺が決めることではない。愛紗自身が決めることだ」

「・・・私が、仕えるとしたら、どうする？」

「別の道を歩む。俺は俺の道を進む」

迷いはない。元々決めていたことだ。

「・・・変わらないな」

何か呟いたようだが、よく聞こえなかった。

だが、目的地に着いたようだ。

「入るぞ」

少し大きめの洞窟。奥に進むにつれて人の声が聞こえてくる。

「なっ・・・！？」

愛紗が絶句する。それはそうだろう。ここにいる者達は皆、賊だった者達だ。

慌てて武器を探す愛紗だが、その必要はない。

「皆、食料は足りているか？」

「ああ、剣殿。大丈夫ですよ・・・」

「は……？」

「……剣殿、隣の方、関羽将軍ですよね。俺達を引き渡す気になりましたか……？」

「そのような気があるなら、もっと早くからしている」

「……そうですね。失礼しました。気を悪くしないで下さい」

「気にしていない」

唐突に愛紗を連れて来たのは俺だ。疑っても仕方がない。

「……剣、これはどういうことだ？」

「義勇軍が討伐した賊が寄っている隠れ家、といったところだ」

「何故そんなことを黙っていた！？」

やはり、直情的だな、愛紗は。俺は話しかけて来た男に酒瓶を大量に渡した。

「一人一杯分はある筈だ。分けて来てくれ」

「解りました。皆、喜びます」

「ああ。頼む、楊延」

楊延が去って行く。

「剣！」

「・・・愛紗。賊に家族を殺された怨みがあることは解っている。忘れろなどと言うつもりはない。
だが、もう少し視野を広げてみろ。見えなかったものが見えてくる」

「・・・何が言いたい？」

洞窟で声が響く。酒を貰い、喜んでいるようだな。
愛紗が納得いかない顔をしているが、楊延が戻って来るのを待った。

「戻りました。皆の声を聞かれましたか？喜んでいましたよ」

「ああ」

「それで、何故関羽将軍をここに連れて来たのでしょうか？」

「ああ。賊の実態を、少し見せてやりたくてな」

「実態だと？」

「愛紗。賊が何故生まれるか、考えたことがあるか？」

「何・・・？暴挙を挙げる為だろう。それで民を苦しめているんだろう・・・？」

「お言葉ですが、関羽将軍」

楊延が表情を変えずに発言する。

「外れているとは言いませんが、それだけが理由だとお考えですか？」

「……何？」

「そう考えるのが解らない訳ではない。だが、それでは視野が狭い」

「この場にこうして集まっている者達が、そんなことをすると考えますか？」

絶えず聞こえてくる笑い声に、愛紗が黙る。

「賊が生まれるのには、大きく分けて二つ原因がある。一つは愛紗が言ったことだ。もう一つは、生きている現状に納得出来ないことだ。

例えば、朝廷が気に入らない。役人の重い税の取り立て」

「……だが、納得出来ないからと、民を苦しめて良い訳ではない」

「俺達はそんなことはしていない！」

「楊延」

「……は」

目を向けずに名を呼んだ。楊延が押し黙る。

「熱くなるな。悪い癖だ」

「・・・申し訳ありません」

「愛紗。ここにいる者達は、民を苦しめるような行いは何一つしていない」

「・・・だが、私はお前と立ち会った。賊討伐の際に・・・」

「賊と称されただけです。
俺は五百程の仲間を率い、北のある街で乱を起こしました」

「乱を起こしているではないか・・・」

「事実です。否定はしません。ですが、その意義を知って頂きたい。
俺達はその街で静かに暮らしていましたが、苦しみ抜いてきました。税の取り立てが酷過ぎたからです。
一日一日の食さえ満足に食べられない俺達がいるのに、役人は必要以上に食し、肥えている。俺達は餓死寸前だというのにだ。
俺達にも限界が来た。もう堪えられない。俺の下に、そういった者達が集まりました」

そして、楊延は集まった者達の命を背負い、乱を起こした。

「俺は乱を起こし、役人を殺した。倉を壊し、民に食料を配って回りました」

「・・・」

「ですが、役人を殺した俺達に、居場所はなかった」

役人を殺した罪を問われる。そうなれば、楊延達の命はない。

「街を出た俺達に追っ手が向けられた。それをくらましながら、この近辺まで逃れて来た。

そこで、義勇軍に叩き潰された。見事だったよ。闘い、突破して活路を開いたと思ったら埋伏だ。何とか逃げた先にまた埋伏。死を覚悟して、あんたに向かったが、俺を部下が生かした。結局俺は生き残り、俺達は潰滅。生き残ったのはこれだけだ」

ここにいるのは、僅か百程だ。よくこれだけ生き残った。褒められる程だ。

楊延の口調が丁寧さに欠いていたが、咎める気にはならない。無理な話だ。

「生き残った俺達に救いの手を出したのが、剣殿だ。餓死するしかなかった俺達にここを提供し、食料さえ運んでくれている。自らの危険も顧みずにだ」

ここにある食料は全て俺が提供した。村で働いた分の食料を分けて貰い、全てここに運んでいる。腹を充分に満たすことは出来ないが、食に困ることはない。

このことを劉備殿に知られれば、俺は咎められるだろう。そして、ここにいる者達も。

「なぁ、関羽将軍。俺達は何か悪かったか？こんなになるまで、俺達は討伐されなきゃならなかったか？」

「……」

俯いている。言い返すことなど、出来る筈もない。

「俺達が役人を殺し、賊と見られたことが悪かったかな？あのまま餓死するのを待てば良かったかな？
俺達は何一つ、悪いことをしたとは思っていない。それなのに、俺に付いて来た者達を殺され、身を切る思いでこうしていなくちゃいけないか？」

愛紗が唇を噛み締め、拳に力を込める。無駄なことだ。今更悔いても、何も変わらない。

「なぁ」

「もう良い。止せ、楊延」

「・・・解りました。剣殿がそう言うのなら止めます」

楊延が、今の現状を身を切る思いで堪えていることは解る。そしてそれは、愛紗も同じだ。

「・・・剣殿が言われたことも理解しています」

「止めろ。そう言った筈だ」

「・・・失礼しました」

人を率いる覚悟をしたのなら、失う覚悟もしろ。楊延に言った言葉だ。
理解してはいても、まだまだ整理出来ないのだろう。無理もない。割り切るなど出来る筈もない。それでも、生きなければならない。死んでいった者達の分まで生きなければならない。

「愛紗には、まだ整理する時が必要だな。俺達は帰る」

「はい。ありがとうございました、剣殿。それから、関羽将軍」

腰を上げた。愛紗も、重たく腰を上げる。洞窟を出て村に戻る為、足を運ぶ。

「・・・剣」

「なんだ？」

「・・・私は、間違っていたのか？」

「どうだろうな」

誰が間違いで、誰が正しいのかなど、誰にも解らない。

「・・・私は、これからどうすれば良い？」

「悩め、愛紗。悩んで悩んで悩み抜け。答は自分で見付け出せ。何が正しいかなど、誰にも解らない。自分なりの答を見付けろ。行動は、それからでも遅くない」

「答・・・」

「見付けた答を貫き通せ。時にくじかれ、時に絶望することもあるかもしれない。それでも、己が信じる答だけは貫け」

「・・・」

「それが出来ないのなら、武器を棄てろ。苦しみが待っているだけだ」

もう手遅れだがな。武器を振るい、相手に向ける以上、その覚悟を背負わなければならない。それが出来ない者に、武器を手に取る資格はない。

「…まあ、考えてみろ。相談ならいくらでも聞いてやる」

村に着き、愛紗にそう言って部屋に押し込んだ。

これからは愛紗の問題だ。愛紗が導く答によっては、俺はこの村にはいられなくなる。楊延達もだ。その程度の覚悟はした上で、愛紗を連れて行った。

「剣さ～ん！」

朱里が走り寄って来た。

「あの子のところに行きませんか？」

「そうだな」

今日は干し草でも持って行くか。

「しかし、急だな」

「雲行きが怪しいんです。もう随分寒くなりましたし、雪でも降りそうで…」

言われてみれば‥‥。空には青を遮り、曇天が広がっている。

「雪が積もれば、あの子が辛い筈。やはり、あそこに入って貰うのが‥‥」

「そうだな。とにかく、行ってみるしかない」

次はあの馬がいる場所に足を運ぶ。

「そういえば、あの子に名前を付けてあげるのはどうですか?」

「喜ぶと良いがな」

いつもの場所に着くと、あの馬がいた。

「ブルルル」

白い毛並みはいつ見ても鮮やか。傷は癒え、体は好調。脚は驚く程速い。体力もある。かなりの良馬だ。だが、軍馬には程遠い。調練を乗り越えて初めて、戦に出ることが出来る。そうでなければ、徒に馬を潰すだけだ。

「あは。元気そう」

朱里が頭を撫でると、くすぐったそうに首を振る。嫌ではなさそうだ。

相変わらず、俺と朱里だけには心を開いている。心の傷は開いたままだ。

「この毛並みは暖かいですね〜」

「ブル・・・」

「この馬は寒がっているな。やはり冬は寒い」

「そうですね。厩に入りませんか？」

「・・・」

「・・・嫌そうですね」

「そこで、お前の為に村の端に小屋を造った。そこに村人が訪れることはない」

「行きませんか？」

「ブルル・・・」

迷っているな。無理もないが。

「あそこに入れば、寒さを凌げる。俺達はお前を心配している」

「ブルルル」

「人は来ない。保証する」

「・・・ブル」

「行くか？」

「……ブル」

肯定、と判断した。軽く首筋に手を当て、撫でる。気持ち良さそうに首を振った。

「良かったですね」

「ああ」

「次は、名前ですね。何が良い？」

「ブルルル……？」

よく解らないようだ。当然ではある。

「俺が付けてやろう。少し考えていたことだ」

「そうなんですか？」

実は前々から考えていた。自分からは言い出さなかったが。

「お前の名は、雷光だ」

白い毛並みを靡かせて疾駆する姿から考えた名だ。速く駆けるその姿は正に光の如し。

「ブルル！ブルル！」

「あっ、喜んでるみたいですよ」

「ああ。気に入ってくれたようだな」

「良かったですね」

「良し。行くか、雷光」

歩き出した。手綱は引いていないが、雷光は静かに付いて来る。本当に賢い。

「剣さんは馬に乗れるんですか？」

「いや、乗れないな。経験がない」

「私もです」

いつか、乗る日が来るとは思わない。俺が将軍になることはない。目的地に着き、雷光は小屋に入った。元々、雷光に合わせて造った小屋、体を入れても充分に余裕がある。寒さや飢えを凌げるよう、草も敷き詰めている。雷光の為だけの小屋だ。

「ブルルル」

「気に入ってくれましたかね？」

「解らない。だが、これで冬を越えられるだろう」

いつ雪が降るか解らない。だが、これで楽に様子を見に来ることが出来る。

もうすぐ年が変わる。雪が降らずに年が変わると良いが・・・。

病（後書き）

次回予告～。

鈴「病って何の病だったのだ～？」

剣「心の病だ。なかなか治り難くてな」

鈴「心も病気になるのか！？びっくりなのだ・・・」

愛「・・・お前は罹らないだろうな」

朱「そうですね。鈴々ちゃんは罹らないでしょう」

剣「それより、本編で登場した人物に名乗り出て貰おうか」

石「我が名は、楊延。字を六尚。真名を石幻と申します」

剣「楊延の真名は、本編ではまだ紹介されていないが、いずれな」

石「宜しく頼みます」

剣「次回、『悩み』よろしくな」

悩み

時の流れは止めることが出来ない。自然と流れていく。
薬草摘みに出掛けていた朱里と鈴々が、とある薬草の養分となっていた馬超殿を連れて来た。もとい、引っ張って来た。朱里が言うには、よく生きていたとのことだ。何をしていたのか。
その馬超殿をきっかけに、村の大掛かりな工事が始まった。何でも、村の防備を高める為だそうだ。
堀を造り、櫓を建てる。朱里が立案したこの工事に間違いはないだろう。無論、俺も工事に参加している。

「もうすぐ完成って感じだな」

「ああ。そうでござるな」

木材を運んでいた俺に馬超殿が話しかけてきた。

「しっかし、あんた義勇軍に入ってないんだろ？何で手伝ってんだ？」

「ここに居座らせて貰っている以上、ただで居座る訳にはいかないでござる」

「だったら義勇軍に入れば良いじゃん？」

「拙者には、入らない理由があるでござる」

「ふぅん。よく解んねぇや」

「事情は人それぞれでござるよ」

「ま、そりゃそうか」

俺は馬超殿との話を切り上げ、木材を運んだ。

「鈴々も手伝うのだ」

今度は鈴々か。しかし、様子が少しおかしい。

「どうした？」

「気に入んないのだ」

「何がだ？」

最初は余り噛み合わなかった鈴々と朱里だったが、今はそれ程でもないように見える。朱里の案が面白くない訳ではないだろう。では何だ？

「あいつなのだ」

何と無く解った。劉備殿か。

「何故だ？」

「あいつ、戦の時はいっつも後ろの方にいて、全然前に出て来ないのだ」

大将が危険な前線に出るからこそ、兵の志気が上がる。大将とし

てはあるまじき行為だな。考え方は人それぞれだろうが、俺は気に食わないな。

「それに、戦で手に入れた物は全部蔵に仕舞ってるのだ」

「どのように使うか聞いていないのか？」

「聞いてないのだ。
愛紗や馬超は軍資金にするんだって言うけど・・・」

「鈴々は軍資金とは思わないのか？」

「何か怪しいのだ」

・・・鈴々は恐らく、直感的に感じているのだろう。はっきり言って、俺も同意見だ。

「・・・剣は否定しないのだな」

「俺は義勇軍の一員ではないからな。部外者が口出しすることではない。
朱里には言ってみたか？」

「まだなのだ。最近忙しそうだったから」

見るべきところはよく見ている。意外に鈴々は視野が広い。

「そろそろこの工事も一段落する。朱里にも話してみると良い」

「そうするのだ」

朱里には劉備殿のことを話してある。どういう反応を示すか。

「ん‥‥？」

冷たい何かが鼻に触れた。雪か‥‥。

少しずつ勢いを増しているようだ。これは根雪になるな‥‥。

翌日、外は見事に白銀の世界へと変化していた。雪が積もり、見渡す限り白く見える。

まだ早朝、誰も起きていない時間だが、俺は雷光の様子を見に行った。小屋を造っておいて良かった。屋根がある上に、秣もあるからな。不足しないように秣を付け足しておいた。

次に楊延達を見に行ったが、こちらも問題なかった。洞窟の中にいるだけで寒さは大分凌げているようだった。食料も不足してはいない。

「剣殿。我等一同、考えたことがあります。お聞き頂けますか？」

「‥‥随分改まっているな。どうした？」

「はい。我等百四名、貴殿の麾下に加えて頂きたいのです」

「‥‥何？」

驚きは表面に出さないよう気をつけた。だが、表情に少し出ていただろう。隠し切れた自信はない。楊延は何を言い出した‥‥？

「何を言っている？俺に麾下などない。部隊を率いている訳ではない」

「承知しています。ですから、我等を率いて頂きたいのです！」

「何故だ？」

「我等は貴殿に命を救って頂いた。他にも、我等と同様に苦しんでいる者は少なくない筈です。その者達を、貴殿が見捨てるとは到底思えない。

我等も、その想いはあります。微力ながら、貴殿の力になりたいのです！」

「そうか・・・」

元々、そういった想いを抱き、楊延に集った者達だ。偽りの感情ではないのだろう。

「皆の想い、よく解った。良い軍司がいる。その者の麾下となれ。俺から話は通しておく」

朱里に話す。朱里も賊に対しては厳しいものを持っているが、説得は可能だろう。解ってくれる筈だ。劉備殿の義勇軍としてではなく、朱里直属の部隊として。

「我等は剣殿に仕えたいのです！」

やはり納得してはくれないか。だが、俺が認めることは出来ない。兵を率いて戦をするということは、楊延にも言ったことだが、失う覚悟をしなければならない。俺がその覚悟を決め、戦をするにしても、犠牲は必ず出る。

不殺を誓っている。俺が率いていた兵が死ぬということは、俺が殺したことと大差はない。そのようなことは出来ない・・・。

「諦めろ。俺が兵を率いることはない」

「ですが、一人では限界が！」

「一人だからこそ、出来ることがある」

隠形の業は一人でないと意味を成さない。自由に動き回る訳にもいかなくなるだろう。

「俺は誰も従える気はない。もっと良い道がある筈だ。もう少し探してみろ」

背を向けた。これ以上いても、懲りずに言い募ってくるだろう。

「また来る」

短く告げ、村に戻った。

解っている。楊延が言うように、一人では限界があることも、兵を率いる覚悟が必要かもしれないということも。

世の乱れは止まらないだろう。今の朝廷に、それを食い止めるだけの力があるとは思えない。乱れるだけ乱れ、その情勢を狙う者達が必ず現れる。見た限りでは、曹操殿や孫策殿は時機を待っていると見て間違いない。俺はこのままで良いのか……？

耽っていた。視界に入ったある者と同様に。

「愛紗」

「……剣」

「冷えるぞ。体調を崩す」

「‥‥ああ。‥‥少し、話を聞いてくれるか？」

「‥‥解った」

部屋に入った。小さく火が焚かれている。

「‥‥あれから、いろいろと考えた」

そうだろうな。様子を見ていれば、自然と解る。

「答は出たか？」

「‥‥解らない。間違っていたという気もすれば、間違いではないという気もする」

事実、あれが正か否かとなれば、二極に別れるだろう。結局、個人の見方次第とも言える。

「‥‥孔明殿に聞いたが、お主は戦に出ているのだろう？私達の気付かないところで‥‥」

「ああ。その通りだ」

やはり、朱里は気付いていたか。兵と話をするところをよく見掛けた。恐らく、兵に聞いたのだろう。

「‥‥例の戦にも、出ていたのか？」

「出ていた。楊延達も、既に知っている」

初めはかなり警戒された。当然ではあるが。説得を重ね、何とか俺が提示した道を選び、今に到る。

「‥‥それで、打ち解けていたのだな」

「見合うだけの苦労はした。

一つ、助言だ。過去を変えることは出来ない。過ちを償う必要もあるかもしれない。だが、大事なのはこれからだ。自分に何が出来るのか、ということだ」

俺も、あの同朋もそうだ。いくら悔いたとしても、過去を変えることは出来ない。

「‥‥剣は、強いな」

「いや、俺は弱い。過去を幾度となく悔い、一度は逃げ出した程だ」

「‥‥弱い？」

「人間は弱い。自らに秘められた弱さを認めないからだ。偉そうなことを言っているが、所詮俺も一人の人間だ。現実に弱さを突き付けられる日々だ」

「‥‥その上で、生きているんだな」

「命を投げ出すことは誰でも出来る。簡単なのだ。難しいのは、それでも尚、不様に生きることだ。

俺を見てみろ。逆刃刀という愚かな刀を振るいながら、黙々と生

きている。徒に時を重ねている訳ではない。俺なりに考え、それを実行しているのだ」

「・・・そうか」

「・・・焦ることはない。じっくりと時間を掛けて考え、愛紗なりの答を見付ければ良い」

少し、話し過ぎたかもしれない。余計なことまで話した気がする。背を向けた。愛紗はもう暫く考えることになるだろう。愛紗なりの答を導き出せば良い。

静かに部屋を出た。だが、考えに耽るのは愛紗だけではない。俺も同じだ。これからどうするか・・・。

「あっ！剣さん」

・・・今日はよく人と話すな。今度は朱里か。

「どうした？」

「あの、雷光は・・・？」

そうか。この雪で心配していたのだな。

「今朝、様子を見て来た。心配ない。大丈夫だ」

「そうですか・・・」

ほっと息を吐く。優しいな。

「あの、ちょっと良いですか？」

「・・・何かあるか？」

「ここでは・・・」

庄屋の館内の、誰もが通りそうな廊下。聞かれたくないということか。

朱里の先導に従い、朱里自身の部屋に入った。ここなら問題ないな。

「内容は、鈴々ちゃんとの会話なんです」

・・・成る程。鈴々から話を聞いたか。

「賊から奪い返した財、劉備さんは全て倉にしまっているとのことですが・・・」

「何か問題があるのか？」

「財はかなりのものです。ですが、それを少しも使わないのは明らかにおかしいです。

度重なる戦で怪我人は増え、武装は乱れています。あの財が軍資金だと言うのなら、良薬を揃えるなり武装を整えるなりしても良い筈・・・」

・・・とうとう、仮面が外れてきたか。誤魔化しているのだろうが、思惑が見え隠れし始めた。

「それとなく、劉備殿に聞いてみてくれ。倉にしまってある財をど

うするのか、とな」

「はい。それとなく、聞いてみます」

朱里なら上手く聞き出すだろう。正体が垣間見えるか、疑い過ぎたのか、少しは解る筈だ。

もし、良い方なら使い道に迷っているか、万が一に備えているか。悪い方なら、同じようなことを言い訳として言うだろう。判断は朱里に任せるのが良い。心配はないだろう。

「ふぅ‥‥」

「どうかしましたか？」

「‥‥この世は、どうなるのかと思ってな」

「‥‥漢王朝は衰退し、各地に賊が出没しています。官軍が各地に赴いて討伐に当たっていますが、いつまで持つか‥‥」

その賊の中には、少ないだろうが楊延達のような者達もいるかもしれない。今も各地で、血が流れている‥‥。

俺はこうしていて良いのか？その疑問が付き纏う。どうするべきなのか‥‥？

俺とあの同朋には決定的な違いがある。逆刃刀を振るう時期が、動乱の最中か時代の護りかということだ。この差は大きい‥‥。

「朱里の眼から考えて、漢王朝は持つか？」

「‥‥正直な話、先は余り長くないと思います」

やはり、か……。

覚悟を決めるべきなのかもしれない。現実から目を背ける訳にはいかないのだから。

新たな時代を創り、またその時代を護る。だが、その為には戦が続く。そうなれば、苦しみのは民だ。しかしそれは、動乱のただ中でも変わらない。

「……何か、お悩みですか？関羽さんも酷く悩んでいるようでしたし」

「まあ、少しな……」

「お酒でもお持ちしましょうか？」

「……何故？」

朱里はまだ酒は飲まないだろう。何をいきなり言い出す？

「黄忠さんが言ってましたよ。何かを払拭したい時はお酒が一番だと」

「ふっ……そうか、黄忠殿が」

つい笑ってしまった。紫苑がそのようなことを言うとはな。

「酒を飲み過ぎるのは、余り良くない。それに、人それぞれだとは思うが、悩んでいれば酒は不味い」

「そうなんですか？」

「少なくとも、俺はそうだ」

「じゃあ、何を悩んでるんですか？」

「・・・先のことだ」

「漢王朝が、完全に機能しなくなる時ですね・・・」

「その時を、待っている群雄がいる。俺は、このままではいけない気がする」

「・・・士官、ですか？」

「その道もある」

飛天御剣流の流儀に背くことになるが、それも仕方がないという気がする。奥底から信じられる主を、見付けられるかが問題だ。

「あの、剣さんがもし士官を考えているなら、間違いなく遊軍を率いるべきです」

「・・・訳を聞こうか」

興味がある。朱里が俺を、如何様に見ているのか。

「戦の期・・・と、いうのでしょうか。剣さんにはそれを見抜く力があると思うんです。

いて欲しい場所に必ず現れる。そういう軍が一ついて欲しい、と私は思います」

「・・・今の俺のように、完全に自由にするつもりか？」

「それでも良いと思います。独立行動権といったところですね」

「・・・悪くないな」

縛られることが嫌いだ。自由が良い。

「だが、軍律として独立行動権を与えるような軍があるとは思えないな」

「まあ、そうですね」

かと言って、間者をする気にはならない。

「・・・まだ、時の猶予はあるだろう。じっくり考える」

「そうですね。私達もこれからどうするか考えないと・・・」

同じ道か、違った道か。それぞれが決めれば良いことだ。

自らの道は自分で決める。例え、俺達の歩む道が違っていたとしても・・・。

悩み（後書き）

次回予告～。

鈴「雪なのだ！」

朱「寒いですよぉ」

鈴「寒いって思うから寒いのだ。暑いって思えば暑くなるのだ」

朱「なりません！」

剣「皆が悩んでいる最中、二人は元気が良いな」

鈴「剣は何に悩んでるのだ？」

剣「秘密だ。気にするな」

鈴「ふぅん。じゃあ気にしないのだ」

朱「鈴々ちゃんには悩み事なんて無さそうですね・・・」

剣「次回、『春の兆し』よろしくな」

春の兆し

暫く、時が経った。地平を見渡す限り積もっていた雪は溶け、季節は春に差し掛かっている。

ある時、義勇軍に使者が来た。どうやら、地方で大規模な賊が出没したらしい。その討伐の為、義勇軍に出陣の要請が来た。劉備殿はその要請を受けるようだ。

「成り上がり者の何進の命令に従うのは癪だが、見返すには良い機会だぜ」

馬超殿が言う。そのようなことに興味はない。賊の討伐に行くべきかどうかだ。

「朱里」

「はい。劉備さんは、又とない機会だと言ってました。名を高めれば、義勇軍に参ずる者も増え、より大きくなると。意気揚々と語っていました」

「それで？」

「付け加えるように、民を救うことになると言っていました」

この場にいるのは、愛紗、鈴々、馬超殿に朱里。朱里は周囲に聞こえないよう、俺に耳打ちしている。

「例の件は？」

「万が一の為と。軍の装備について言ってみましたが、誤魔化すようにその為に残してあると言っていました」

もう良い。どうやら、間違いないようだ。

結局、何かを企んでいるに過ぎない。民の為と豪語しているが、恐らく妄言だろう。

何を企んでいるか。あるとすれば、成り上がることだろう。所詮、自分の為か。

「解った。済まなかったな」

「いえ。剣さんの心眼が正しかったようですし。この乱、どうしますか？」

「一つ、気になっていることがある」

「何ですか？」

「この辺りの賊のことだ」

一度義勇軍が討伐した賊が、一塊になって村の傍で潜んでいるように見える。義勇軍に怨みを持っているだろう。出陣している間に村を襲うかもしれない。

「…成る程。それは危険ですね」

「だが、行かなければいけない気がする」

「……？」

「予感だ。俺の勘が告げているに過ぎない」

「はぁ。ただの予感なのに、剣さんが言うとなんでこんなに説得力があるんですかね・・・・」

飛天御剣流、という言葉を飲み込んだ。このようなことを信じられても困る。

「どうしますかね・・・・」

「出陣はいつだ?」

「明日です」

明日か・・・・。

事態がこれ以上変わることはないだろう。一つ、手を打っておくべきだな。俺が残りたいが、行けと勘が告げている・・・・。

「少し出て来る」

「雷光ですか?」

「いや、別だ。雷光の様子も見て来るが」

「解りました。お願いします」

もう一つ、気になることがあったが、俺は部屋を出た。愛紗だ。

鈴々が馬超殿と愉快気に話している様子を眺めていただけだった。どうするか決めかねているのだろう。話を聞くことは出来るが、決めるのは愛紗だ。

私は、とりあえず参陣することに決めた。とりあえずだ。
散々考えている。いろいろな人と話もした。が、剣の言う答は今だに解らない。
考えている時によく頭に浮かぶのは、兄者のことだった。村に住んでいた頃、戦に巻き込まれて亡くなった兄者。
私のような辛い想いをするのは、私一人で充分だ。そう思い、腕を磨き、旅に出た。賊は事あるごとに退治してきた。だが、楊延達のような者達がいたかもしれない。それは、考えたところで解らない。
劉備殿に仕えて良いのか？本当にそれで民は救われるのか？疑惑はいつも付き纏う・・・。
翌日、出陣の準備を終えて、馬超と通路を歩いているところだ。

「はわわ！動いちゃ駄目ですよ！鈴々ちゃん！」

「大丈夫ったら大丈夫らのだ！」

鈴々と孔明殿が歩いてきた。鈴々は鼻水を垂らして酷い顔をしている。風邪か？

「何とかは風邪引かないって言うから大丈夫らのだ！」

「馬鹿言わないでください！馬鹿が風邪引かないなんて迷信です！」

「少しは容赦してくれ。朱里」

剣もいたのか。そういえば、剣は出陣するのか？

「鈴々、その体では足手まといだ。館で大人しくしていろ」
「嫌なのだ！鈴々はずっと愛紗と一緒なのだ！」
鈴々の気持ちは嬉しいが、この状態で鈴々に万が一のことがあれば大変だ。
「鈴々、お主に村の守備を命じる！」
「はにゃ！？」
「任せられるな？」
「・・・解ったのだ」
しょんぼりとしているが、認めたな。そっと近付いて耳打ちした。
「早く元気になれ」
鈴々なら、すぐに治るだろう。少し心配だが・・・。
「私も残って、兵糧の確保をしつつ、守備に就きます」
孔明殿が一緒なら少しは安心か。
とにかく、これで鈴々と孔明殿を除いての出陣になった訳だな・・・。

鈴々と朱里が村に残ることになった。鈴々は戦力にならないが、朱里がいれば村の防備を使って上手く凌ぐ筈だ。万が一の場合でも、暫くは持つだろう。

「万が一の場合、どのくらいで戻って来られますか？」

「全力で駆けて四刻。そう思ってくれ」

「解りました」

「万が一の場合、狼煙を上げろ。僅かだが、手は打った」

「……解りました」

つかの間考えたようだが、思い当たらなかったようだな。かと言って、俺の手が上手く働くか解らないのも事実だ。

「そろそろ、出陣した頃ではないでしょうか？」

「ああ。だが、あの程度の進軍では容易に追い付く。俺が出るのはまだ後で良い。

それより、今回の戦の状況は解っているか？」

「天然の要害に立て篭もっていると聞きましたが」

「数を集めたとしても、そう易々と攻め込む訳にもいかないか……」

「はい。兵はあくまで周囲を囲む為の脅威でしょう。先ずは糧道を断ち、兵糧攻めが良策かと」

流石、朱里はよく見えている。戦を測る目は俺より遥に上だ。

「剣さんはどう見ますか？」

「いや、朱里の言う通りだろう。俺より、朱里の方が戦術眼に長けている」

「そうでしょうか？剣さんが自覚していないだけでは…？」

「俺は、事前に考えることは余り得意ではない。戦場で、その場その場で考える」

「やはり、遊軍ですね」

「どうだろうな？」

朱里が言っていることだ。そうそう間違いではないのだろう。

「そろそろ…行くとするか」

「御武運を」

「互いにな」

朱里に別れを告げ、村を出た。行き先は義勇軍が向かった官軍の集結地。

どの道を通れば最速で着けるか考えながら進んだ。どう考えても、村で戦う余力を残してとなると、四刻は掛かる距離だった。

集結地に着いた頃には、既に日が暮れていた。隠形の業で陣に入り込んでいる。軍議は既に終わっているようだった。誰かにこれか

らのことを聞く必要があるな。
そこまで考えて、ふとある人物が視界に入った。機嫌は明らかに悪そうだ。跡を付け、兵舎に入ったところであることをした。それから声をかけた。

「曹操殿。久しいでござるな」

「っ！？」

驚いている。自身の兵舎で声をかけられれば当然だが。

「・・・何か用かしら？剣」

「貴様！何をまたのこのこと！」

「やめなさい。春蘭。
貴方はいつも唐突ね」

「申し訳ないでござる。視界に入ったものでござるからつい」

「で？何か用かしら？」

「そういえば、以前いた二人はどうしたでござる？」

「紹介が遅れたわね。春蘭、呼んで来なさい」

「しかし、こいつと・・・」

「行きなさい」

「は、はっ・・・」

こちらを睨みながら兵舎を出て行った。

しかし、豪胆というか何というか。大した器量だ。まあ、それは良いだろう。

「曹操殿は大変でござるな」

「何のことかしら？」

「拙者以外に、二人間者がいたでござる」

「・・・でしょうね」

権力者の争いは見えないところで行われる。命さえ狙われることもあるだろう。

二人の間者は俺が打ち倒し、気絶している筈だ。俺が曹操殿に接触したことを知られたくはない。

「そんなことを言いに来たのかしら？」

「いや。ただの偶然に過ぎないでござる。声をかけたのは別件でござる。

先程、軍議が行われていた筈でござる。明日からの策を教えて頂きたい。恐らく、それで機嫌が悪いのではござらんか？」

「・・・本来なら、話すべきではないのでしょうけれど、良いわ。教えてあげる。貴方の見解も当たっているし」

「感謝するでござる」

「でもその前に、一つ聞かせなさい。貴方、誰かに仕えてはいないわね？」

何の話だ・・・？

「以前言った通り、誰かに仕えるつもりはないでござる」

「そう。なら、劉備という男に関羽が付いているのは何故？」

・・・機嫌が悪い理由が、少し解った気がする。

「関羽は正式に劉備殿に仕えている訳ではないでござる。義勇軍の将でござるから、形式上ではござらんか？」

「それでも、気に入らないわね。
軍議であの男、私の策を押し退けて自分から攻め込むと言ったのよ。功名目的にしか見えない！無謀にも程があるわ！」

頭を抱えた。賊を次々と討伐していたのは、朱里のお陰だということを忘れていた・・・。

「・・・関羽のことは大目に見て欲しいでござる。大丈夫だろうと思っているでござる」

「ふん。なら良いわ。
貴方は、こんなところで何をするのかしら？」

大してすることはない、と思っていたのだがな・・・。少々変わった。勘が当たったようだな。

「華琳様！」

以前いた時の三人が飛び込んで来た。

「来たわね。紹介するわ」

「華琳様。何故このような者と・・・」

「そろそろ警戒を解きなさい。良いわね？」

「確かに、一度は華琳様を救った者だ。無用な警戒かもな」

「秋蘭の言う通りよ。ほら、早く自己紹介しなさい」

「・・・は」

ぎろりと俺を睨み、向き合った。

「我が名は夏侯惇！字を元譲だ！」

「私は、夏侯淵。字を妙才だ」

「・・・荀イクよ」

まあ、簡単に心を開いてくれるとは思っていない。

「剣でござる。

曹操殿。一つ、折り入って頼みがあるでござる」

「言ってみなさい」

「義勇軍の退路を確保して欲しいでござる」

頼むしかなかった。この状況で頼めるのは、曹操殿以外見当たらない。

攻めるのは天然の要害。落とすには少なくとも三倍近い兵力が必要だろう。にもかかわらず、義勇軍は賊の倍もいない。無謀でしかない。徒に犠牲が出るだけだ。

「要求はそれだけかしら?」

「これ以上は頼めないでござる」

この頼みは、もう一つ目的がある。退路の確保だ。万が一ということがある。

「それで?見返りはあるのかしら?まさか、何も無しでそんなこと頼んでないわよね?」

やはりな。狡猾なものだ。だが、俺とてそれ程抜けてはいない。

「滞陣する間、貴殿の無事を保障する、というのはどうでござる?」

「ふぅん。私の護衛に付くと?」

「平たく言えば、そうでござるかな」

乗ってくる。そう思っている。それなりの確信がある。

「貴様！我等では役不足とでも言うのか！？」

「逆に聞かせて頂くでござる、夏候惇殿。貴殿は自軍の指揮があるのではござらんか？」

「そんなもの、両立してみせる！」

無茶苦茶だな。そのようなことができれば、誰も苦労はない。

「無理を言うな、姉者。我等が部隊を指揮しなければ、誰がするというのだ？」

「ぬぅ・・・」

「良いわ。その条件で受けてあげる。義勇軍の退路の確保で良いのね？」

「問題ないでござる」

やはり、乗ってきた。護衛程度なら俺にとって何でもないことだ。

「ただし、条件があるわ」

「何でござる？」

「滞陣中、私の命には全て従って貰うわ」

俺を試す気か？その程度は平気でやるだろうな。

「幾つか、従えないでござる」

「何かしら？」

「人を殺す、そういう類でござる」

「甘いわね」

「重々承知しているでござる。だが、拙者は不殺を誓っているでござる。その誓いを破ることは出来ないでござる」

「・・・それだけかしら？」

「もう一つ。緊急時に、一度だけ抜け出すことを認めて欲しいでござる」

「何の緊急時かしら？」

「それは時と場合に因るでござろう？」

「・・・良いわ。ただし、一度だけよ。それ以上は許容しない」

「承知。それだけでござる」

この選択が俺にどう働くのか、解らないな・・・。

不意に、何者かがこの陣に駆け込んで来る気配がした。気になる。

兵舎の外を覗いた。

「どうかしたのか？」

夏候淵殿が近寄って来た。

「陣の一部が騒がしくなったでござる」

「ふむ。そのようだな」

嫌な予感がする。どこの軍だ・・・？

「・・・劉の旗。義勇軍のようだな」

的中してしまった。間違いないだろう。

「曹操殿！約定通り、一度抜け出すでござる！」

「もうか！？」

夏候惇殿が何か言っているが、目も向けなかった。

「それから、軍の一部に出陣準備を！」

「お、おい！」

「これも約定通りでござる！」

もう待てなかった。何か言いたいことがあるだろうが、返事を聞かずに兵舎の外へ駆け出した。

春の兆し（後書き）

次回予告～。

石「出番がなかった……」

愛「まあ、そう言うな」

華「代わりに私の出番ね」

秋「アニメでは語られなかった華琳様の活躍もあるかもしれないな」

朱「そして今回、風邪を引いて鈴々ちゃんは寝込んでます」

剣「鈴々は予告の出番がないようだ。ほぼ皆勤状態だったのだがな」

翠「ちょっと待て～い！」

華「あら。貴女いたの？」

翠「何なんだよ！？この仕打ちは！何で予告初登場の奴にこんなこと言われてんだ！？」

華「五月蝿いわ。剣」

剣「ふぅ。次回、『一つの結末』よろしくな」

翠「だ～か～ら～！」

石「……不憫だな」

一つの結末

走り込んだ。劉備殿が率いる義勇軍の警戒は薄かった。
兵舎の傍に来た。声が聞こえる。

「襲撃です！賊の大軍に村が襲われました！」

やはり・・・。

「討伐した賊が、一塊になっているようです！孔明殿が指揮を取っていますが、そう長くは持たない。援軍を請う、と」

兵舎に駆け込んだ。既に、隠形の業は使っていない。

「劉備殿！聞いた通りでござる！今すぐ軍を返せ！」

「剣殿！？何故ここに！？」

「そのようなことはどうでも良い！早くするでござる！取り返しのつかないことになるでござる！」

「しかし、我等は明日の先陣を承っている」

「それがどうした！？」

「明日の戦で功を立てれば、官軍の将に成れるんだぞ！」

所詮、この程度の男か。自身の利のみを考え、行動する愚かな男・・・。

「…邪魔したな」

これ以上、この愚かな男に語る言葉はない。時間の無駄だ。最後の、機会を与えたつもりだったのだがな…。

「剣！」

愛紗か…。

「自分の道を進め」

それだけ言い、兵舎を出た。ざっと用件だけを書き記し、曹操殿の兵舎に投げ入れた。これで、俺に出来る手は全て打った。

急いで戻らなければならない。朱里が、鈴々が、村人が待っている。それ以外はもう何も考えなかった。ひたすら駆けるだけだ。

陣を抜け出した。これから最低でも四刻は掛かる。それまで、何とか耐えてくれ…！

暫く駆けたところで、ふと見覚えのある姿を目にした。白い毛並み、大きな躯。

「何故ここにいる？…雷光」

「ブルッ！」

互いに駆けながら聞く。止まる時間が惜しい。

「ブルルルッ！」

何を言っているか解らない。俺に何かを伝えたいのだろうが…。

雷光は村が危険だから逃げて来て、俺に戻るなと言っているのか……？

「雷光。俺は急ぎ村に戻らなければならない。村が危機的状況だからこそだ」

「ブルルッ！」

「何……？」

止めている訳ではないのか……？

雷光は絶えず自分の背を見る、その仕草を繰り返している。

「まさか……俺に乗れというのか？」

「ブルッ！」

「無理だ。俺には馬に乗った経験がまるでない」

「ブルルッ！」

乗れ。そう言われているのが、はっきり解る。

確かに、乗った方が早く辿り着ける。俺の体力的にも余裕が持てる。だが、途中で落ちてしまえば、そこで終わりだ。

「ブルッ！」

……雷光は既に覚悟を決めている。俺だけが、逃げている訳にはいかない。

「良いだろう。この賭け、お前に全て預けてやる！」

初めて止まった。雷光は鞍すら乗せていないが、それでも雷光に飛び乗った。

「行くぞ！」

しがみついている。雷光が駆け出した。速い。俺が走る速さとは段違いだ。

また、暫く駆けた。この速さなら、後一刻程で着ける。俺が走るより、一刻近く速い。

「ブルルル……」

不意に雷光が苦しそうな声を上げた。考えてみれば、雷光は村から陣まで駆けて来たのだろう。それが、休む間もなく戻っているのだ。それも全力の速さだろう。きつい筈だ。

「もう良い。無理をするな。俺をよくここまで運んでくれた。後は俺が走る」

「ブルッ！」

止まらない。止まろうとしない。駆け続けている。

「止せ！これ以上はお前が潰れるぞ！」

「ブルルルッ！」

止まらない。調練していない馬が駆け続けるのには限界がある。

本当に潰れる。
だが、俺が何を言おうと無駄だ。駆け続けるだろう。それ程の迫力を醸し出している。後は、雷光の持久力に賭けるしかない。
村が見えて来た。証拠に、狼煙が上がっている。

「もう少しだ！」

村に着く。が、遠目から見ても賊が周囲を囲んでいる。
雷光はその囲いに突進した。不意なことに、賊に動揺が走る。突き飛ばしていく。庄屋の館の門が閉められていく。あれに何とか入らなければ・・・。
眼前にいる賊は雷光の気迫に圧されて道を開いている。間に合うか・・・。
雷光が賊の群を突破し、門の内側に飛び込んだ。

「賊が一騎入り込み・・・待ってください！」

朱里の声が聞こえる。無事なようだな。
雷光は俺を降ろし、ぐったりしている。だが、潰れてはいないようだ。

「よく頑張った。後は任せろ」

雷光に声をかけ、朱里に向き合った。

「状況は？」

「よくありません。剣さんが来ていなければ、篭城するところでした」

閉められた門に衝撃が与えられているのが、伝わってくる。篭城したところで、そう長くは持たなかっただろう。

「俺が出る。後は任せる」

「ですが・・・」

「誰かが出なければならない状況だ。俺はその為に戻って来た。雷光を頼む。それから、鈴々は絶対に表に出すな」

背を向けた。何と言われようと、この状況を打開する為には、これしかないだろう。

「御武運を・・・」

俺は死なない。まだ転生して何もしていない。

門に近付いた。村人が門を懸命に抑えているが、時間の問題だ。

「皆、俺が出る。出たら、再び門を閉めろ」

「あんた、死ぬ気か!?」

「死なんさ」

門が石柱に破られる。逆刃刀を抜き、裏返した。飛び出している石柱を斬った。石柱が一度引かれる。その隙に、門の外に出た。

「門を閉めろ!」

村人が驚き、急いで門を閉める。これで良い。

「無闇に怪我人を出したくはない。大人しく帰れ」

聞く筈もなく、賊が群がって来た。一人二人と叩き潰していく。

「何だ!?こいつ!?」

「貴様等に名乗る名はない。早く立ち去るんだな」

「嘗めんな!押せ押せー!」

数に任せて押してくるか。だが、前方にしか敵はいない。後ろを気にする必要はない。

刀を振るい続けた。何刻こうしているかも解らない。何人倒しているかも解らない。既に気絶している者は何人もいる。

「‥‥ふぅ」

流石に、息が切れてきた。後何刻持つか‥‥。

不意に、背後の門が開かれた。一人分の人影が見える。‥‥鈴々。

「助太刀するのだ!」

「何故来た!?」

怒鳴り付けた。顔が赤い。風邪が治っている訳がない。

「剣一人じゃ、流石に限界なのだ!鈴々が一緒に闘うのだ!」

「足手まといだ!下がれ!」

「そんなことないのだ！鈴々は愛紗とこの村を護るって約束したのだ！」

・・・くそ。もう遅い。賊が迫っている。鈴々を護りながら闘うしかない。

「門を閉めろ！」

「こっから先は、絶対通さないのだ！」

鈴々が矛を振るうが、如何せん動きが鈍い。やはり、治っている筈がない。

だが、鈴々の決意は固い。このような状況で、一人寝ている訳にはいかないのだろう。だが・・・、

「あっ・・・」

鈴々が矛を弾かれた。やはり、持たない。

「もう良い！ここにいるのは危険過ぎる！」

「・・・」

既に意識が薄い。これ以上は本当に無理だ。いや、下がることさえ出来そうにない。

「くそ・・・！鈴々！」

鈴々を庇うように前に立ち、刀を振るう。これでは状況が悪化し

たも同然だ。俺もそう長くは持たない。どうする……？

「はっ！」

何かが投げられてきた。見たことがある得物だ。これは……青龍偃月刀！

顔を上げると、そこには馬に乗った愛紗がいた。俺と同様に、賊中を突き破って来たのだろう。

「剣！鈴々！」

「……よく来たな、愛紗」

「ああ」

「……愛紗」

「もう大丈夫だ。よく頑張ったな、鈴々」

「……うん」

愛紗が鈴々の頭を撫でている。これで状況が変わる。

「仲間が随分世話になったようだな！倍にして返してやるぞ！」

俺も、もう一度気勢を上げるべきだ。自らを奮い立たせろ。

「いくぞ！」

逆刃刀を構え直す。俺から賊に仕掛けた。賊を一人一人打ち倒す。

愛紗が加わったことで、戦況が変わりつつある。

「弓だ！弓を使え！」

とうとう痺れを切らしたか。愛紗はともかく、鈴々を護れるか・・・？

突如、全く予期していなかった方向から矢が飛んできた。弓を構えていた賊に次々と当たり、倒れていく。村の櫓の上からだ。誰が射ている？

「弓ならこの黄忠がお相手しますわよ！」

紫苑だと！？何故紫苑がここにいる？

櫓に一瞬目を向けたが、確かに紫苑だ・・・。

「黄忠殿！どうしてここに？」

「話は後！今は村の死守が先決です！」

紫苑の言う通りだ。だが、紫苑がいることで戦況が一変する！

「紫苑！弓兵を優先に頼む！俺達は群がる兵を叩く！」

「解りました！」

紫苑に任せておけば、矢はそうそう飛んでこないだろう。眼前の敵に集中出来る！

希望が見えてきた。ここの門を護り通せる筈だ。

しかも、どうやら天は俺達を見放した訳ではないようだ。完全に運が向いてきている。

何故俺がそのように思うか、簡単だ。賊が二方向から動揺していることが伝わってきた。俺の打った手が、功を成したようだ。
見えるのは夏の旗。夏候姉妹のどちらかだろう。もう一方に旗は見えない。だが、恐らくは……。

「悪党共！」

今度は誰だ？館の高台に立っているが……あの奇妙な仮面は、

「年貢の納め時のようだな」

「誰だ！？」

「ある時は旅の武芸者、またある時は美と正義の使者、華蝶仮面。しかして、その実態は！」

「そのような口上は良い。早く手伝え、星」

星こと華蝶仮面がずっこけた。唐突に現れるのは構わないが、あの仮面は何なのだ？気にしている場合ではないか。

「とう！」

星が声を上げて敵中に飛び込んだ。同時に敵中を一人で駆け抜けて来る。

「これで、ここにいるのは四人か」

「ここは鈴々が押さえるのだ！誰一人通さないのだ！」

大丈夫か、と声をかけそうになったが止めた。

「鈴々、大丈夫なのか？」

「愛紗の顔見たら元気になったのだ」

やれやれ。思い込みは時に強く左右するが、愛紗の顔とはな。だが、顔色が先程より良いのは確かだ。

「鈴々、ここは任せて良いのか？」

「任せるのだ！」

賊の前線はほぼ潰滅している。門を押さえようとする賊の部隊はないだろう。攻勢に転じる時だ。朱里もそろそろ機を狙っている筈だ。

「ここは鈴々に任せる。愛紗と星は夏の旗に向かえ。俺はもう一方に向かう」

「解った！」

駈け出した。動揺が収まらない賊中を駆け抜ける。大した反発はもう返ってこない。すんなりと辿り着いた。

「楊延！」

「剣殿！」

「よく来てくれた」

「はい！」

「良し！もうひと押しだ！いくぞ！」

楊延達から雄叫びが上がる。一塊りとなり、更に押した。

「に、逃げろぉ！敵う訳ねぇ！」

賊の一人がそう叫び、それにつれて崩れる。潰走していく。

「追撃しますか？」

「必要ない。軍を纏めろ、楊延」

「その必要はありません」

既に纏まっているようだな。軍の統率はしっかりしている。

「皆！俺の要請によく応えてくれた！感謝している！」

「剣殿の要請とあれば、応えない訳にはいかないでしょう。俺達の恩人なのですから」

「…誰か欠けてはいないか？」

「皆、問題はありませんよ」

内心ほっとする。犠牲は出ていないか…。

束の間、軍がこちらに寄って来た。夏の旗、夏候惇殿だ。夏候惇

殿が来てくれていたか。

「これで良いか？」

「感謝するでござる、夏候惇殿」

「華琳様の命じられたことは二つ、救援と貴様のことだ」

「約定を守るのはこちらの番でござるな。気にすることはないでござる。
ただ、少し事後処理をしたいでござる。少し待って頂けるでござるか？」

「良いだろう」

軽く夏候惇殿に会釈した。
集まっていた者達がいる。真名を預けてくれた者達だ。・・・馬超殿以外か。

「あの、剣さん・・・。その人達・・・」

朱里が楊延達を見て言う。解っているのだろう。

「俺達は・・・」

「近くで発足した義勇軍だ」

「剣殿？」

「俺は少し知り合っていた。違うのか？」

「・・・そのようですね。解りました」

「今後はここの義勇軍と合流する。何か問題があるだろうか？」

「いえ。大丈夫です」

「ならば、編成は朱里に任せていいな？聞きたいことがあれば、この楊延に聞いてくれ」

朱里はまだどこか納得していない。楊延達も同じようだな。だが、解ってくれる筈だ。そう信じている。悪いが、余り時間がないのだ。夏候惇殿が待っている。

「紫苑。よくこの村に来ていたな。助かった」

「いいえ。少しでも恩が返せたのなら、何よりです」

恩などとは思っていないのだがな。

「馬超殿、よく戻って来てくれたでござるな」

「まあな。あんな奴に興味はないし、友達の方が大事だからな」

良い者だ。義の厚い者なのだろう。

「星・・・」

「何だ？私にはないのか？」

仮面のことを聞きそうになったが、時間が惜しいな。

「いや、よく来てくれた」

「なに」

「鈴々。風邪はもう良いか？」

「治ったのだ！」

今回、最も冷や冷やしたのは鈴々だ。今後は控えて貰わなければな。その前に体調管理が先か。

そして、最後に・・・愛紗と向き合った。

「答は出たか？」

「本当に愛する者を護り抜く。それが私の答だ」

笑った。どうやら、愛紗なりの答がきちんと出たようだな。

俺の要件は終わった。夏候惇殿に目を向けた。

「もう良いか？」

「十分でござる。待ってくれたこと、感謝するでござる」

「良し。行くぞ！陣に戻る！」

夏候惇殿が踵を返す。俺は後を追おうとした。

「剣！どこに・・・」

「曹操殿には借りがある。俺は約定を果たさなければならない」

「もう戻って来ないんですか……？」

朱里は、俺といろいろと話したからな。俺が曹操殿に士官するとでも思ったか？

「心配するな。約定を果たし終えれば、必ず帰って来る。春が訪れ、桃が咲き誇る頃には戻って来る」

「剣殿！」

「楊延。お前達とは、戻って来てから決めよう。それまでは、村に世話になれ。復興を手伝ってやってくれ」

賊に攻め寄せられた所為で村が荒れた。俺が手伝いたいところだが、出来そうにないのでな。

「では、俺は行く。また再会しよう」

背を向け、夏候惇殿に歩み寄った。行き先は、曹操軍本陣だ。

一つの結末（後書き）

次回予告～。

翠「なぁ……。本気で思うけどさ、あたしの扱い酷くないか？」

剣「グッチー曰く、扱いが難しいらしい」

朱「アニメによる馬騰さんの死が、余りに酷いと思ったからだそうです」

愛「その所為か、アニメ第四話もなかった訳だしな」

翠「あたし、直接関係ないじゃん！」

紫「まあまあ。少し落ち着いて」

鈴「そうなのだ。星なんて、卒業したっきりここでは出番がないのだ」

翠「……まだ良い方なのか？」

剣「さあな。次回『護衛任務』よろしくな」

護衛任務

曹操殿の陣営に来てから、数日が経過した。俺は約定通り、曹操殿の護衛に就いている。

俺が戻って来て、曹操殿との会話はこうだ。

「巧く私を使ってくれたわね」

「確証は無かったでござる。万が一の保険と思っていたでござるが、手は打っておくものでござるな」

「まあ、良いわ。こちらは約定を守った。次は」

「拙者の番でござる」

それからは、ずっと曹操殿の傍に控えている。とは言っても、隠形の業で姿を消し、表には出ていない。兵舎に近付いて来た間者を打ち倒しているのがほとんどだ。

賊の反乱は、天然の要害に立て篭もっている故、官軍は攻め込むことが出来ずにいるが、曹操殿が立案した兵糧攻めが策として用いられている。それ程長くは持たないだろう。

義勇軍は陣に留まっている。劉備殿は大将軍何進に散々に叱責されたと曹操殿は笑っていたが、興味は欠片も無かった。気にしているといえば、義勇軍の兵だが、無事に桃花村に帰されるだろう。もう義勇軍がこの戦で前線に立つことはないと見ている。

「剣。姿を見せなさい」

「何か用でござるか？」

言われた通り、曹操殿の下に姿を見せた。今は曹操殿一人だ。

「貴方、やはりやるわね。毎日のように感じていた視線が、ここ数日嘘のように消えているわ」

俺が間者を打ち倒しているからだろう。敢えて言いはしない。

「春蘭達とは上手くやっているかしら？」

「それなりでござるな」

実際、それ程関わりがある訳ではない。常に控えてはいるが、姿を見せることは少ないからだ。

夏候姉妹はかなり優れている軍の指揮官だ。愛紗とそれ程差はないだろう。荀イク殿はかなりの切れ者だ。朱里と比べても遜色ないだろう。曹操殿は人材に恵まれている。

「貴方の目から見て、賊はどのくらいで落ちそうかしら？」

「何故拙者にそのようなことを？」

「別に。貴方の見解を聞きたいだけよ」

何か企んでいるのか？

「そう長くは持たないでござろう。もう少し時を待てば、投降してくる者も出てくるのではござらんか？そういう工作は行っているでござろう？」

主に荀イク殿がだが。
しかし、効果的だろう。兵糧攻めによって、要害内は空腹の者が出始める筈だ。その者達に罪を軽減し、糧食を与えると流せば、自然と投降してくる者は増える。

「よく見えてるわね。見解も申し分ないわ。
ねぇ、やっぱり私に仕えない？重宝するわ」

「拙者は誰にも仕える気はないでござる」

「でも、今は私に仕えてるようなものよ？」

否定は出来ない。事実、今の俺の状況は曹操殿に仕えているようなものだ。

「以前は取り合いもしなかった貴方が、どういう変化かしら？」

「いろいろ、想うことがあるのでござるよ」

「つまり、仕えるのも満更ではなくなっているということね？」

「まあ、そうかもしれないでござる」

「私に仕えるのはどうかしら？」

「曹操殿は何を目指しているでござる？」

「私が歩む道は、覇道よ」

茨の道を選択したものだ。だが、厳しいからこそ、人は集まる。

それが、曹操殿の魅力なのだろう。

「私に力を貸してくれないかしら？貴方が護衛についてから、随分と安心していることは隠しようもなく事実。素直に頼んでいるつもりよ」

「拙者としては、腕の立つ護衛を一人か二人つけるべきだと思うでござる。暗殺というものが如何に防ぎ難く、恐ろしいかは多少なりとも知っている筈でござる」

「ええ。それで、貴方に頼んでいるのよ」

やれやれ。随分信頼されたようだな。だが、今回は仕方なくしているが、間者のような働きはもう御免だ。

「護衛は勘弁して欲しいでござる」

朱里の言う遊軍が俺の可能性だった。最も、そのような軍を認める軍律があるとは思えないが。

「なら、何か望みがあると？」

「さぁ、どうでござるかな？」

「ふぅ。私に仕える気はまだ無さそうね」

「もう少し、考える時が必要でござる」

「いいわ。可能性はあるのね？」

「選択肢の一つには、入れておくでござる」

「そう。今回はそれで良しとするしかないようね」

まだ諦めた訳ではないだろうが、ひとまずは良さそうだな。俺は曹操殿の前から姿を消した。

更に数日が経過した。兵糧攻めはやはり効いているようで、続々と投降してくる者がいるようだ。この分ならば、もうさほど時はかからないだろう。

「剣。いるだろうか？」

俺を呼んだのは夏侯淵殿だ。わざわざ曹操殿がいないところでだ。

「何か？」

「何。ちょっとした世間話でもしないか？」

「拙者には護衛の任があるでござるが」

「お前のことだ、姿を見せたということは華琳様に今のところ危険はないのだろう？しかも、すぐに駆け付けられる場所にいるのだろう？」

「買いかぶりでござる」

事実ではあるが。

「華琳様はどうだ？」

「調子は悪くなさそうでござる。特に取り上げることはないでござる」

「そうか。助かる」

「賊の様子は？」

「大したことはない。ただ、もうすぐこちらから攻めかかる気配が見え隠れしているな」

また、血が流れるのだろうな・・・。

華琳様から命を受けた。

「お呼びでしょうか？華琳様」

「ええ。よく来たわね、秋蘭。今、剣は私の傍にいないわ」

「宜しいので？」

「構わないわ。たまにいなくなるみたいなのよ。すぐそこにはいるでしょうけど」

機嫌は良さそうだ。剣が護衛についてからずっとだ。

「私に何か？」

「ええ。貴女は、剣とよく話をするかしら？」

「普段は身を隠しているみたく、余り話す機会が多いとは思えませんが」

「そう。秋蘭、剣と話す機会を増やしなさい」

「はっ」

返事はしたが、どういった狙いがあるのだ？

「そう不思議そうな顔をしないで。考えがあるの」

「どのような考えを？」

「剣を、我が陣営に加えたいのよ」

また華琳様の悪い癖が出たか……。

「可能なのでしょうか？」

「一度はあっさり断られたわ。初めて会った時にね。二度目は、ついこの前。断られたけれど、少し考える仕草は見せたわ」

「可能性はあると？」

「そういうことよ。誰かに仕える気はないとも言っていたけれど、その考えも変わっているようね。なんとかして引き込みたいのよ」

「それと今回の命にどのような関係が？」

「貴女に剣の友になって欲しい、と言えばいいかしら」

「友に、ですか？」

「ええ。考える仕草を見せたのだから、私の他にも迷う対象がいると考えられるわ。例えば、義勇軍とか」

成る程。有り得ない話ではない。むしろ、自然だ。今回の約定は、元々義勇軍のことがきっかけなのだから。

「秋蘭、貴女に命じることは三つよ。一つは友となること。二つ、剣に関する情報を聞き出すこと。どんな些細なことでも構わないわ。三つ、出来ることなら引き込みなさい」

「承知しました。やってみましょう」

「頼んだわ。他に頼める人もいなくてね」

姉者や桂花には無理だろうな。第一、私は奴が嫌いではない。認めているつもりだ。我が陣営に来てくれると言うのなら、頼りになる同志となるだろう。

そして、私は剣に声をかけた。友になるのは難しくない。それなりに砕けて話しているようには感じる。情報もそれ程難はないだろう。問題は引き込めるか、だ。

「我が陣営はどうだ？」

「悪くはないでござるな。統制もしっかりしているようでござる。流石でござる」

「この乱を鎮めたらどうするつもりだ？」

「とりあえずは、桃花村に戻るでござる」

やはりか。

「義勇軍には入っていないのだろう？」

「あの村にはまだやることがあるのでござる。そのことを片づけるまで、あの村を離れるつもりはないでござる」

やることとは何だ？

「それが終われば、どうする？」

「やけに聞いてくるでござるな。何か気になるでござるか？」

・・・少々突っ込み過ぎたか？警戒されたか？

「友のことが気になった、では駄目か？」

「成る程。俺を友と見てくれているのか」

笑った。自然な笑みだろう。口調も砕けたものになった。

「そうだな・・・、旅にでも出るかもしれない」

「旅か。士官先でも探すのか？」

「いや、気ままな旅だ。今のこの世がどうなっているのか、もう少し見たい。
だが、夏候淵殿が言ったことも兼ねるかもしれん。まだ決めかねていてな」

「そうか。因みに、士官するならどこを考えているんだ？」

「あらかた見て回ったつもりだからな。今のところ、三つだ。義勇軍、孫呉、そして、ここだろうな」

我らも入っているか。華琳様の言う通り、可能性は十分ありそうだ。

「まあ、可能性の一端に過ぎない。気にしないでくれ」

「ああ。来るなら、いつでも来い。華琳様も歓迎してくれるだろう」

「そうか。まあ、期待しないで待っていてくれ」

「そうだな。何か用意して欲しければ、用意するが？」

「ふむ。俺は、茶と酒を好む」

「ほぅ。味なものだな」

これは華琳様に伝えておくか。

「ん！」

剣のようすが変わった?どうかしたのか?

「俺は曹操殿の下に戻る。何者か来たような気配だ」

「そうか。華琳様のこと、よろしく頼む」

「ああ」

ふっと姿を消した。目を離した一瞬なのだがな。

誰か来たと言っていたな。どこからか使者が来たのか?私も戻るとするか。

「そう。解ったわ。連れて来なさい」

俺が戻って来た時に聞いた曹操殿の言葉だ。やはり、何者か来たようだ。

「剣。姿を見せなさい」

「どうしたでござる?」

「使者よ。貴方も知ってる者よ」

俺が知っている・・・?

「劉備よ」

・・・何をしに来たというのだ?劉備殿にはもう何かが出来るとは思えない。まして、その機会が与えられるとも思えない。

「それで、何故拙者にそのようなことを?」

「私が呼んだら姿を見せなさい。いいわね?」

「・・・承知したでござる」

曹操殿が何をしたいのかも解らないな。まあ、命には従う約定だ。聞かない訳にはいかない。

数分待つと、何者か忍び込んで来た気配がした。と、同時に劉備殿が兵舎に入って来た。曹操殿の傍には、夏候姉妹と荀イク殿がいる。

「私に、何か用かしら?」

「はっ。こたびの曹操殿の策、素晴らしいものでありました。この劉備、感服しております」

「貴方のくだらない猪突猛進な策に比べればね」

挑発している。劉備殿は表情を歪めている。だが、事実だ。否定出来る訳がない。

「劉備、私はそんな話はどうでも良い。要件を言え」

くだらない話をする気はない、そう言って捨てた感じだな。

「・・・こたびの戦の最中、我等の拠点である桃花村の危機を聞き、援軍を差し向けて頂いたとか。大変感謝しております」

「ええ。貴方がすぐに軍を退いていれば、苦戦はなかったでしょうね」

「・・・我等は、先陣を任せられていた故」

まだ言っているのか、この男は。このような男に揺り動かされている者達が不憫だな。

「それで?今更礼でも言いに来たのかしら?」

「・・・は。そして、ある願いを聞いて頂きたく」

「言ってみなさい」

「・・・曹操殿に、軍を貸して頂きたいのです」

聞く気が失せた。何を馬鹿なことを言っている?これ以上聞いたとしても、意味があるとは思えない。

劉備殿が入って来る前に紛れ込んだ間者に近付き、人知らず打ち倒した。見覚えがある。劉備殿の側近だった筈だ。益々くだらないな。

「貴方、何様のつもり?」

それは俺も聞きたい問だ。

「…曹操殿は、桃花村に援軍を送って下さった。我等を重んじてくれていると思い」

「図に乗るな」

言い切った。流石だ。

「重んじる？笑わせないで。誰が貴方のような小物を重んじると言うの？

私はある取引をしただけよ。貴方のことなんて考えてもいないわ」

「うぐ…、で、では、聞きたいことがあります」

「はぁ。何かしら？」

露骨に溜息を吐いた。隠す気さえなかったようだ。解らなくもないが。

「こ、こちらに、桃花村に住まう者がいると聞いています。その者が曹操殿に手を煩わせるやもしれません。私が引き取りますので」

「名は？」

「剣と申します」

俺のこととはな…。

「あはははははははは！無能ね！貴方、本当に無能だわ！」

「な、何を…」

「剣！」

言われていた通り、曹操殿に呼ばれた。何事もないように、曹操殿の隣に姿を見せた。

劉備殿は目を丸くしているが、一瞥をくれただけで終えた。言いたいことは多々あると思えたが、言っても虚しいだけだ。それに、俺に発言は許されていない。

「今の話は聞いていたわね？」

「聞いていたでござる」

「そう。好き放題言っていたわね」

「そうでござるな」

「どうするのかしら？」

「追い返せば良いのではござらんか？これ以上の話に、何か利があるとは思えないでござる」

「だそうよ」

「つ、剣殿！これ以上曹操殿に迷惑をかけるのは・・・」

大方、俺が曹操殿の陣営にいることを偶然発見し、俺を利用して少しでも功を立てようとでも思ったのだろう。俺とて、四六時中隠形の業を使っていられる訳ではないからな。しかしまあ、浅ましいものだ。

「さっさと失せなさい。剣はこのまま私の下にいるわ。貴方と話すことはもう何もない」

「し、しかし、曹操殿の手を煩わせる訳には・・・」

「消えろ。そう言った筈よ」

曹操殿が劉備殿を鋭く睨み付ける。大した覇気を放つものだ。何も言い返せなくなった劉備殿がおずおずと下がっていく。俺にはもうひと仕事あるのか。静かに劉備殿の後ろに付き、兵舎から出たところで声をかけた。

「劉備殿」

「おお！剣殿！」

嬉々とするが、喜ぶ内容ではない。

「そこに気を失っている者達の処理を頼むでござる」

「な、何事だ！？」

転がっている者が二人いる。俺が打ち倒した間者だ。勿論、死んではいない。

あ然としている劉備殿を一瞥し、俺は兵舎に入った。

「劉備は？」

「さあ？自身の兵舎に戻ったのではござらんか？」

最早、どうでも良い。それ以上何か言われる前に、姿を消した。
翌日から賊の籠る要害に攻撃が行われた。何日か耐えていたようだが、既に下がり切っている士気では抵抗という抵抗は出来ない。
天然の要害が、陥落した。
何進が軍儀を開き、今後のことが話し合われた。明日陣を払い、自らの領地に帰ることになった。
俺の約定は、これで終わりだ。

「剣」

「どうしたでござる？」

曹操殿に呼ばれた。

「明日、私は自領戻るわ。貴方はどうするのかしら？」

「桃花村に戻るでござる。約定は互いに果たしたでござる」

「ええ。そうね。また逢いましょう」

「そうでござるな」

曹操殿は悪い人物ではない。魅力は充分にある。

「酒は、呑めるかしら？」

「良いのでござるか？」

戦は終わったとは言え、陣中にいることに変わりはない。それで

良いのか？

「余り良くはないけれど、少しなら良いわよ」

「そうでござるか。なら、付き合うでござる」

杯を二つ用意し、曹操殿が酒を注いでくれた。杯を口に運ぶ。

「・・・美味しいわね」

「・・・そうでござるな」

久しぶりに美味いと思える酒だった。俺の中で何かが吹っ切れているのか？

「ふぅん。なかなかいけそうね」

「大したことはないでござる」

二杯目を呑んだ。美味い。

「道中、気をつけるでござるよ」

「ええ。いずれまた逢いましょう」

翌日、早朝。曹操殿は退陣した。軽く見送り、桃花村へと足を向けた。

護衛任務（後書き）

次回予告～。

剣「やれやれ。長時間隠形の業を使うのは、やはり疲れる」

華「貴方が間者として働いたら、ぞっとするわね」

春「そうなのですか？」

桂「貴方は・・・」

剣「その可能性は万が一にもないでござる」

秋「待っているぞ、剣」

剣「いつになるか、解らないがな」

華「歓迎するわ。私に仕えてくれるなら、尚更ね」

剣「それは、その時にならないと解らないでござるな」

華「楽しみにしてるわ」

剣「次回、『桃園』よろしくな」

桃園

曹操軍と別れ、桃花村に向かっている。三週間程が経過している。村は復旧しているだろうか？

四刻程駆け、桃花村に着いた。まだ朝が早い。村人は起き出していない。俺は、村の離れに向かった。雷光だ。

ついでに村も見て回る。どうやら、元通りに回復しているようだ。生き物の気配を感じる。雷光だろう。俺の気配も感じたようだ。

「ブルル・・・」

「俺だ。雷光」

「ブルッ！」

小屋から飛び出して来た。相変わらず、鮮やかな毛並みをしている。調子は良さそうだな。

「元気にしていたようだな、雷光」

顔を擦り寄せてくる。俺は軽く首筋を撫でてやる。

「また直ぐに来る。大人しく待っていてくれるか？」

「ブルル」

顔を遠ざけ、小屋に戻っていく。俺も背を向け、村に戻った。

愛紗達は庄屋の館にいるだろう。俺はその館に足を運んだ。

「剣！」

愛紗だ。変わった様子はない。館の前に立っていた。

「つい先程戻って来た。起きていたのか？」

「ああ。偶然だがな。無事に戻って来たな……」

「当然だ。俺はまだ死ぬ訳にはいかない」

「そうか……」

愛紗が倒れ込んで来た。俺にもたれ掛かっている。

「どうした？」

「……心配したんだ」

「……そうか。もう大丈夫だ。心配するな」

俺のような者でも、案じてくれる者がいるのか……。

「剣さ～ん！」

「剣～！」

朱里に鈴々、星に紫苑、馬超殿が出て来た。迎えてくれているようだ。

「よく戻って来たな」

「お待ちしてましたよ」

「そうだぜ」

「・・・そうか。待たせてしまったか」

俺を待っていてくれた者が、これ程いるのか・・・。

「剣殿」

「楊延か」

楊延が一人で奥に控えていた。村で待っていろ、そう言ってあったからな。俺を信じて待っていたのだろう。

「今日はお花見なんですよ。剣さんも参加してくださいね」

「ああ。今日は、久しぶりに羽目を外させて貰おう」

この村で為さなければならないことがまだある。だが、今すぐという訳ではないだろう。宣言通り、今日は羽目を外す。

花見は午後から行われるらしい。朱里が率先して準備に取り掛かっているようだ。

「お兄ちゃん！久しぶり～！」

「ああ。久しぶりだな、璃々」

紫苑の娘の璃々もこの村に来ていたようだ。紫苑が来ているのだ

から当然ではあるが。
午後になった。準備が整えば、朱里が呼びに来る手筈になっている。直に来るだろう。
朱里を待っていると、次第に村が騒がしくなった。
「どうかしたのかな？」
「何でも、義勇軍が帰って来たようよ」
義勇軍か。曹操軍が自領に戻ったのだから、当然義勇軍も戻って来る。義勇軍自体は村に喜んで迎え入れている。家族の者達もいる筈だ。
一人、俺達を見付けて近寄って来た。劉備殿だ。
「や、やあやあ。お揃いで出迎えとは痛み入る」
皆が皆、憮然とした表情をしている。無理もない。何様のつもりだ。
「つ、剣殿ではないか。貴殿はいつ戻って来られたのだ？」
「貴殿に話すことはない。早急に立ち去れ」
「な、何を馬鹿な・・・」
「お前、この村を見捨てたんだぜ？お前の居場所なんてある訳ないだろ？」
「馬超の言う通りです」

馬超殿に続き、愛紗さえもこれだ。取り付くことも出来はしない。

「し、しかし、この村の義勇軍を裏切り、曹操の下にいたのはどうなる！？」

「ふぅ。曹操殿の話を聞いていたでござるか？取引したのは拙者でござる。

拙者が先日の戦で手を貸す代わりに、曹操殿に援軍を派遣して貰ったでござる。貴殿の代わりに」

「な、何だと！？」

「もう一つ。裏切りと言ったでござるが、拙者は義勇軍の一員ではないでござる」

「倉に貯めてあった軍資金は、全て孔明殿の指揮で村の援助に使われました」

「なっ！？あれは私の・・・・」

やはり、自分の金だと思っていたか・・・・。

「あれは貴殿の金ではないでござる。義勇軍が勝ち取ったこの村の金でござる」

「あーっ！」

紫苑に抱え上げられている璃々が突然騒ぎ出した。子供故にありがちかもしれないが、どうかしたのか？

「げぇっ！黄忠！」

劉備殿が慌てた様子で馬に乗る。まるで何かに逃げるように。というより、逃げた。

「待ちなさい！」

紫苑が制止の声を上げるが、劉備殿は逃げていく。

「どうかしたのか？」

「あの者が璃々を誘拐した一党の黒幕なんです！」

なるほど。必死に逃げる訳だ。追うことは出来なくもないが、奴は馬だ。無理そうだな。

「もう遅い。放っておけば良いだろう。
璃々はそれで良いか？」

「う～～・・・うん」

「良し、良い子だ」

紫苑に抱き上げられている璃々を軽く撫でてやる。

「皆さ～ん！お花見の用意が出来ましたよ～！」

朱里が呼びに来てくれた。訪れた場には、桃の花が満開に咲き誇っている。流石に桃花村という名が付いているだけはある。
思い思いに寛ぎ始める。鈴々が相変わらず大食いをしているよう

だ。かと思えば、隣で馬超殿が競い合っている。やれやれ。

「呑みますよね？」

紫苑が二つの杯を持って寄って来た。

「呑む」

今日は羽目を外すと言った。そのことを取りやめるつもりはない。紫苑が酒を注ぐ。二人で杯を当て、口に運んだ。美味い。酒が美味い。

「何だ？酒盛りか？私も混ぜてくれ」

星が杯を持って来た。星も呑みたいようだな。星も加えて呑み始めた。

「程々にしてくださいね」

「そうだよ～」

朱里と璃々が忠告してきたが、俺はともかく紫苑と星は止める気はなさそうだ。

「朱里。少し、俺がいなかった頃の話をしてくれ」

「特に変わりはありません。殆どが村の復興だったので」

「愛紗が倉の金を復興に宛てたと言っていたが」

「はい。残りは、義勇軍の武装と、保険金として残しておくことに使います」

「そうか」

これ以上は何も言わない。朱里に任せておけば、間違いないだろう。

「楊延さん達も、よく手伝ってくれましたよ」

「上手くやれているか？」

「はい。村の方々とは、打ち解けています」

「朱里とは？」

少なからず、気にしていたことだ。愛紗は心配していない。鈴々は愛紗と同様に接するだろう。問題は朱里だ。

優しいが、激しさは間違いなく秘めている。軍師としての才覚が、裏切りという行為を認めることが出来ないのだろう。

「……少しは」

「認めてはいる。だが、納得してはいないようだな」

「……やはり、悪行を為していたとはいえ、村の長を……」

「解らなくはない。反逆という点で、いつ裏切られるかが頭に付き纏うのだろう。

だが、俺としては、楊延達は自らの幸福を願ったに過ぎない。幸

福を求める権利など、万民が抱く願いだ」

「それは、そうですが・・・」

「そもそも、このようなことが起こる今の世が、間違いなく可笑しい」

朱里が箸を置き、考える仕草をする。ふっと微笑み、朱里の頭に手を置いた。

「止めよう。今はこのような話をする時ではない。そうだな？」

今は、飲み食いを楽しみ、思い思いに語り合う時だ。このような難い話をする時ではない。

「そうですね。剣さん、私も注ぎますよ」

「済まない」

空になっていた杯を、朱里が再び満たす。

「あらあら。本当に剣さんはいける口ですね」

かく言う紫苑も余裕の笑みを浮かべている。星と杯を重ねていた筈だ。

「ところで、剣さん？」

「何だ？」

「これだけの美女を前に、お酒を口にして口説かないおつもり？」

「・・・何のことだ？」

「そう言うものではないぞ、黄忠殿。女は黙して待っていなければ」

「あら。そうかしら？」

余裕の表情は虚勢か？酔っているのではないのか？

「俺にそのようなことを聞くな。朱里、この二人は頼む。ああ、璃々のこともな」

「はわわ！？剣さん！？」

そそくさとその場を立ち去った。上手く言いくるめられかねないのだ。

相変わらず大食いを続ける鈴々と馬超殿。隣にはその相手をしている愛紗の姿がある。大変だな。

「剣殿」

呼びかけられた。楊延達が呑んでいる。近寄ると、杯に酒を注がれた。

「杯を交わしましょう、剣殿」

「良いだろう」

腰を下ろし、杯を口に運んだ。

「今日は共に語ろう」

一人一人に近寄り、酒を呑む。語る。それを繰り返した。

これと言って、取り上げる話題がある訳ではない。だが、様々なことを話した。幼少期のこと。故郷のこと。友のこと。そして、志。

全員と語り終えた頃、楊延が近付いて来た。

「皆と、語っていたのですね」

「ああ。気持ちの良い者達だ。志もしっかり持っている」

「はい」

黙って楊延が酒を注ぐ。

「この村はどうだ？」

「良い村です。とても、俺達がいた村とは較べられません」

「だが、こういった平凡な幸福が、本来あるべき姿だと、俺は思う」

「はい」

それ以上は、何も言わなかった。黙って酒を口に運ぶ。楊延が、自らのことを語り始めた。内容は当たり障りのない、自らの過去。静かに耳を傾け、酒を呑んでいた。

語り終えた頃に、気が付いた。静かになっている。もう、酔って寝た者が多い。

「剣殿は、あれだけ杯を重ねていたにもかかわらず、全く酔っていないように見受けられますね」

「酔ってはいない。だが、美味い酒だった。お前も眠るか、楊延？」

「石幻です。俺の真名は、石幻と申します」

「解った。そう呼ばせて貰おう、石幻」

石幻は口元を緩め、寝息を立て始めた。俺は立ち上がり、周囲を見渡した。起きている者は殆どいないようだ。いや、一人いた。

「愛紗」

「剣。お主は起きていたのか」

「ああ。他は寝たのか？」

「呑み過ぎだ」

寝たのだな。やれやれ。かく言う愛紗もそれなりにふらついている。肩を掴み、支えてやる。

「呑んだのか？」

「星と黄忠殿に呑まされた」

納得だ。

「歩けるか？」

「ああ。何とか」

既に辺りは暗くなっている。朱里と璃々の姿はない。恐らくは、寝台の上だろう。星と紫苑は潰れている。呑み過ぎだ。鈴々と馬超殿も違う意味で潰れている。食べ過ぎだ。

「寝台まで送ろう」

「済まん」

愛紗を支えながら歩く。

「剣・・・お主の答は、見付かったのか？」

気付いていたのだろう。同じように悩んでいた俺のことに。

「まだだ。もう少しで、見付かりそうな気がする」

「見付かるさ。必ず・・・」

「ああ」

答えた時には、愛紗は意識を失っていた。軽く笑い、抱え上げた。館の寝台に運び、寝かせた。

毛布を幾つか取り出し、また桃の花が咲き誇る場に行く。星や紫苑、鈴々と馬超殿に毛布をかけてやる。女子が体を冷やすのは良くない。

それから、また方向を変え、違う場に向かう。村の外れに、まだ語り合っていない者がいる。人ではないが。

「起きているか？雷光」

「ブルル」

起きていた。小屋から静かに姿を見せた。

「お前に、頼みたいことがある」

小屋から出ようとした雷光を押し戻し、俺も小屋に入った。少々窮屈ではあるが、我慢出来ない程ではない。

「お前には、何もかも話しておく」

雷光は大人しく体を寝かせる。隣に腰を下ろす。

「俺はいずれ、軍を率いる。恐らく、石幻達は俺に付いてくるだろう」

今日、一人一人と語り合って改めて認識した。俺に付いてくる者が何人かは解らないが、少なからずいるだろう。

「俺の軍は、少数精鋭の騎馬隊にしようと思う。朱里の言う、独立行動権のような権利が貰えるか解らないが、最速の騎馬隊にしたい。その為に、俺は馬に乗らなければならない。雷光、俺をお前の背に乗せてくれないか？」

答は来ない。だが、静かに首を近付けて来た。擦り寄せて来る。

「良いのか？」

暫く待つが、答はやはり来ない。というより、相変わらず擦り寄せて来るばかりだ。

「そうか。ならば、俺と共に駆けてくれ、雷光。この乱世を、泰平の世に変えるその日まで」

「ブルル」

初めて、雷光が答えた。俺と共に駆けてくれるということか。

俺は小屋の中で、雷光と共に眠りについた。

桃園（後書き）

次回予告～。

鈴「お腹いっぱいなのだ～」

翠「全くだぜ～」

愛「食べ過ぎだ」

星「うぃ～・・・」

紫「頭が痛いです・・・」

剣「呑み過ぎだ」

朱「剣さ～ん。あのような押し付けは酷いですよ～」

剣「済まないな」

石「しかし、久々の登場が酒で酔った唸り声だけとは・・・」

剣「名まで言ってやるな」

朱「早くどうにかしましょう」

愛「そうだな。という訳だ、剣」

剣「次回、『新たな旅へ』よろしくな」

石「あれだけ呑んでいた剣殿が、何故ああも平然としている？」

愛「……さあな」

新たな旅へ

二月の時が過ぎた。

ほぼ賊の討伐に費やされた。村にある義勇軍は愛紗が中心となって率い、朱里が立案する策を基に賊は鎮圧されていった。桃花村の周辺には賊が見られなくなった。この辺りに、平穏な時が訪れたと言って良いだろう。

俺はこの二月、雷光と共に馬術の訓練に励んだ。愛紗や馬超殿に教わりながら上達した。何しろ、俺と雷光は初心者当然だったからだ。

他には、楊延達の剣の調練をした。飛天御剣流を教える訳にはいかないが、剣の使い方なら教えられる。

俺が重点的に教えたのは、身の護り方だ。眼前の敵を如何に倒すではなく、眼前の敵から如何に身を護るかだ。一人一人適度に打ち据えながら、体に覚えさせた。最終的には三、四人を相手にしても身を護れる段階まで仕上げた。皆が皆、最終段階まで音を上げなかった。それだけ、想いが強い。

それ以外の時間は、殆どが館で家事をしている紫苑の手伝いだ。時には璃々と遊んだりもしている。

「はあっ！」

槍。鋭く突いてくる。俺は馬上で躱す。同時に斬り込む。馳せ違う。

「いやあ、ここまで上達するとはなぁ」

「ああ。馬超と互角に撃ち合えている」

「二人の指導の賜物だ。感謝している」

「馬と息が合ってるんだよ。気性の難しい馬なんだけどな」

雷光の心の傷はまだ完全に治っている訳ではなかった。ただ、愛紗と馬超殿には心を開くようになった。

余談だが、雷光は子供には心を開いている。というより、閉じていなかった。心の問題だろうと思っている。証拠に、鈴々や璃々には抵抗を示さなかった。

「もう、私達が教えられることはないかもしれないな」

「まあな。後は、慣れだな」

「そうか」

二人から修業を納めたという了承を貰った。そういうことだろう。ならば、かねてから考えていたことを現実にする時が近付いている。

二人に感謝の旨を伝え、いつも石幻達が待つ調練場に向かう。今日は石幻だけが待っていた。その予定だったからだ。

「始めるぞ」

「はい」

構えのない構えを取る。相変わらずの無形の型。対する石幻は、剣を低く構えている。どこからでも攻撃に対処しやすいのだろう。

跳躍した。石幻も低く構えたまま駆け出す。一度撃ち合い、入れ代わった。振り返ると同時に次の仕掛けに入る。飛天御剣流、龍巻閃。

「ふっ！」

気合いと共に、逆刃刀に衝撃が伝わる。石幻が剣を盾にするように防いでいる。

鍔ぜり合いはしない。すぐに退き、もう一度仕掛ける。連撃。躱し、受け、俺の連撃を防いでいる。動きに無駄がない。

攻めきれない。退いた。

「よく防げるようになったな」

「な、何とか・・・」

息が荒い。余程集中していたのだろう。それで良い。

「俺はまだ、一撃も返せませんが・・・」

「構わない。隙を見付けたと思った時に、渾身の一撃を叩き込めば良いのだ」

「はい」

息が整ってきたようだ。ならば、俺の要件を伝えておく。

「明日、皆を集めてくれ。伝えたいことがある」

「何でしょう?」

「明日、話す」

「解りました。では、明日」

背を向けた。この村で、俺が為すべきことは全てやった。思い残していることはない。

雷光は相変わらず小屋にいる。俺は、調練の疲れを癒しているだろう雷光の下に足を運ぶ。

「雷光。体はどうだ？」

「ブルル」

「そうか」

調子は良さそうだ。支障はないだろう。

「明日、お前にも話すことがある。良いか？」

顔を擦り寄せてきた。首筋を軽く撫でると、気持ち良さそうに首を振る。そっと手を離すと、雷光はまた小屋に戻る。

翌日。俺は調練場に行く。石幻達は、静かに俺を待っていた。

「皆。よく集まった」

俺は静かに語り出す。

「この二月、俺はお前達を見て来た。調練も課した。お前達一人一人に、志があったからだ。

必ずしも、俺と同じ志という訳ではない。それで良い。今の世を憂うる想いは、はっきりと伝わった」

聴き入っている。皆、俺の声に耳を傾けている。

「俺は、旅に出る」

「！！？」

動揺。ざわつき始めた。

「静まれ」

動揺が一瞬納まる。しんとなる。

「まだ、話は終わっていない。続けるぞ」

再び、静寂となった。

「俺は旅に出る。今の世を、もっと見詰める為だ。
そして、お前達も旅に出ろ。同様に、今の世を見詰めて来い。一人一人の目で、この世がどうなっているのか、よく考えて来い」

一人で旅が出来る程度に調練はしている。その程度はしてある。

「志が変わらないというのならば、もう一度この村に戻って来い。期限は一年。俺はその時、皆を待っている」

「私達を、率いてくれるのですか？」

「そのつもりだ。どこの軍に寄るかは決めていないが、俺達の志を受けてくれる者にしか寄るつもりはない。
俺は、最速の騎馬隊を編成する。旅で、自身の馬を手に入れろ。

更に言えば、同志を募れ。一人でも二人でも、同じ志を持つ者を見付け、共に生きろ。
俺が皆に伝えることは以上だ。明日、出立する。一年後、必ず皆と再会することを信じている。また逢おう！」

一つ、また一つ。歓声が上がる。地響きが起きているような感覚になる。

「明日に向けて準備。俺からの話は以上だ。散会！」

そう簡単には散会しなかった。だが、俺は全員が散るまで待っていた。最後まで残っている者がいる。石幻だ。

「どうした？まだ何か用があるのか？」

「俺は、剣殿の供をしたいのですが」

「駄目だ。俺は一人で行く。お前も同様だ。自分の目で、今の世を見詰めて来い」

「…は。承知しました」

「一年後、また逢おう」

背を向けた。これ以上は必要ない。後は俺達個人の問題だ。石幻が去るのを待ってから、館に戻った。
食事中、皆で紫苑が作った料理を食べている。だが、如何せん空気が重い。どうかしたか？

「…やれやれ。剣、黙々と食していないで、はっきりと言ったら

どうだ？」

たまり兼ねたように星が俺に言う。そうか、皆にも言っておく必要があるか。

「明日より、俺は旅に出る」

「そうなのか？」

「え～！？」

「そうだ。鈴々、璃々。暫くお別れだ」

この二人は知らなかったようだな。

「……どうしても行きますか？」

「行く」

「……何故ですか？」

「俺の目で、もう一度この世を見詰めて来る。俺がこの先何をすべきなのか、確かめる為の旅だ」

「答を見付ける為の旅、か……」

愛紗の言う通りだ。この動乱のただ中、俺に出来ることは何なのか。その答を見付けたい。

「止めても無駄でしょうね」

「みたいだな」

「この二月で賊は討伐した。それに、この村には皆がいる。だから俺は、思い残すことなく旅に出れる」

「ふむ。まあ、剣の自由ではある。慕っている者達も旅に出すのだろう？」

「ああ」

「供は連れるんですか？」

「いや。一人旅だ。その方が今まで見えなかったものが見えてくる気がする。ただ、雷光だけは連れていく」

「あいつはもうお前の馬だもんな」

「淋しくなりますね……」

「済まない、朱里。だが、これは今生の別れではない。いずれ、また逢える。その日を楽しみにしている」

これはただの旅。今生の別れではない。

俺は一人で食を終え、席を立つ。

「馳走になった」

背を向けた。自室に戻る。

旅立つ用意をすることは特にない。この村で蓄えた賤を路銀とし

て持って行くだけだ。それ以外の荷はない。肌身離さず腰に差している逆刃刀があるくらいだ。

夜更けまで暫く眠った。それから起き出す。外に出て、村の離れにある小屋に向かう。

「雷光」

静かに雷光が姿を見せた。小屋にある秣を取り、雷光に乗せた。

「旅に出る。行こうか、雷光」

何も言わずに進路に向かって歩き出す。手綱を取る必要もない。宣告通り、日が変わってからの出立。既に日は変わっている。迷いはない。門前まで来た。誰かが立っている。

「……このような夜更けに起きているとはな。何か用があるのか、愛紗？」

「……お主がこうやって夜更けに出ていくことは解っていた」

読まれていたか……。

「私も共に行く」

「駄目だ。ここに残れ」

取り合う気はない。俺は一人で行くと決めている。

「鈴々のことを考えろ。俺はともかく、愛紗には無条件で頼っているだろう。鈴々一人置いていく訳にはいかない」

「それは・・・そうだが・・・」

「暫し別れるだけだ。一年後に戻って来る。大した期間ではないだろう？」

「・・・私は、剣と離れたくないんだ」

「は・・・？」

間の抜けた声を出した。頭の中にあった考えが、一瞬全て消えた。

「お主がいつも傍にいてくれた。初めて出会ったあの時からずっと・・・」

何かを俺に告げようとしている。その真意が何か、俺には解らない。

「助けて貰っていた。命さえ、救って貰った。いつしか、心のどこかで頼るようになっていた」

黙している。ただ聞くことにのみ集中している。

「この想いが何なのか、解らなかった。いや、認めたくなくて、気付かない振りをしていたのかもしれない。

だが、星に叱咤され、漸く自分の気持ちに正直になれた」

元々、愛紗は我が強い方ではない。他人の為に自らは退く。そういうところが見られる。だが、それで何に気付いたという？

「私は・・・剣のことが好きだ」

再び、思考が止まる。考えが全て飛ぶ。

「・・・何を言っている？」

「いや、戯言ではないのだが・・・・」

愛紗が肩の力を抜く。あのようなことを言えば無理もないが。

愛紗が冗談でこのようなことを言う筈がないことは解っている。

ならば、俺も真剣に向き合わなければならない。そうか、あの愛紗が・・・・。

「そう言われると、素直に嬉しいな。ありがとう、愛紗」

すっと愛紗に近付く。そっと抱きしめる。出来るだけ優しくしたつもりだ。

「剣・・・」

「言った通りだ。気持ちは素直に嬉しい。

だが、俺は一人で旅立つと決めた。だから、愛紗を連れて行くつもりはない」

「・・・そうか」

愛紗を抱きしめたまま言った。鈴々のこともある。故に、

「この村に、残ってくれ」

「……解った。必ず、戻って来てくれるんだな？」

「約束する。また逢おう、愛紗」

そっと抱きしめていた手を離す。静かに距離を取った。

「またな」

歩き出した。雷光は何も言わずについてくる。振り返ることもしない。

夜が更けている中、雷光を連れ、一人旅に出た。

新たな旅へ（後書き）

次回予告～。

朱「私は子供ではないんですね……」

剣「賢過ぎるのだろうな」

紫「しかし、淋しくなりますね。お酒の相手がいなくなってしまいます」

鈴「ありゃ。それは大事な問題なのだ」

石「どこがだ？」

愛「気にしてやるな」

剣「ともあれ、次回から予告も俺一人だ。どうしたものか」

華「正義の使者、華蝶仮面！次回からの予告に！」

剣「登場しなくて良い」

華「なに～っ！？」

翠「じゃあさ、あたしは？」

剣「大人しくしていろ」

翠「はぁ～っ！？」

朱「はぁ。先が思いやられますね」

石「旅の最中に出逢う者達に登場して貰う予定だ」

愛「私たちは次の登場までお預けだ」

剣「お前への返答もな」

愛「へっ？」

剣「次回、『西涼』よろしくな」

愛「お、おい！」

西涼

西涼に来ている。旅を始めて既に三週間程経っている。

西涼は馬超殿の故郷。その話は馬超殿本人から聞いていた。馬術に優れている。南船北馬と言われているらしい。確かに、南の孫呉は船の扱いに長けていた。

俺の目的は北の優れた馬術にある。牧や馬の環境など、何か一つ取っても学ぶことは多くあるだろう。

三週間も経っているのには理由がある。雷光の調練も兼ねているから、雷光に乗って駆けて来たが、途中途中の村に滞在する時間が長かった。

一つ一つの村を見ていた。桃花村のように食に困らない村もあれば、一日の食にさえ事欠く村もあった。小さなところでも貧富の差が広がっている。治世者の問題だった。自らの利しか頭にない者が統治している。

だが、その真意を俺が知ったからといって、何かが出来る訳ではない。横行している者を咎めても、また別の者が現れ、横行する。無駄なことだった。

不正を糾すには何が必要なのか。漢王朝の力はもうないも同然だろう。当然、不正を糾す力はない。盛者必衰とはよく言ったものだ。

何かが起こる。近い将来、必ず何かが起こる。恐らくは、動乱。情勢を見極め、新たな国を建てようとする勢力が現れる。

それで良い。むしろ、その方が良い。乱れを直す力がないのだから。

「ねぇねぇ」

「‥‥貴殿は」

話しかけられた。西涼の街を歩いているのだから、別に不思議なことではない。俺が不思議に思ったのは、その人物の面影。

「‥‥？あたしの顔に何か付いてる？」

「いや、済まないでござる。貴殿の面影に知り人を重ねていたでござる」

どうやら、まじまじと見ていたようだ。馬超殿の面影に重なったのだが、親族くらい故郷なのだからいても可笑しくない。

「何か用があるでござるか？」

「ぷぷ。ござるっておもしろい‥‥」

再び、視線を向け問い掛けたが、笑いを必死に堪えていた。それ程おもしろいか？

少し待っていると、顔を上げた。

「はは。ごめんなさい」

「構わない。だが、笑うのなら普通に話させて貰う」

「うん。それで良いよ」

「それで？俺に何か用か？」

「あ、ううん。立派な馬連れてるな～、と思って」

「雷光という」

「へぇ～」

この者が雷光に近付き、軽く触れる。雷光が嫌がっていないから止めはしない。見たところ、相手が純粋な子供だからだろう。

「あ、あたし馬岱っていうの。よろしくね」

「剣という。旅の者だ」

「ねぇねぇ。さっき面影が似てるって言ってたよね？もしかして、お姉様？」

「お姉様・・・馬超殿のことか？」

「やっぱり！」

なるほど。面影が似ている訳だ。

「お姉様どこいるの！？知ってる！？」

「知ってはいるが、聞いてどうする？」

「そこに武者修行に行く！」

大丈夫なのか？見たところまだ幼い。

「一人旅は危険だ」

「貴方もしてるじゃん」

確かに。だが、俺は一人でも特に問題はない。
食料は旅の途中で採れば良い。獣はいくらでもいるし、山中に行けば果物もある。飢えることはない。
賊に襲われたこともしばしばあった。盗っ人と言った方が適当かもしれない。逆に少しだけ打ち倒し、食料を分けてやった。大抵の者は不思議がるが、眼に邪な光はなかった。ただ飢えて死にたくないだけ。だからそうした。近くの村まで連れて行き、仕事を適当に与えて貰った。給金も出る。それで飢えることはなくなる。
ただし、話をして志のあった者もいた。俺からも多少は話し、その気があるなら一年後に桃花村に来るよう言った。

「ふむ。馬岱殿、俺は西涼の馬術に興味があって来た。広大な牧でも紹介してくれないか？」

「紹介したら教えてくれる！？」

「考えても良い」

「わ～い！」

跳びはねて喜ぶ。無邪気な子供だな。故に、旅に出して良いものかどうか。
案内されて向かったのは、広い草原。所々に馬の姿が確認出来た。

「連れて来たのは良いんだけど」

「何か問題でもあるのか？」

「ここの主さんが気難しい人だからね～・・・」

なるほど。気をつけろということか。
傍で雷光が草を食み始めた。敢えて止めはしない。

「あっ！来たよ！」

誰かが近付いてくる。男、歳は俺より取っていそうだな。

「腹が減ってんのか？たんと食べな」

俺達に話しかけるのではなく、雷光に話しかけている。

「ブルッ！」

男に雷光が威嚇する。静かに割って入った。

「済まないでござる。雷光に悪気はないのでござる」

「‥‥あんたの馬か？」

「そうでござる」

「てめぇ‥‥こいつに何しやがった！？」

何と言われてもな‥‥。

「とぼけやがって‥‥何でこいつにこれ程の傷痕があるんだ！？」

傷痕‥‥。雷光に出会った時にあった傷は、朱里の治療で回復したが、傷痕が少し残った。だが、それは鮮やかな毛並みに隠されて

いる筈。見ただけで解ったというのか？

「ブルルッ！」

雷光が俺を押し退け、前に出ようとする。

「……ああ、こりゃ悪かった。どうやら俺の勘違いみてぇだ」

「どういうことでござる？」

「こいつはあんたに懐いてる。それが何よりの証拠だ。しかしまさか、主人が自分のことを責められてるって解って、反抗の声を上げるなんてな。とんでもなく賢い馬だな」

よく解るものだ。それだけ馬に接しているということか。

「あん？馬岱じゃねぇか」

「おっそ～い！遅すぎ！あたしずっといたよ！」

「で、あんたの名は？」

「剣でござる」

「そうかい。俺は段恵（だんけい）ってんだ。よろしくな」

「こちらこそ」

「って無視！？何で！？」

「うるせぇなぁ。何騒いでんだ？」

「あああああああああっ！」

段恵殿の表情は明らかに笑っている。馬岱殿を面白おかしくからかっている。

「んで、こいつのことなんだが」

「雷光がどうかしたでござるか？」

「馬にこれ程敵意を向けられたのは、実は初めてでな。興味がある。この反応からして、人間嫌いなのは間違いねぇ。が、てめぇには有り得ねぇ程懐いてるのには理由があんのか？」

「拙者が雷光と初めて出会った時、貴殿が言う傷が体中にあったでござる」

「それを治したの？」

「友人が」

「食料の提供、住み場。単純に考えればいろいろありそうだが、他に大きな理由があるな。この様子じゃ」

俺には特に思い当たらないが。段恵殿が言うのならそうかもしれない。

「人間嫌いの理由は、まあその傷だろうな」

「拙者もそう思っているでござる」

「やれやれ。どこにでもひでぇことする奴がいるもんだ」

どこにでも？何かあるのか？

「……ふぅん。てめぇ、馬に乗るのは慣れてねぇな？」

「解るでござるか？」

「まあ、こいつ見てればな。もう少し労ってやれ。こいつはもうてめぇに応えてるみてぇだがな」

「気をつけてみるでござる」

雷光の毛並みを軽く撫でると、気持ち良さそうに首を振る。

「ところで、何かこの辺りで問題があるでござるか？」

さっきの、どこにでもという言葉が引っ掛かっていた。

「ああ……この辺りに最近馬の盗っ人が出てんだよ。金に困って、食いぶちのねぇ奴らが盗んでいくんだよ……。

良馬は金になるからな。その辺にいる金持ちに売りゃ、良い金になるんだよ」

「その話、あたしも聞いた。けっこう困ってるんだよね～……」

なるほど。納得だ。

「ブルル」

「・・・どうした？」

雷光が不自然な反応を示した。常に俺の指示に従っていたが、雷光は俺に自分の意志を伝えようとしている？

「ブルル」

「・・・そうか。そうだな。解った。そうしよう。ただし、お前は連れて行かない。良いな？」

理解したように雷光が草原に寝そべった。どうやらここにいるようだな。

「段恵殿、馬の盗っ人がどこにいるか知っているでござるか？」

「確かあっちの山に身を潜めてる・・・って、まさかてめぇ！？」

「行ってくるでござる。戻ってくるまで、雷光を頼むでござる」

踵を返した。山を適当に探ってみるしかないな。

「あたしも行く～」

「戦闘になるかもしれないが、大丈夫か？」

「お姉様程じゃないけど、槍をね」

「段恵殿、盗っ人は何人程か解るでござるか？」

「三十…くらいか」

「承知。では、参るでござる」

視界に捉えられる山に向かう。二つ程連なっているようだ。

「ねぇねぇ。剣って強いの？」

「大したことはない」

まず、戦闘になる。そう思っている。説得には応じないだろう。ついでに馬岱殿の力量を見極めるか。

山中に入った。暫く上に歩く。流石に馬岱殿は遅れずに付いて来る。

不意に、何かが動いた気配がした。どこかに立ち去って行く気配。

「馬岱殿、少し周囲に警戒を強めろ」

「へ？何か解ったの？」

問には答えない。既に意識を四方に向けている。少しずつ、気配が強くなる。増えている。

「隠れていないで、出て来たらどうだ？群れてやって来たのだろう？」

少しずつ周囲に姿を現した。三十とまでは足りない。二十とちょっとか。

「お前達が馬を盗んでいた者達か？」

「・・・・」

答えない。どうかは見れば解るがな。眼が語っている。悪いことをしていると。

「・・・金目の物を全て置いていけ。そうすれば、命は助けてやる」

「べ～っだ！誰がそんなことするもんか！」

「・・・なら、仕方ねぇ」

武器を構え始めた。自分達の為に、人を傷付けるか・・・。

「無駄に怪我人は出したくない。大人しく非を認め、武器を下ろせ」

「うるせぇ！」

飛び掛かって来た。三人同時。逆に跳躍した。着地した時には、三人がぱたりと倒れた。

「すごっ！何したの！？」

馬岱殿は驚いている。馬岱殿だけではないがな。周囲にいる者達に焦りが生じている。

「もう一度言う。怪我人を無闇に増やしたくはない。投降しろ」

「・・・殺したのか？」

「この刀は人を殺すことは出来ない。逆刃の刀だからな」

これ以上の闘争は無用だ。はっきり解った。

三人を相手にしても、手を拱くことはない。三十だろうと、大して変わらない。それは恐らく、盗っ人の頭領も感じているようだ。

「・・・投降したところで、罪を問われて首を討たれるだけだろう？」

「そのように命を無駄に散らすようなことはしたくない。

俺の隣にいる者は馬岱殿という、西涼の頭角の家柄の者だ。仕事ならばいくらでもあるだろう。仕事を与えて貰い、給金を貰え。それで暮らしていける筈だ」

「ちょっ、ちょっと待って！勝手に決めないでよ！」

「これらの者達は皆、飢えているだけだ。仕方なく金になることをしなければならなかった。貴殿の家にも、多少の責はあるのではないか？」

「そ、そりゃあそうかもしれないけどさ」

「ならば頼む。貴殿にしか頼めないことなのだ」

「う・・・聞いてみるけど」

「頼む」

とりあえず馬岱殿に任せた。多少の罰はあるかもしれないが、処断とまではいかないだろう。

馬岱殿と盗っ人達を適当なところまで見送り、段恵殿の広大な牧に行った。雷光を迎えに行かなければならない。

「段恵殿」

「おお！無事に戻りやがったか！」

「無論でござる」

雷光が近付いてきた。軽く首筋を撫でる。

「賢いが、頑固な馬だな。俺が何と言おうと無駄だったんだよ」

「いや、貴殿には少なからず心を開いているでござる。拙者が手引しなければ、誰にでも警戒していたにもかかわらずでござる。流石だと思うでござるよ」

「そうかい。
ところでよ、この牧に何か用があって来たんじゃねぇのか？」

「拙者は今旅をしているが、遠からず騎馬隊を組織するつもりでござる。その為に、西涼の馬術を見に来たでござる。牧一つ見ても、学ぶことは多かったでござる」

素直に打ち明けた。段恵殿になら、そうして良いと思えている。

「面白いことを言うじゃねぇか。何をする気なんだ？」

「世直し」

「あはははははははははははははは！」

段恵殿が声を上げて笑い出した。腹は立たない。馬鹿にしたような笑い方ではないように思えたからかもしれない。

「愉快だ！これ程笑ったのは久しぶりだ！」

「段恵殿」

「ああ、悪い。怒らねぇでくれ。あんたを馬鹿にした訳じゃねぇんだ。むしろ、てめぇが気に入っちまった」

「どういう意味でござる？」

「とりあえず、数はいいんのか？そうでなけりゃ話にもならねぇが」

「百。これからどれだけ増えるかは解らないでござる。それから調練を重ね、身を寄せる勢力を見極めるつもりでござる」

「なるほど。ただ無謀な阿呆じゃねぇみたいだな。良し！この俺が手を貸してやる！」

「・・・それは有り難い話でござるが、良いでござるか？」

「言ったろ、てめぇが気に入った。理由はそれで充分だ。だいたい、馬が暮らすにゃ厩より牧が遥に良い。その点に目を付けたことは褒めてやるが、素人が牧を管理すんのがどれだけ難しいか解ってねぇ。つうか、まず第一に馬が足りねぇだろ」

確かに、その通りだった。段恵殿の言い分に間違いがあるとは思

えなかった。馬が足りそうにないことも明白だった。

「済まない。貴殿の協力は実に有力でござる」

「気にすることはねぇ。ただし、一つ条件がある」

「何でござろう？」

「てめぇの下に付く訳じゃねぇ」

そのようなことか。最初から下に見るつもりなどない。

「拙者は対等、と思っているでござるが」

「なら、馬岱と同じように話せよ」

「失礼した。これで良いな、段恵？」

「応！」

この日は段恵の家に泊めて貰った。夜を徹して語り明かした。兵糧などの管理もしてくれるとのことだ。

王朝に対する反感はほぼない、現実に満足していそうな気配だった。それでも信頼するに値した。友の為、そう言い切ったからだ。

翌日、夜が明ける前に旅立つ準備を終えた。雷光は既に俺の傍にいる。

「行くのか？」

「ああ」

「どこ行く気だ？」

「董卓という大守が近くにいる筈だ。知り合いでな」

「そうかい。なら、あの山を越えたところに見える筈だ」

「解った」

次の目的地は董卓殿。恋は上手くしているだろうか？

「ああ、そうだ。段恵、一つ馬岱殿に伝言を頼む」

「何だよ？」

「桃花村」

「訳解んねぇんだが」

「それだけ伝えてくれ」

「まあ、解った」

ふっと笑みを零し、雷光に跨がった。

「では、また逢おう。段恵」

「応。剣が何人連れて来るか、楽しみにしてる」

馬首を返した。雷光がゆっくりと駆け始めた。

西涼（後書き）

次回予告～。

蒲「ねぇねぇ。あたしの実力解ったの？」

剣「立ち振る舞いからほぼ解った。まあ、大丈夫だろうと判断した。後は恩返しのようなものだ。約束でもあったからな」

蒲「んで、あたしの他に新しい人物が登場！馬が友達の頑固親父！」

段「誰が頑固親父だ！この悪戯好きの小娘が！」

剣「落ち着け」

段「ちっ！俺は段恵、字を金毛（きんもう）だ」

蒲「真名は？」

段「誰がてめぇに教えるか！」

剣「やれやれ。という訳で真名はお預けだ。次に登場した時だな」

段「次はいつだよ？」

剣「俺に聞くな。二人共、暫くはないだろう」

蒲「あたしも～！？あたし、第二期で登場するのに！？」

剣「今はオリジナルだ」

段「別に構わねぇぜ。お前が何人連れて来るか楽しみにしてるだけだからな」

剣「ああ。次回、『名無しの男』よろしくな」

蒲「ちょっと待ってよ！」

段「誰が待つか！」

名無しの男

平静を装っている。

山道を歩いている。深い山で、雷光から降りて歩いている。山はまだまだ抜けないだろう。

偶然だった。一度だけ、弱々しくだったが追い風が吹いた。その風によって、はっきりと気配が漂って来た。何かの獣かと思ったが、これ程上手く気配を消すことなど出来ない筈。

つまり、俺は何者かに尾行されている。

隠密行動は相当な腕だ。周泰殿よりも上かもしれない。気付いたのは本当に偶然だ。

俺を尾行する理由は何か考えている。今までと同様に、飢えを凌ぐ為だろうか？

考えると同時に、気は全く抜かなかった。これ程の腕を持つ者を相手に気を抜けば、一瞬でやられる。だが、俺が気付いていることを相手に知られる訳にはいかない。平静を装っている。俺の異変に気付いているのは、隣にいる雷光だけだ。

雉が一匹飛び出して来た。常備している礫を打つ。雉に当たり、捕らえた。今日の食事だな。

日が暮れ始めている。山を抜けることは無理そうだ。野宿だな。

「雷光、今日は野宿にしよう」

雷光に秣を与え、火を起こした。雉を簡単に解体し、火にかけた。

唐突だった。背後から強烈な気配。瞬間的に刀を抜きながら振り返る。眼前にいた。擦れ違う。倒れる気配がした。全身から汗が噴き出し、息が乱れていた。

気を取り直し、雉を見た。雷光が顔を向けていることに気付いた。

「大丈夫だ。問題ない」

際どかった。気付いていなければ、間違いなく俺がやられていた。倒れている者を見た。息を飲んだ。顔に布を巻いていたが、その中に焼けた薄黒い顔がある。酷い火傷だ。今だに熱を持っている感じがする。

手にある短刀はそのままに、起きるのを待った。雉が良い感じに焼けてきた。

倒れていた者が突然跳ね起きた。短刀を構え、俺を完全に警戒している。

「・・・何故？」

「殺さない、か？俺には殺す理由がない。殺すつもりもない」

警戒は解かない。だが、漸く自分のことに気を配る余裕を持てたのだろう。慌てた様子で、乱れた布を顔に巻いた。

「・・・見たな？」

「ああ。わざわざ隠していたのに、済まなかった」

動きが止まった。

「どうした？」

「・・・何故謝る？」

「見られたくないものを見てしまった。理由はそれだけだ」

顔は見えないが、恐らく戸惑いの表情でもしているのだろう。

「俺から問おう。何故、俺を襲った？」

指を指した。雉を指している。

「食料か。良い感じに焼けている。食べて良い」

近寄って来ない。まだ警戒しているのか？

「俺は何もしない。事実、お前が倒れている間は何もしていないだろう？」

「・・・くれ」

近寄って来た。怖ず怖ずとだが。短刀を納める。

「全部」

「それ程腹が減っているのか？」

「違う」

「では、何故だ？」

「・・・・」

「答えるなら、全部やる」

少し迷ったようだが、重い口を開いた。

「子供」

「人の親なのか？」

「迷い子」

迷い子を養っているのか？そういえば、強烈な気配さえしたものの、悪い気はしなかったな。良い者ではないか。

「くれ」

「解った。少し新鮮味が落ちるが、もう一度焼けば食べられる。俺も行こう。案内してくれないか？」

また少し迷い、しかし頷いた。火を消し、雉を持つ。雷光が静かに付いて来る。いつの間にか、あの者が消えていた。気配だけ感じる。

「どうした？」

「見られたくはない」

「案内してくれなければ解らないのだが。それに悪いのだが、もう見てしまった」

「・・・確かに」

すっと姿を見せた。隠形の業は並外れているな。

歩を進めるので、遅れずに付いて行く。雷光も付いて来る。

「俺は剣という。名は？」

「ない」

「何故だ？」

「棄てた」

俺と同じか……。

暫く歩くと、古びた寺が見えてきた。あの寺にいるのだろう。

「兄ちゃん！」

子供が数人出て来た。五人。何とか飢えるまではいっていないことを見て取れた。

「貴方、だあれ？」

「俺は剣という者だ。兄ちゃんと知り合った。雉を捕らえている。皆で食おう」

だが、子供とはいえ五人もいれば、雉一匹だけでは足りないだろう。雷光は静かに寝そべっている。雉の調理を任せ、山中に入った。簡単な仕掛けをして、少し待った。兎が一羽飛び出して来た。素早く礫を打った。兎が倒れる。これで充分足りるだろう。

持ち帰り、簡単に捌いて火にかけた。雉はもうない。子供達が声を上げる。

「……捕って来たのか？」

「そうだ。雉だけでは、足りなかっただろう?現に、俺とお前は一口も食べていない」

「・・・何故解る?」

「口に脂が付いていない」

子供達の口周りだけが、てらてらと光っていた。

「少しは口に入れておけ。いずれ倒れる」

返事は返って来なかった。

兎は綺麗に焼け、皆で少しずつ分けた。俺と男も少し食った。満足したのか、子供達は少し遊んだ後眠ったようだ。俺は寺には入らず、雷光の隣で目を閉じている。

「頼みがある」

男の声だ。姿は見えない。気配だけ感じる。

「何だ?」

「あいつらを預かってくれ」

「無理だ。俺は旅をしている放浪者だ。旅には連れて行けない」

「いずれ飢える」

よく状況が理解出来ているようだ。だからこその頼みだろう。

「一つ、提案がある。
俺はこの山を降りた先にある街に行く。そこに、俺の知人がいる。その者に預かって貰うのはどうだ？」

「信用出来ん」

「俺を信用して頼んでいるのなら、俺が信用する者も信用するのだな」

「・・・任せる」

腹を括ったようだ。董卓殿は充分信用するに値する。この子供達を快く引き取ってくれるだろう。
翌日、子供達を連れて、山を降りた。朝早くから降り始め、昼過ぎに漸く到着した。その間、男は姿を見せなかったが、気配だけは時々感じた。
城にはたやすく入れた。俺の名を出せば、入城を認めてくれたようだった。謁見の間に通されると、董卓殿が待っていた。隣に賈駆殿がいる。

「お久しぶりです。剣さん」

「確かに、久しいでござるな、董卓殿」

「関羽さん達はいないようですが」

「一人旅の途中でござる」

「それで？孤児を拾って来たと？」

「そうでござる、賈駆殿。ここには最初から立ち寄るつもりでござったが、理由が出来たでござる。
単刀直入にお願いするでござる。この子供達を引き取って欲しいでござる」

「解りました。私達が責任を持って、お引き取りします」

「感謝するでござる」

「詠ちゃん。あの子達を」

「はいはい。最初から解ってたわよ、そんなこと」

賈駆殿が子供達を連れて行った。一先ずは安心出来る。飢えることはないだろう。

「治安は良いようでござるな。ここに来るまでの道中、賊や盗っ人はいなかったでござる」

「いいえ。あの子達のような孤児がいます。注意しないと。
あの子達とはどこで？」

「山中でござる。董卓殿なら、快く引き取ってくれると思ったでござる」

「当然ですよ」

柔らかく笑みを見せた。良い治世者もいる。全員が董卓殿のようにはいかないのが現実だが。

「雷光、拙者の馬は？」

「恋さんが。あ、来ましたよ」

振り返ると、恋が一人立っていた。

「恋。久しいな」

「……剣、久しぶり」

恋も変わりなさそうだ。

「俺の馬は？」

「……牧にいる」

恋なりの配慮だろう。雷光は厩を嫌がる。

「調子はどうだ？」

「……好調」

「そうか。何よりだ」

「……ん」

恋の髪が奇妙に動く。頭を軽く撫でてやった。

「ち～んきゅ～……」

何者かが入って来た気配がした。微かに、俺に殺気じみた気を放っている。

「キーック！」

何かが飛んで来たが、目も向けずに躱した。

ドッカーンッ！

物凄い物音がした。

「今のは何だ？」

「・・・気にしない」

「解った」

謁見の間で聞く物音ではないと思ったが、別に良いか。

「あ、あの～・・・」

「董卓殿？」

「いえ。先程のことは良いのですか？」

「恋がそう言ったでござるから」

「そ、そういう問題ではないと思いますが・・・」

まあ、董卓殿がそう言うのにも理解出来るが。

「こんの～……ち～んきゅ～……」

またか……。

「キーック！」

また飛んで来た。が、躱す。

「うぎゃーっ！」

ドッカーンッ！

「ふぅ。恋」

「……」

「誰だ？」

「……音々」

「呼んだでありますか、恋殿！？」

俺に突っ込んで来た者ががばっと跳ね起きた。凄い勢いだったのだがな。

「……五月蝿い」

「何ですとーっ！？」

恋に同意。静かに頷いた。

「そこーっ！何頷いてるでありますかーっ！」

「恋が正しいと思ったのでござるが」

「貴様が五月蝿い！だいたい、何で恋殿を真名で呼んでるでありますかーっ！」

「・・・恋が教えた」

「何ですとーっ！？」

騒がしい者がいるのだな。恋を随分慕っているようだが。

「この者は？」

「・・・陳宮」

「暫く前に、仕えてくれるようになったんですよ」

「そうでござるか。拙者は剣というでござる。よろしく頼むでござるよ」

「五月蝿い！」

ふむ。何故か嫌われている。俺は跳び蹴りを二度も何もなかったようにしているのだが。

「剣さん。今日は泊まっていきますか？」

「感謝するでござる」

元々そのつもりだったかのようだ。俺もだが。

軽い宴会のようなものが開かれた。流石に悪いとも思ったが、董卓殿に簡単に流された。何でもない会話をしながら食事を楽しんでいる。

「ん。おお、剣だったか？」

「貴殿は・・・華雄殿だったでござるか？」

「応！お前も呑め！」

華雄殿はもう随分呑んでいるようだ。酒は先日段恵と呑んだのだがな。

「まあ、付き合うでござる」

「良し！呑め呑め！」

勢いよく杯に注いでいく。俺は流れに従い、一息で飲み干した。それで会場は盛り上がった。ざっと見渡すと、恋は一心不乱に食している。董卓殿は笑って、賈駆殿は呆れて眺めている。ここは、俺が心配するまでもなく皆が笑って生活出来るだろう。

一人、二人と酔い潰れ始めた。次第に片付けが始まる。これで宴会は終わりだろう。

「楽しんでくれましたか？」

「そうでござるな。客人としては、楽しめたでござるよ」

「何よりです」

「あの子供達のこと、よろしく頼むでござる」

「はい。私が責任を持たせて頂きます」

「では、拙者は明日にでも旅に戻るでござる」

「お急ぎですか？」

「いや。勝手気ままな旅でござる」

軽く董卓殿に微笑み、夜風の当たる場所に出た。不意に、あの男の気配を感じた。

「礼を言いたい」

あの子供達は上手く過ごせているのだろう。それ故の礼か。

「気にすることはない。見捨てることが出来なかっただけだ」

「感謝」

気配が消えた。

翌日、俺は恋や董卓殿に別れを告げ、旅に戻った。雷光が恋に懐いていたことに少し驚いたが、納得だという気もする。恋は異常な程純粋だからな。

街道を歩く。雷光は静かに付いて来る。その前に、人影が現れた。
あの男だ。

「どうした？」

「付いて行く」

「何・・・？」

あの子供達の傍にいるものと思っていたのだが。

「あの子供達は良いのか？」

「もう何も出来ない」

確かにそうかもしれない。董卓殿に任せた以上、不自由することはない筈だ。

「俺は一人旅をするつもりだ。その為に供を連れていないのだ」

「邪魔はしない」

邪魔にはならないだろう。姿を見られることを極端に嫌っているようだから、隠形の業を使って姿を隠しておく筈だ。

「俺は見ての通り武人だ。そして、いずれ軍を率いることになる。つまり、俺に付いて来れば戦に巻き込まれることになる」

「関係ない」

「何故だ？」

「間者として働く」

そのことが頭になかったかと聞かれれば、否定出来ない。かなり有力だと思える。

「恩を返したい」

「覚悟はあるのだな？」

「ある」

即答だった。覚悟は充分あるようだ。

「解った。俺はお前を信用し、連れて行くことにする。俺に付いて来るからには、幾つか守って貰うことがある。

一つ、無闇に人に手を出すな。俺を襲った時のようなことはするなよ。

二つ、俺の命には大抵従って貰う。無理なことを言うつもりはないが、良いな？」

「解った」

従順だな。良し、俺は信頼すると決めた。疑いは棄てる。

「名は・・・ないのだったな？」

「ない」

「この先呼び辛いな。何と呼べば良い？」

「無呼で良い」

呼ぶ名が無い、で無呼か。

「では、無呼。行こうか？」

頷いたのを確認し、再び歩き出す。無呼は静かに姿を消した。

俺は旅を続ける。

名無しの男（後書き）

次回予告～。

無「……」

恋「……」

剣「出て来たのなら、何か喋らないか？」

無「無呼」

剣「無呼は初登場だ。俺に付いて来ることになった」

月「次はどちらに行かれるんですか？」

剣「真っ直ぐ東に向かうでござる」

恋「……東？」

剣「都の方向だ」

恋「……ん」

剣「という訳だ。行くぞ、無呼」

無「解った」

剣「次回、『白花の音色』よろしくな」

月「道中お気をつけて」

白花の音色

街道を抜け、早三日。今は山道を歩いている。次の目的地は、曹操殿が治める陳留だ。

何も変わらない旅が続いている。無呼が密かに付いて来ているが、気にはならなかった。というより、気配が解らない。ただ食事時になると、ふらりと姿を見せる。雷光は既に警戒することを止めている。

「別れ道か」

山道の別れ道。陳留への方向は合っている筈だ。この別れ道をどちらに行けば良いか解らないが。

「どちらに行けば良い？」

「知らん」

どこからか返事がきた。こういうやり取りがしばしばある。

無呼は俺の行き先を知っているが、この別れ道をどちらに行けば良いかは解らないようだ。ならば、適当に進むしかないな。

「ブルル」

不意に雷光が首を振った。別れ道の一つの方向に、確かに首を向けた。

どうやら、この方向に行きたいようだ。手掛かりは何もない。雷光の行きたい方向に行ってみるか。

「良し。こちらに行くか」

歩を進めると、雷光が少し嬉しがっているように付いて来る。無呼も黙って付いて来ているのだろう。

そのまま、少し歩いた。何となくだが、雷光が行きたがった理由が解った。澄んだ、美しい音色が聞こえてきている。雷光はこの音色に反応したのだろう。

花。一輪の花が咲き誇っている。周囲に蝶が踊っている。

そう思える程だった。美しい、可憐な女が腰を下ろして笛を吹いている。思わず、見取れてしまった。女の笛の音に、魅了された。

一瞬、女が俺に目を向けた。微笑んだ。花が咲いたようだった。

笛の音が止んだ。どれ程の時が経ったのか、よく解らない。女が笛を仕舞い、俺にはっきりと目を向けた。また、微笑んだ。

「盗み聞きして済まないでござる。邪魔したでござるか？」

「いいえ。聴き入って下さっていた御様子で、少々嬉しくなってしまいました」

「素晴らしい音色でござった。生涯、これ程音に引き込まれたのは初めてでござる」

「それはそれは。また嬉しくなることを申されるのですね」

口に手を当て、上品に笑う。

冷静に風体を観察した。桃色の美しい着物を着飾り、胸元が開かれている。胸は豊かに膨らんでいる。愛紗以上か？

「旅の御方、とお見受けしましたが」

「そうでござる」

「お急ぎですか？」

「いや。特に急いではいないでござる」

「ならば、わたくしの隣でよろしければ、腰を下ろして下さい。何ももてなすことは出来ませんが」

「失礼するでござる」

女の隣に腰を下ろす。雷光も寝そべった。

「わたくしは、白倫と申します」

「剣というでござる」

「見たことのない着物を御召しになっているのですね」

「まあ、拙者は他所から流れて来た者でござるから」

「そうでしたか。武芸者ですね？」

「一応は、そうでござるかな」

「どこへ行かれるのでしょう？」

「陳留へ行こうと思っているでござる。道順は合っているでござるかな？」

「はい。この山道を抜ければ、陳留ですよ」

雷光が選んだ道は正しかったということか。

「何故、旅を？」

「今の世を見定める為でござる」

「・・・剣様は、今の世をどのように見ておられるのですか？」

一瞬、白倫殿の表情が曇った。何かを想うように。

「少しずつ、乱れ始めているでござる。いや、もう充分乱れているでござる。その乱れを修正するだけの力が、漢王朝にはないでござる」

「・・・はい。そう、ですね」

「何か、気にかかることがあるでござるか？」

そこまで聞いて、不意に何かの気配を感じた。人の気配。それも複数。

「五人。賊」

耳元に囁く声が聞こえた。無呼が調べたことを報告して来たのだ。

茂みから、ぞろぞろと五人出て来た。

「悪いが、死んでくれや」

一人の男が言う。五人は古びた剣を持っている。すぐには動かなかった。今更気付いたのだが、白倫殿はただ者ではない。隣で慌てることなく座っていることはもちろんだが、何よりも‥‥。

「だそうでござる」

「わたくしはまだ死にたくはありません」

「そうでござるな」

漸く、俺は立ち上がった。

「何が望みだ?」

「貴様等の持つ物全部だ」

「お断りするでござる」

「ならば、死ね!」

五人一斉に飛び掛かって来た。逆刃刀を抜き、斬り返す。五人の手首を弾き返す。剣のみを叩き落とした。

「なっ‥‥」

「何が望みだ?食料か?」

「貴様‥‥」

「答えろ。もう一度だけ聞く。何が望みだ?」

「・・・言ってどうすんだよ？」

「可能なら分けてやる。食料なら少しある」

五人が驚いている。その驚きに取り合うつもりはない。

「斬るつもりはない。早く言わなければ、お前達を追い出すだけだ」

「・・・食料が欲しい」

俺の手元にある食料は、先日捕らえた雉の干し肉だけだ。全て与えれば、五人は充分に食べられる。

「足りるか？」

「・・・」

「もしかすると、ですが、家族の方々がいるのではないでしょうか？」

五人が弱々しく頷く。白倫殿の言には、確かにそう思えることがある。普通なら、突然襲ってくる。それだけ、まだ良心が多く残っている。

「何故、このような山中にいる？」

「家族を連れて、逃げて来ました・・・。地方の役人に追われています・・・」

成る程な。

「何かしたのか？」

「・・・税を払いきれなかったのです。肥やしても肥やしても、税として取り立てられ・・・」

「解った。もう良い。
それより、家族の者達がいるのだろう？連れて来ると良い」

頷き、山中に入って行った。俺も山中に入ろうとした。

「どうしたのですか？」

「食料を探してくるでござる」

山中に入った。深く入っていく。

「猪」

無呼の声。遠目に猪がいる。

「捕らえられるのか？」

「俺は旅に出て長い。猪は経験がある。任せておけ」

ある程度距離を詰める。手を打った。猪が反応する。だが、その隙に隠形の業を使い、忍び寄る。猪が四方を探すうちに、眉間に逆刃刀を叩き込む。声を上げ、倒れ伏した。

「……今のは何だ？」

「無呼。俺もお前と似たようなことが出来る。間者の経験がある」

「……何故、俺を雇う必要があった？」

「俺は隊を率いると言った筈だ。好き勝手な行動は出来なくなる。間者として動く気はないのだ。

だが、優れた間者が必要になるのは明白だ。俺自身がしていたのだ。よく解っている。だから、お前の力を貸して欲しい」

「解った」

「それから、一つ訂正しておけ。雇ったのではない。俺に付いて来たくなければ、付いて来なくても何も言わない」

「お前に付いて行く」

「良いな？雇ったのではない。同志、仲間だ」

「覚えておく」

それだけ伝え、猪を抱えた。

「食料はあるか？」

「干し肉が残っている」

大丈夫そうだな。猪を抱えたまま歩き出した。

戻ると、人が増えていた。家族の者達を連れて来たのだろう。男

五人、女三人、子供も三人いる。白倫殿が火を二つ起こしている。

「獣肉だが、食べられるか？」

「ありがとうございます」

贅沢を言う気はないようだ。猪の血を抜き、調理を始めた。簡単に捌く。すると、白倫殿が近寄って来た。

「お手伝いします。お料理には、多少の自信がありますので」

「済まないでござる」

俺が捌き、白倫殿が味を付ける。香料などは持っていたようだ。随分手慣れている。

肉を焼き、この場にいる者達に振る舞った。余程腹が減っていたのだろう。肉に食らい付いている。俺も一つ手に取り、食らい付いた。

「美味いでござる。味付けが絶妙でござるな」

「ふふ。ありがとうございます」

この人数で猪一頭は多過ぎるが、いつものように干し肉にする。

「明日、山を下りて陳留へ行くと良い。俺の知人に紹介しておく。厳しい者だが、仕事を与えて貰え」

「何から何まで、申し訳ない・・・」

「気にすることはない。そこに残っている猪も持って行って構わない」

「ありがとうございます」

「好きなだけ食べて、今日は眠ると良い。明日は山を下りることになる」

「はい」

好きなだけ食した後、すぐに全員眠ってしまった。逃げて来たのだ。疲れていて当然か。

「剣様」

「何でござる？」

「いいえ。お優しいのですね」

「そうでござるか？」

「はい」

微笑む。軟らかな笑み。

「剣様はこれからどうなさるのですか？」

「一足先に陳留へ向かうでござる」

「知人がいると仰っていましたね」

「曹操殿がいるでござる」

「まあ。大守様ですか」

「白倫殿はどうするでござる？」

「わたくしは、どうしましょうか」

「白倫殿はここで何をしていたでござる？」

「剣様と同じですよ」

旅、か。このような者が旅、何をしているのだ？

会話はそこで途切れた。眠ったようだ。俺は雷光の傍に移動し、浅い眠りについた。

わたくしは、都である洛陽で生まれました。高級貴族で、広大な屋敷を持つ一族。

幼少の頃より、わたくしはひたすら芸術に打ち込まされました。ゆくゆくは更なる皇族の妃となり、地位を高める為に。

そのようなことに、興味はありませんでした。芸術は、わたくしの好きな笛と舞踊しか取り組まなくなり、代わりに武芸に取り組むようになりました。そのようなわたくしを快く思わなかった父君と母君は、わたくしをきつく叱り付けましたが、取り合いはしませんでした。

洛陽の都を一度、出たことがあります。わたくしに、都と村の違いを教える為に。

愕然としました。都ではあれ程栄えているのに、地方の村では毎日の食にも事欠く有様。天と地程も差があるのです。

納得出来ませんでした。しかし、誰に聞いても同じ答が返ってきます。選ばれた人間だから。そのような答に、納得出来る筈はありませんでした。

答が知りたい。このような生活から抜け出したい。そう思い、都から逃げました。

放浪を続け、わたくしが追われていることを知りました。父君と母君が手を回しているのでしょう。

追っ手をくらまし、気まぐれに笛を吹いている最中、剣様に出逢いました。

わたくしの笛の音を聴いて下さっていることが嬉しくなり、つい微笑みました。人と関わることは出来る限り避けていましたのに。

ですが、杞憂でした。わたくしのことを知らなかったのか、何も行動を起こさなかったのです。話をして、確信になりました。名乗りもしました。何の行動もしなかったのです。

お優しい方でした。襲ってきた方々を傷付けずに圧倒し、それどころか引き受けてしまいました。

剣様が何故旅をしていらっしゃるのか、よく解りません。ですが、武芸の達人ということは仕草を見ていれば解ります。自然と、付いて行きたくなるような魅力も備えています。

付いて行きたくなります。ですが、陳留へ行けば、追っ手が来るとも限りません。御迷惑を、かけたくはありません。

不意に、辺りに火が見えました。松明に見えます。姿を隠さなければなりません。

「どこへ行くでござる?」

びくんと反応してしまいました。剣様の声。暗闇の中、目を開いているか解りませんが、起きていらっしゃる。

「何者かが近辺をうろついているでござる。十人程でござるかな」

「はい」

「その二本の剣を持って、どこへ行くつもりでござる?」

それ程気付かれていますか‥‥。

「止めるでござるか。いつこの場を突き止められるか解らないでござるから」

「追っ手でしょうか?」

「恐らく。ただ、どちらを追っているかは解らないでござる」

「何のことでしょうか?」

「無駄でござる。拙者にはもう見当が付いているでござる。貴殿は、追われているのでござろう?」

気付かれています。もう、何と言おうと無駄でしょう‥‥。

「話は後にするでござる」

剣様が立ち上がりました。松明の方へ歩いて行きます。

「わたくしを突き出さないのですか?」

「突き出す理由が拙者にはないでござる」

松明の方へ歩いて行くことを止めません。暗闇に消えて行きました。思わず、後を追いました。

松明の方へと向かう。人数は十。無呼から情報が入っている。背後から密かに白倫殿が付いて来ているが、気にしなかった。

「誰だ!?」

気付かれたようだ。隠れるつもりもなかったが。

「そのまま返すでござる。貴殿等は何者でござる?」

「冀州大守、袁紹様の兵だ」

袁紹。あの黄猿か。

「兵がこのような山中に何用でござる?」

「この近辺に、女子供を連れた集団がいなかったか?」

成る程。黄猿の下から逃げて来たのか。

「拙者は知らないでござるが」

「そうか。ならば、美しい女はいなかったか？」

やはり、白倫殿も追われている。

「知らないでござる」

「ふん。ならば貴様に用はない」

「拙者はあるでござる」

「何？」

「見たところ、貴殿が隊長でござろうが、少々頼みたいことがあるでござる」

「何だ？」

「眠るでござる」

首に手刀を打ち込んだ。気を失い、倒れ込んだ。周囲にいた他の者が色めき立つ。

「この者を連れて去れ。お前達の追っている者がいれば、必ず知らせる。これ以上この山を荒らすな」

「わ、解った」

気を失った者を連れて去って行く。姿が見えなくなるまで、動きはしなかった。それから、声を出した。

「白倫殿」

「・・・気付いておられたのですか」

「すぐに山を降りるでござる。寝ている者達を起こすでござる」

「わたくしは、行けません」

「捕まるのを、待つでござるか？」

暗闇の中、じっと白倫殿を見詰めた。

「どのような理由で追われているのか、拙者は知らないでござる。興味もないでござる。

ただ、見捨てることは出来ないでござる。陳留へ行けば、匿ってやれるかもしれないでござる。あくまで、可能性でござるが」

「わたくしは・・・身勝手で逃げたのです。そのようなわたくしの身勝手で、剣様に御迷惑をかける訳には・・・」

罪を犯したとは思っていなかった。そのような目はしていない。

「言った筈でござる。見捨てることが出来ないのでござる。拙者は迷惑とは思っていないでござる」

動かない。伝えるべきことは伝えた。後は白倫殿次第だ。

俺は皆が寝ている場に戻った。俯きながらも白倫殿は付いて来た。

「起きろ」

皆を起こす。何事かという表情をしていたが、事情を伝えると、蒼白した。

「朝まで待てない。すぐに山を降りる」

全員付いて来る。無呼から情報は入って来ないが、絶えず周囲を探っているだろう。慌てずに、ゆっくりと山を降りた。

白花の音色（後書き）

次回予告～。

白「皆様、はじめまして。白倫と申します」

剣「真名はお預けだ」

白「今回はわたくし達二人だけですね」

剣「（本来ならもう一人いるが、表には出て来ないだろうな）
そうでござるな」

白「わたくしは、あるキャラクターをそっくりモデルに使っているらしいのです」

剣「ついでに言っておこう。オリキャラでモデルがいるのは、一応白倫殿だけだ」

白「そうなのですか？」

剣「（無呼が般若のイメージだと言われていたが、言われて作者が納得していたからな）
細かく言えば、モデルはいるでござる。そっくりそのままというのは、白倫殿だけでござる」

白「光栄です」

剣「次回、『陳留』よろしくな」

陳留

山を降りた。降りるまで、兵との遭遇はなかった。夜明けには、陳留の街を視認出来た。

白倫殿を始め、付いて来る者達の表情は暗い。追われているのだから仕方がないが。大した罪ではない。むしろ、罪とする方が間違いだろう。白倫殿も、恐らく同じだろう。目を見れば、その程度は見抜ける。

「武人」

無呼の声。通っている林を抜ければ陳留という距離で、この報告か。

「どのような武人だ?」

「青。弓兵」

その単語と一致する武人が曹操殿の下にいる。俺の友か?

「皆。ここで少し待て」

「どうしたのですか?」

「何者かがいるでござる。姿を見られるのは状況的に良くないでござろう?拙者が見てくるでござる」

「‥‥お願いします」

雷光に跳び乗った。駆け始める。林の奥へ行く。近付いている。あちらも気付いているだろう。少し広い場所に出た。

「誰・・・剣ではないか！」

やはり、夏候淵殿。

「久しいな、夏候淵殿」

「こちらの台詞だ。旅をしているのだな？」

「そうだ。曹操殿は御健勝か？」

「ああ」

何も異変はなさそうだな。夏候淵殿は見た限りでは、朝の鍛練でもしていたのだろう。

「良い馬に乗っているな」

「雷光という」

「ここまで来たのだ。華琳様に逢って行くだろう？」

「実は少し頼みたいことがある。旅の道中で知り合った者達がいるのだが、少々訳ありでな。役人に追われている。保護して貰いたい」

「ふむ。私では判断出来ん。華琳様に直接聞いて来よう」

「済まない。俺はここで待とう」

「解った」

夏候淵殿が馬に乗って駆け去って行く。

皆を連れて来た。その後は静かに待った。急いたところで何も変わらない。じっと待った。

二刻程待っていると、馬蹄が聞こえてきた。夏候淵殿だ。

「剣」

「何と言われた?」

「とにかく連れて来い。事情はそれから聞くそうだ」

「解った」

後ろを振り向いた。皆が神妙な顔付きをしている。

「最後の機会だ。万が一の場合は、俺が責任を持つと約束する。信じて付いて来るか、再び逃げるか、どちらかを選んでくれ」

迷い。それははっきりと解ったが、家族の者達は頷いた。白倫殿を見ると、静かに口を開いた。

「剣様を信じます」

「解ったでござる。

では、夏候淵殿。案内を頼む」

夏候淵殿が頷き、馬を進める。雷光が並び、皆が後ろに付いた。

「歓迎の用意は何もしていないが、済まないな」

「気にするな。唐突の、それもこのような朝方に訪った俺が悪い」

「華琳様が快く引き受けてくれるかは解らん。だが、罪が有りそうな者達ではないな」

「まあな」

城に着くまでは、俺の旅の道中の話になった。無呼に関すること以外は全て話した。

城には簡単に通された。武器の類は取り上げられたが。

謁見の間に、皆で入った。曹操殿に荀イク殿、夏候惇殿、変わらない顔触れが待っていた。

「久しいでござるな、曹操殿」

「ええ。旅をしていると聞いたわ、剣」

「そうでござる」

「その旅の道中で、後ろの者達に逢ったのね。しかも役人に追われていると。どのような罪状か、言ってみなさい」

黙った。後ろにいる者の一人が代表して答える。

「どこから逃げて来たのかしら？」

「冀州でございます」

聞いた瞬間、曹操殿の口元が緩んだ。袁紹のことが嫌いだったな、確か。

「良いわ。剣の頼みでもあるし、貴方達は私が引き受けるわ。桂花、手配を」

「はっ」

荀イク殿が声をかけ、後ろの者達が退出していく。一先ずは安心出来る。

「貴女は待ちなさい」

曹操殿が待ったをかける。相手は白倫殿だ。

「曹操殿？」

「そう心配することじゃないわ。それに、貴女はあの家族の者じゃない」

「……」

「剣。貴方、何故この者が追われているか知らないわね？」

「知らないでござる」

興味もない。

「その者は、家内を逃げ出して追われているのよ。そうよね？白光

の花」

「……はい」

白倫殿が弱々しく返事をする。俯いている。白光の花というのは、恐らく通り名だろう。

「都である洛陽の高等貴族。その娘で、あらゆる芸術に優れ、将来を期待されたと聞いているわ。そして、家出騒動で指名手配されているところよ」

成る程。どこかの御令嬢だとは思っていたが、そのような者か。逃げた理由は想像するに難くない。

「だとしても、拙者には何も出来ないでござる。しようという気もないでござる」

「ふふ。そう。
秋蘭、一室を用意してあげなさい」

「はっ」

白倫殿が若干驚いた表情をしている。保護されるようなことを考えていなかったのだろう。退出していく。

「また貸しが出来てしまったでござるな」

「今度は何を返してくれるのかしら？」

「唐突のことなので、申し訳ないが何も考えていないでござる。ま

あ、借りたものは返すでござる」

それから、旅の道中のことを聞かれた。無呼のこと以外を、適当に話した。

「ふむ。これからどこに行くのかしら?」

「冀州でござる」

「ふぅん」

曹操殿が嫌らしく笑う。黄猿とは仲が良ろしくないのだったな。

「それから?」

「更に北、公孫贊殿のところでござる。そして、南の呉へ行くつもりでござる」

本来なら、まだ陳留で曹操殿に逢う予定ではなかった。北の後に滞留するつもりだった。

「それで?ここにはどのくらい滞留するのかしら?」

「いや、すぐにでも」

「どのくらい滞留するのかしら?」

微笑み。その微笑みに何故か寒気を感じる。逆らわない方が身の為か・・・。

「三日でござる」

「短いわね。急ぎ旅かしら？」

「そういう訳ではないでござるが、それ程の日数を滞留するつもりはないでござる」

「まあ良いわ。客人として迎えるから、ゆっくりしていきなさい」

「忝ないでござる」

「春蘭。剣に一室を」

「はっ」

夏候惇殿と共に退出した。静かに夏候惇殿の後ろに付いて行く。

「何だ？」

「何もないでござるが。ただ後ろを歩いているだけでござる」

「貴様に後ろを歩かれると、敵に狙われているような気がする」

「気の所為でござる」

本能的な何かで言っているのだろう。勿論、俺に襲う気はない。だが、何かが囁いているのだと思う。上手く言葉では言えない。

部屋を与えられた。特に何もすることはない。すぐに白倫殿が与えられた部屋を訪れた。

「剣様・・・」

まだ何か考えているようだった。

「どうしたでござる？」

「隠していて、申し訳ありません」

「構わないでござる。聞いた訳でもないでござる」

「そういうものでしょうか？」

「そういうものでござる」

どこかの御令嬢だと思っていただけだ。

「人には語りたくない素性の一つや二つ、有って当然でござる」

「・・・ありがとうございます」

「曹操殿に匿って貰えば、安心出来るでござる。達者に暮らすでござるよ」

「・・・あの、剣様のお供をしたいのです。御迷惑かと思いますが、わたくしは付いて行きたく存じます」

「・・・残りたくないでござるか？」

「その想いも、あるかと思います」

一つの場に留まるのは危険ではある。見付かれば曹操殿でも庇い立て出来ないだろう。だが、

「拙者は武人。いずれは戦に出るでござる。危険が付き纏うでござる」

「剣様は、今の世をどう思いますか？」

「乱れている。その乱れを糾す為に、拙者は刀を振るうでござる」

「わたくしは、平和な世で舞いたいと思います」

解る気がする。それも、立派な志か。

「戦に出れば、危険も増すでござる」

「平和の為なら」

戦に出る覚悟もあるようだ。

曹操殿が白倫殿を放り出すことは考え難いが、どうにもならないことがある。それに、ここに連れて来たのは俺だ。俺にも責任がある。だが、

「貴殿の想いは解った」

「お供をして宜しいのですね？」

「いや、まだでござる。貴殿の武を見せて貰うでござる」

「・・・解りました」

二人で部屋を出た。少し城内を歩くと、夏候淵殿を見付けた。

「どうした？」

「練兵場を使わせてくれないか？」

「何か始めるのか？」

「少しな。出来れば、預けた刀も返して欲しい」

「ふむ。まあ、良いだろう。私が立ち会えば、華琳様は何も言わないだろう」

「済まない」

「白倫殿と立ち会うのか？」

「そうだ」

夏候淵殿が不思議がるが、それは無視した。

俺は逆刃刀を、白倫殿は二本の剣を返して貰い、練兵場に入った。

すぐに白倫殿と向き合う。夏候淵殿は静かに眺めている。

白倫殿は両手に剣を構えている。隙はない。武芸も卓越しているようだ。発せられる闘気こそ少ないが、内に秘められた重い何かを感じる。逆刃刀を抜き、無形の型で自然に立つ。

「始めるでござる」

「はい」

どちらもすぐには動き出さない。互いに出方を窺っている。
半刻が過ぎた。時間が惜しいと判断し、動いた。間合いを詰め、振り下ろす。躱され、払いがくる。下がることで躱すと、続けざまに突きが飛んでくる。紙一重で躱し、その拍子に回転する。飛天御剣流、龍巻閃。首筋に逆刃刀を寸止めしている。

「実戦ならば、既に死んでいるでござる」

「う‥‥」

白倫殿が弾かれたように後方に下がった。すぐに向かってくる。

「(‥‥剣の奴)」

二刻後。
白倫殿は座り込んでいる。肩を上下させ、荒く息をしている。

「(白倫とやらもかなりの腕だが、剣は遥か上をいっている。私は無論、もしかすると姉者でさえ‥‥)」

「それ程、拙者に付いて来たいでござるか?」

荒い息遣いの中、白倫殿は顔を上げ、はっきりと頷いた。
俺は容赦していない。時には打ち据えもしている。痣も幾つか出来ているかもしれない。それでも向かって来た。

「‥‥わたくしは、納得出来ないのです。都では輝かしく栄えているにもかかわらず‥‥地方の村では当然のように食に困っている今の世に‥‥」

「それで？」

冷たく言葉を促す。だが、表には出していないが、間違いなく俺を揺り動かしている。

「剣様は……見捨てませんでした。路頭に迷っていたあの家族の方々に、確かな救いの手を差し延べたのです。私情で逃げたわたくしにさえ、救いの手を差し延べていただきました。

剣様に……付いて行きたくなりました。剣様が御覧になっている未来に、間違いがあるとは思えません。そう、信じたくなったのです」

「……それで、俺に付いて来るというのか？はっきり言って、俺はお前に気を配ってはいられない。自分の身は自分で護らなければならない。そのことがどれ程危険か、解っているのか？」

「連れて行って頂けるのですね」

微笑みながら言う。何故、その結論に至る？

「剣様の口調が変わりました。立派な証拠ではないでしょうか？」

「……これは、一本取られたな」

確かに、口調を変えていた。やれやれ。

「陳留に三日滞留する。その間、俺が鍛える。自分の身を護る術を身に付けろ」

「承知致しました」

白倫殿に歩み寄る。もう、息は整っている。

「済まないな。痣を作ってしまって」

「いいえ。戦場では、そのようなことは言っていられません。お気にしないで下さい」

「処置はきちんとしておけ。舞姫が体に痣を作っている訳にもいかないだろう」

「お優しいのですね。承知致しました」

顔を夏候淵殿に向けた。何人か入って来た。夏候淵殿自身も近寄って来た。

「お前がそれ程の腕を持っているとは、知らなかった」

「大したことはない。所詮、一人の人間だ」

「そういうところが、強いのだろうな」

白倫殿は衛兵に手当して貰っている。逆刃刀を預け、練兵場を出た。夏候淵殿が付いて来る。

「士官先は見付かったのか？」

「俺の武を見て、更に引き入れたくなったか？」

「正直、間者としての働きを期待していたが、他の部署でも働き所は多くあるだろう」

「まだ仕えると決めた訳ではない」

部屋に戻り、少しだけ眠ろうとした。

「あの女、連れるのか？」

無呼の声。全く気付かなかった。

「不服か？」

「お前が決める」

「連れるつもりだ。お前のことは知らせない」

「眠るのか？」

「ああ」

まどろんできた。抗わず、眼を閉じた。

「剣」

声。眼を醒ました。無呼だろう。

「青服の女が来る」

「剣。私だ」

寸分違わず、だな。

「何か？」

「食事だ。華琳様が待っている」

「解った。すぐに行こう」

何刻眠っていたのだろうか、ということをぼんやりと考えながら夏候淵殿の後ろを歩いた。

導かれた部屋に入ると、宴会の準備がなされていた。主立つ者達がいるのだろう。見知った顔もある。客席には白倫殿もいる。白倫殿の隣に座った。

「揃ったわね。では、始めましょう」

曹操殿の掛け声で宴会が始まった。静かに酒を呑む。

「剣様はお酒をよく嗜むのですか？」

「呑む方だと言われる」

「それなら、お注ぎします」

杯に酒を注がれ、口を付ける。美味いな。

「痣は？」

「消えました。剣様が加減して打ったからでしょう」

「そうか」

「剣様に、わたくしの真名を預かって頂きたく思っています。よろしいでしょうか？」

「俺は他所者だ。名は剣しかない。俺が預ける真名はないが、それでも良いか？」

「構いません。預かって頂けるのですね？」

「ああ」

「わたくしの真名は、蝶と申します」

「解った。これからは、蝶と呼ばせて貰おう」

蝶が軟らかく微笑んだ。澄んだ、綺麗な笑みだった。

会が盛り上がってきた。曹操殿は夏候惇殿や荀イク殿の扱いで忙しそうだ。夏候淵殿が近寄って来た。

「楽しめているか、剣？」

「ああ。料理は美味い。酒も美味い。言うことはない」

「そう言う割には、酔ってはいないな」

「幾ら呑もうと、酔いはしない。不思議とな」

「何でもないようにしていますが、普通なら既に酔う程のお酒を呑

んでいるのですよ」

「そうなのか。強いようには見えないがな」

酔わなくなったのはいつ頃からなのか、よく覚えていない。だが、酒は時折呑まなければ体が求める。

「あら。よく呑んでいるわね」

曹操殿も近寄って来た。傍にいた二人は眠っている。

「私からも注いであげるわ」

杯が満たされていく。ぐっと呑む。

「貴方、練兵場で訓練をしていたと聞いたわ」

「いけなかったでござるか？」

「いいえ。白倫と立ち会っていたと聞いたわ」

「その通りでござる。白倫は、拙者に付いて来るそうでござる」

「そう。その為に鍛えている、といったところかしら？」

「まあ、そうなるでござるな」

「なら、ここを出ていく前に、自慢の芸を見せて欲しいわね」

「自慢にはしていないのですが。笛の音で宜しければ」

「お願いするわ」

どこからか笛を取り出し、優雅に構える。吹き始めた。思わず引き込まれそうな、美しい旋律。

「へぇ。綺麗な音色ね……」

曹操殿と夏候淵殿も聴き入っているようだ。

「剣。白倫に惚れたのかしら？」

「何を言い出すでござる？」

そのような感情はとうに消えていると思っている。愛紗に想いを伝えられた時は、少し戸惑いを覚えたが。

「別に。そう思っただけよ」

「冗談でござろう。拙者、私情を挟むのは嫌いでござる」

「それは悪かったわ。
ところで、貴方の腕はかなりのようね」

隣にいる夏候淵殿に目を向けたが、何食わぬ顔で流された。まあ、仕方がないな。

「大したことはないでござる」

「貴方らしい返答ね。士官先は見付かったかしら？」

「まだでござる」

「私に仕える気は？」

「さあ？」

「相変わらずね」

結論を出すにはまだ早い。もっと真実を見詰め、俺の意志で決断する。

「まあ、楽しみに待っているわ」

「期待はしないで欲しいでござる」

「それなら、期待しているわ」

「天の邪鬼でござるなぁ」

白倫殿の笛の音を聴きながら、静かに酒を呑む。優雅な夜を過ごした。

陳留（後書き）

次回予告～。

華「久しぶりね、剣」

剣「久しいでござる、曹操殿」

蝶「お二方がお知り合いとは、些か驚きました」

剣「蝶はこれから俺と共に旅だ」

華「袁紹のところにね？」

剣「余程嫌いなようでござるな」

華「ええ。気に入らないもの」

秋「ところで華琳様」

華「何かしら？」

秋「姉者と桂花は？」

華「眠っているわ」

剣「何故でござる？」

華「眠らせたのよ」

全員「……」

無「（よく命が持つものだ）」

剣「…程々にするでござるよ」

華「それは心得ているわ」

剣「次回、『北方の地』よろしくな」

北方の地

早々と陳留での三日間の滞留が過ぎた。白倫殿を鍛えることで時間はすぐに過ぎたのだ。

「では、曹操殿。拙者等は旅に戻るでござる」

「北から戻って来たら、また一度寄りなさい。良いわね？」

「余裕があれば、でござる」

「良いわね？」

にっこりと笑う曹操殿。何故か、この不敵な笑みが苦手だ。

「申し訳ありません、曹操様。馬まで頂戴してしまって」

「良いわ。また逢いましょう」

「剣もな」

見送りに来てくれている曹操殿と夏候淵殿に別れを告げ、雷光に乗った。駆け始める。白倫殿も付いて来る。

暫く駆けた。目的地は冀州。だが、白倫殿を連れていることで街には入れない。そのようなことは白倫殿を連れると決めた時から解っている。

俺は、先に無呼を冀州へ行かせた。無呼を先に行かせることで、街の様子を伝えるよう言ってある。

「大丈夫か？」

「お速いのですね。付いて行くのに必死です」

「雷光が速い」

まだ疾駆さえしていない。それでも付いて来るので精一杯という感じだ。

休み休みに進んだ。馬を休ませなければならない。

「日が暮れるまでには着けるでしょうか？」

「ああ。街には入らないがな」

「・・・申し訳ありません」

「気にするな。冀州は迂回する」

「良いのですか？」

「構わない」

情報は入ってくるだろう。無呼を頼りにして間違いはない。それに、俺は名門が余り好きではない。逢って話をしたいとは思わない。日が暮れる前に街が見える丘まで来た。予定通りだ。

「今日はここで野宿だな」

「はい」

火を起こす。相変わらず、捕った獣を焼く。その肉を食うことに変わりはない。

煙が上がる。旅人が野宿しているという程度にしか見えないだろう。これが、無呼への合図だった。

調理は蝶が行っている。なかなかに美味い。旅の道中で食するには贅沢だと思える。

「明日には、公孫贊様のところへ？」

「ああ。そのつもりだ」

北の地で何かすることがある訳ではない。ただ、一度知り合った公孫贊殿に挨拶の一つでもしておこうと思っただけだ。

夜が更け始めた。蝶は既に眠っている。俺は目だけ閉じていた。

「戻ったか？」

「気付いたか」

無呼の声。気配は薄いが感じた。もしかすると、蝶が眠るのを待っていたのかもしれない。

「どうだった？」

「街と村に差がある」

以前街に入った時は、十二分に栄えていた。それも、村から搾り取って栄えたのだろう。

「村は飢えている」

「何故だ？」

「税が厳し過ぎる」

「何故解る？」

「土地は肥えている」

判断するには充分な材料だ。土地が良く、それで飢えているならそう判断するだろう。

「解った。済まなかったな」

「気にするな」

「俺の代わりに、お前が冀州の街を見て来たと判断する。それで充分だろう」

「使えそうか？」

いつものことだが、無呼の言うことは端的だ。唐突に言い出され、何のことか解らないことがある。

「蝶のことか？」

「騎馬隊としてだ」

「素質は充分だろう。音を上げない我慢強さは、気付いていたことではあるが目を見張るものがある」

芸術で散々に鍛えられたからだろう。訓練の類が生半可なものではないことを知っている。

「何か問題があるか？」

「追われている」

「俺は気にしない」

「なら良い」

俺の意見を採用するということか。それならそれで良い。

「腹が減った」

「残してある。食え」

蝶が調理した獣肉がまだ残っている。残っている分を無呼に渡し、眠りについた。

翌日。目を醒まし、朝食を軽く済ませ、雷光に乗る。

「行こうか、雷光」

雷光が駆け始める。蝶が後ろから付いて来る。無呼はそのうち追い付いてくるだろう。

休息しながら進む。また日が暮れる前に街が見えるだろう。思った通り、日が暮れる頃合いに街が見えてきた。街に入り、公孫贊殿にお目通しを願う。蝶と待っていると、すぐに姿を見せた。

「久しぶりだなぁ、剣殿」

「こちらこそ、公孫贊殿」

「そちらは？」

「白倫と申します」

「ん・・・？」

公孫贊殿の表情が曇る。このような北の地まで手配が広がっていたか？

「捕らえるというのなら、拙者等は速やかに出ていくでござる」

「いや、悪い。人違いのようだ」

微笑みに変わった。心配はいらないな。

「それで？こんなところまで、何か用か？」

「近くまで立ち寄ったのでござる。一晩泊めて頂きたいでござる」

「そうか。構わないぞ。ゆっくりしていくと良い」

「忝ない」

「それでだな、その代賃という訳ではないが、一つ協力してくれないだろうか？」

「何をでござる？」

「恥ずかしながら、また賊の退治に手間取っていてな。力を貸して貰えないだろうか？」

「解ったでござる。一宿一飯の恩でござるな」

「そうですね」

蝶も何も言わずに同意した。

「場所は解っているでござるか？」

「今回は解っている。山の中に大きな寺があってな。そこを砦のようにしているんだよ」

成る程な。それで攻めあぐねている訳か。

「とりあえず、今日はもう無理だ。詳しいことはまた明日だ。今日はゆっくり休んでくれ」

一室を与えられ、その部屋に二人で入った。

「賊だそうですが・・・」

「戦場に出ることになる。恐いか？」

「・・・賊とはいえ、やはり」

「それで良い。恐怖を感じないなどは、獣と同じだ。恐怖を感じ、

なお生きようとしろ。それが力になる」

「はい」

初めてというのは、誰にでも存在する。経験を積むことが今後に生きてくる。

「眠ると良い。今日は疲れただろうからな」

大して疲れてはいないだろう。だが、俺の気遣いと受け取ったのか、すぐに眠った。

「明日の日暮れまで、時を与える。行ってくれ」

「何を調べれば良い？」

「頭領の器量、名。人数に目的。その辺りだな。頭領については詳しく頼む」

「解った」

無呼に任せるべきことは任せた。俺も眠った。

翌日、公孫贊殿に賊について話を聞いた。無論、全てが正確ではない。無呼が齎す情報と照らし合わせれば良い。

討伐については、詳しい作戦をもう少し煮詰めるようだ。残念だが、賊の討伐に時間を使うつもりはない。

日暮れ時、一人で街を散策している。治安は悪くない。賊は頻繁に出没するようだが、他所から流れてくる者が大半らしい。

「剣」

「どうだった？」

「概ね」

「目的は？」

「恐らく、私益」

「器量は？」

「ない」

「名は？」

「劉玄徳」

思わず、歩いていた足を止めた。

「どうした？」

「・・・美男だったか？」

「ああ」

無呼が言った情報と、俺が奴に対して持つ情報は全て一致する。

奴なのか？

「知っているのか？」

「多分な」

「行ってみれば解る」

無呼の言う通りだ。どのみち、行くことに変わりはない。逢えば解る。

「人数は？」

「百五十」

「ん？」

「どうした？」

「公孫贊殿は、三百程度だと言っていたが？」

「どちらを信じるかは、自由だ。俺は自分の目で見て来た。自信はある」

少し、嫌がらせをしたつもりだった。無呼が少し饒舌になっている。思っていたより、素直そうだな。

「済まない。少しからかった」

「……下らん」

「案ずるな。俺はお前を信頼している」

「もうやるな」

「悪かった。解ることはこれだけか？」

「寺に罠がある」

「入れそうか？」

「かい潜れる」

「蝶も連れるつもりだ」

「問題ない筈だ」

「今夜、抜け出す。真っ直ぐ寺に向かう。落とすぞ」

返事はなかった。俺は散策を止め、戻った。

蝶に今回の内容を伝えた。流石に、二人で行くことに驚いている。

「来ないなら来ないで良い。俺一人で行く」

「…お供いたします」

付いて来ないならば、追放される。そう思っていたとしても、不思議ではない。事実、俺はそうするつもりだ。足手まといを連れるつもりは、一切ない。

夜、二人で密かに抜け出した。雷光に乗り、駆け出す。無呼は既に寺で準備を進めているだろう。

寺に着いた。見張りはいない。罠が取り除かれている。無呼だろう。ここまでの準備をしたということだ。

「蝶。相手は賊だが、殺すなよ」

「剣様は以前、わたくしにそう語ったことがありますが、持っている剣は峰ではありません。どうすれば・・・」

「今回、剣を抜く必要はない。ただ眺めていれば良い」

戦闘するかもしれないが、俺一人で充分だろう。蝶が二振りの剣を使えば、死人が出る。死人を出すつもりはない。

「俺に付いて来るからには、俺を信用しろ。俺が蝶に伝えるのは、それだけだ」

寺の中へと雷光が歩き出した。蝶は黙って付いて来る。中は広いようだが、道は一本しかない。罠には警戒しているが、余り残ってはいないだろう。無呼が取り除いている筈だ。

広い場が見えた。人の気配がする。堂々と隠れもせずに進んだ。賊が騒ぎ始めた。

「何事だ!?」

聞き覚えがある。はっきりと解った。姿も、確認した。

「久しいでござるな、劉備殿」

「なっ・・・なっ・・・」

「貴殿とこうして鉢合わせするとは、夢にも思っていなかったでござる。

どうしたでござる?折角の再会に、挨拶一つ無しでござるか?」

動揺している。無理もないがな。そして、動揺しているのは、奴だけではない。周りにいる者達も騒いでいる。

だが、俺にとっては都合が良い。恐らく、頭領である劉備と俺は知り合いだと思っている筈だ。

「う、うむ。久しいな、剣殿」

やはり、乗ってきた。虚栄心の塊のような男だ。手玉に取るのはたやすい。

「この寺に篭る者達は賊と聞いているでござる。本当でござるか？」

「いや、それは違うのだ。私たちはこの歪んだ街の政を糺す為にいるのだ。その為にも、私たちはここで闘っている」

俯いた。表情を見られない為だ。恐らく、俺は笑っている。その表情を見られてはまずい。

「剣殿も、私たちに協力してはくれないだろうか？貴殿の力があれば、百人力だ」

「‥‥くっくっくっ」

笑いを押し殺せなかった。

「笑わせるな」

「ぐっ‥‥」

「貴殿も解っているのだろう？そうして、ここにいる者達を誑かしているだけだ。違うか？」

そこまで言って、後ろから殺気を感じた。振り返ると同時に逆刃刀を抜く。振り返った時には、既に三人倒していた。残り、七人いるか。十人程は従えていたということか。

劉備に歩み寄る。七人が劉備の周囲を固めるが、物の数ではない。周囲にいる者達は何が起きているか解っていない。思った通りだ。ただ騙されていたに過ぎない。

「無駄な抵抗は止せ。怪我人を出すだけだ」

七人が徒党を組んで向かって来た。正面から飛び込む。跳躍し、着地した時には既にまた三人倒れていた。更に逆刃刀を振るう。残り二人を倒し、もう一度振るうと、立っている者はいなくなった。

「残るは、貴殿だけだ。大人しく投降しろ。それとも、更に怪我人を増やすか？」

「つ、剣殿！私達の仲ではないか！ここは一つ！」

「貴殿を処断するようなことにはさせないが、どう扱うかは公孫賛殿次第だ。俺の知ったことではない」

劉備の表情が蒼白になった。それを無視し、周囲にいる者達に声をかけた。

「皆！今起きた出来事は全て現実だ！お前達は、この者にただ誑かされていただけだ！

今回の件は、俺が公孫賛殿に正しく説明する。案ずることはない。

公孫贊殿は許してくれる筈だ。俺と共に、街へ降りるぞ」

歓声が、一つ二つと上がった。恐らく、理不尽なことは感じていたのだろう。

倒れている者と劉備を連れる。他の者達は勝手に付いて来た。俺は雷光に乗り、蝶は隣に轡を並べている。

「驚きました。もしかすると、賊に参加するのかと思ってしまいました」

「そうして近付いたからな。だから、信じろと言った」

「剣様の行動は、予想出来ません」

「気にするな。ああした方が、怪我人が少なくて済むと思った」

「はい。争う必要は殆どありませんでしたから」

「俺は、賊になるのも事情があると思っている。争うことは必要最低限に抑えたい」

賊は現状に納得出来ない者がなってしまう。この乱れた世で賊が横行するのも、仕方がないとも言えるかもしれない。今回蝶を連れたのは、それを教えたかったからだ。

後のことは全て公孫贊殿に任せた。劉備達は全員労役だそうだ。他の者達は大したことにはしないらしい。

翌日、街を出た。二日かけて陳留に戻った。言われた通り、曹操殿に顔を出した。

「早かったわね。北は面白くなかったかしら？」

「一つ、面白いことがあったでござる」

「何かしら？」

「劉備でござる。賊の頭領をしていたでござる」

「あはははは。成る程、それは面白いわ」

声を上げて笑う曹操殿に、俺も釣られて笑みを零す。

「それで、劉備はどうしたの？」

「さあ？公孫贊殿に任せたでござるから。拙者にはもう興味がないでござる」

「それもそうね。
これからどうするのかしら？」

「明日、荊州に入り、孫呉へ向かうでござる」

「呉ね……。行ったことは？」

「一度だけでござるかな。その時に多少問題を起こしたでござるが」

「へぇ。どんな？」

「つい頭に血が上り、売られた喧嘩を買ってしまったでござる。友に助けて貰って事なきを得たでござるが」

「貴方が問題を起こすとは思えなかったわね。で、呉に友がいるようね」

「周泰殿でござる」

「ふぅん。孫策を貴方はどう見ているかしら？」

「貴殿と同じ、希代の英雄に成る資質を秘めているでござる。最も、今は眠っているでござるが」

希代の英雄。確かに、曹操殿と孫策殿に感じることだった。これ程の逸材が時代を同じくして生きているなど、奇跡と言って良い。最も、今は二人共眠っている。爪を隠していると言うべきかもしれない。曹操殿は都の近辺で力を蓄え、孫策殿は名門袁家の袁術の支配下となっているが、着々と領地を拡げている。乱世が本格化すれば、間違いなく台風の目になるだろう。

「つまり貴方は、孫策に目を付けているということね？」

「一概にそうとは頷けないでござる。拙者はまだ決めていないでござるから」

「ふむ・・・」

俺は、話は終わりだと立ち上がった。

「では、曹操殿。拙者はこれで」

翌日、早朝に陳留を出た。

北方の地（後書き）

次回予告～。

白「白馬将軍、再び参上！」

剣「そして再び退散」

白「何～！？」

蝶「またの参上をお待ちしております」

剣「次はいつ登場出来るでござるかな？」

華「どうでも良いわ。影の薄い者は黙ってなさい」

白「・・・」

剣「さて、次は孫呉だ。行くか」

華「何か用があるのだったわね」

剣「大事な用でござる。今後の拙者の為の」

華「それは興味があるわね。で、その用とは？」

剣「内緒でござる。次回、『鳳士元』よろしくな」

白「・・・私は？」

蝶「お役御免だそうです」

荊州に入っていた。とある村を歩いている。

「長閑かな村ですね。とても落ち着きます」

「そうだな」

蝶の言う通り、長閑かな村だ。桃花村と同等と言って良い。賊もいない。

「荊州の大守、劉表様は大層お人柄が良く、治世も目を見張るものだと聞いております」

「そうか。このような地方の村でさえ長閑かな環境だ。素晴らしい治世だな」

乱れた世にも、正しい治世を行う者はいる。だが、動乱に巻き込まれれば、為す術はない。

「剣様。この村に知人でもおられるのですか？」

「いや」

「ここで一泊を？」

「そうだな。近隣で一泊、そして孫呉へ向かうか」

「はい」

どこかの宿か、それとも野宿か。考えていると、意外な人物を見付けた。

「蝶。この村の住人ではないが、知人はいた。行こう」

「あ、はい」

蝶が馬を引いて付いて来る。雷光は自分で勝手に付いて来る。

「水鏡殿」

「はい？」

歩み寄ったのは水鏡殿だ。背を向けていた水鏡殿が振り返ると、目を丸くした。

「剣さんではありませんか！」

「久しいでござるな、水鏡殿。このようなところで逢うとは思わなかったでござる」

「私もです。旅をしているのでしょう？朱里から手紙がきていました」

「そうでござるか。こちらは拙者の供でござる」

「白倫と申します」

「付いて来ている馬は、剣さんの馬ですか？」

「そうでござる。雷光という名でござる。
雷光、こちらは朱里の恩師である水鏡殿だ」

「ブルル」

雷光が顔を水鏡殿に寄せた。朱里の恩師だということで、警戒していないのだろう。水鏡殿は微笑んで雷光を撫でた。
女の子が近付いて来た。が、俺達を視認して明らかに警戒した。
水鏡殿の傍に寄る。

「水鏡殿、その子は？」

「こちらは、朱里と同様に私の下で学んでいる鳳統といいます」

「そうでござるか。拙者は剣でござる」

「白倫です」

「今日は是非泊まっていって下さい。手料理くらいなら、振る舞い出来ますので」

「忝ないでござる」

歩き出した。水鏡殿の家に向かう。
道中、鳳統殿のことを見ていた。若干警戒しているように感じる。
人見知りがあるのかもしれない。
家に着いた。

「先ずは、旅の汚れを落としますか？」

「そうでござるな。
蝶、水鏡殿の言葉に甘え、湯浴みをしてくると良い」

「良いのですか？」

「どうぞ、遠慮なく。雛里、案内を」

「……はい」

二人が家に入って行った。俺にはやりたいことがある。

「剣さんはどうしますか？」

「近くの小川に行ってくるでござる。雷光、行こうか」

「では、私は夕飯の支度をしていますので」

歩き出した。雷光は静かに付いて来る。旅に出て長いが、雷光の体躯を余り洗っていない。今日は良い機会だろう。
小川に着くと、雷光が水を飲み始めた。布を水で濡らし、雷光を拭き始めた。

「この旅では、お前に不自由な想いをさせているかもしれないな」

雷光はじっとしている。動かない。

「人と接するのは、やはり嫌か？」

体躯を拭き続ける。軽く体を振って、水を払う。

「少しずつ慣れれば良い。俺がいる限り、手荒な真似は絶対にさせない」

一通り、体躯を拭き終えた。秣を出すと、食み始めた。だが、すぐに動きが止まった。

「‥‥ああ。気にするな。問題ないだろう」

小川の前にある林に、鳳統殿が隠れている。簡単に気が付いてしまうが。無呼が知らせるまでもない。

「鳳統殿。拙者に何か用でござるか?」

「‥‥あわわ」

隠れていた筈なのに気付かれて驚いたか?

「‥‥夕飯‥‥出来ました」

「解ったでござる。では、戻るでござるか?」

雷光が秣をくわえ、食べながら付いて来る。鳳統殿と並んで歩く。無言が続く。ちらちらとこちらを見ているが、話し掛けようとはしない。

「何か聞きたいことでもあるでござるか?拙者なら構わないでござる」

「あ、あと‥‥」

「何でござる？」

「・・・旅は、楽しいですか？」

朱里と同じことを聞くのだな。やはり、見聞を広めたいと思うのか？

「楽しいでござる。新たな発見は心が躍るでござる」

「あわ～・・・」

「旅に出たいでござるか？」

「・・・旅は、危険なことも多いと、知っています。私は簡単に・・・」

確かに、そうではある。旅は慣れない者が行えば、簡単に死ぬことも少なくないだろう。食料を確保出来ないのだ。ただ、それは学べば良い。どうにもならないのは、襲われた時だ。

「学べることは学べば良いでござる。明日まではここにいるつもりでござるから、いろいろと聞いてみると良いでござる。特に、蝶に聞いてみると良いと思うでござる」

家に戻り、夕飯にありついた。

剣様は、もう一泊すると決めました。
珍しいことです。剣様は必要もなく一定の場所に留まることはないのだと思っていました。これまでの旅も、陳留ではわたくしの為、北へ行った時は留まることもなくあっさりと戻りました。
この長閑かな家に留まることは、わたくしにとって好ましいことです。家出してから、どこかでゆっくりとすることがありませんでしたので。剣様はそのことに気付き、休息を取ったのかもしれません。

「あ・・・あの・・・」

「はい？」

声をかけられ、振り返りました。初めて、後ろに鳳統様がいることに気が付きました。

「わたくしに何か？」

「あわ・・・あの、話を・・・」

「わたくしにですか？」

こくんと頷きました。

「何でしょうか？」

「・・・旅について、いろいろと聞くと良いと、剣さんが」

剣様が？

「わたくしは、剣様に助けられてばかりです。剣様にとって、わたくしは邪魔にしかなっていないのかもしれません」

「・・・食料は？」

「剣様が採ってきます。獣が殆どで、野菜はたまにですね」

「買わないのですか？」

「剣様が路銀を使っているところを、わたくしは見たことがありません。持っていない訳ではないと思いますが、使わないのではないでしょうか」

宿を取ることなどもありません。野宿か知人に泊めて頂くかのどちらかです。

「どうして旅を？」

「剣様に、付いて行きたくなったのです」

逃げているとは、言えません。

「旅は、どうですか？」

「学ぶことは多いです。それも、剣様の御蔭ですね。以前、道中で剣様が語ってくれたことがあります。食料を確保出来ない者から、賊に身を寄せていくと」

「・・・治世ではないのですか？」

「いえ。大元は、治世だとわたくしは思っています。ですが、食料の確保が出来れば賊になどなりません」

「……一つ、学びました」

平穏で、平凡な暮らし。剣様はそのような暮らしが何よりも尊いと仰しゃいました。当たり前の生活を、当たり前に過ごす。そのような幸福が、何よりも幸福であると。わたくしにも、解る気がします。

「わたくしから聞いてもよろしいですか？」

「はい」

「人と接するのは、お嫌いですか？」

「……苦手です」

大きな帽子の鍔を握り、顔を隠します。

「わたくしも、解る気がします。今まで上辺だけで接することが多かったもので」

芸術を磨き、人様に披露する機会は多々ありました。芸術を娯楽として楽しむだけで、わたくしのことはついでのように感じられたのです。

「剣様は、凄いですね……」

初めて出逢った時、わたくしはついでではありませんでした。全

てを見て頂いていたような気がします。わたくしの人付き合いに関しても、敏感に感じていたのかもしれません。いえ、鳳統様のこともですね。

「わたくしの真名は、蝶と申します。預かって頂けますか？」

「……良いのですか？」

「はい。これ程、偽りなく語ったのは久しぶりなのです」

「私の真名は、雛里です」

「では、雛里様。わたくしの笛の音、聞いて頂けますか？」

「はい」

わたくしは、清々しい心境で笛を手にしました。

笛の音が聴こえてきた。蝶の音色だろう。今日の音色は、一段と澄んでいる。

「どうやら、吹っ切れたようだな」

蝶が人との関わりを避けていることは知っていた。旅の道中で治して貰いたいことだったが、なかなか機会がなかった。

鳳統殿は良い機会だと見た。鳳統殿も、人との関わりを苦手とし

ていたからだ。互いに克服すればと思っていたが、上手くいったようだな。

「雛里も朱里同様、親戚間をたらい回しにされていたんです」

「水鏡殿」

「役に立たないと怒鳴られていたそうです。それから、私が引き取りました」

あの人を怖がるようなところは、その恐怖があったからだろう。

「恐らく、あの子の友達は白倫さんが初めてではないでしょうか」

「水鏡殿は、母といったところでござるかな」

「そう思われていれば、嬉しいのですが」

「思っているでござる。鳳統殿だけでなく、朱里も」

一瞬だけ水鏡殿が目を逸らした。目頭が少し赤い。

「鳳統殿も、旅に出たそうでござるな」

言うか、束の間迷った。だが、言うべきことだろう。

「そのようですね」

どうやら、水鏡殿も知っていたようだ。

「連れて行って貰えますか？雛里を」

「無理でござる。今回の旅は、速いのでござる。以前のようにのんびり歩くような旅ではないでござる」

水鏡殿は鳳統殿も旅に出す気だったのだろう。しかし、今回の旅は速い。とても連れて行くことはできない。

「そうですか。次の機会を待つことにしましょう」

「拙者等は、明日に旅に戻るでござる」

「解りました」

庭に出た。笛の音はまだ聴こえる。不意に、無呼の気配がした。

「どうした？」

「聞きたいことがある」

「何だ？」

「呉で何をする？」

「ある物を造る。必要になると、解っている代物だ」

「何故？」

「決意を固める為。現実から逃げ出さないようにする為だ」

「解った」

気配が消えた。無呼に言ったことは本当だ。この旅の最終目的でもある。

夜になり、夕飯を食べた。蝶と鳳統殿は微笑みながら会話している。黙ってその光景を眺めていた。

「剣様」

「何だ?」

「共に、湯浴みしませんか?」

思考が停止した。が、水鏡殿が含み笑いをしていることに気付き、我を取り戻した。

「からかうな、蝶。何を唐突に言い出す?」

「からかっているつもりはないのですが」

小首を傾げる蝶に、どう対応すれば良いか解らなかった。

「わたくしが剣様に?」

「違うんですか?」

「そう言われましても・・・」

「やっぱりそうなのではないですか?」

「・・・わたくしが、剣様に好意を持っていると?」

「はい」

困りました・・・。雛里様がそのようなことを言われるとは・・・。そういった想いがないとは言えません。わたくしを支え護っているのは、間違えようもなく剣様です。

「確かに、持っているとは思いますが」

「愛ですか!?」

わたくしの気の所為でしょうか?雛里様がどこかときめいているように見えるのですが。

「雛里様。正直に申しますと、わたくしには恋という経験がまるでないのです。愛と言われましても、わたくしにはよく解りません」

「私もです。だからこそ興味があるんですが」

「そうなのですか」

わたくしは、幼い頃から芸術にばかり取り組んでいました。恋をする相手がいなかったというよりも、恋をする暇がありませんでした。

「蝶さんは美人ですし、もったいないです」

「そうでしょうか？」

「はい」

そうは言われましても、どうすれば良いのか、わたくしには皆目見当が付きません。

その後、様々なことを雛里様に教えて頂き、実行してみたのですが、

「何を言っている？」

剣様は首を傾げるばかり。思わずわたくしも首を傾げてしまいます。

「湯浴みなら、俺ではなく鳳統殿とで良かろう。明日の朝には呉に向かうのだからな」

確かに、わたくしにはそちらの方が良いと思います。剣様とは旅で一緒ですが、雛里様とは次にいつ会えるのか解りません。

わたくしは、雛里様と共に湯浴みすることにしました。

蝶は鳳統殿と共に湯浴みに行った。やれやれ。

「白倫さんと入ってくれれば良かったではないですか」

「勘弁して欲しいでござる、水鏡殿。余りからかわないで欲しいでござるな」

「あら。ごめんなさいね」

蝶は舞姫だ。普段着ている着物は余り肌が露出されていないが、時折見える肌は白く澄んでいる。共に湯浴みなど、目に毒だ。

「剣さんは、やはり鈍感な方のようですね」

「鈍感でござるか？拙者、感性は鋭い方だと思うでござるが」

「自覚していれば、鈍感とは言えませんよね」

何故かしみじみと頷く水鏡殿に、俺は首を傾げるばかりだった。

解らん。

翌日。俺と蝶は別れを告げ、呉へと向かった。

鳳士元（後書き）

次回予告～。

剣「静かな時間を過ごしたのは久しぶりだ」

雛「・・・そうなんですか？」

蝶「はい。急いだ旅でしたので」

水「ここでゆっくりと出来たのなら、留まって頂いた甲斐があったというものです」

剣「すぐに旅に戻るでござるがな。余りのんびりとしている訳にはいかないのでござる」

雛「あわわ・・・お気を付けて」

蝶「はい。雛里様、いずれまたお逢いしましょう」

雛「はい」

剣「次は孫呉だ。次回、『覚悟』よろしくな」

覚悟

孫呉の領地である江東に着いた。歩いている林を抜ければ、城が見えてくる筈だ。

「剣様。孫呉には知人がいらっしゃるのですか？」

「いる。まあ、多くはないがな」

以前呉に来た時、俺は問題を起こした。俺を目の敵にしている者もいるだろう。周喩殿が良い例だ。

問題を起こすつもりはなかった。自分を抑えるつもりもなかったがな。

不意に、嫌な気配を感じた。何が原因か解らないが、不思議な感覚が漂っている気がする。どこか、闘気のような……。

「蝶！」

庇って跳ぶ。網が落ちてきた。共に避けた格好だ。素早く体制を整え、次に備えた。

「今のは……？」

「罠だ。気を抜くな」

そう言った時、俺は刀を抜いていた。背後から迫る気配を感じたからだ。

打ち合った。鍔ぜり合いになる。相手の顔を見ることが出来た。

「剣殿！？」

「……周泰殿か」

俺と刀を交えていたのは周泰殿だ。はっきりと動揺が見て取れた。

「俺は余程呉に嫌われていると見えるな？」

「い、いえ。そんなことは……」

慌てて刀を退く周泰殿を見て笑う。蝶は目を白黒させている。俺は逆刃刀を納めた。

「事情を説明してくれるか？」

「……はい」

周泰殿が俯いたまま話し始めた。

「今、隠密行動の調練中なんです……」

成る程。それだけで事情は解った。

「周泰殿は罠を仕掛け、身を潜めていた。が、想定外の者の登場に驚き、捕らえようとした。筋書はこのようなところだろう」

「う……その通りです」

まあ、そうだろう。俺自身が間者だったのだ。気持ちはよく解る。

「邪魔してしまったのは事実だが、それで無闇に捕らえられては堪らないな」

「…気を付けます」

とは言ったが、間者としてはそのようなことに構ってはいられない。その点で言えば、周泰殿が間違っているとは言えない。

「さて、大丈夫か、蝶？」

「わたくしには何が何かよく理解していないのですが…」

とにかく、地面に座り込んでいる蝶を立たせる。

「調練中だったそうだ。この者は周泰殿。俺の友人だ」

「そうだったのですか…」

「申し訳ありません。知らなかったこととはいえ、御無礼を…」

「いえ。剣様の御友人のお方ですし、余りお気になさらずに」

「うう…」

「周泰殿。今は調練中だろう？戻らなくて良いのか？」

「はっ！そうでした！
剣殿。お連れの方。調練はもう暫く続きますので、どうかこの場を動かないでください！」

足早に駆けて行き、颯爽と消えた。どのような調練か解らないが、終わり次第迎えに来るつもりなのだろう。若しくは、迎えの者を寄越すかだ。

「…済まん」

無呼の声。周泰殿に気が付けなかったことに関してだろう。

「気にするな。周泰殿はお前同様、かなりの隠形を遣う。むしろ、お前のことに気が付いていなかったことに安心している」

「…何だと？」

「気に障ったなら謝る。お前のことを知られるのは、出来るだけ避けたいのだ」

「覚えておく」

本音だった。無呼のことはいずれ知られるだろうが、知られないに越したことはない。

「剣様？何か呟いているようですが、どうかいたしましたか？」

「いや。行こうか、蝶」

蝶を誤魔化し、歩き出した。まだ蝶にさえ知らせるつもりはない。

「待ってください。周泰様はここで待つようにと」

「気にするな。実践に不測の事態は付き物だ。ここで時を無駄に過

ごすつもりはない」

周泰殿に従う義理もない。

林を躊躇わずに進む。蝶は戸惑いながら付いて来る。雷光は周囲に首を振って警戒しているように見える。

歩いていると、周囲に気配を確かに感じた。周泰殿程優れてはいない。ただ気配を隠しているつもりだけのようだな。

「五人」

無呼の潜めた声。だが、少しずつ減っているように感じる。一人飛び出して来た。

「剣殿！」

「なんだ、周泰殿か」

「なんだではありません！動かないよう言ったではありませんか！」

「退屈だったのでな。調練は終わったのか？」

「……はぁ。終わりました。呉へ案内します」

「頼む」

周泰殿の息遣いが若干荒い。速攻で終わらせたのだろう。

周泰殿が先導して歩き出した。俺と蝶は静かに付いて行く。

「剣殿。関羽殿達は？」

「いない。一人旅だったのだ。蝶は途中で知り合った」

「白倫と申します」

「周泰です」

「周泰殿。実は、折り入って頼みがあって来た。旅のついでではあるが」

「何でしょう？」

「刀を打ちたい」

「刀・・・ですか？」

「そうだ」

旅で決めたことだ。いや、元々決めていたことだ。

俺は部隊を率いる。その部隊が戦に出陣する。人を殺さないなどという甘いことは、絶対に不可能だ。そのようなことをすれば、部下の者達の命を絶つことになる。

つまり、人を殺すことになる。部隊を率いる以上、覚悟はしている。部下が手を汚すにもかかわらず、俺だけが綺麗なままでいて良い筈がない。

「着きました。孫策様が待っている筈です」

城に入った。王の間で、孫策殿、孫権殿、周喩殿がいる。

「よく来たわね、剣。歓迎するわ」

「貴殿の御厚意、感謝するでござる」

「連れの者は？」

「白倫と申します」

「そう。私は孫策よ。貴方達を客人として迎えるわ」

「忝ないでござる」

「周泰。案内を」

「はっ」

周泰殿に連れられ、王の間を退出した。孫権殿が付いて来た。

「剣殿。関羽殿達は？」

「今回は拙者だけでござる」

「そうですか」

以前のことを引きずっているようには見えない。だが、愛紗に逢いたくはあるのだろう。

「周泰殿。俺はすぐにでも行きたいのだが」

「使者は出しています。出来るとは思いますが」

「蝶を案内して欲しい。俺は一人で大丈夫だ」

「そうですか。では、お気をつけて」

孫権殿は不思議そうな顔をし、蝶は余り事態を理解していない。周泰殿も余り変わりはないが。全て無視し、速足に城を出た。向かうは以前鞘を貰ったあの鍛冶屋。

「失礼するでござる」

「応。お客人」

「周泰殿から知らせが入っていると思うでござるが」

「応。しかし、打てんのかい？」

「問題ないでござる。経験があるでござるから」

店内に入れて貰い、工房に入った。熱い。すぐにそう思った。高温で鉄を打っているからだ。着ている袴を脱ぎ、上半身裸になった。

「経験があるってのは本当みてぇだな。良し、そこ使って良いぜ」

与えられた場で、すぐに鉄を火に当て、打ち始めた。周囲の鍛冶屋から異様の眼差しを向けられたが、気にしなかった。

何度も何度も鉄を打った。何度打ったかなど、解る筈もない。

「おい。お客人」

呼ばれたので、眼だけ向けた。

「あんたに客が来てるぜ。高官だ」

「拙者は今手を離す気はないでござる。急用でない限り、ここまで来て欲しいでござる」

「おいおい、相手は役人。しかも高官だぞ？」

「関係ないでござる」

また鉄を打つ。手は休めない。呆れたように店主が俺から離れた。

「誰だ？」

「周泰。それと、王の間にいた女」

無呼が名で言わなかった。つまり、名を知らないということだ。孫権殿ならもう少し解る言い方をするだろう。つまり、

「来たぞ」

「これは、周喩殿。拙者に何か用でござるかな？」

振り返らずに言った。周泰殿も隣に立っているようだ。

「呉に、鉄を打ちに来たのか？」

「そうでござる」

「相変わらず、喰えないな」

「こちらの台詞でござる」

また鉄を打った。

「こんな場所で言う言葉ではないが、お前は何者だ?」

「ただの放浪者でござる」

「ただの放浪者が、それ程の傷を全身に持っているとは思えないが?」

今の俺は上半身裸だ。過去に受けた傷が全て見えるのだろう。

「相当な修羅場を潜り抜けてきたと見える。ただ者ではない」

「それで、拙者に何が言いたいのでござる?」

「呉に仕えないか?」

またか。

俺は鉄を打つ腕を止め、水に付けた。鉄が急激に冷える音がする。

再び火に当て、鉄を打ち始めた。

「唐突でござるな。拙者は士官先を探す為に旅をしている訳ではないでござる」

士官すべき軍を探している、が正確だ。孫呉はあくまで候補の一つ。まだ決めてはいない。

「ならば、何故鉄を打つ？」

「覚悟を決める為でござる」

俺の覚悟。人を斬る覚悟であり、命を絶つ覚悟であり、死ぬ覚悟である。人を殺すのなら、殺されるのもまた然り。

俺が打っているのは、新たな刀の為。逆刃刀を封印し、刀を振るう。泰平の世を築き上げた後、俺は再び世を回り、逆刃刀を抜く。

「誘ってくれたことは覚えておくでござる。士官するとは限らないでござるが」

鉄を打つ。もう意識を鉄に向けていた。これ以上話が出来ないと悟り、戻って行った。

またひたすら鉄を打つ。また人を殺すことになる。もう一度、俺は自分の手を汚す。泰平の世を築き上げる為に、俺は一振りの刃となる。

「おい。お客人」

また呼ばれた。眼だけ向ける。

「いつまで打ってるつもりだい？もう日が暮れちまった」

「済まない。拙者のことは放っておいてくれて構わないでござる。置いていって欲しいでござる」

「おいおい。本気かい？」

「本気でござる」

三度、鉄を打ち始める。もう声は掛からなかった。
刀が出来るまで、手を休めるつもりはない。この刀は俺の新たな魂になる。相応の魂を注ぎ込まなければならない。

「剣」

「何だ？」

無呼の声に反応した。

「夜が明ける。大丈夫か？」

「問題ない。俺は三日三晩起きていられる」

「解った」

また鉄を打つ。もう何十、何百と打っただろう。

「まだだ。まだ足りない」

手を休めることなく打ち続ける。俺の魂を、この刀に委ねなければならない。何度打とうと、足りないかもしれない。

「剣様」

蝶の声だ。ここに入れて貰ったのだろう。

「お茶にしませんか？」

「いらない」

「昨日から、余り休息をとられていないのでしょう？お体に毒です」

「大丈夫だ」

短く答えるだけだった。意識は殆ど鉄に向けている。

「余り無理をなされませんよう」

「大丈夫だ」

蝶には悪いと思う。だが、手を休める気にはならない。

いつの間にか、周囲には誰もいなかった。日は暮れているようだ。

確認しただけで、何が変わる訳でもない。

渾身の力を込めた。鉄を打つ。良い感触がした。

「良し」

刀の形になっている。鋭く研ぎ澄まされた、見事な太刀。

「出来たのか？」

「これから、更に研ぐ。一日は研ぐ時間に当てる」

「その前に、何か食え」

「いや。研ぎ終わってからだ。全てはそれからだ」

「持つのか？」

「案ずるな。問題ない」

鑢を当て、丁寧に研ぎ始める。鉄を打つことと同じだ。魂を込めて研ぐ。

集中していた。どれ程の時間研いでいたのか、自分でも解らない。だが、

「・・・良し」

出来た。間違いなく。俺の魂を全て込めた、渾身の一振り。

「終わったか？」

「終わった」

「夜だ」

それ程時間が経っていたのか。

だが、完成した。この刀と共に乱世を生き、乱世を終わらせる。泰平の世を築き上げる。その時まで、俺はこの刀を振り続ける。

刀を見納め、鞘に納めた。腰に差す。逆刃刀の隣だ。

「腹が減ったな・・・」

「知るか」

「まあ良い。城に戻るか」

鍛冶屋の主人に感謝の旨を告げ、城に戻った。流石に日が暮れて

いて中に入れないかと思ったが、周泰殿が出て来て招いて貰った。

「済まない。感謝する」

「いえ」

「もう一つ頼みたい。食い物はないか？」

「だったら、私のところに来ない？」

背後に孫策殿と周喩殿が立っていた。

「呑まない？」

「良いでござるよ」

誘いに乗り、部屋に入った。卓についたのは四人だ。従者が食事と酒を持って来た。

「呑みに自信はある？」

「それなりでござるな」

箸を取り、食事に手を伸ばした。腹が満たされていく。

「三日刀を造り続ければ、腹が減っていない方がおかしいな」

「だから、今食べているでござる」

「呑んで食べて、ゆっくりすると良いわ。お酒には付き合って貰う

けどね」

「承知したでござる」

孫策殿は杯に酒を満たし、呑み干していく。俺の杯にも酒が満たされていた。その酒を呑む。

「剣殿。刀は出来たのですか？」

「出来た」

「その刀を遣って、何をするつもりだ？」

「別に何でもないでござる」

「相変わらずだな」

真意は見せないのが基本だ。

「そうそう。周喩から孫呉への誘いがあった筈だけど」

「誘いを受けた。ただそれだけでござる」

「このまま旅を続けて生きる生ではないだろう？」

「まあ、そうでござるな。ただ、間者として働くのはもう御免でござる」

「そうなのですか？」

「ああ」

「じゃあ、刀を打った理由は何？」

「旅を終えた時、遣うのでござる」

「旅を終えた時ねぇ……」

鋭い。孫策殿は計り知れない何かを持っているようだな。

「どこかに仕えるつもり？」

「まだ決めてないでござる」

「貴方がいれば、何かと出来そうね」

「気の所為でござる」

「そうして、いつもはぶらかしているのか？」

「何のことでござるかな？」

頭が切れる。怖いものだ。

「まあ、すぐに答を出すつもりはないのよね？」

「解っているでござるな」

それで終わりだった。退出するとすぐに眠くなった。抗う気にはならなかった。

翌日、俺は丸一日寝ていた。蝶が気にして起こしに来るまで、起きることはなかった。

「剣様。大丈夫ですか？」

「ああ。しっかり眠った。もう大丈夫だ」

「今日はゆっくりしてください」

「ああ。明日には、ここを出る」

「解りました。次はどちらへ？」

「桃花村。旅の終結地だ」

覚悟（後書き）

次回予告～。

剣「さてと、俺の刀は出来たな」

明「刀なんて打てたんですね」

蝶「わたくしも知りませんでした」

剣「過去に少し経験があった。それだけのことだ」

雪「でも、わざわざ呉まで刀を打ちに来るとはねぇ」

剣「旅のついでござる。呉には来るつもりでござった」

冥「自慢の洞察力でか？」

剣「拙者のことを認めてくれるのは嬉しいのでござるが、もう少し素直に言って欲しいでござる」

蝶「剣様は孫呉で問題を起こしたと仰っていましたが」

明「あの時は私達も悪かったんです」

雪「ま、過ぎたことは気にしないことね。冥琳」

冥「わ、私は気にしてなど・・・」

剣「どうでも良いことでござる。
次回、『母の想い』よろしくな」

蝶「物語は再び原作に戻りますよ」

母の想い

孫呉の城を出た。桃花村へ向かう。これで旅は終わる。
ある街を歩いている。大きな街だが、活気がない。何故だ?

「蝶。この街を知っているか?」

「確か、名門袁家の袁術様が治める街だと聞いたことがあります」

「そうか・・・」

息を吐く。名門などという驕りがこのような悪政を齎す。見るに耐えない。

「あの~、すいません」

「何でござる?」

話し掛けられた。長い桃色の髪の女だ。

「この街にあるっていう、化け物が出る寺を知りませんか?」

化け物?そのようなものがいるとは思えないが、何か噂でもあるのか?

「済まないでござる。拙者らは旅の者で、つい先程この街に着いたのでござる」

「そうなんですか。残念~・・・」

見るからに気を落とす。
その時だった。知っている者。間違いなかった。
「寺は見付かり・・・・」
俺を見た。口を開けたまま止まる。はっきりと認識したのだろう。
「久しいな。・・・・愛紗」
「剣・・・・」
「剣・・・・」
いつぶりだろう?剣に会ったのは・・・・。
剣が旅に出て、暫く時が過ぎた。私達は桃花村で暮らしていた。
桃花村は平和だった。私達が賊の討伐に成功したからだ、という自負は少なからずある。だが、この平和は桃花村だけに過ぎない。国の各地で賊が出没し、苦しみ者がいる。私も旅に出ようかと思っていた。
きっかけがあった。だから私達は旅に出た。旅の目的である物の為に、袁術殿の街を訪れた。そして、剣との再会。
旅に出た時からそのことを期待していなかった訳ではない。そして、こうして遭えたんだ。
「どうした?このような街に何か用があったのか?」

「あ、ああ。実は・・・」

「剣ーっ！久しぶりなのだー！」

「おっと。久しいな、鈴々」

剣に飛び込んだ鈴々を抱き留める。皆も集まって来たようだ。

「剣。久しいな」

「ああ。星、お前もな」

「剣さん。お久しぶりです」

「朱里。久しいな」

剣は微笑んでいる。再会を喜んでいるようだ。

「剣様。お知り合いの方々ですか？」

思考が止まる。何故気付かなかったのだ？剣の隣に立っている女がいる。この者は誰だ・・・？

「ああ。俺の知人だ」

「・・・剣。その者は誰だ・・・？」

「ん？旅で知り合った者だ」

「白倫と申します」

女の私から見ても、この者は美しく見える。旅で知り合ったということは・・・、

「剣さん。旅で何をしていたんですか？」

私が聞く前に朱里が聞いた。私も聞きたい問だ。

「何と聞かれてもな。ただ旅をして各地を回っていたに過ぎない。な、雷光？」

雷光が朱里に頭を寄せる。朱里は笑って雷光を撫でている。

「俺は雷光と共に各地を回った。ゆっくりしていたのは水鏡殿の家にいた時だけだ」

「水鏡先生のところに行ったんですか？」

「ああ。健全な様子だった」

雷光のあの様子では、確かに各地を回っていたようだ。とすれば、この者は剣に付いた悪い虫か？

「あの、わたくしを睨みつけて、いかがかいたしましたか？」

「いや、何でもない」

剣が誑かされるとは思えないが、もしかしたら・・・、

「愛紗。そう怖い顔をしていないで、もう一人を紹介してやったらどうだ？」

「そうですよ～。私のこと忘れてますよ～」

「あ、ああ。済まない。劉備殿」

「何・・・？」

剣が反応した。事情を知らなかったな。

「貴殿。失礼ながら、名は何という？」

「私の名は劉備。字を玄徳といいます」

「・・・剣という者でござる」

剣がさりげなく視線を向けてきた。事情を説明しなければな。

「ということだ」

つまり、俺が以前に知っていた劉備は今出逢った本物の劉備の名を語っていたらしい。劉備殿の家柄を利用してのし上がるつもりだったのだろう。そのくだらない企みはもう潰えたがな。

「大変だったようでござるな」

噂を聞き、愛紗達のいる桃花村を訪れた。目的は偽劉備に奪われた家宝の剣を取り戻す為だ。そして、その宝剣を取り戻す為の旅に出た。

「それで、その宝剣はどこにあるか解っているでござるか？」

脳裏を過ったのは公孫賛殿のことだ。だが、宛てもなくここまで来たとは思えない。

「解っています。持っているのは、めぐりめぐってこの街の袁術さんです」

「なるほど。だからこの街に来たのか」

この街に来た理由は解った。だが、何故化け物がいるという寺を捜す？

「袁術さんが寺に篭る化け物を退治すれば、宝剣を返してくれると約束してくれたので」

朱里が俺の疑問を次々に答える。だが、化け物などこの世には存在しない。

「寺を見付けた」

無呼の潜めた声。咄嗟に周囲を見渡した。

「あれは何だ？」

出鱈目な方向を指差し、皆の注意を逸らした。その瞬間に隠形の業を使い、姿を消した。静かにその場から離れた。

「無呼」

「お前の隠形か」

無呼には隠形の業を使っても小声を出せば、すぐに気付かれる。

「無呼。皆がいる時は余り声をかけるな。気付かれる」

「お前にしか聞こえていない」

「解っている。だが、あの中には卓越した武人がいる。常人と同じにしない方が良い」

「覚えておく」

「それで、寺は？」

「街の端」

「化け物の化けの皮を剥いで来たか？」

「子供だ」

「何・・・？」

子供がしていることなのか？

「親のいない迷い子達だ」
「・・・寺に住んでいたのか？」
「ああ」
それなら、化け物を装う理由も見当が付く。
「解った」
皆のいるところに戻る。
「どこに行っていたんだ？いきなり消えて」
「済まない。少し気になることがあってな。もう大丈夫だ。それで、寺に行くのだろう？」
「今夜、行きます」
「解った」
化け物退治をわざわざ夜行う。朱里も何か感づいている。
夜になった。俺と蝶も付き合っている。松明を持ち、皆で向かっている。
愛紗と鈴々は相変わらず化け物の類は恐いようだ。星は面白そうに笑っている。以前のことを思い出すな。
「朱里」
「はい？」

「何か考えがあるのだな？」

「はい。まずは化け物の正体ですね」

「任せる」

朱里に任せておけば、まず間違いはないだろう。愛紗と鈴々はまた倒れるかもしれないが。

寺に着いた。一見、不気味な雰囲気が漂っている。だが、複数の気配が確かにある。それが子供達なのだろう。

何かが光った。点滅か。だが、顔のようなものが浮き出してくる。成る程。

「きゃあああああっ！」

「うわーっ、なのだーっ！」

二人は相変わらずか。やれやれ。

見れば解る。ただの張りぼてだ。所詮、子供が造った玩具。

「あう・・・」

気絶した。やはり、化け物の類はどのようなものでも駄目なのだろう。

「剣さん。戻りましょう。目的は果たしました」

朱里の潜めた声を聞き、黙って頷く。鈴々を背負い、愛紗を手で抱えた。

「大変だな」

星が声をかけてくる。星には何も気にしていなかったが、蝶と劉備殿は大丈夫か？

「剣様。あのままで宜しいのですか？」

大丈夫そうだな。

「構わない。
劉備殿、大丈夫でござるか？」

「あ、はい」

呆けていたようだ。まあ、気絶していないだけ良いか。
俺達はそのまま宿に戻った。気を失った二人を寝かせ、俺達も眠った。俺と蝶も宿に入れて貰った。
翌日。起き出した。皆も起き出す。

「朱里。目的は達した筈だ。どうする？」

「待て。目的とは何だ？」

「化け物の正体を知ることです。あの張りぼて、光を燈している型。やはり、化け物などではありませんでした」

「そうなのかーっ！？」

「進歩がないな。二人共」

星の言葉に愛紗と鈴々が俯く。まあ、別に良い。

「そうだったんですね。今解りましたよ」

劉備殿は気付いていなかったのか。別に構わないが。

「そうと解れば、恐れるものはない！」

「ただ、解らないのは何故そのようなことをするかなんですよね」

朱里が腕を組む。だが、その答は解っている。

「あの。わたくしの気の所為かもしれませんが、子供の姿が見えませんでしたか？」

ほう。蝶はそこまで目が届いていたか。

「俺も同意だ。あの張りぼては子供が操っていた。間違いない」

「子供ですか・・・」

「何か理由があるのだろうな」

「今夜、もう一度行ってみましょう。ですが、その前に一つしておきましょう」

数分後、俺と蝶を残して城に向かった。

「上手くいくでしょうか？」

「朱里の考えたことだ。何か勝算があるのだろう」

目的は、化け物退治の前に宝剣を返して貰うこと。後に誤魔化されては堪らない。

朱里には何か考えがある。そうでなくとも、袁家の者ならやすやすと引っ掛かるかもしれないが。

暫くして、皆が戻って来た。劉備殿が見覚えのある剣を携えている。宝剣だろう。

そして夜。再び寺を訪れた。愛紗と鈴々は、もう流石に恐れてはいない。

「さあ。また来たぞ！化け物！」

「報酬金も貰ったし、後には退けんのでな」

「この宝剣があれば、簡単に倒せるんだから！」

三文芝居が行われている。黙って成り行きを見守っている。俺がすることはない。

「さあ。出てこい！化け物！」

何かが光る。皆が恐れる振りをする。張りぼてが出て来た。皆が怖がり、その場で気絶した。振りだが。

子供が近寄って来た。数人いる。報酬金を持ち去りたいようだ。

「そこまでだ」

皆が振りを止め、起き出した。子供達は逃げようとするが、捕ま

えている。

「芝居は終わりだ。大人しく事情を説明して貰おうか」

「お待ちください」

寺から誰か出て来た。子供達を纏めている女がいたと無呼から聞いていた。この女だろう。

「事情を説明して貰おうか。寺に入っても良いか？」

「はい・・・」

寺に入った。無呼の報告通り、何人もいる。だが、飢えてはいないようだ。

話を聞くと、両親を亡くした子供が一人二人と集まってきたらしい。それでこの人数になったが、何とか遣り繰りして飢えずにはいられた。だが、領主である袁術の身勝手でこの寺を取り壊すことになった。だから、化け物がいると装ったとのことだ。

「話は解った。何をどうしたいのかも、よく解った」

「私達は・・・」

「止せ。俺はこの寺を壊す気はない。少なくとも、俺はな」

「私もです！こんな身勝手、許せません！」

皆を見渡すと、各自頷いた。

「朱里」

「袁術さんがまだ化け物のことを信じているのなら、手はあります。袁術さんを化け物を装って脅せば良いんです」

逆手に取る訳か。それならいけるか。

「解った。その役は俺が請け負う。行って来る」

「大丈夫ですか？」

「ああ」

「剣。私も行こうか？」

「わたくしもお供いたします」

「闇に紛れて。俺一人の方が動きやすい」

背を向けた。歩き出す。寺を出た。

「無呼。行くぞ」

「解った」

速足で城に向かった。無呼もしっかり付いて来ているだろう。隠形の業を使い、城に忍び込んだ。

余り関係ないが、警備はそれ程強くない。これなら愛紗達でも忍び込めたな。袁術の寝室まで迫った。無呼によれば、袁術はまだ子供だという。

だが、近寄ったところで何か違うと気付いた。起きている。袁術はこの夜中に起きている。だが、酷く怯えている。どういうことだ？

『貴方に、お願いがあります』

咄嗟に刀に手を伸ばした。俺の存在が気付かれている。どういうことだ？無呼から周囲に誰かいるという報告は入っていない。俺自身、人の気配を感じない。

『ここです』

うっすらと人影が見えた。何故かは解らない。だが、解った。この者は生きていない。俺達とは別次元の存在。

「あの子供達の母親でござるか？」

『はい。貴方に、お願いがあります』

「こうして逢うのも、何かの縁でござる。拙者に出来得るなら、するでござる」

『これを、あの子達に渡してください』

足元に袋があった。持ち上げると、一杯に入った金だった。親がしてあげられることは、もうこれ以上ないのだろう。

顔を上げると、もう人影はなかった。また、俺達と別次元の世界に旅立ったのだろう。

「戻るぞ。無呼」

「何を呟いていた?」

「気にするな」

無呼には見えなかったのだろう。俺にだけ話し掛けたということか。

城を出て、寺に戻った。皆が寝静まっている中、誰かが起きていた。

「愛紗。まだ起きていたのか」

「どうだった?」

「問題ないだろう。明日から変わるのではないか?」

それ程の怯えようだった。これで少しは改心するだろう。

翌日。街の民への施しが開始された。孤児院も早々に造られることになった。あの消えた母親の御蔭だろう。

俺達は街を出た。旅に戻ったのだ。

「しかし剣。子供達に配っていた金は、どこで手に入れたのだ?」

「まさか、昨日ついでに金も盗んできたと言うのではないだろうな?」

「そのようなこと、間違ってもしない。俺は昨日、散々脅してやっただけだ」

「剣さんの散々がどれ程なのか、少し気になります・・・」

俺は何もしていないが、俺がしたと思わせておいた方が良いだろう。知っているのは無呼だけだ。

「金は俺が貯めていたものだ。俺には必要のない金だからな」

これも本当は違う。あの母親に貰った金を均等に配った。暮らしに不自由はないだろう。

「何はともあれ、劉備殿の宝剣も取り戻し、一件落着だな」

「後は桃花村に帰るだけだ」

「のんびり帰るのだ～」

「あの、剣様」

「何だ、蝶？」

「急ぎ旅ではなかったのですか？目的地は一緒のようですが」

「大丈夫だ。期日にはまだ間がある。皆と共に戻っても支障はない」

「解りました」

今まで急いで旅を進めてきた。まだ時間は残っている。多少の猶予はある。

不意に人影が見えた。こちらに頭を下げ、消えた。来世で幸福になってくれ。その時は、子が成長した姿を見られると良いな。

母の想い（後書き）

次回予告～。

剣「原作に戻ったな」

愛「そうだな」

鈴「鈴々再登場なのだ！」

蝶「今回は大勢いますね」

剣「ああ。二、三人だけの時もあったからな」

星「私達も漸く出番という訳だ」

朱「ですが星さん。すぐにいなくなるんですよ？」

星「・・・え？」

鈴「原作ではいなくなったのだ」

星「・・・え？え？」

蝶「動揺されておりますが」

剣「放っておけ。おいしい役所を狙ったが、見事に玉砕しただけのことだ」

愛「……まあ、確かに」

剣「原作ではな。この小説では誰が消えるか」

一同「……え？」

剣「次回、『水攻め』よろしくな」

愛「ちょっ！ちょっと待て！」

剣「終わりだ」

水攻め

俺達は桃花村へ戻る道中にいる。空は激しく曇天だが、一人機嫌良く歌を歌いながら先を歩く者がいる。劉備殿だ。宝剣を取り戻せたのが余程嬉しかったのだろう。

「そういえば、白倫は歌うの得意なのか～？」

「芸術全般は取り組みましたが、今は笛と舞しか取り組んでおりません。ですから、歌は得手ではありません」

「笛ですか。聞いてみたいですね」

「合間が出来れば吹きますよ」

よく笛を吹くようになったものだ。鳳統殿との関わりの賜物だな。

「ですが劉備さん。剣を抜いて振り回すのは危ないですよ。雷が落ちてきそうですから」

「ぷぷ。朱里の奴、雷怖がってるのだ」

「鈴々ちゃん。雷が落ちると、あんなふうになるんですよ？」

木が黒く焦げている。雷が直撃したのだろう。

「雷は金属に落ちやすいので、皆さん気をつけてくださいね」

劉備殿が慌てて剣を隠す。続いて愛紗達が得物を隠した。俺達は

苦笑するしかなかった。

「皆様、村が見えますよ」

蝶の言に俺達は反応する。因みに蝶の二振りの剣は鞘に納めてある。

その村へと足を運ぶ。いつ雨が降り出してもおかしくない。屋根があるところで過ごしたいものだ。

「待て！」

村への入口に子供が二人立っている。棒を交差させ、俺達を通さないと示している。門兵のつもりか？

「お前ら！賊の手先だろ！？」

賊だと？

「この近辺に賊がいるんでしょうか？」

「そう思うか、やはり」

「はい。しかし、何故あのような子供が門兵をしているんでしょう？」

考えられるのは、人手がいないということだが。

「楽進さん達を呼んで来い！」

「皮肉だな、愛紗。黒髪の山賊狩りが賊に間違われるとは」

「そう言うな、星。愛紗が暴れたらどうする？」

「誰が暴れるか！」

「黒髪の山賊狩り？嘘付け！黒髪の山賊狩りはすっげー美人だって聞いたぞ！」

愛紗の表情が歪んでいる。まあ、失礼なことを言われているのだが。

「落ち着け。所詮子供の言うことだ」

「解っている！解っているが・・・」

「黒髪の山賊狩りっていうなら、後ろのお姉ちゃんじゃないの？」

もう一人の者が後ろにいる蝶を指差して言う。蝶は確かに美人だが、

「・・・今、何と言った？」

地の底から聞こえてくるような低い声。子供達の表情が若干引き攣った。まあ、怖いだろうな。

「落ち着け、愛紗」

「止めるな、剣。口の聞き方を教えてやる」

「第一、何故蝶のことで反応する必要がある？確かに蝶は黒髪だが」

「そ、それは・・・」

愛紗が顔を逸らす。どうした？

が、俺は愛紗から気を逸らした。村から走って来る者がいる。

「真桜ちゃん！あの人達なの！」

「おっしゃ！」

砲らしきものを構え、何かを撃ってきた。網か。逆刃刀を抜く。

裏返す。網を切り崩した。

「いいっ！？」

「話が通じる者か？ならば、話をさせて貰おう。俺達は賊ではない」

「・・・何か、そんな気がしてきたんやけど」

「私もなの～・・・」

説得をする必要はなさそうだな。どうやら認めてくれるようだ。

村に入れて貰い、ある家に入れられた。一人の女が姿勢を正して

座っている。眼前に座った。先程走ってきた二人は座っている女の

後ろに座った。

「申し訳ありません。とんだ無礼を」

「いや。面倒事は拙者が引き受ける故、気にすることはないでござ

る」

愛紗のことだ。俺が話を聞けば良いだろう。
この者達は、楽進殿、李典殿、于禁殿。曹操殿に士官を求めるべく旅をしていたが、この村の近辺の賊を気にして動けずにいる。既に三月が経っているらしい。

「聞くところによると、賊はかなりの数のようだな」

「ああ。こちらは戦える者がこの場にいる人数くらいだ」

「私は戦えませんよ!?」

「何も戦場だけが戦う場ではないでござるよ、劉備殿。そうだな、朱里？」

「はい。その通りです」

「討伐の策、任せて良いか？」

「今回は剣さんも策に参加してくれるんですね？」

「ああ。約束する」

朱里に任せておけば、まず間違いはない。策の通りに動くことも問題ない。

「では、俺は少し外れる。良いか？」

「解りました」

「剣様。どちらへ？」

「何。少し散策に出掛けるだけだ。行くぞ、愛紗」

「・・・は？」

「俺に付き合え」

愛紗を無理に引っ張り、連れ出した。戸惑いに構うこともない。

外は相変わらず曇天。いつ雨が降り出すか解らない。

口笛を吹いた。雷光がどこからか寄って来た。

「散策だ。行こうか？」

何も言わずに付いて来る。

「剣！どういう・・・」

「少し落ち着け。その為の散策でもある」

「・・・そうは言うが」

「どの道、あの場に残っても冷静でなければ役に立たない」

冷静だろうと役に立たないがな。こういうことについては朱里に任せておけば良い。聞きたいことがあれば、楽進殿達に聞くだろう。

村を歩いた。特に何かが見たい訳ではない。解ったことはある。

大人が少ない。故に、子供が賊に備えている。所詮は真似事に過ぎないが。

「‥‥剣。聞きたいことがある」

少しは冷静になっているようだ。ならば聞こう。

「何だ？」

「白倫を何故連れたんだ？」

「蝶は独り身だ。それなりの事情も抱えている。だから、連れた」

「‥‥理由はそれだけか？」

「今は同志だと思っている。まあ、何かの縁だ」

「‥‥縁、か」

愛紗が何をそれ程深く考えているのか、俺には解らない。

「‥‥剣、旅への出立時、私が言ったことを覚えているか？」

「‥‥俺は自分をそれ程礼儀知らずとは思っていない。忘れる筈がないだろう」

出立時、俺は愛紗の想いを聞いた。結局、特に何か返答した訳ではない。だが、今の状況に何の関係がある？

「‥‥私が再会した時、剣の隣に女がいれば、どう思う？」

成る程。簡単に言えば、嫉妬か。愛紗の気を考えていなかった俺が悪いと言える。そう感じているのだろう。

「確かに、俺の考えが浅はかだったな。済まなかった」

「……いや、私の勝手な想いだ」

「愛紗。この際だ。正直に伝えておこう」

「……？」

「俺に、余り好意を抱くな。その好意に応えることが出来ないのだ」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。
以前、好意を持ってくれることは素直に嬉しいと言った。そのことに偽りはない。だが、俺がその好意に応えられない」

初めて語る、俺の正直な想い。はっきり言って、俺に女を幸福にする度量はない。ただただ刀を振り、この世に泰平を齎す。このことしか考えていない。

「……剣」

「済まない」

「……いや、お主らしいと思ってな」

愛紗が微笑む。どういうことだ？何を考えている？

「私がその程度で諦めると思うか？中途半端な想いなら、抱いてい

ない」

「……後悔するぞ」

「良いさ。私が選んだ道だ」

「……解った。まあ、お前が冷静になったのならそれで良い。戻ろうか？」

「ああ」

村へと戻った。すぐに朱里から話を聞いた。水攻めをするらしい。上手くいけば殲滅、悪くても崩すことは出来るだろう。

翌日から雨が激しく降り始めた。李典殿の工作により、雨水が溜まるようにしてあるらしい。それを嵩の低くなった川に流すことで、水攻めが成功する。

「朱里。この雨の量で、必要な水が溜まる為に何日かかる？」

「明日までで充分です。この雨の量が続けばですが。

しかし、この雨は暫く続くでしょう。村人に聞いたんですが、この時期になると纏まって雨が振り続けるそうです」

周到だ。良い策を持っている。

「剣さんにも、皆さんと一緒に賊の陽動に動いて貰います。良いですか？」

「ああ」

奇襲を仕掛ける。賊を撹乱させる。そして、川沿いまで退く。正確にはおびき出すと言った方が良いだろう。そこを水攻めか。よく考えられている。

「思わず、舌を巻くな。大した策略だ」

「ありがとうございます」

朱里が笑う。こうして見れば、普通の子供だ。この裏には、鬼才としか言いようのない策略が潜んでいる。敵に回せば、これ程怖い存在はない。

「あの、剣さん。余計なことかもしれませんが、白倫さんも討伐に？」

「ああ。案ずる必要はない。このような討伐で犠牲者を出すつもりはない。現場は任せて貰おう」

「お任せします」

気にしているのは蝶だけではない。于禁殿も不安を浮かべている。楽進殿が付いているが、一応は注意するつもりだ。残りの者に心配はいらないだろう。

一日中振り続いた雨を眺めていた。早々と夜になった。皆、眠りについている。

「眠れないのか？」

愛紗の声。俺に向けた言葉ではない。

「はい……」

劉備殿の声。起きていたのか。何か話し始めた。聞いては悪いと思い、外へ出た。相変わらず雨は振り続いている。

「剣」

無呼の声。相変わらず姿はない。

「賊は？」

「警戒は薄い。が、多勢」

「予想していることだ。賊の食糧は？」

「見付けた。潤沢に蓄えられている」

「混乱に乗じて持ち出してくれ。可能な限りで良い」

「解った」

村人に配るつもりだった。問題は無呼がどれだけ運べるかだ。

翌日。雨は相変わらずだ。静かに時を待った。夜が深くなった頃、朱里から声がかかった。劉備殿と李典殿以外は集められている。

「今夜、仕掛けます。賊に奇襲を掛け、引き込み、水の力で一掃します」

動き出した。周囲は闇に包まれている。雨は都合よく止んでいる。

「蝶。大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

戦闘こそなかったが、一度二人で賊の下に乗り込んだからな。今回は人数が多い。

素早く賊の下に近付き、一斉に襲い掛かる。俺は逆刃刀を抜いた。まだ孫呉で打った刀は抜かない。あの刀を抜くにはまだ早い。

奇襲は難無く成功。愛紗、鈴々、星は二、三人を薙ぎ倒す。蝶は二人を。楽進殿と于禁殿も二人程度倒している。だが、賊の数は多い。それだけはどうにもならない。

「鈴々。我等の役目は賊をおびき出すことだ。余り深追いするなよ」

「解ってるのだ！うりゃりゃりゃりゃー！」

「解ってないだろ・・・」

「星。鈴々のことは頼む」

「解っている。しかし、こう数が多くてはどうにもならんな」

「その為の策を朱里が用意した。俺達はその策に従うだけだ」

「うむ」

鈴々を星に任せ、辺りを見渡した。愛紗は一人で青龍偃月刀を振るっている。案ずる必要はない。

「蝶」

「剣様」

一人倒したところだった。問題はなさそうだ。

「戦えているようだな」

「はい」

「気を抜くな。それだけは言っておく」

「はい」

楽進殿と于禁殿に目を向けた。楽進殿はともかく、于禁殿は何とか形になっているだけだ。楽進殿が上手く手を貸している。それ程案ずる必要はなさそうだな。

「剣！頃合いだ！退くぞ！」

「承知！」

傍にいた者を打ち倒し、愛紗が先頭で駆けていく。楽進殿と于禁殿が続き、星が鈴々を引きずって続く。そして蝶と俺が最後尾で続いた。殿をするつもりだったが、賊はそれ程の速さで追って来ている訳ではない。

川に着いた。橋を落とす。川に水は流れていない。ここから賊がはい上がってくるだろう。その賊を止めなければならない。これからが正念場だ。

「来たか」

賊の大軍がずらりと並んでいる。一斉に押し寄せてきた。川沿いの防塁のない唯一の箇所に迫る。が、その場に俺達が待ち構えている。一人一人叩き落とす。

「きりがないな……」

時間の問題だろう。だが、朱里がどこかで機を狙っている。それまで耐えれば良い。

戦闘の時間が続いた。一人として通してはいない。もう賊の大半は川に入っている。

「まだか！もう長くは持たんぞ！」

「耐えろ！星！一人でも通せば、一息になだれ込まれるぞ！」

とは言ったが、俺自身は耐えられても他の者は限界に近い。どうする？

「きゃあっ！」

考えているうちに、于禁殿が賊に川の方へ引きずり込まれた。楽進殿がつられて飛び降りる。まずいな……。

「愛紗！鈴々！星！蝶！お前達はこの場の死守だ！俺は賊の勢いを止める！」

俺も飛び降りた。着地と同時に三人を叩き伏せる。

「楽進殿！于禁殿！この場では身が持たない！上に駆け上がれ！」

「解った！剣殿も早く！」

二人が駆け上がる。俺は二人の後ろで殿を務めた。その場から動かず、立ち止まった。

「剣殿！何をしている！？早く駆け上がって来い！」

楽進殿が叫ぶが、無視した。賊の勢いを削がなければ、もう長くは持たない。水が流れてくるまで耐えるだけだ。

周囲を完全に囲まれたが、そのようなことは想定内。雄叫びを上げた。瞬時に数人を叩き伏せる。

「倒れたい者からかかって来い！いくらでも相手をしてやる！」

咆哮した。賊が後ずさる。

その時だった。鑼の音。漸く水が流れて来たようだ。周囲の怯えている者達を蹴散らし、駆け上がる。水が流れて来ている。跳躍した。間一髪で水を躱した。他の者達も無事のようだ。賊が残らず水に流されていった。

夜が明けている。日が変わっているようだ。これでこの件は解決だ。

「と、終わっていれば良かったのですが・・・」

隣にいた朱里が呟く。水を流す為、仕掛けを壊す。だが、想定していなかったことが起きた。巨石が倒れ、水の流れを止めていた。その巨石を劉備殿が自身の宝剣を避雷針にし、巨石を破壊した。結果、水は流れたが、宝剣は無くなった。

劉備殿に声はかけなかった。皆が懸命に戦った。それ故の犠牲。

割り切っていた。
愛紗が話をしている筈だ。愛紗に任せておけば良い。

「朱里。俺はここから別れる。急ぎ桃花村に戻る」

期日が迫っている。この村に滞在し過ぎた。仕方なかったが。
書籍を認めた。曹操殿に宛てたものだ。楽進殿に渡しておく。紹介についてしか書いていないが。
事後処理は全て任せた。無呼が運んで来ていた食糧は朱里の指示に任せてある。不正はまずないだろう。

「蝶。俺はこれから皆と別れる。どうする？」

「お供して宜しいですか？」

「解った。支度しろ。すぐにここを出るぞ」

「解りました」

無呼は既に準備を終えているだろう。もう一つだけしておきたいことがある。
愛紗達が村に戻って来た。すぐに愛紗に逢った。

「俺はこれから急ぎ桃花村に向かう。皆とはここで別れる」

「そうか・・・」

「連絡先を渡しておく。恐らく、ここにいる筈だ」

愛紗に紙を渡した。俺がいるのは、恐らく西涼。段恵の下だ。

「それから、一つ頼みがある。この村を出た後、水鏡殿の下に行くのだろう？」

「ああ。急ぐ旅ではないからな。水鏡殿に挨拶に行くつもりだ」

「朱里同様、水鏡殿の下で学問に取り組んでいる者がいる。望めばで構わないが、旅に連れて欲しい」

「成る程。解った」

「では、俺は行く。また逢おう」

「ああ。気をつけてな」

雷光の下に向かうと、蝶が自分の馬を連れて待っていた。

「行こうか」

雷光に乗ると、静かに駆け出した。

水攻め（後書き）

次回予告～。

剣「次は桃花村だ」

愛「・・・私達はまた非番か」

沙「でもでも、関羽さん達はよく出てる方なの～」

朱「あんまり言わないであげてください・・・」

真「せやで～。出番が消えとる人もおるんやさかい」

蝶「厳しい物言いですね」

鈴「ところで、どうしたのだ？」

凪「・・・」

沙「緊張してるらしいの～」

剣「勿体ないな。折角の出番を」

朱「言わないでくださいよ～・・・」

愛「では、また次回だ」

真「出番あるんか？うちら」

全「……」

無「（終わらせろ）」

剣「次回、『騎馬隊の組織』よろしくな」

星「……私は？」

騎馬隊の組織

俺と蝶は連日馬を走らせた。桃花村に戻っている。旅をして約一年。期日が迫っている。

「剣様。お急ぎのご様子ですが、その桃花村という村には何があるのでしょうか？」

「以前話した、俺と志を同じくする者達が集まる。その集結地が桃花村だ。そして、約束の日が迫っている」

「だからお急ぎなのですね？」

「そうだ」

皆は無事に桃花村に着いているだろうか？そのようなことを考えながら雷光を走らせた。

更に日が過ぎた。漸く桃花村が見えた。今日が期日。間に合ったな。

桃花村に入った。まずは庄屋の館に赴いた。

「剣さん。お久しぶりですね」

「紫苑。久しいな」

「愛紗さん達は旅に出ましたが、お逢いになりました？」

「ああ。偶然な」

「お兄ちゃん！久しぶり～！」

「璃々。久しぶりだな。元気にしていたか？」

「うん！元気～！」

軽く璃々の頭を撫でてやった。

「剣殿」

「石幻」

どうやら石幻は既に桃花村に着いていたようだ。静かに俺を見据えている。

「剣殿。我等同志一同、既に調練場にて集まっています。剣殿の帰りを待っていました」

「解った」

石幻に続いた。蝶だけが後ろから付いて来る。

調練場には、俺の同志達がいた。知った顔の他にも、多くの者達がいる。旅先で知り合った者、同じ志を持っていた者達を連れて来たのだろう。

「総勢三百人。剣殿、どうぞ」

石幻に促され、皆の前に立った。視線が集まった。一人一人を見返す。

「皆！よくぞ集まった！」

腹の底から声を出した。静かに聞いている。

「これから、俺達は乱世を共に生き抜く。辛く厳しい戦いが待ち構えているだろう。

だが、体を張って家族を養う者達が多分に税を取られ、嘆き苦しむこの世の中を放っておいて良いのか？

断じて否！幸福になる権利など、誰もが有している！幸福を奪う権利など、誰も有してはいない！

戦うのだ！この世にある不合理全てと！乱世を治め、幸福な世を齎すのだ！」

「おおおおおっ！」

皆が声を上げた。全員が戦う意志を持ち、幸福を求めている。

今日は桃花村に留まり、交流を深めるつもりだ。皆はそれぞれに話している。俺は石幻に報告を聞いている。

「三百人分の食糧はよく持って三日分です。馬は僅かに十頭いるだけです」

「馬の心配はいらない。しかし、三日分の食糧か。

五日分に何とか引き延ばせ。残りは道中で確保すれば良い」

「どうするんですか？」

「西涼に向かう」

「西涼ですか？」

「西涼に知人がおられるのですか？」

蝶が近寄って来た。

「貴殿は？剣殿に付いて来ていたが、名を聞きたい」

「白倫と申します」

「私は楊延です」

「西涼には俺の知人がいる。馬、食糧、そのことについては問題ない。

この話は終わりだ。石幻、蝶。皆と話したい。連れて来てくれ。数人ずつで良い」

それからは日が暮れるまで延々と話し続けた。三百人とはよく集まったと思っている。一人一人の特徴を知りたく思っていた。

日が暮れ、夜が更けた。最後に石幻と蝶を呼んだ。

「よく来たな」

「はい」

「私たちで最後ですか？」

「ああ。二人には伝えておこう。隊の編成だ」

「もうですか？」

「固定するのはまだ後だ」

皆と話したのは特徴を知る為だが、隊を編成する為でもある。

「隊は三隊。俺、石幻、蝶、俺達三人が隊長だ」

「わたくしもですか？」

「あくまで仮だ。変更があるかもしれない。俺も例外ではない。だが、仮とはいえ俺達の意思疎通は出来なければならない。解るな？」

「はい」

「とりあえずの編成はこれだ。明日から西涼に向かう」

紙を渡し、俺は眠った。石幻と蝶は二人で話して互いを知れば良い。

翌日。早朝から起き出した俺は、まだ皆が眠っている中、山中に入った。

「早いな」

「無呼か」

いつもながら、気配だけ感じる。気にせずに礫を二、三拾った。

「これを西涼にいる知人に渡してくれ。広大な牧を経営している段恵という者宛てだ」

「解った」

無呼の姿を確認し、書籍を渡す。無呼が再び姿を消した。

皆のいる場に戻ると、既に起き出し、石幻と蝶が熱心に隊の編成をしていた。声はかけず、じっと待った。

「もう、行くのね」

背後に紫苑がいる。振り向きはしなかった。

「もうこの村には戻って来ないかもしれない」

「貴方はいつも、私たちとは違う景色を見ていた。今にして、それが解ったわ」

「生きていれば、いずれまた逢うこともあるだろう。今生の別れとは、思いたくないからな」

「ええ」

「剣殿。隊の編成、終わりました」

「進発するぞ。まずは俺の隊からだ。二刻毎に石幻、蝶の順で付いて来い」

紫苑がいる方向に振り向き、目を合わせた。何も言わずに隊に近付いた。

「そういう…格好良い仕草を自然としてしまうから、貴方は乙女心を刺激するのよね…」

皆が俺を見ている。声を出した。

「行くぞ。目指すは西涼。西涼までは駆けに駆けて貰う。調練の一環だ。俺に続け」

皆も声を上げた。走り出す。雷光が隣を駆けていた。

「お前には退屈かもしれないな。だが、俺自身が皆と走ることに意味がある。良いな？」

雷光は何も言わずに、ただ俺の隣を駆けている。皆も後ろから付いて来ている。

皆が付いて来れないような速さで走ってはいない。だが、体力を付けることが目的だ。

食糧は馬に載せて走らせている。雷光にも多少載せている。とはいえ、西涼まで食糧は足りない。それも調練の一つだろう。道中で獣を捕らえるつもりでもある。

三日駆けた辺りで、皆の表情に余裕が出て来た。体力がそこそこに付いてきたのだろう。ここからが辛くもある。食糧が不足し始めるからだ。

五日目になった。四日目の食糧は獣を捕ってはいたが、皆が皆、ほぼ口にしていない。無論、俺は一口も口にしていない。ただ水を飲んだだけだ。その為か、誰も不満を口にしなかった。

段恵の牧が見えた。約一年振りか。

牧に入った。既に日が暮れている。火が方々に見えた。何者かが近付いて来た。誰かはすぐに解った。

「段恵。久しいな」

「応！まさか本当に兵を連れて来るとは思ってなかったぜ！」

「まあ、そうだろうな」

「書籍は読んたぜ。三百だろ？これだけじゃねぇ筈だ」

「別々に来た。もうじき到着するだろう」

「おっし。飯食ってねぇんだろ？それも書いてあったからな。用意してあるぜ」

「手際が良いな。助かる。だが、残りが到着してからだ」

「ま、そうだな」

俺は二、三人に石幻と蝶の隊を迎えに行くように指示を出した。すぐに駆け去って行った。食糧があり、それを食せると解れば、自ずと力は湧いてくるのだろう。残りの者には休息を命じた。

段恵と話をすることが多くある。兵糧、武具、武器、馬、話すことは多い。

「まず兵糧だが、お前と別れてから以前からやっていた商業に力を入れてな。今じゃあすっかり富豪になっちまった。御蔭で、兵糧は三百人なら数年は裕に持つぜ。武具と武器もその金でどうとでもなる。馬は言うまでもねぇな」

頼りになる。想像を遥に越えている。どこかの軍に身を寄せるまで食糧をどうするかと考えていたが、段恵に任せておけば良い。

「とにかく、剣は隊のことだけ考えとけ」

「頼りにしている。俺は明日から皆の調練だ」

「馬に乗せるところから始めるだろ？それは俺がいねぇと話にならねぇだろ」

「本当に頼りになるな。だが、馬に乗せるのはまだ早い。体力は無論必須だが、武器の扱いに拙い者も多い」

「それからか。一応聞いとくが、武器は何にするんだ？それぞれか？」

「いや。全員剣だ。馬上で速さを損なう武器は必要ない」

「徹底してんな。そんだけ考えてたってことか」

「当然だ」

考え無しに何かが出来る程、物事は甘くない。考え得ることは全て考えてきたつもりだ。

俺の騎馬隊は神速を目指す。故に軽騎兵でなければならない。動きが鈍る物を持たせるつもりはない。

「剣殿。私の隊、及び蝶の隊、到着しました」

「皆さんをこちらで休ませております。宜しいでしょうか？」

「解った。段恵」

「飯だな。すぐに用意してやる」

段恵が駆け出して行った。

「皆に食事だと伝えてやれ。それから、今日はよく休むように伝えろ。明日から厳しい調練を始めるとな」

二人が頷き、去って行った。漸く、俺一人になったか。

「無呼」

「何だ？」

やはりいたようだ。気配は感じなかったが、近くにいるような気がしていた。

「暫く仕事はないと思ってくれて良い。異変があれば知らせてくれ」

「解った」

食事が運ばれてきた。段恵、石幻、蝶が周囲に座った。

思い思いに話していることを黙って聞いていた。皆も恐らくそうしているだろう。

翌日から厳しいを始めた。剣の扱いをろくに知らない者は少なくなかった。知っていた者も徹底して一から扱いた。既に二週間が経過した。

「大したもんだな」

「段恵」

「この二週間、黙って調練を見ていたが、厳しいの何の。必ず誰か逃げ出すと思ってたぜ」

「だが、一人も逃げ出す者はいなかった。それだけ一人一人に秘められた想いが強い」

「そうみてぇだな。認めてやるぜ」

「一つ、頼みがある」

「言ってみな」

「宴を開きたい。今夜だ」

「ほう。厳しいだけじゃねぇのも、解ってる訳か。良いぜ、俺に任せておきな」

今日で武器の調練は終わりだ。明日は休息にし、明後日からは馬を遣う調練を始める。だが、皆にはここで息抜きをして貰わなくてはな。

調練を終えて、皆が戻って来た。目は疲れきっている。疲労が溜まっていて当然だ。それだけの調練を課してきた。

夜になった。巨大な火を起こしている。だが、肝心の皆は疲れきって余り感心を示していない。

「剣様。これから何か始めるのでしょうか？」

「蝶。お前はまだ余裕がありそうだな」

「はい」

「ならば、今宵は酌を付き合ってくれ」

不思議そうな顔をしたが、余り取り合わなかった。

少しずつ準備が進められていた。皆も異変に気付き始めている者が見られる。そろそろ良いだろう。

「皆。まずは二週間の調練、よく耐えた。しかし、誰も脱落する者はいなかった。

皆を労わなければならないだろう。今宵は宴だ！大いに飲み、食い、騒げ！」

呆然としていた者達が事態を理解し始めたようだ。騒ぎ始めている。大量に用意してある物を飲み食いし、散々騒いでいる。

「充分だろ？」

「ああ。呑まないか、段恵？」

「応！」

蝶が杯を四つ用意していた。石幻が俺の隣に腰を下ろした。

「厳しい調練でした」

「お前が堪えてどうする」

「申し訳ありません」

「まあ、皆の前であれだけ姿をさらけ出していたのだ。無理もない

な」

「見ていたんですか？」

「俺は調練を課しながら一人一人を見ていた。その中で、最も皆に気を配り、最も気丈に振る舞っていたのはお前だ」

蝶が四つの杯に酒を注いだ。一つを持ち、石幻に渡した。

「呑め、石幻」

「はい」

「蝶、お前もだ」

「はい」

「段恵」

「応」

「俺は恵まれている。こうして杯を交わし合える信頼出来る友がいる。

俺は未熟だ。それに甘い。だが、足りないところはお前達が補ってくれる。そう確信した」

四人で杯を掲げた。

「行くぞ。泰平の世を齎すその日まで、俺達は駆け続ける」

杯を鳴らし、四人で呑み干した。
それからのことはよく覚えている。蝶が笛を吹き、皆が軽快に唄う。用意されてあった食糧はあるだけ食ってしまった。酒はあるだけ呑み干してしまった。寝静まるまで、陽気な声はいつまでも聞こえていた。
二日後、馬を使った調練に移っていた。段恵が一人一人に合う馬を選び、皆が懸命に乗りこなそうとしていた。
段恵と意見が一致したのは、裸馬に乗れるようにすることだった。俺が裸馬の雷光に乗って見せた。雷光は全力で駆けたが、俺を振り落とすことなど一切なかった。それによって、不満は何も出なかった。
今は既に石幻と蝶が与えられた馬を裸馬で乗りこなし、皆の調練に励んでいる。

「さてと、隊として駆けられるようになるまで、どのくらいかかる？」

「まあ、そう長くはかからねぇだろ。馬を労ってやれば、自然と馬は応える」

「手入れなどは、当然だが各自でしている。時間の問題ということか」

「応」

焦ることはない。実戦はまだまだ先の話だ。

「剣」

無呼の潜めた声。俺は段恵から静かに離れた。

「どうした？」

「客」

「俺にか？」

「そうだ」

ここに俺がいると知っているのは、精々愛紗くらいだ。誰が来たというのだ？

「愛紗か？」

「楽進」

何故楽進殿がここに来る？

「おい！剣！お前に客だ！」

段恵の呼び声に応え、客人を迎えた。無呼の言う通り、楽進殿だった。

「楽進殿。よくここが解ったでござるな？」

「関羽殿に聞きました」

「それで、このようなところまで拙者に用でござるか？」

「はい。華琳様から書籍を預かっています」

「曹操殿から？」

書籍を受け取り、目を通す。ふむ・・・・。

「・・・拙者の力を必要としているでござるか？」

「そのようです」

「曹操殿には借りがあるでござるからな。参るでござるよ」

「では、早速」

「少し処理することがあるでござる。待って頂けるでござるか？」

「解りました」

黄巾の乱。地方で大規模な反乱が起きた。全員が同じ黄の布を巻いていることからそう呼ばれている。討伐の命が下され、曹操殿と袁術殿が出陣した。桃花村にいる愛紗達義勇軍にも援軍を頼み、参陣したらしい。俺にも要請がきた。

軍で行くつもりはない。まだ戦に出られる軍ではない。俺一人で行く。段恵、石幻、蝶を呼んだ。

「俺は暫く曹操殿の下に行く。調練を続けてくれ。手は抜くなよ」

「曹操様の下で何かあるのですか？」

「借りを返してくる」

「わたくしも」

「駄目だ。石幻と蝶で皆の調練を続けろ」

「解りました。剣殿が戻るまでに、隊で駆けられるようにしておきます」

「頼む。段恵、頼んでおく」

「応」

「剣様・・・・」

「どうした？」

蝶が黙って見詰めてくる。何か想うことがあるのか？

「・・・お気をつけて」

「ああ。行ってくる」

何かあるのかと思ったが、気にしないでおく。俺は楽進殿に近寄り、雷光に飛び乗った。

「待たせたでござる。行くでござるか？」

「行きましょう」

楽進殿と共に駆け出した。

「おい、蝶」

「段恵様。何でしょうか？」

「剣に気があるな？」

段恵様は剣様のことを平気で呼び捨てにします。剣様が何も仰らないので気にしないようにしていますが。しかし、今段恵様は何と？

「何だ？自覚がねぇのか？」

「以前、同じことを言われたことがありますが」

「そうかい。んじゃ、さっき剣と別れる時、どう思った？」

「それは・・・」

言葉がすぐに出てきませんでした。わたくしは確かにあの時、心に蟠りを感じていました。

「そいつが、恋ってもんだ。相手は剣。離れてやっと実感が湧いたんじゃねぇか？ずっと一緒だったんだろ？」

「・・・何となく、本当に何となくですが、解る気がいたします」

「なら良い。相手はあの剣という切れ者だが、お前の容麗な姿も負

けちゃいねぇと俺は思うぜ」

「段恵様は、剣様をどのように感じておられますか？」

「英傑だろうな。あいつは間違いなく英雄にはなれねぇ。あいつ自身が解っちゃいるがな」

剣様は、いずれどこかの軍に身を寄せると仰っていました。御自身で天下を、ということは考えておられないのでしょう。

「恋路については完全にお前次第だ。頑張んな」

「ありがとうございます」

騎馬隊の組織（後書き）

次回予告～。

剣「石幻、段恵」

石「はい」

段「久しぶりの登場だな」

剣「まあ、次回からまた出番はないがな」

段「何だそりゃ？」

石「いずれ出番はあるでしょう」

蝶「わたくしも暫くは出番がないですね」

剣「して、次回からは黄巾党絡みだ」

蝶「剣様。お気をつけて」

剣「ああ。次回、『黄巾党』よろしくな」

黄巾党

楽進殿に伴われ、黄巾党討伐の陣営に到着した。曹操殿が出迎えてくれた。

「曹操殿自ら出迎えとは、痛み入るでござる」

「あら。私と貴方の仲じゃない。凪達を私の下に送ってくれたことには礼を言うわ」

「礼を言われるようなことは何もしていないでござる。拙者はただ紹介状を認めただけでござるから」

「まあ、入りなさい」

曹操殿に伴われ、兵舎に入った。朱里と荀イク殿が地図に見入って何かを話している。

「剣さん!?何故ここに?」

「朱里の言うことは拙者も聞きたいでござる。何故呼ばれたのでござる?」

「貴方は陣営に忍び込むのはお手の物でしょう?」

「まあ、そうでござるが。間者として働く気はないでござる」

「解っているわ。貴方がここに来たのも、私への借りを返す為でしょう?」

「察しの通りでござる」

「ここに来てから、歌声が聞こえているわね？」

確かに、綺麗な歌声が聞こえていた。戦時に何をしているのかと思っていたが、曹操殿も認めているのか。

「黄巾党の首領である張三姉妹は歌を歌うことで党の士気を高めています。ある妖術書を使って・・・」

朱里が説明してくれた。しかし、妖術書だと？

「太平妖術っていう厄介なものがあるらしいわ。その力によって、党の者達は操られているようよ」

「その妖術を跳ね返すには、こっちも歌を歌って、操られている奴らをこっちに引き込む必要があるのよ。だから、歌」

「話は解ったでござる。だからこそ、話を最初に戻して欲しいでござる」

朱里、曹操殿、荀イク殿の説明は理解した。だが、今までの要素に俺が必要とされる理由がない。

「剣。貴方には主立った者達と一緒に黄巾党に忍び込んで貰うわ。そして、歌を歌って黄巾党の気を引き付けているうちに太平妖術を奪って欲しいのよ」

「簡単に言うでござるな」

「ええ。だからこそ、貴方を呼んだのよ」

「承知したでござる。出来得るなら、してみるでござる」

退出した。それぞれが何か作業をしている。簡単に目を配り、陣営を密かに出た。

「行くか」

「西に十里」

無呼の声。歩き出した。目指すは黄巾党の陣営。策の実行を待つことはない。俺がその妖術書を奪えば良い。

無理をするつもりはない。無呼のみを連れて忍び込むだけだ。奪えれば奪う。その程度しか考えていない。

陣営に近付き、忍び込んだ。警戒は薄い。楽に入り込める。討伐軍の陣営で造られている会場も入り込めるだろう。

「別行動をしよう。六刻後にここで」

陣営を歩き回った。見たところ、ただ張三姉妹の歌を楽しみにしているだけのようだ。張三姉妹のいる兵舎、というより部屋に忍び込んだ。特に強く警戒している訳ではない。

不意に、目を奪われた。一冊の本。この本からまがまがしい妖気が漂っているように感じる。太平妖術という書なのだろう。触れるのは危険だ。そう判断した。

六刻後、無呼と別れた場に戻った。無呼の声が聞こえてきた。

「楽に撹乱出来る」

「そうだな。だが、意味はないだろう」

「奪いに行くか？」

「辞めておく。あの妖術書に触れるのは危険だ。取り込まれても不思議ではない」

「どうする？」

「一度戻る。焦ることはない」

「解った」

すぐに討伐軍陣営に戻った。

私は傍に秋蘭を付けて凪を呼んだ。

「凪。剣のことで解ったことを報告しなさい。剣は西涼で何をしていたのかしら？」

「軍の調練らしきことをしているように見えました。乗馬の訓練のような」

「……旅を終えて、動き出したということね」

「恐らくそうでしょう。しかし、いつの間に兵を集めたのか…」

「凪。他に聞いたことは？」

「私も何故調練らしきことをしているか気になったので、それとなく聞いてみたのですが…」

「答えなかったか？」

「いえ。商人に護衛団として雇われたと」

「何人くらいいたのかしら？」

「二百から三百かと」

「解ったわ。下がって良い」

「はい」

凪が退出するのを見てから、思考を巡らせた。

「剣が護衛団として雇われるなど、まずありえないと思うのですが」

「同感ね。そのような器量なら、私の目がどうかしていたわ」

「偽りでしょう。間違いありません」

偽る理由はいくらでもあげられる。第一、人に従うことを嫌っている剣が雇われることを素直に認めるとは思えない。

「秋蘭。偽りとして、何を考えていると思う？」

「西涼と言えば馬です。とすれば、騎馬隊の編成でしょうか？二百から三百なら、妥当かと思えます」

「凪は商人の護衛団と言っていたわね。その商人と親しくなり、護衛団を築くと騙した。そして、自分の騎馬隊にする」

「剣がそのようなことをするでしょうか？」

「しないでしょうね」

可能性の一つとして考えただけ。そのようなことをするのなら、私の下にはいらない。

「商人とは親しくなったとして、僅かな時間に人を集めたというのが解らないわね・・・」

しかも、剣は誰も連れずに一人で来た。白倫を連れていれば、いくらか聞けたかもしれないけど、その辺りも周到ということね。

「誰か派遣して探るようにしてみては？」

「剣のことよ。下手な小細工は不信感を抱かせるだけ」

「では？」

直接、正直に聞く。下策に見えるけれど、正攻法で行動するのが最も正しい。

夜更けに陣に戻った。兵舎に入ると、愛紗達もいた。主立った者達は全員いる。一人知らない男がいた。軍議でも行われているのだろう。

「曹操殿」

声をかけ、姿を見せた。皆が動揺する中、ただ一人曹操殿だけが口を開いた。

「何をしていたのかしら？」

「散歩でござるかな」

「この非常時に、しかも陣営内から姿を消してかしら？」

「拙者がいたところで、何が出来た訳ではないでござる」

「散歩の行き先は黄巾党陣営ですね？」

朱里が口を開いた。落ち着きを取り戻している。が、俺は朱里の隣にいる者に目を向けた。

「旅に出たのでござるな、鳳統殿」

「……あわわ」

軽く微笑み、朱里を見た。

「察しの通りだ。黄巾党陣営に行ってきた」

「勝手なことをするのね」

「助太刀に来たでござるが、下に付いた覚えはないでござる」

「つまり？」

「貴殿の命に従う気はない、ということでござる」

「そこまではっきり言われると、いっそ清々しいわね」

にやりと笑う曹操殿。何か企みでもあったか？

「拙者が見てきた結論としては、太平妖術という書を奪うことは不可能でござる」

「どういうことですか？」

「太平妖術の妖気に取り込まれてしまうからだ」

俺ではなく、知らない男が答えた。

「賢明な判断だな」

「貴殿は？」

「俺は華陀。お主も妖術を使えるようだな。名は何という？」

「剣でござる。何か勘違いしているようでござるが、拙者は妖術など一切使えないでござるよ？」

「先程突然現れたのは、どう説明する？」

「ちょっとした種があるだけでござる。それを妖術とは言わないでござる」

「ならば、その種とは？」

「そこまで明かす義理はないでござる」

明かしたところで、何か出来る訳ではないがな。

「して、その口ぶりから察するに、貴殿は妖術に詳しそうでござるな。太平妖術について知っているのでござろう？何とか出来るでござるか？」

「俺が封印する」

「ならば結構でござる」

「その道を切り開く為の、今回の策です」

「剣が奪えれば、それで終わりだったのだけれど。そう簡単にはいかないわね」

「入り込むのは難しくないでござる。ただ、目論見が上手くいかなかった時が危険でござるな」

「偽善者を出さない為です！頑張りましょう！」

劉備殿が胸を張る。犠牲を出したくない想いは解る。ただ操られているだけなのだからな。

「とにかく、明日の仕掛けで決めましょう。皆さん、ご武運を」

「策に失敗した場合は、春蘭と秋蘭が兵を率いて乗り込むわ」

「それまでは愛紗さん達で時間を稼いでください」

一連の概要は理解できた。上手くいくか全く解らない。いざという時は本当に偽善者が出るだろうな。

これで軍議は散会した。問題はこれからだ。何故か曹操殿に残らされた。残っているのは曹操殿だけだ。

「何でござろう？」

「凪に聞いたわ。西涼で何をしているのかしら？」

「商人の護衛団として雇われただけでござる」

「見え透いた冗談は面白くないわ。第一、貴方は人の命を聞くことが嫌いな筈よ。でないと、さっきのような切り返しは出来ないわ」

やはり、試されていたか。喰えないものだ。だが、

「一つ、訂正しておくでござる。拙者は縛られることが嫌いなだけでござる。命を聞くことにさほど抵抗は持っていないでござる」

「私の命は聞かないのね」

「そのようなことはないでござるよ。下に付いた訳ではないので、少し言い返したくなるでござる」

「私の下に付くことは考えていないのね？」

「諦めたでござるか？」

「冗談よ。もし頷いていたら、首を落としていたけれど」

「怖いでござるなぁ」

本当に首を落としているかもしれない。苛烈なものは持っているだろう。

「それで？西涼で何をしているの？」

こうして、たった一人で向き合って愚直に聞いてくる。腹を括っているのだろう。大器な御仁だ。

「解ったでござる。こうして真っ正面から堂々と聞かれているのでござる。適当に誤魔化すのは無しにするでござる」

「聞きたいわね」

「商人は拙者の知人、段恵という者でござる」

「聞いたことがあるわ。確か、この一年で急激に目立った者よ。

……成る程。貴方の旅の期間と完全に一致しているわね」

「拙者が旅で最初に向かった地が西涼でござるからな」

「何かを見越しているのね？」

「西涼と言えば、まず何を思い浮かべるでござるか？」

「馬ね」

「そうでござる。拙者はそれを狙ったでござる。そして、広大な牧を経営している段恵と知り合ったでござる。

正直、あれ程の商人になっているとは思わなかったでござる。御蔭で幾つか考える必要がなくなったでござるな」

「つまり、騎馬隊。騎馬隊のことは考えていたと見えるわね」

「察しの通りでござる。騎馬隊を率いることは元々考えていたでござるからな」

「一つ、全く解らないことがあるわ」

「拙者がどのように人を集めたか、でござるな？」

「ええ」

「桃花村にいた頃、拙者を慕う者達が百名いたでござる。その者達を率いると決め、全て拙者と同様に旅に出したでござる。その者達が国を回り、同じ志を持つ同志を募ったでござる」

「……納得出来たわ」

「拙者も、まさかあれ程いるとは思っていなかったでござる」

深く思索に入る曹操殿に付け足す。これだけは本当に想定外だった。嬉しい誤算だ。

「……何の為に騎馬隊を組織するのかしら？」

「泰平の世を築く為。その想いは変わらないでござる」

「貴方の騎馬隊だけで出来る筈はない、なんて言わせないわね？」

「何を当然のことを言っているでござる？」

「悪かったわ」

解りきっていることを言ったと、自分でも解っていたようだ。確認しただけだろう。

「どこかに寄るつもりでしょう？」

「そうでござる。拙者は泰平の世を築く為に戦うのみ。自らの国を築く気はないでござる」

「つまり、貴方が信頼のおける国に付く。という訳ね」

「そうでござる」

よくぞこれだけ正直に話したものだ。偽らずに話したのは、曹操

殿が正直に話したからだろう。

「話は終わりね」

「これにて失礼するでござる」

話すだけ話した後、俺は静かに退出した。華陀殿と話す為、声をかけ、華陀殿のいる兵舎に入った。

「何か？」

「貴殿は太平妖術という書を知っているのでござろう？そして、封印出来るそうでござるな？」

「うむ。それで、何が聞きたい？」

「今回、太平妖術を封印したとして、他に妖術書はあるでござるか？太平妖術一つを封印したところで、他の書があれば意味がないでござろう？」

「妖術書はあるにはある。だが、太平妖術程凶悪な書はない」

人々の怨嗟によって妖力を溜める。それが太平妖術。その妖力は無尽蔵にあるらしい。

俺に妖術の心得などない。だが、人々の怨嗟を糧にするなど、許せる所業ではない。

「太平妖術の封印は貴殿に任せるでござる。拙者は道を切り開くでござる」

「任せておけ」

俺は静かに退出した。どこかで眠らなければな。

「剣」

「愛紗。どうした？」

「お前の兵舎はないだろう？私達のところに来ないか？」

「済まない。助かる」

愛紗に連れられ、兵舎に入った。見回すと、鈴々、朱里、劉備殿、鳳統殿がいる。

「星はどうした？姿が見えないが」

「えっと、消えたんです。水鏡先生の下に行く時に」

まあ、何かしらの考えがあるのだろう。心配はいらない。

「旅はどうでござる、鳳統殿？」

「あわわ・・・楽しかったです。いろいろと見るものがありました」

「そうでござるか。そして、愛紗達の義勇軍に入ったのでござるか？」

「はい」

「雛里ちゃんの軍学は凄いんですよ」

朱里が褒めるのならば、かなりのものなのだろう。

「そういえば、旗は劉のままだったな。愛紗が率いているのではないのか？」

「私と劉備殿は姉妹になったんだ。劉備殿が姉でな」

「えへへ～」

劉備殿が愛紗の姉。まあ、詳しくは聞かなくても良いだろう。

明日の為、俺達は早めに就寝した。犠牲者が出なければ良いが・・・。

黄巾党（後書き）

次回予告～。

剣「次回は黄巾党終盤だ」

愛「歌合戦だな」

剣「確か、袁術殿達が歌うと言っていたな。俺が兵舎に入った時はいなかったが」

朱「歌い疲れて寝ていたそうです」

鈴「まだまだ子供なのだ」

雛「・・・鈴々ちゃんもあんまり変わりません」

鈴「五月蝿いのだー！」

雛「あわわわ！」

桃「もう、子供なんだから～」

剣「・・・やれやれ。ここは平和だな」

朱「星さんはどうしたんでしょう？」

剣「他人の出番を気にする余裕があるのだな」

朱「はわ！？」

愛「・・・怖いな」

桃「因みに、私は後書き初登場ですよ～」

剣「まあ、なるようになる。次回、『死域』よろしくな」

死域

俺達は黄巾党の陣営に忍び込んだ。忍び込むという言い方が適切かどうか疑いたくなるような、大胆極まりなかったが。

単純だ。目立つように歌うには舞台が必要。つまり、黄巾党陣営にもその舞台はある。舞台が入れば、黄巾党は新しい舞台が入って来たとしか思わなかっただろう。

「上手く入り込めたようだな」

「入り込むことは難しくない。出るのは不可能だろう」

「鈴々がいれば簡単なのだ」

「勇むのは結構だがな、鈴々。数が違い過ぎる」

俺達はここにいる十数人だけだ。対する黄巾党は武術を学んだ者がいないと考えられているとはいえ、数は約三千。とてもではない。

万が一の場合は、夏侯姉妹が率いる黒騎兵二千騎が参戦してくる。そうなればどうとでもなるが、黄巾党は多勢の犠牲を出すだろう。それは俺達の望むことではない。

「そろそろ良いか。始めよう。華陀殿」

「承知！」

華陀殿が舞台を起動させる。動き始めた。

「よっしゃ！上手く動いとるみたいやな」

綺麗な歌声が聞こえてきた。大きな歓声も聞こえてくる。上手くいっているようだな。

「流石、張三姉妹の好きな奴等が集まってるだけあって、この手の演出には馴れとるで」

確かに、異様な盛り上がりを見せているようだ。動き出すには良い機会だろう。

「華陀殿。先に行っているぞ」

「うむ。任せたぞ」

俺は密かに抜け出した。この場は異様な盛り上がりである以上、俺に気を配る者はいない。

黄巾党陣営の中心、張三姉妹の舞台に入り込んだ。舞台に上がろうとしていたところだ。良い頃合いだ。

「待て」

「なっ!?あんた誰よ!?」

「官軍の手先・・・?」

「そうとも言える。貴殿等に一つ提案がある」

「提案?」

三人が警戒を示す。無理もないが。いや、一人は事態をよく理解

していないか。

「もうじき、官軍がここを襲う」

「なんですって!?」

「…官軍が来ても、ここにいるみんなを動員すれば」

「甘いな。この混乱の中、貴殿等の言うことを聞く者がいるか?」

「私達が歌を歌えば…」

「歌わせると思うか?」

その為に俺はここに来た。華陀殿もすぐに来るだろう。そこで太平妖術を封印すれば良い。

「退きなさい!」

「退かぬよ」

「退け!」

「貴殿等が歌えば、ここに集まっている者達は無事では済まないだろう。犠牲を出したいのか?」

「…歌わなければ、私達は殺されるんじゃ?」

「殺されるようなことをしているという、自覚はあるようだな」

「嫌だ～！そんなの嫌～！」

「殺されるのを黙って待ってる訳ないでしょ！」

大きく息を吐き出した。

「よく俺の話を聞け。提案があると言った筈だ」

「・・・何よ？」

「大人しく投降しろ。この陣営を解し、太平妖術を差し出せ」

「えっと、それで私達はどうなるの？」

「俺が曹操殿にそう提案してある。多少の労役はあるかもしれないが、命まで取りはしない」

「労役～！？」

「悪いことをした。そのくらいは解っている筈だ。何もない程、甘くはない」

三人で顔を見合わせる。悩むのは当然だろうが。

「一つ、釘を刺しておく。提案に従わないというのなら、少し痛い想いをして貰う」

「ちょっと！それじゃ脅迫と一緒じゃない！」

「当たり前だ。犠牲者が出るのは御免なのでな」

「うっ・・・」

逆刃刀に手をかけた。このような駆け引きは俺の好みではないが、致し方ない。

「・・・解ったわ。解散させて、太平妖術を差し出せば良いのね？」

「良いよね、地和ちゃん？」

「・・・うん」

「良し。ならば、そう動いて貰おう」

舞台に三人で駆け出して行った。少し見張っていたが、しっかりと交渉通りに動いているようだ。黄巾党はこれで解散。血を流さずに済んだな。

「あの・・・」

「何だ？」

あの三人がまた俺のところに戻って来た。

「みんなが、最後に少し歌って欲しいって・・・」

それで、俺の下に頼みに来たか。

「解った。俺もそこまで鬼ではない。歌うと良い」

表情に笑みが戻り、再び駆け出して行った。俺は愛紗達がいる舞台に戻った。

「剣！どこに行っていたんだ？事態が変わってきたぞ！」

「知っている。もう大丈夫だ。何の心配もない」

「・・・お前の働きか？」

「さあな。

華陀殿、張三姉妹に言えば、すぐに太平妖術を差し出す筈でござる。封印は任せるでござる」

「うむ。任せておけ」

俺は舞台を出て、一人で曹操殿の下に向かった。あの三姉妹のことを交渉しなければな。

綺麗な歌声と大きな歓声を聞きながら、俺は曹操殿の陣営に向かった。

「剣さん！」

「朱里か」

「黄巾党は！？」

「大丈夫だ。もう解決したと思って良いだろう」

「何かしたのですね～？」

この者は確か、曹操殿に仕えている程イク殿だったな。

「乱を治める為、少し動いただけでござる。では、拙者は曹操殿の下に行ってくるでござる」

何か不思議な感覚を思わせる程イク殿だが、そこは気にしないでおく。

「失礼するでござる、曹操殿」

「剣？何故、貴方がここに？」

「報告するでござる。黄巾党は本日をもって解散。乱を治めたでござる」

「貴方がここに来たから何かあると思っていたけれど、いきなりその報告とはね・・・」

「本当でしょうね？」

「そのようなつまらない冗談を言ってどうなるでござる、荀イク殿？」

「やめなさい、桂花。剣の言っていることは恐らく本当よ」

まあ、曹操殿の信頼は篤いようだな。

「それで、黄巾党をこれからどうするかでござる」

「その為に貴方はここに来たのでしょう？」

「左様でござる」

「貴方の案は？」

「罪を認めた上での投降故、罪は軽くして欲しいでござる」

「でしょうね。貴方のこと、そう言うと思ったわ」

「それで、受け入れてくれるでござるか？」

「見せしめの為にも、多少の罰は与えるべきかと」

「そうね。異存は？」

「多少の罰は必要でござる。それは貴殿の采配に一存するでござる」

「良いでしょう」

「では、拙者はこれにて失礼するでござる」

「待ちなさい。どこへ行くつもりかしら？」

「現場に戻るでござる。全て終わらせれば、すぐに西涼に戻るでござる」

ここに戻って来たのは、曹操殿に報告する為でもあるが、雷光を迎えに来る為でもある。

「随分急いでるわね」

「西涼を離れてもう一週間が経っているでござる。そろそろ頃合いでござるよ」

「そう。なら、また逢いましょう」

「そうでござるな」

退出し、雷光を呼ぶ。飛び乗り、駆け出した。もう一度黄巾党陣営に向かう。

俺が黄巾党陣営に到着した時、土台が撤収されているところだった。すぐに華陀殿を捜した。太平妖術を封印したか聞いておきたい。

人々の怨嗟を糧に妖力を溜める妖術書。改めて考えても、悍ましいとしか思えない。封印しなければならないということはよく解る。

「華陀殿」

「おお、剣殿。今、封印するところだ」

張三姉妹から太平妖術を受け取るところだった。これで、華陀殿が封印すれば・・・。

良いと思っていた。不意に知らない者の気を感じない限り。

「華陀殿！」

叫んだ時、俺は既に逆刃刀を抜いていた。刀を振る。しかし、何か得体の知れないものに阻まれていた。

「無粋な方ですね。いきなり刀を振り上げるとは」

俺の斬撃を受け止めて尚、この余裕。しかし、どのように止めた？

「貴様…何者だ？」

「私が聞きたいですね。貴方の存在を、私は知らない」

「于吉！」

張三姉妹が叫ぶ。この者を知っているようだ。

「剣殿！そいつは間違いなく妖術使いだ！」

成る程。俺の斬撃を妖術で受けたとなれば、納得は出来る。

「下がっていろ」

逆刃刀を鞘に納める。

この者は危険だ。何か、普通では考えられないような違和感を感じている。この者は、ここで捕らえる。

「刀を鞘に納めるとは、私を逃がして頂けるのですね？」

「誰がそのようなことを言った？」

踏み込む。飛天御剣流、神速の抜刀術！

火花が散った。

「ふふふ。その程度、私が防げないとでも思いましたか？」

妖術の盾によって防がれている。だが、

「がっ……！ぐっ……！」

「油断したな……」

苦しげな声を上げる。俺の鞘が奴の脇腹を打ち付けている。

「飛天御剣流、双龍閃。

貴様に打ち止められるのは百も承知。だが、俺の抜刀術は二段構え。甘く考えたな」

脇腹を抑え、ひざまずいた。この者には聞きたいことがある。

「貴様……何者だ……？この歴史に存在する者ではないな……」

確かに、俺は転生することでこの場にいる。何故そのことを知っている？

「知っていることは全て話して貰おう。太平妖術のこと、そして、今言った歴史とは何だ？」

気を抜いてはいなかった。だからこそ、新たに近付く気配に反応出来た。

咄嗟だった。刀を盾に、襲ってきた衝撃を後方に跳ぶことで緩和した。腕に痺れが残っている。

「誰だ！？」

「まさか、御老体に助けられるとは思いませんでしたよ」

「油断しておるからじゃ。わしの手を煩わせおって」

俺の問には答えず、于吉と話す新たに現れた御老体。だが、俺に与えた衝撃の正体は何だ？

「ここはわしに任せ、さっさと太平妖術を持ち帰れぃ」

その瞬間、俺は距離を詰めた。刀を振る。

キィン！

「無粋じゃのぅ。老体に刀を向けるとは」

止められている。腕にだ。金属音から考えて、腕に何か仕込んでいる。恐らく、この御老体は徒手空拳の使い手。相当な腕だ。

「貴殿こそ、拙者を突然襲ったのではござらんか？」

「そうじゃったかのぅ？」

「御老体は記憶が追い付かないでござるか？」

一度、距離を開けた。既にこの御老体との対峙に集中している。太平妖術を持っている于吉は諦めた。とてもではないが、この状況で于吉に意識を向ける余裕はない。

「お任せしましょう」

于吉が消えた。華陀殿が追おうとしていたが、無駄だった。意識は全てこの御老体に向けている。一瞬も気を抜けない。殺気

が肌を刺してくる。

「お主、何者じゃ？」

「先に自ら名乗るべきではござらんか？」

「確かにそうじゃのぅ。わしは左慈という者じゃ」

「剣でござる」

「お主、この歴史にはおらぬ者じゃな？」

「先程からそう言われているでござるが、何のことでござる？」

「知らぬならそれで良いわい。不適切な存在は排除するのみじゃ」

「拙者としても、貴殿には聞きたいことがあるでござる」

俺と御老体の間に、静寂が訪れた。肌には絶え間無く殺気が突き刺さる。どちらも動かない。動けない。

時が流れた。額に汗が浮かぶ。一度だけ大きく息を吸った。

動き出せば、どちらかが倒れるまで止まらないだろう。それ程、この状況は緊迫している。

「剣。お主、戻って来ていたのか」

均衡が崩れた。御老体が動く。愛紗に気を取られた俺は、一瞬動き出しが遅れた。

鋭い拳打が飛んでくる。刀を盾に防ぐ。が、蹴りには対応が遅れた。

キィィィン！

「がっ……！」

受けた逆刃刀が真っ二つに折れた。更に迫る拳打を、躱すことが出来なかった。

「ごほっ！がっ……！」

口内に血が溢れる。

「つ、剣！」

愛紗の声。だが、上手く言葉を紡ぐことが出来ない。

「まだ生きているようじゃな。身体を捩ることで急所を躱すとは、やはりただ者ではないようじゃな」

殺される。愛紗に気を取られた、一瞬の気の緩みが死を招くか。

「さて、ここにおる者達の口を封じねばならぬが、頼んだところで無駄じゃろうな」

「き……さま……」

「苦しそうじゃのぅ。今、楽にしてやるわい！」

御老体が手を上げた瞬間、動かない筈の身体が、勝手に動いた。跳躍していた。立っている。自分の足で、しっかりと立っている。

「貴様！まだ動けたというのか！？」

「御老体……貴様は危険だ。ここで、俺が斬る」

刀を抜いた。もう一振り、俺の魂が篭る刀を。

「剣！」

「……下がっていろ、愛紗」

再び、御老体の眼前に立った。身体は動く。俺はまだ戦える。まだ死ねない。

「参る」

対峙には移らなかった。もう長時間の戦闘は身体が耐えられない。

「死に損ないが！」

刀と拳打が交錯する。擦れ違う。一合、二合。

「ぬうっ！」

「気迫に押されたか？」

三合目。斬った。

「ぬぐっ！」

「やった！」

いや、まだだ。寸で躱された。浅い。

「己っ！」

もう一度、踏み込め。

「くっ・・・・」

身体が動かない。これ以上は言うことを聞かない。限界を超え、更に奥の死域という領域に入っていたのだろうが、身体が悲鳴をあげている。

「・・・どうやら、貴様もこれまでのようじゃのぅ」

「・・・貴様もだ」

「その命、いずれわしが貰う。覚えておくんじゃな」

御老体が姿を消した。助かったか・・・。

急激に意識が薄れていった。立っていられないことが解る。そのまま倒れ伏した。意識が消えた・・・。

死域（後書き）

次回予告～。

華蝶仮面「華蝶仮面、参上！」

朱「剣さんが倒れちゃったからって、そんな登場しないでください！」

地「そうそう。本編にも出てないんだから、引っ込んでなさいよ」

華蝶仮面「……（ずーん）」

朱「……今の一言は急所に当たったようですね」

雛「あわわ……」

鈴「剣はどうなったのだ？」

華「次回解るわ。そして、新しい刀を抜いた剣の心情もね」

雛「……じ、次回もお楽しみに」

朱「では、次回、『陣払い』よろしくお願いします」

陣払い

黄巾の乱から三日

「うっ……」

ここは……？

「目が覚めたか？」

「愛紗……」

俺は寝ていたようだ。愛紗がすぐ傍にいる。死んではいないようだな。

「大丈夫か？」

「ああ……」

俺は、あの左慈という御老体と死闘をしたのだったな。得体の知れない相手だった。

「おお。目が覚めたようだな」

「華陀殿……」

「暫くは動くな。内蔵の一部が痛手を受けている。あの時気を失わ

なかったのが奇跡と思える程だ」

「華陀殿がお主を診てくれたんだ。暫く寝ていれば治るそうだ」

「どのくらい寝ていれば治るでござる？」

「一週間程だ」

長いな。西涼が気にかかる。だが、医者の許しが出るまでは動かない方が良い。

「ここは？」

「黄巾党討伐軍の陣営がそのまま残っている。事後処理があったからな」

身体を起こした。まだ思い通りに動きそうにない。

「焦る必要はないわ」

「・・・曹操殿」

曹操殿が入って来た。

「西涼に凪を遣わせたわ。状況の把握は出来る筈よ」

状況の把握が出来るだけだ。騎馬隊の調練は滞る。口には出さないが。

「さて、話せるわね？少し聞きたいことがあるわ」

概ね見当が付く。俺がこうして倒していることについて詳しく聞きたいのだろう。

「太平妖術を封印出来なかったことについて咎めるつもりはないわ。ただ、このことは私を含めてここいる者しか知らないわ。張三姉妹を除いてね。張三姉妹については、きつく口止めしてあるわ」

「それで、拙者に何を聞きたいのでござる？」

「貴方は、その左慈という老体と張三姉妹を護りながら対峙したわね？」

確かに、その通りではあった。あの御老体は一度渡り合った後、楽には勝てないとでも悟ったのだろう。

それで、意識を少し張三姉妹に向けた。俺はその意識を牽制しなければならなかった。だからこそ、俺に不利な状況になった。張三姉妹を見殺しにすれば、状況は好転したかもしれない。だが、俺の本意ではない。

「そして、関羽の参入で崩れた」

愛紗が俯いた。だが、事実ではある。

「どうやら当たりのようね。まあ、済んだことはもう良いわ。私が聞きたいのは、その二人のことよ」

「何か聞かれたところで、何も答えられないでござる」

「つまり、何も知らないという訳ね。なら、歴史に登場していない

とはどういう意味かしら?」

どうやら、かなり細かいことまで知っているようだ。

「拙者が知りたいことでござる。何が何やら、解らないでござる」

俺は確かに、本来この場に存在する人間ではない。だが、何故そのことを奴らは知っていた?疑問に思っても、口にすることは出来ない。

「そう。解ったわ」

「拙者から聞きたい。拙者の刀は?手元にないのでござる」

「これかしら?」

刀を渡された。逆刃刀ではない方の刀。一瞬、身体の中が逆流した感覚になった。

「ぐっ!おえっ‥‥」

「ちょっと!剣!?」

吐いた。刀を見た瞬間。何故かは理解出来ている。血の臭いだ。俺はあの御老体を斬った。その血は拭き取られているが、臭いがこびりついている。

「やはりまだ治ってはいない。内蔵を痛めたのだ」

そのような理由ではない。が、口にはしない。

一度吐いた。今、吐いてしまえ。これから更に斬る。殺すことになるのだ。全て吐き出してしまえ。

ひとしきり吐いた。吐き出し続けた。身体の中がすっきりしている。

「くっ・・・」

「大丈夫か？剣」

「問題ない。もう大丈夫だ」

「・・・なら良いわ。もう少し、事後処理で陣を引き取らないから、ゆっくり休みなさい」

「感謝するでござる」

曹操殿が出ていく。が、もう一つ。

「拙者の逆刃刀は？」

「関羽に聞きなさい」

振り返らずに言い、そのまま出ていった。

愛紗を見ると、黙って逆刃刀を差し出した。真っ二つに折れた逆刃刀を。

「済まない・・・。私の所為で・・・」

「気にするな。お前の所為ではない。それより、犠牲者が出なくて良かった」

「だが、お主が・・・」

「勘違いするな。俺は死んでいない」

「あ、ああ・・・」

愛紗の表情は暗い。俺のことを気にしているのは解る。

「愛紗。余り気にするな」

愛紗の頭に触れ、軽く撫でた。

「身体の傷は癒える。折れた逆刃刀は打ち直せる。終わった訳ではない。だから気にするな」

「あ、ああ・・・」

「お前の人を気にする性根は嫌いではない。だが、過ぎると良くないぞ」

頷いたのを確認し、俺は手を離した。吐き出したものを片付け、もう一度伏せった。一週間は大人しくしていよう。

暫くして、また目覚めた。騒がしい感覚がしたからだ。

「起きてるかな？」

「あんまり騒がしくしちゃ駄目よ、姉さん」

「いい加減起きてるんじゃない？」

騒がしいな……。

「張三姉妹」

「無呼か」

「無事か？」

「まだ本調子ではないな」

「無理はするな」

「解っている」

無呼は戦闘には向いていない。あくまでも間者だ。

三人がそっと入ってくる。気配はまるで隠せていないな。

「俺は起きている。入ると良い」

「あっ！起きてた起きてた～」

「大丈夫なの？」

「一週間は安静にだそうだ」

「私達、曹操様の下で一から活動することになったの」

「三姉妹力を合わせれば、出来ないことはないもんね！」

「そうか。頑張れよ。今度は間違えないようにな」

「大きなお世話よ」

再出発に絶望はしていないようだな。曹操殿の下なら間違いを起こすこともないだろう。

もう暫く適当に話して、張三姉妹は出ていった。もう一度目を閉じる。

「兄ちゃん！起きとるんやろ？」

李典殿の声。再び目を開いた。

「何か？」

「怪我してるっていうからお見舞いに来たんやないの」

「そうそう～」

于禁殿もいる。

「それは済まなかったでござるな」

「大丈夫なの？」

「問題ないでござる。一週間寝ていれば治るそうでござる」

「しっかし、兄ちゃんに何があったんや？怪我するようなことなかったやろ？」

曹操殿が言ったことは本当のようだ。何も知らないらしい。

「拙者が失敗したのでござるよ」

「へぇ～。失敗もするんだね～」

「失敗のない人間などいないでござる」

上に立つ者は極端に失敗が少ない。故に、気付かないだけだ。

また暫く適当に話し、二人は出ていった。目を閉じる。すぐに意識が遠退いた。

目を覚ました時、少し目眩がした。吐き出すだけ吐き出し、その後何も口に入れなかったからだろう。

「剣さ～ん。起きてますか？」

「あわわ・・・」

朱里と鳳統殿の声だ。日が変わり、朝のようだ。

「朱里ちゃん。駄目だよ。剣さんは怪我してるんだから」

「剣さんなら既に起きてると思うんだけど」

今回は朱里の推察が当たっているな。

「朱里。鳳統殿。俺は起きている」

二人が入ってきた。

「ほら。起きてたよ」

「うん。流石だよ、朱里ちゃん」

「二人共、少し頼まれてくれないか？」

「何でしょう？」

「昨日から何も食していなくてな」

「解りました。何か持ってきますね」

朱里と鳳統殿が出ていくのを見送り、俺は身体を起こした。身体を動かすのはまだ辛い。

「持ってきましたよ」

「済まない」

食べやすい果物を中心に持ってきてくれたようだ。傷付いているのが内臓だと知っているのだろう。

果物を口にした。何かが染み込んでいく感覚だった。

「身体は大丈夫ですか？」

「本調子には遠い。まあ、じきに治るさ」

「剣さん。蝶さんはお元気ですか？」

「今はこの場にいないでござるが、元気だと思うでござる」

「雛里ちゃんは白倫さんのと仲が良いんだ」

「うん。私のお友達」

こうして見れば、この二人は本当にただの子供だ。それが軍略や治世だけでなく、礼儀正しくもある。水鏡殿の手腕が気になるな。

「蝶さん。凄く綺麗な人だから、つい羨ましくなるの」

「そうだね。胸も大きかったし」

少し学び過ぎている気もするな。

「二人は、もうこの陣営ですることはないのでござるか？」

「はい。昨日終えました。ただ、剣さんのことが気になるので、桃花村にはまだ帰らないということで一致しています」

「そうか。気を遣わせて済まないな」

「いえ」

「あの、剣さん・・・」

急に鳳統殿が恥ずかしそうに帽子を深く被る。

「どうかしたでござるか？」

「・・・私の真名は雛里です」

真名は知っていた。俺が預けられた訳ではないので、普通の名で呼んでいたが。

「預かって頂けますか？」

「そうか。ならば、預からせて貰う。雛里」

「ほら。言った通りだった」

「うん」

朱里と雛里が顔を見合わせる。笑っているようだ。

「どうした？」

「朱里ちゃんが、真名を預ければ剣さんの口調が普通になると教えてくれたんです」

「確かに、そうしている」

例外はあるが。夏候淵殿などだな。

朱里もそうだったが、普通に話して欲しかったのだろう。

「ところで、剣さん」

改まった表情で話し掛けてくる。俺は気にせず、果物を口に入れた。

「桃花村を出て、西涼にいるんですね？白倫さんや楊延さん達を連

れて」

「ああ」

じっと見据えてくる朱里。俺は調子を変えず、適当に果物を手に取る。

「軍を編成するんですか？」

「ああ」

「あわわ・・・西涼といえば馬。騎馬隊ですか？」

「そうだ」

「剣さんが編成するのなら、恐らく遊撃の騎馬隊。それなら私が言っていたことを？」

「雛里はどう思う？」

「何のことですか？」

「独立行動権を持つ軍」

「あわ～・・・」

「雛里の素直な意見を聞きたいだけだ。何を言おうと構わない」

「・・・兵法には反します。その軍がどれ程の働きをするかにもよると思いますが、策を考える身としては怖い存在になります。敵とし

ても、味方としても」

「・・・成る程な」

「あぅ・・・」

恥ずかしそうにまた帽子を深く被る。

「それ程構えないでくれ。俺は雛里の意見を聞きたかっただけだ」

「・・・あぅ。ですが、剣さんは何故独立行動権を？」

「自由が好きでな」

「・・・理由にならないと思います」

「剣さんは抜群に戦の機を読むのが上手いんだよ、雛里ちゃん。戦場での綻びを繕ってくれることで、策が上手く運ぶんだよ」

「でもそれは局地戦の話で、全体の影響は予想の範疇じゃないかな？」

「そうかもしれないけど、小さな綻びから大きな穴に変わるんじゃない？」

二人して頭を捻らせる。その様子を眺めている。聞いていて飽きない。面白いな。

「あっ！すいません！私達ばかり・・・」

「気にすることはない。二人の意見は聞いていて面白い。参考になる」

「剣さんはどう思いますか？」

「俺は賛成だな。無論、俺が率いるからという私怨がないとは言えない」

「そうですね。しかし、やはり軍律があってこその軍だと思うんですが」

「軍律を破るつもりはない。いや、必要に応じては破るかもしれないな」

「簡単に認めるんですね」

「認める。全ての可能性において、二人には話すつもりだ」

二人は相当の切れ者。このような機会は貴重だ。可能性については全て話しておきたい。

「俺は必要に応じては軍律であろうが命令であろうが、破る時は破る」

「・・・言い切りますね」

「ああ。躊躇はしないだろう」

「私としては、軍律や命令は守って欲しいです」

まあ、軍師としてはそう考えて当然だな。

「剣さんは、軍律や命令よりも大切なことがあると考えますか？」

「考えている」

「何ですか？」

「命だ」

「…お言葉ですが、戦場では命が散りますよ」

「雛里ちゃん！」

「止せ、朱里。雛里の言うことは正しい」

戦場では命が散る。否定する気はない。否定することなど出来る筈もない。

「だがな、雛里。俺もその程度のことは百も承知だ。俺は犠牲者を出来る限り出したくない。その為に、俺は戦場に出て来た。以前も、そしてこれからも」

「可能でしょうか？」

「解らない。だが、可能性が少しでもあるのなら、俺はその場に駆ける。その為の騎馬隊であり、機動力だ」

速さを重視するのもその為だ。俺はあくまで犠牲者を出さない為、そして戦を早く終わらせる為に動く。

「…剣さんの考えはよく解りました」

雛里は軽く腕組みして何か考えている。

「朱里ちゃんが認めてますから、恐らく相当の動きなのですよね。一度、見てみたいです」

「成る程。確かにその通りだな」

一度見なければ納得出来ないという軍師の性だろう。仕方がないな。

「さて、二人共、もう昼時だぞ」

「はわわ!?」

「あわわ…」

「俺は先程から果物を食べていたから平気だが、腹は減っていないか?」

「…減りました～」

「…私もです～」

「また来い。話し相手になってくれ」

「はい」

二人が出ていった。面白い話だったな。
それから数日、俺を見舞いに来てくれる皆と話しながら過ごした。特に朱里と雛里は頻繁に来てくれた。話すことは多岐に及んだ。軍略や日々の話、堅い話から何でもない話まで様々だ。
そして、俺は漸く歩くことが出来るようになった。雷光に乗って駆けることも出来た。もうじき一週間だ。
朱里と雛里が来て、また話し込んでいた。その時、外が騒がしくなった。

「剣様！」

蝶だ。蝶が飛び込んで来た。俺の姿を見て、ほっと息を吐いた。

「…御無事でしたか」

「心配をかけたようだな。まあ、大丈夫だ」

確か、曹操殿が楽進殿を西涼に派遣していたのか。蝶が駆け付けて来たのだろう。

「大事はない。後数日で傷は完全に癒える」

「そうですか…」

「俺のことは気にするな。それより、西涼の調子はどうだ？」

「既に隊で纏まって駆けています。今も石幻さんが調練を続けていると思います。わたくし達全員、剣様の帰りを待っています」

「そうか」

雷光が駆けたいだろう。何よりも速く、ただ光のように。

「あわわ・・・蝶さん」

「これは、大変失礼致しました、雛里様。剣様とばかり」

「いえ。構いませんよ。お久しぶりです」

「こちらこそ、お久しぶりです。雛里様」

「はわ～・・・仲が宜しいんですね」

「俺は席を外そう。話していると良い」

ゆっくりと立ち上がり、静かに外に出た。口笛を吹くと、雷光が近寄って来た。

「そろそろ西涼に戻る。やっと全力で駆けてやらせられるな」

軽く雷光の毛並みを撫でる。雷光が気持ち良さそうに身を震わせた。

「・・・もう良いのか？」

「愛紗」

愛紗が近寄って来た。鈴々、劉備殿もいる。

「そろそろ癒える」

「良かったですね」

「良かったのだ」

「ああ」

楽天的な二人だ。愛紗は苦労しそうだな。

「これから、桃花村に戻って何をするつもりだ？」

少し気になるところだった。義勇軍で終わるような器量ではないと思うが。

「苦しむ民を放ってはおけません。その想いを忘れた訳ではありませんよ」

「その為に動くのなら、いずれまた逢うこともあるでござろう」

「私達と一緒に来ないか？」

「悪いな。俺は情勢を見極めるつもりでいる。どこに寄るかは決めていない」

「なら、鈴々達の敵になるのか～？」

「なるかもしれない。その時はその時だ。自らの為に戦えば良い」

「剣とは戦いたくないのだ・・・」

俯く鈴々の頭を撫でた。
俺も同じだ。関わりを持った者を自らの手に掛けたくはない。だが、自らが選んだ道が衝突するというのなら、俺は躊躇しない。

「ではな。いずれまた逢おう」

それから数日、俺は華陀殿に傷の完治を言い渡された。同時に曹操殿は陣を払い、それぞれが自分の領地に戻る。俺も西涼に戻らなければ。
次に出逢った時、敵か味方か。その結論は、いずれ出る。泰平の世を築き上げる為に。

陣払い（後書き）

次回予告～。

剣「さて、帰るか」

蝶「そうですね」

愛「またな」

華「次に逢う時は貴方の騎馬隊が見られるのね。楽しみにしておくわ」

剣「期待に応えられるか、解らないでござるがな」

朱「剣さんにそういう心配をして当たったことないんですが・・・」

愛「私もだ」

蝶「良いではないですか。それより、次回は特別なお方が登場なさると聞いたのですが」

剣「俺と同じ、この歴史には存在しない者だ。
次回、『天の御遣い』よろしくな」

華「突っ込まれる前に終わらせたわね」

天の御遣い

黄巾の乱から時は流れ、世は再び混乱に陥った。都である洛陽で、漢王朝に取って代わった董卓が悪政をしき、民が怨嗟の声を上げる。これを討たんと、名門である袁紹が地方に激励を送る。それに応えた群雄が続々と集まった。

時は少し遡り、天より舞い降りた流星。乱世が大きくうねり、新たな戦乱の世が訪れる。

「あとどのくらいで連合軍の陣営に着くかな？」

「あと一日の行軍で到着出来ると思います。ご主人様」

俺は本郷一刀。皆には天の御遣いなんて呼ばれてる。

俺は本来、この時代で生きてた人間じゃない。気付いたらこの世界にいたんだ。だけど、可愛い皆が今の不幸な世の中を変える為に戦おうとしている。俺は関係ないからって、見て見ぬ振りは出来ない。俺に何が出来るか解らないけど、天の御遣いとして頑張ることにした。

そして今、反董卓連合軍に合流する為に、桃香達が率いていた義勇軍を率いて行軍している。

「あわわ！大変です～！」

雛里が慌てて近寄ってきた。

「どうした？」

「斥候に出した皆さんからの連絡です！物凄い速さで騎馬隊が近付いて来るそうです！」

「旗は！？」

「剣の旗が！」

雛里が慌てて報告することを愛紗が冷静に返す。黙って聞いてたけど、剣の旗ってことはどこの軍だろ？聞いたことないけど。

「どこの軍？」

「私達の知り合いの軍です。恐らくですが」

「そうか。なら、出迎えないとな、桃香」

「そうだね」

俺達は出迎えの準備を始めた。簡単な準備だけどな。

それより、俺は剣の旗の将軍なんて知らない。誰なんだろ？

袁紹からの激励が俺の下に届いた。驚愕の一言だった。

董卓殿の都での暴政。あれ程の良君が暴政をしくなど、有り得る

のか？
　西涼のような辺境にいては解らない。俺は激励に応えた形で組織した騎馬隊を率い、反董卓連合軍に向かった。
　連日、雷光は駆け続けている。相当な速さで駆けているが、誰一人遅れる者はいない。厳しい調練を繰り返し、鍛えに鍛えた精兵だ。だが、実戦経験が皆無という難点を抱えている。

「剣殿。行軍中の軍を前方に発見しました」

　石幻が報告してくる。斥候は出している。こちらも行軍中だからだ。

「旗は？」

「義の旗です。恐らくは義勇軍かと。劉の旗と北の旗も」

　義勇軍で劉の旗といえば、劉備殿達が率いる軍だろう。だが、北の旗というのは何だ？そのような者がいた記憶はないが。

「行ってみますか？」

「蝶」

「俺もです」

「解った。行くぞ」

「わたくしは構いませんが」

　義勇軍に向けて駆けた。ゆっくりとした行軍で、追い付くのに大

した時間はかからなかった。次の斥候が戻って来た。

「剣殿。数百騎が向かって来ているそうです」

「向こうの将校だろう」

すぐに対面した。騎馬隊を率いていたのは、馬超殿だ。

「やっぱり剣じゃないか！見違えたよ！」

「馬超殿、久しいな」

「やっほ。久しぶり～」

「なんだ。いたのか、馬岱殿」

「いたよ！ずっと！」

「からかっただけだ。
馬超殿、義勇軍はどこに行軍中でござる？」

「反董卓連合軍だよ。剣もそうじゃないのか？」

「そうでござるよ」

やはりそうだったか。

「あたし達のところに来いよ。皆も逢いたがってるぜ」

「解ったでござる。だが、その前に」

「何だよ？」

「少し遭遇戦をしないでござるか？」

実戦経験を積むには良い機会だ。馬超殿は馬術においては相当な腕を持っている。相手には絶好だ。

「良いぜ。お前がどんだけ出来るようになったか、見てやるよ」

互いに少しだけ距離を開けた。武器は棒を使い、馬から落ちれば戦死とする。

あちらの騎馬隊は五百騎程度だろう。対するこちらは三百騎。だが、数はいつも相手の方が多いと考えていた。思い通りに動かす為、機動力を高める為に、数は極力少ないことを望んでいる。

「いつも通りだ。初の実戦と思え」

「はい」

「承知致しました」

石幻と蝶も気負ってはいない。問題無く動けるだろう。全体の指揮は俺が取り、三隊に別れた時は俺と石幻、蝶が指揮する。

互いに動き始めた。一丸となって突っ込んでくる。適当に散り、通してやる。

「遅いな……」

素早く一つになり、側面に回った。こちらが一丸となって側面を

突く。少し崩したところで、馬超殿が立て直そうとする。素早く離脱して、近くの小さな丘に上った。

近辺には小さな丘が三つある。小さな丘とはいえ、逆落としの勢いは付く。

先頭で駆け降りる。小さく一つに固まっている隊を突き崩す。少し反発されたが、強引に押したところで退いた。また丘を駆け上がる。追ってくるが、速さがまるで違う。引き離し、再び逆落としをかける。

その瞬間、俺の隊百騎が離脱した。石幻と蝶の隊が一丸となって突き崩す。馬超殿の騎馬隊の中で隊が散開し、乱し、離脱して一つになり、また突き崩す。完全に崩れたところで、馬超殿の周囲を囲んでいた百騎程の隊が離脱した。

そこへ突っ込んだ。ただ一騎、馬超殿を狙う。遮る騎兵を叩き落とし、迫る。馬超殿が構える棒と、俺の棒が一度触れ合った。擦れ違う。百騎程の騎兵を突き抜け、また反転し、再び襲い掛かる。

これで終わりだった。騎兵を次々と叩き落とし、最後に馬超殿を取り囲んだ。

「終わりでござるな。馬超殿」

「ああ・・・」

隊を散開させ、馬超殿と向き合った。

「強いな、お前の騎馬隊」

「兵の練度の差でござる。拙者は徹底的に鍛え上げたでござるが、義勇軍ではそういう訳にもいかないのではござらんか？」

進んで調練に励む者もいない訳ではないだろう。だが、多い訳で

はない筈だ。俺の下に集まった者達は、全員文句一つ言わずに調練に励んだ。兵の気持ちに大きな差がある。

「剣殿。報告します。
馬から落ちた者が五十。怪我人はいません」

「落ちた者達に声をかけて回れ。戦場なら死んでいる。命を大切にしろとな」

「解りました」

石幻が駆けていった。俺が調練で言い続けたことは、死ぬな、だった。命を第一に動け。死にたくなければ、俺達の命に従え。俺の騎馬隊の唯一の鉄の掟は、命に従え、ただ一つだ。

「でもさぁ、貴女本当に綺麗だね～」

「ありがとうございます」

蝶と馬岱殿が近寄って来た。

「こら！蒲公英！お前も取り囲まれたんだろ！何へらへらしてるんだ！」

「え～！しょうがないじゃん！強かったんだもん！」

「そんなの言い訳になるか！」

姉妹喧嘩が始まってしまったか。石幻が戻って来た。事後処理は終わったようだ。

「馬超殿。そろそろ義勇軍に」

「そうだな。案内するよ」

馬超殿の案内に従った。義勇軍は行軍を中断し、先程の遭遇戦を見ていたようだ。

兵達に待機を命じ、石幻と蝶を連れて入った。簡単に卓が用意され、客を迎える用意がなされていた。

「剣！久しぶりだな！」

「愛紗。久しいな」

お馴染みの者達も揃っていた。鈴々、朱里、雛里、星、紫苑。全員に軽く挨拶を交わし、目を向けた者がいる。北の旗の正体、俺の知らない者が一人いる。劉備殿の隣に座っている男だ。俺に驚きの目を向けている。

「お初にお目にかかる筈でござるが、どうかしたでござるか？」

「・・・着てるの、袴だよな？」

俺が驚く番だった。この男は俺同様、この時代に生きている筈のない人間だ。袴を知っている、それがはっきりとした証拠だ。

どういうことだ？警戒するべきなのか・・・？

「剣殿。どうかしましたか？」

「・・・いや。何でもない。

貴殿の名を聞きたいでござる。北の旗の者でござろう？」

「ああ。俺は北郷一刀。桃香と一緒に義勇軍を率いている。あんたは？」

「拙者は剣という者でござる。待機している騎馬隊を率いているでござる」

「凄い騎馬隊だったな。翠の騎馬隊を圧倒してたし」

「大したことはないでござる。
さて、行軍しなくて良いでござるか？今日中に進まなければ、明日に連合軍陣営に着かないでござる」

「そうなの？」

「はい。ここで野営すれば、明日には着かないですね」

北郷殿の問に朱里が答えた。行軍が再開される。俺達は隣についた。
無呼に軽く指示を出し、ゆっくりと行軍した。遅い行軍だ。俺達は今日中に到着するつもりだったからな。

「剣殿。先に行かないのですか？このような遅い行軍をする必要はないと思いますが」

「何か気になることがあるのですか？」

「……少しな」

「北郷様のことですね？」

「確か、天の御遣いという話です。占いで祭り上げられた名です」

天の御遣いか。そのような、神通力のような力など、あの男にはない。普通の人間でもないが。この時代に、本来いない存在。俺同様に。あの男も俺がこの時代にいない存在だと気付いているだろう。

行軍を続け、日が暮れた。野営を始める。火を起こし、その火の傍に座っている。石幻と蝶は指揮をしている。

「剣」

無呼の声だ。頷き、耳を傾けた。

「北郷一刀はお前と同じ」

「どういう意味だ？」

「お前のことを探っていた。関羽達に聞いて」

「お互いに探っていたということか」

「おかしな行動はない」

無呼に探らせて解ることでもなかったか。少し動転しているのかもしれない。

「お前の着物も知らない。奴の着物も知らない」

「何が言いたい？」

「同類か？」

「だとしたら？」

「どうでも良い」

無呼らしい答だ。

「誰か来たぞ」

そう言って気配を消した。蝶が雛里を連れて来たようだ。

「雛里。どうかしたか？」

「ご主人様が話をしたいそうですが」

「俺から出向こう。今から向かう」

良い機会だ。話さなければ何も解らない。

一人で出向いた。北郷殿と劉備殿が待っていた。座るよう促され、素直に従った。

「悪いな。来て貰って」

「気にする必要はないでござる」

「食事はもう終わりましたか？」

「問題ないでござる。して、拙者に何か？」

「俺は剣さんのことよく知らないけど、皆からいろいろ聞いたよ」

「して？」

「仲間にならないか？」

単刀直入で、自らの意見のみか。

「何故？」

「愛紗達とは全員知り合いみたいだし、真名も知ってる。すぐに受け入れられると思うんだけど」

「貴殿の勝手な神通力でござるか？天の御遣い殿」

「いや、そういう訳じゃないけど」

「拙者は各地の群雄から勧誘を受けたでござる。貴殿だけではないのでござるよ」

「……そうか」

「他には何かあるでござるか？」

「……桃香。席を外してくれるか？」

「え……でも」

「大丈夫。剣さんは何もしないよ」

「・・・はぁい」

劉備殿が出ていく。二人でじっと向き合った。

「さて、貴殿の聞きたいことは拙者が着ているこの、袴でござるか？」

「ああ。袴といえば、日本だろ？」

「貴殿の着ている着物については知らないでござるが、日本を知っているようでござるな。名から考えても、日本でござるか」

「ああ。俺が何でここにいるか解らないけど、俺は日本人だよ。剣さんもなのか？話し方何かは日本人みたいだけど」

「日本人でござる」

ただ、生きていた環境は違うようだ。着ている着物を見れば解る。

「このことは内密に頼むでござるよ」

「俺もだよ」

話すことはないだろう。自らのことを語ることにもなってしまう。

「では、拙者は戻るでござる」

「なあ。本当に力を貸してくれないのか？」

「敵対することがないと良いでござるな」

俺は背を向け、隊に戻った。雷光の傍で暫く眠った。

翌朝、すぐに起き出し、雷光の体躯を洗った。その後は適当に散策し、隊に戻ると、皆が起き出していた。

反董卓連合軍陣営に向かう。昼が過ぎた頃、漸く到着した。すぐに出頭した。北郷殿と劉備殿も来ているようだ。

「失礼するでござる」

「失礼します」

兵舎に入った。大きな声が聞こえてくる。

「この連合軍の総大将を務めるのに相応しいのは、誰でしょうね？」

俺が嫌う名門が口煩く何か言っている。軽く嫌気を覚えながら、曹操殿の隣に座った。

「久しぶりね」

「そうでござるな」

「貴方の準備は終わり、騎馬隊を率いて乗り込んで来たのかしら？」

「まあ、そうなるでござるかな」

「今の状況なら聞かないで。見たままよ」

総大将を決めているのだろうが、自らが名乗り出れば、様々な責

任を負う。だが、推薦となれば話は別。推薦した者に責任を問うことが出来る。くだらないな。

俺は立ち上がり、退出した。どうでも良いことに関わるつもりはない。

各陣営を見て回った。臨戦状態には程遠い陣が殆どだ。良い緊張感があるのは、曹操軍くらいだ。孫策軍は為りを潜めているように見える。

「剣様？今は軍議では？」

「どうでも良いことに関わるつもりはない。それより蝶、隊を暫く任せる。俺は暫く抜ける」

「いつまででしょうか？」

「翌朝までで良い。俺がいないと言って、各陣営からの呼び出しには応えなくて良い。報告だけは聞いておいてくれ」

「承知致しました」

蝶にそれだけ伝え、密かに陣営を出た。そこへ雷光が姿を見せ、俺はすぐに乗った。

駆けた。雷光が疾駆すれば、日が落ち切る前に着けるだろう。目指すは、？水関。恋が守る砦だ。

天の御遣い（後書き）

次回予告～。

剣「まさか、俺以外にこの時代の者でない者がいるとはな」

鈴「何のことなのだ？」

一「何でもないよ」

愛「ご主人様は初登場ですね」

一「ん。北郷一刀だ。よろしくな」

剣「天の御遣い様だ。俺にはどうでも良いことだが」

朱「どうでも良いんですか？」

蝶「剣様は迷信に動かされるお方ではないので」

石「確かに、剣殿は何を信じているのか」

剣「基準か？基準は信じているものからの情報だな。後は自分で見たものだ」

雛「大事なことですね。疑うことも大事ですし」

剣「そういうことだ。このような時代では特にな」

一「大変なんだな」

剣「次回、『謎』よろしくな」

謎

？水関に着いたのは日が落ちる前だった。雷光は久しぶりに心地好く駆けた感覚なのだろう。雷光は騎馬隊の優れた軍馬の中でも、速さは群を抜いている。体力も並外れている。どうしても、力を抑えなければならなかった。

「いつでも良い」

無呼の声だ。無呼には？水関を探ることを命じていた。用意は出来ているようだ。

雷光に近辺で待機するように命じ、俺は？水関に入り込んだ。

「こっちだ」

無呼の声を頼りに、隠形の業を遣って砦の中を進んだ。特に苦もなく、目的の者の部屋に来た。恋の部屋だ。

「！」

「……流石だな、恋」

気付かれた。俺の極僅かな気配を敏感に感じ取ったのだろう。

「……剣」

「久しいな。このような訪問で、許してくれ」

恋は黙って自らの得物を手にした。俺に刃先を向ける。

「待て。争いに来た訳ではない。話をしに来ただけだ」

「‥‥話すことはない」

「ある。董卓殿は」

そこから先を言う前に、恋が刃を振った。跳躍して躱す。

「恋」

「‥‥出て行け」

「恋」

「‥‥」

無言で構える。だが、以前立ち会った時と同じだ。殺気がまるでない。

「俺は抜く気はない。董卓殿はどうしている？それが聞きたいだけだ」

「‥‥帰れ」

じりっと迫る。だが、大して脅威は感じない。

「剣」

声を聞いた瞬間、背後へと跳んだ。無呼の声に耳を傾ける。

「離脱しろ。誰か来た」

頷き、恋に目を向けて離脱した。来たのは音々音だったようだ。

砦の外へ出て、雷光を呼んだ。

「どうする？」

「確信した。悪政をしいているのは董卓殿ではない」

恋の苦しげな表情を思い浮かべた。何かを抱えている。それが何か、董卓殿程度しか考えられない。

「都へ行き、董卓殿を捜せ。それと、何者かが暗躍している可能性がある」

「解った」

「行動は起こすな。董卓殿の居所を掴むことが目的だ」

「解った」

雷光に乗り、連合軍陣営に駆けた。無呼は都へ向かっただろう。

翌朝、連合軍陣営に着いた。雷光を休ませ、俺は蝶を呼び、報告を聞いた。

「連合軍の総大将は、劉備様の推薦で袁紹様に決まりました。袁紹様は遅れて連合軍に加わる軍の収容の為、後方に陣を構えるそうです。前衛の指揮は曹操様に任されたようです」

これ以上連合軍が増えるとは思えない。ただ、戦に出て自軍の犠牲を出したくないのだろう。まあ、愚かな大将が前衛に出ないことは救いだ。曹操殿なら問題ない。

「それから、曹操様と北郷様が陣に来て欲しいと連絡がありました」

「解った。石幻は？」

「馬のお手入れをしています」

馬の手入れは各自で行う。決めた訳ではないが、暗黙の掟として成り立っている。

「剣様。すぐに行かれますか？」

「ああ。行ってくる」

蝶に後のことを任せ、曹操殿の陣に赴いた。すぐに曹操殿に引き合わされた。

「昨日は済まなかったでござるな」

「どこに行っていたのかしら？」

「散策でござるよ。陣を回っていたでござる」

「成る程。私が前衛の指揮を取ることになったのは、知っているわね？」

「知っているでござる」

「貴方は自由に動いて良いわ。好きにしなさい。三百騎で何が出来るのか、見せて貰うわ」

自由にして良い。その許可を得た。俺の動きを見極めようというのだろうが、好都合だ。

「曹操殿。貴殿はこの討伐、どう見るでござる？」

「さあ？ただ、悪政は間違いないようよ。私の街に都から逃げて来た者がいたわ」

やはり、悪政は間違いないようだ。無呼の報告を待つが、俺には董卓殿が行っているとは思えない。

「貴方は何か、腑に落ちないことがあるみたいね？」

「この悪政、その目的が何かと思っているでござる」

じっと見詰めてくる眼を見詰め返す。何を考えているか、謀ろうとしているのだろう。

「では、曹操殿。拙者はこれで。別のところにも呼ばれているのでござる」

「どこかしら？」

「義勇軍でござる」

曹操殿の陣営を出て、義勇軍の陣営に赴いた。北郷殿の下に通さ

れると、主立った者達が集まっていた。

「悪いな。また来て貰って」

「今度は全員集合でござるか？」

「愛紗ちゃん達が剣さんに聞きたいことがあるそうなんです」

劉備殿の言に、愛紗に目を向けた。

「剣。董卓殿のこと、どう思う？」

成る程。俺同様、愛紗と鈴々、星は董卓殿を知っている。

「董卓殿のことは知っている。だが、その感情は私情だ。私情を戦場に挟むつもりはない」

「ならお主は、悪政を董卓殿が行っていると言うのか！？」

「そんな筈ないのだ！鈴々はそんなの絶対に認めないのだ！」

姉妹揃って激昂する。星は静観か。

「俺がそう言わずとも、既にそういう事態になっている。今更そのように叫んだところで、民が納得すると思っているのか？」

「・・・ならば、見捨てると言うのか？」

「見損なったのだ！」

大きく息を吐き出した。この姉妹は揃って正直者だな。

「俺に当たるな。ならば聞くが、董卓殿が悪政を行っていないという確たる証拠はあるのか？」

「それは・・・」

「鈴々が思ってるのだ！」

「・・・それは理由にならないと思います。鈴々ちゃん」

「朱里の言う通りだ。そして、こうも言える。董卓殿が悪政を行っているという確たる証拠もない」

「あっ！」

「解ったか？愛紗、私情で動くな。今の状況のように、情報が決定的に欠けている時に私情で動くのは危険過ぎる。覚えておけ」

「・・・済まん」

「さて、本題に移ろう。無駄な時間は使いたくない。雛里、何か董卓殿についての情報はあるか？」

「いえ。特には・・・」

だろうな。

「結論を出すにはまだ早計だな。話は終わりでござるか？」

話は終わりだと言うように、俺は背を向けた。

「ちょっと待ってください！」

「何でござる？」

劉備殿に呼び止められ、歩みを止めた。振り返らずに、次の言葉を待った。

「もし、董卓さんが何も悪くないとしたら、剣さんはどうしますか？」

「自らの正義に従う。ただそれだけでござる」

「その正義って何だよ？」

「北郷殿。人はそれぞれ何かしら、護るべきものを抱えているでござる。人であり、正義であり。大事なものなど、人それぞれなのでござる」

「じゃあ、あんたの正義って何だよ？」

「拙者の正義は拙者だけのもの。人に教える必要はないでござる」

再び歩み始め、俺の隊に戻った。雷光に歩み寄る。

「見たいものは見れたか？周泰殿」

雷光を撫でながらそう言うと、隠れていた気配がはっきりした。

「出て来たか。俺一人だからな」

「申し訳ありません、剣殿」

周泰殿が姿を見せた。雷光が軽く警戒するが、頭を撫でて警戒を解かせた。

「誰の命かは聞かないが、今は眠い。昨日は寝ていないのだ」

「それは私もですが」

「俺を捜してか？」

「いえ」

恐らく、陣を見て回っていたのだろう。確信はないが。

「俺をわざわざ見張っていた理由は何だ？」

「何でもありません。姿を確認したので、少し」

「都合の良いことだな。曹操殿の陣に行った時から見ていた筈だ」

「・・・何のことでしょう？」

誤魔化すか。別に構わないが。

「さて、周泰殿。俺は暫く眠る。貴殿も眠ったらどうだ？」

「そうします」

姿を消した。溜息を吐き、雷光に体を預けて眠った。

目を覚ましたのは日が暮れてからだった。特に変わったことはない。軽く何か食し、もう一度眠った。

翌朝、董卓殿のことを考えながら過ごしていた。日が暮れた頃、曹操殿の陣営で軍議が行われるようになった。

兵舎に入ると、既に主立った面々が揃っていた。曹操を筆頭に夏侯姉妹、荀イク殿。孫呉からは孫策殿、周喩殿。義勇軍からは劉備殿、北郷殿、朱里。他には公孫賛殿。俺は一人で来た。

「これより軍議を始める」

曹操殿の宣言により、軍議が開始された。荀イク殿が現況を説明する。

「董卓軍は？水関に飛将軍と名高い呂布を据えて防衛する構えです。？水関は洛陽への要害の一つですし、陥とすには苦戦必須かと」

黙って聞いていた。特に口を挟む必要はない。

「連合軍は曹操軍二万、孫策軍一万、公孫賛軍一万、義勇軍三千。対する董卓軍は五万です」

「おいおい。兵法で考えれば、攻城戦には三倍の兵力が必要なのに、全然足りていないぞ？」

「仕方ないじゃない。現状は変わらないわよ」

「それに、袁紹や袁術の脆弱な兵を加えるより良いわ」

その点は曹操殿の意見に賛成だ。

「何か考えはないかしら？」

「攻城戦ならば、内部から撹乱するという方法がありますが」

「？水関に入り込めるでしょうか？」

内部撹乱の意見を言う周喩殿が俺を見た。朱里も一瞬だけ俺に目を向けたが、気付いていないように振る舞った。俺は間者としてこの場にいる訳ではない。

「正攻法で陥落させるのは無理そうね」

「正攻法っていうなら、呂布を倒せば良いじゃない」

「呂布を超える将がいるかしら？」

「厳しいかと。天下無双と呼ばれる豪傑ですし」

恋と一騎打ちをして勝てる将はいないだろう。だが、恋と話をするには絶好の機会だ。

「何か考えがあるかしら？そうね、天の御遣いはどう？」

「いや、特に何も」

「なら、剣は？」

「……拙者でござるか？」

「ええ」

「この兵数で攻めるのは不可能でござろう。方法は先程あげた二つのみ。二つとも厳しいでござるかな」

「ならどうするかを聞いてるんじゃない」

「降伏させる」

「貴方、もう少し考えて言いなさいよ。あっちが完全に優勢なのに何で降伏するのよ？」

荀イク殿の取っ掛かりには取り合わず、曹操殿に目を向けた。

「何か考えがあるのね？」

「まあ、賭けでござるな。成功すれば、苦もなくしすいかんに入れる筈でござる」

「内容を言ってみなさい」

「まだ早いでござる。拙者とて、この策を実行するには不足しているものがあるでござるから」

「何かしら？」

「情報」

無呼が戻るまで仕掛けるつもりはない。とにかく、情報が不足している。

「確かに、情報は不足しています。もう少し対峙を続けてはどうですか？」

「今後、袁紹殿や袁術殿の軍も増えると言えば増える。ここは、陣を前進させるに留め、様子を見るべきでしょう」

「そうね。それが良さそうだわ」

結局、？水関まで距離五里に詰めるという話で纏まった。

俺は陣に戻り、素早く隊を前進させた。気力は抜けていない。臨戦体制は整っている。

「剣殿。戦はまだ始まらないんですか？」

「始まらないだろう。だが、気を抜くな、石幻。臨戦体制は常に整えていろ」

「解っています」

「ならば良い」

任せておけば大丈夫だろう。特に口出しする必要もない。

夜になり、雷光の傍で静かに目を閉じている。

「剣」

「戻ったか。待っていたぞ、無呼」

気配しか感じないのは相変わらずだな。

「どうだった？」

「董卓は見つからなかった」

「いなかったのだな？」

「ああ」

つまり、政治を行っている者は董卓殿ではない。別の何者かが悪政を行っている。

「都で政治を行っているのは誰だ？」

「表向きは賈駆だ」

「裏は？」

「宦官張讓」

宦官張讓。何故、悪政を行う？何故、裏で賈駆殿を操ることができる？

「董卓殿の居所は解らないか？」

「解らなかった。時間がかかる。一度報告に来た」

「よく戻って来た。この情報は貴重だ」

「もう一度行く」

「可能ならば、董卓殿の居所を掴め。ただし、無理はするな」

「解った」

やはり、恋と話をする必要がどうしてもある。董卓殿を語って政治を行っているのならば、行くしかないだろう。

曹操殿の陣営を訪れた。すぐに曹操殿に引き合わされた。

「夜に何か用かしら？」

「明日、？水関まで三里の距離に軍を前進させて欲しいでござる」

「・・・本気で言っているの？」

「無理を承知で言っているでござる。戦闘は起きないと思うでござる」

「それを私に了承しろと？何が狙いかしら？」

「拙者が呂布と死合うでござる」

「・・・貴方、呂布に勝てるというの？」

「さあ？勝負はしてみなくては解らないでござる」

「・・・命を無駄にすることは許さないわよ？」

「無駄に？死ぬつもりなど、毛頭ないでござる」

「‥‥そう」

「決断して欲しいでござる。曹操殿」

「‥‥良いでしょう。貴方の勝ちに期待するわ」

乗った。俺は恐らく笑っている。乗らずとも仕掛けるつもりだったが、騎馬隊三百騎と連合軍数万では圧力がまるで違う。

「では、明日」

隊に戻り、暫く眠った。

翌日、曹操殿は連合軍を進めた。俺の騎馬隊が最前線にいる。俺は一人、雷光に乗って歩を進めた。？水関を眼前に、防壁を見上げた。

「降りて来い。恋」

呟く。見上げ、大きく息を吸った。

「飛将軍呂奉先！貴殿に、一騎打ちを所望する！」

「ふざけるななのです！お前ごときに、飛将軍と名高き恋殿に勝てる訳がないのです！」

「貴殿に用はない。来い！」

待った。目を閉じ、これからの戦いに意識を集中する。

ゴゴゴゴゴ……

門が開く音。目を開いた。恋……。

謎（後書き）

次回予告～。

剣「俺と恋の二度目の一騎打ちが始まる」

愛「壮絶な斬り合いだろうな」

一「呂布っていえば、三国志最強なんだけどな」

鈴「鈴々は負けないのだ！」

剣「相性というものもあるからな。俺ははっきり言って、長物相手は苦手だ」

朱「どうしてですか？」

剣「間合いに入るのに苦労するからな。相手は間合いに入っているというのにだ」

蝶「皆様、長物を扱っている方が多いですね。わたくしは剣様と同じ短物ですので、お気持ちは理解出来るのですが」

愛「……ふん」

剣「……何故愛紗の機嫌が悪くなった？」

華「考えてみなさい。閉めて良いわよ」

剣「……承知したでござる。
次回、『救出』よろしくな」

蝶「曹操様。いらっしゃったのですか？」

華「あら？何が言いたいのかしら？」

蝶「……何でもありません」

救出

「……剣さん、本当に大丈夫なのか？」

曹操の命で俺達は軍を前進させた。何をするのかと思ってたら、剣さんが一人で馬を進めてた。あの呂布と一騎打ちをする為に……。

三国志において、呂布と言えば最強の武将だ。関羽、張飛、劉備の三人を相手にしても負けなかった。この世界じゃどうなるか解らないけど、勝てるのか？

「剣は強いです。しかし、あの呂布も強いですな」

「星」

「あの二人、実は一度立ち会ったことがあるようなのです。私は見ていませんが」

「どっちが勝ったの？」

「勝負着かず。夜通しだったそうですが、どちらが勝ったというのはなかったようですな」

「じゃあ、剣さんにも勝てる可能性があるってことか」

剣さん、そんなに強かったんだな。益々仲間になって欲しいんだけどな。

「しかし」

「星？」

「私は、剣には何か別の目的があるように思うのですよ。決着を着けることとは別に」

「私もそう思います」

「朱里」

「剣さんは降伏させると言いました。呂布さんを倒して降伏させるとも考えられますが、そのような強引な策を剣さんが選ぶ筈もありませんし」

「じゃあ、この一騎打ちは・・・」

「あくまで推測ですが、剣さんが思い描く展開の第一歩ではないでしょうか？」

「まあ、危険ではあるがな。見てみろ、愛紗などいつ飛び出すか解らん」

愛紗は凄い形相で食い入るように見てる。大丈夫か？

「さて、始まるようですな。ご主人様」

剣さんと呂布が対峙していた。これから、死闘が始まるんだ・・・。

対峙。まだ、窮まってはいない。俺は雷光から降り、刀に手をかけているだけだ。

ただし、雰囲気は以前とはまるで違う。恋は、俺を討つ気でこの場にいる。純粋な殺気が俺の肌を刺している。

対する俺は、恋を殺す訳にはいかない。ただただ、真相を掴みたいだけだ。それまで、犠牲者を出すつもりは毛頭ない。

時が静かに流れる。機が、熟す。

キィィン……！

火花が散る。抜刀術を見事に受けられ、鍔ぜり合い。目が合った瞬間、恋が退いた。

何ともないようにしている。平静に見える。だが、刃を交えた俺には解る。恋の心の叫び。辛い。苦しい。

息を吐き、仕掛けた。間合いを詰め、連撃。全て見切られ、躱される。方天戟の払いが飛んでくる。跳躍、躱す。

「飛天御剣流！龍槌閃！」

渾身の力を込め、打ち合う。俺も恋も譲らない。だが、長くは続かなかった。俺が着地してしまうからだ。

着地と同時に、互いに弾かれたように間合いを空ける。額に汗が流れる。

恋が仕掛けた。間合いの差を利用され、突き、払い、打ち下ろし、続けざまに打ち込まれる。全て紙一重で躱し、間合いを詰める。が、恋は方天戟を払うことで間合いを取る。一歩踏み込めない。

大きく息を吐き、身を屈めた。速さで踏み込む。突っ込んだ。待ち構えていたように恋が方天戟を薙ぎ下ろす。

キィィィン！

鍔ぜり合い。ここは退かない。押す。

「恋」

呟いた。恋は鋭い目付きで俺を睨む。

「悪政を行っているのは董卓殿ではなく、宦官の張譲だな？」

「っ！」

恋の力が一瞬弱まった。それに合わせ、押す力を弱める。

「董卓殿の居所が解らない。張譲に捕らえられているな？」

「……」

「俺は無駄な争いは避けたい。恋と決着を着ける一騎討ちという名目でここにいるが、このような心境で戦闘してもつまらない」

「……剣」

「答えてくれ。張譲が悪政を行っているのは解っている」

「……（コクッ）」

答えてくれそうだな……。

「董卓殿の居所は解らないのか？」

「・・・解らない」

「俺の仲間が捜している。俺も向かう」

「・・・・？」

「都にだ。捜してくる」

「・・・・お願い」

「任せておけ。それまで、？水関を死守出来るか？」

「・・・・約束」

「ああ。必ず守ろう」

鍔ぜり合いを止め、間合いを開けた。向き合う。

「周囲の目を眩ませる為にも、暫く立ち会いを続けるぞ。良いな？」

「・・・・殺さない」

「俺もだ。改めて、始めようか？」

踏み込む。恋の圧力が増した。純粋で、素直な気。これからは純粋な戦闘、以前と同じ状況だ。

笑い合った。次の瞬間、互いに踏み込んだ。

昼頃から始まった剣さんと呂布の一騎打ち。護身術程度に学んだ剣術でも、今目の前で行われてる一騎打ちの凄さは解る。

「凄ぇ……」

どっちも譲らない。お互い、打ち合いを続けてる。

「けど、何か二人共、楽しそうだな……」

「……」

「愛紗？」

「……何でもありません」

「しかし、二人の力はまず互角だ。決着など着くのか？」

「どうでしょうか？一瞬の隙が勝敗を分けるのでは？」

「あれ程の決闘で、隙が生じることがあるのか？」

「ないのだ。二人共凄いのだ」

ここにいる皆、凄い豪傑なのに、あの二人を素直に称賛してる。

「いつ終わるのかな？」

「解りません。ですが、終わりはきます。二人の体力が限界を超えた時に」

昼から夕方。もう何時間も戦ってる。確かに、もう限界かもしれないな。

ドンドン！

「何だ？この音」

「鑼です。曹操殿が決闘の見切りを付けたのです」

「成る程」

終わりなんだな・・・。

剣さんが馬に乗って戻って来た。呂布も？水関に戻って行く。

曹操が全軍を元の位置まで退かせた。剣さんの騎馬隊もいつも通りだ。ちょっと、行ってみようかな。

「愛紗。剣さんのところに行かないか？」

「構いませんが・・・」

「良し、じゃあ行こうか」

愛紗と一緒に剣さんの陣に行った。楊延さんが迎えてくれた。

「剣殿に何か用ですか？」

「いや、ちょっと話をしたくてさ」

「剣殿は疲れています。今日はお引き取りください」

「あ。まあ、そうだよな」

あれだけの激戦だったんだ。疲れてて当然か。

「石幻。俺なら問題ない。中に入れろ」

幕の中から声が聞こえた。剣さんの声だ。

「・・・どうぞ」

「おう」

幕の中に入ると、剣さんは上半身を出して白倫さんに何かして貰ってるみたいだけど。

「怪我してるの？」

「無傷という訳にはいかないでござるよ。奴は強いでござる」

「凄かったな。とてつもなく強いんだな、剣さん」

「拙者は一人の人間。一人の人間以上の力はないでござる」

「へぇ・・・」

「剣、怪我は大丈夫か？」

「大したことはないのだが、蝶が聞かない」

「剣様の為を想って治療しています。違いますか？」

「この程度、何でもないのだが」

「剣殿。そう言わず、傷を癒してください。剣殿の代わりはいないんですから」

「何を言っている？俺がいない時は、お前達二人が隊を指揮しなければならない。解っている筈だ」

「それは、解っていますが」

そういうのも決めてるんだな。

「して、見苦しいところで申し訳ないでござるが、何か用でござるか？」

「特に何かある訳じゃないんだけど、悪かったな」

「いや。しかし、拙者はこの状況なので、大したことは出来ないでござるが」

「良いよ、別に」

話してると、何の為に来たか解らないな。

「そういえば、剣さんって董卓と知り合いなんだろ？」

「そうでござるな」

「どんな人なんだ？愛紗達の話を聞いてると、悪い印象は全くないんだけど」

「拙者も同じ考えでござる。決して悪い御仁ではないでござる」

「そうか。じゃあ、この悪政をどう思う？」

「拙者は既に答を見付けたでござる。貴殿は？」

「俺は愛紗達を信じたいんだけどな」

「臣下を重んじるのは大事でござるな」

「剣」

「何だ？」

「答とは？」

「不足していた情報を手にし、俺は一つの結論に達した」

「何か解ったの？」

「剣殿。そのことは私も知りたいです。私と蝶も知らないんですから」

「わたくしもです」

剣さんは目を閉じて、何か考えてる。俺達は静かに待った。そして、剣さんが目を開いた。

「解った。皆を信頼し、伝えよう。これからの策と、俺の行動を」

俺は都である洛陽に来た。雷光を離し、静かに都に入り込んだ。隠形の業は遣っていない。身を窶し、都を歩いた。

荒れている。都とは思えない。人々の表情は暗く、絶望に満ちている。光がない。そして、周囲に感じる視線。恐らくは監視。くだらないことを。民を監視して何とする？

「おい」

声だ。声の主を捜すことはなく、歩みを止めなかった。正体は解っている。無呼だ。

「何をしている？」

「董卓殿だ。見付かったか？」

「急ぎか？」

「ああ。切迫している」

「まだ見付かっていない」

「何か解ったか？」

「目星は付けた。だが、厳しいと思っていた」

「俺がいる。行くぞ」

無呼が一人で救出するのは不可能だろう。解っていたことだ。

宮中に忍び込む。隠形の業を遣っている。無呼の案内を頼りに進んだ。奥の奥、地下だ。光が当たらない。蝋燭が燈してあるだけだ。警戒が厳しい。見張りが周囲に立っている。俺達でなければ、こうも上手くは忍び込めないだろう。

牢が幾つか見える。無呼の合図があった。その牢に近寄る。いた。董卓殿だ。間違いない。目を閉じて、黙想しているようだ。声はかけない。そのまま地下を出た。

「助けないのか？」

「今日は確認に来ただけだ。明日の夜明け、救出に行くぞ」

「解った」

「賈駆殿の居所は解るか？」

「こっちだ」

救出には、俺と無呼だけでは難しい。内通者が必要だ。賈駆殿程の適任者は考えられない。

賈駆殿を見付けた。だが、容易に声をかけることはできない。見張りが付いている。

日が暮れるのを待った。賈駆殿が自室に戻った。機だ。瞬時に、

見張りを打ち倒した。

「賈駆殿」

「っ！あんｔ！」

声をかけ、手で口を塞いだ。仕種で静かにするよう促す。

「見張りは倒したが、どこで聞かれているか解らないでござる。声は潜めるでござる」

賈駆殿が頷いたのを確認し、手を離した。

「無礼をお許し頂きたいでござる」

「そんなことより、どうしてあんたがここにいるのよ？」

「忍び込んだでござる」

「・・・あんた、何者なの？」

「どうでも良いことでござる。それより、董卓殿のことでござる」

「・・・月は」

「知っているでござる。悪政を行っているのは、宦官張譲。董卓殿は囚われているのでござろう？」

「・・・その通りよ。僕が甘かった所為で・・・」

「今更悔いても仕方がないでござる」

悔いる気は解る。だが、悔いるより先にすることがある。

「夜明け、董卓殿を救出するでござる」

「月を！？」

賈駆殿を睨む。はっとしたように口を塞いだ。

「ご、ごめん・・・」

周囲には誰もいない。聞かれてもいないようだ。

「気を付けるでござる。取り返しのないことになるでござる」

賈駆殿が頷く。

「月の居場所は解るの？」

「抜かりはないでござる」

「いつ決行するの？」

「夜明けでござる」

「私は何をすれば良いの？」

「表に馬車を用意して頂きたいでござる。出来るでござるか？」

「出来るわ」

「では、任せるでござる」

背を向け、姿を消した。夜明けを待つ。

「助けた後はどうする？」

「俺の隊に匿う。いつまでもという訳ではないがな」

「任せる」

「そろそろ行くか」

動き出す。地下に向かう。闇の中で光は蝋燭の灯すらないが、一度行ったことがある。迷うことはない。夜目も利く。

見張りが二人、三人。確認した瞬間、動いた。有無を言わさず気絶させる。周囲には誰もいない。刀を抜き、牢を切った。

「董卓殿」

「……はっ！」

寝ていたようだ。俺の声で起きたのだろう。

「貴方は……剣さん？」

「迎えに来たでござる。賈駆殿が待っているでござる」

「詠ちゃんが！」

董卓殿を抱え、走り出した。身を隠しながら外に向かう。

「剣さん、どうして……？」

「貴殿が悪政を行う筈がないと思ったでござる。信じていたでござるよ」

「……はい」

「詳しい話は後にするでござる。口を開くと舌を噛むでござる」

闇に紛れて駆け抜ける。だが、宮中が騒がしくなっている。既に気付かれているな。

「屋根を飛び降りろ。下に賈駆がいる」

無呼を信じた。躊躇なく屋根を駆け登り、反対側に飛び降りた。

「賈駆殿！」

「詠ちゃん！」

「月！」

董卓殿を馬車に乗せ、走り出した。門を抜ければ安全な場まで行けるだろう。しかし、そう簡単に逃がしてはくれない。後ろから馬蹄が聞こえる。

「追っ手だ。賈駆殿、もう少し速く」

「これで精一杯よ！」

「言ってみただけだ」

馬は二頭で駆けているが、軍馬ではない。とても逃げ切れないな。

「・・・まずいな」

「しまった！門が！」

門兵に門を閉められている。門を閉められれば、逃げ道はなくなる。

「どうにかならないの！？」

「なるようにしかならないでござる」

「何でそんなに落ち着いてるのよ！？」

「拙者にはまだ心強い仲間がいるでござる」

門の方向を見据えていた。何かが入ってくる。門兵を全て蹴り倒した。

「雷光！」

馬車から飛び降り、雷光に飛び乗った。追って駆けて来た騎馬を、刀を抜いて叩き落とす。

「駆けろ！門を抜けろ！」

適当に足止めする。何騎だ？十五騎！

「駆けろ！雷光！」

数を確認した瞬間、雷光の馬腹を蹴り、加速した。一振りで数騎叩き落とす。刀は裏返しているがな。

駆け回る。雷光は全力で駆けている。騎馬隊は付いて来れていない。全騎叩き落とした。

「良し。行くぞ、雷光」

門を抜けた馬車を追う。蹄の跡を進む。すぐに追い付いた。

「剣！」

「駆け続けろ。俺に付いて来い」

ゆっくりと駆けた。目的の場まで休まずに駆けた。

俺の策は成就しつつある。この乱はもう終わりだ。

救出（後書き）

次回予告～。

剣「さて、いよいよ反董卓連合の話も終わりだ」

華「私達は何もしていないわ」

雪「そうねぇ。ただ対峙してただけだもの」

蝶「孫策様は後書きに初登場ですね」

雪「退屈なんだから仕方ないわよ」

剣「しかし、退屈だと感じていたのは貴殿だけだ。兵達は皆対峙で緊張していた」

石「そうですね。私達の兵も疲れは出ていました」

剣「しかし、それももう終わりだ。この対峙は終わりになる」

華「そして、大乱が始まるわ」

雪「ええ。楽しみね」

剣「次回、『幕引き』よろしくな」

幕引き

剣と呂布が一騎打ちをしてから、既に一週間が過ぎた。状況は何も変わっていない。

私達連合軍の兵数では、？水関を護る董卓軍を打ち破るのは難しい。対峙を続けているけれど、？水関の兵糧が途絶えることはない。打つ手無しね。

「桂花。何か変わったことは？」

「剣率いる騎馬隊が、五日前から調練を始めたこと以外は何も」

確かに、剣の騎馬隊が調練を始めていた。暫くは戦が始まらないと判断して、兵の気を緩めない為に調練を始めたのでしょうね。陣にも戻らずに野営しているくらいだし。

剣の実力は私の想像を遥に越えていた。呂布との一騎打ちは勿論、兵の掌握も相当なもの。長い対峙の間、全く兵に緩みはなかった。そして、調練を見ている限りでは、騎馬隊の動きも熟練されている。何より、速い。

剣はいずれ遠からずくる戦乱時、どこかの軍に身を寄せると宣言している。私の下に来れば、頼もしい仲間になる。けれど、敵になればこれ程恐ろしい相手はない。

「華琳様。どうかしましたか？」

「何でもないわ」

「華琳様」

「何かしら、流琉」

流琉が兵舎に入って来た。

「剣さんがお供を一人連れてお目通りを願っていますが」

「通しなさい」

調練から戻ったのかしら？

「失礼するでござる」

「ええ。何か用かしら、剣？」

確かに誰か連れて入って来たわね。けれど、連れている者は何者？小さな者だけれど、顔の見えない着物を着ているから誰か解らないわね。

「少し、深刻な話でござる。貴殿にしか話せないでござるからな」

「何かしら？」

「では、姿を」

隣にいた者が着物を脱ぎ、顔を見せた。

「なっ！？」

「何で貴女がここにいるのよ！？」

「……董卓」

「はい……」

「曹操殿、荀イク殿。出来得るならば、冷静に願うでござる。宜しいでござるか？」

剣が私達を見据える。何故剣が董卓をここに連れて来たのか。いいえ、何故連れて来れたのか、ね。

「事の真相は、拙者が後程語るでござる」

剣が私を手で制した。まずは董卓ということね。

「都で行われている悪政は董卓殿ではなく、宦官張譲に因るものでござる」

「いきなりそんなこと言って信じられる訳がないでしょ？」

「信じるかは知らないでござるが、もし董卓殿が行っていたなら、このように今落ち着いていられるでござるか？」

確かに、腰を据えているわね。慌てる様子もない。

「拙者は真実を言っているでござる。
さて、張譲のことでござるが」

「待ちなさい。軍議を開くわ。話は皆で聞きましょう」

「そうでござるな。ならば、召集をお願いするでござる」

流琉に命を出し、すぐに召集をかけた。暫くして集まった。

「……これはどういうことなの？」

「孫策殿。落ち着いて座って欲しいでござるな」

「……ふぅん。良いわよ」

「これで全員座ったわね。では、軍議を始める。剣、何故董卓がいる理由を聞きたいわね」

「私は……」

「待つでござる、董卓殿。必要以上のことを話すことはないでござる。

都で行われている悪政は、董卓殿ではなく宦官張譲が行っていたでござる」

「信じられる理由はあるのか？」

「この場に董卓殿がいる。それで十分ではないでござるか、周喩殿？」

「そうね。さっき聞かせて貰ったわ。信じられるとすれば、その要素しかないわ」

「確信は持てないでしょう。言うだけならば誰でも出来ます」

「ならば、張本人に登場願えば良いでござる」

場が剣の発言で目を丸くした。剣が手を挙げると、外が騒ぎ出した。

「何事!?」

「失礼します。曹操殿」

関羽がまた顔の見えない着物を着た者を連れて来た。思わず、溜息を吐き出した。

「剣。思わせぶりなことはしないで欲しいわね。今度は誰よ?」

「先程言ったでござる。張本人でござるよ」

着物を脱がせる。顔が見えた。

「張譲‥‥!」

確かに、張本人。一体どういうことなの‥‥?

「真相は後程語ると言った筈でござる。曹操殿、落ち着いて事態を対処して欲しいでござる」

「‥‥ええ。そうね」

「悪政を行っていたのは、貴殿でござろう、張譲殿?」

「違う!僕は陛下に信頼を寄せられ、政に携わっているのだ!それを悪政だと!?誰に向かって言っている!頭が高い!」

「ここで董卓殿が同じことを言えば、結局のところ真実を知るのは当事者のみでござる。所詮、水掛け論になるだけでござるな」

「・・・ならば、どうする？」

「もう一人、当事者を呼ぶでござる」

「注進！華琳様！」

「今度は何事！？」

流琉が慌てた様子で入って来た。今度は何？私もそこまで冷静ではいられないわね・・・。

「呂布率いる軍勢が、この陣に迫っています！」

「なっ！？」

「慌てる必要はないでござる」

剣が冷静に言う。

「・・・全て計算済みということか」

「・・・流琉。呂布は？」

「はい。董卓を返せ、と。董卓に罪はなく、悪いのは張譲だと叫んでいます」

「馬鹿な！？口車だ！」

「確かに、そう考えられなくもない。呂布は董卓の配下だ」

「そうでござるな。これ以上の準備はしていないでござる。ならば、貴殿等はどちらを選ぶでござる？」

流石の剣もここが限界。けれど、この選択は・・・。

「張譲を選ぶわ。悪政を行っていたのは、張譲ね」

「なっ！？」

私より先に孫策が答えた。孫策は状況を理解しているようね。

この陣を襲う構えを見せている呂布は、董卓を取り返そうとしている。つまり、董卓に危害を加えなければこの陣が襲われることはない。それに、剣の騎馬隊と義勇軍は動かないでしょう。被害は私達だけ。なら、それは避けた方が良い。

「よくここまでの状況を作り上げたものね・・・」

「真実を真実だと伝えるのは、場合によっては難しいのでござる」

「ま、待て！僕は」

「悪政を行っていた罪を、償って貰う必要があるわね」

「違う！僕は！」

「もう決めたことよ」

「なっ……!?陛下の許しも得ずに、僕に手を出して良いと思っているのか!?」

「既に、漢王朝に権力はないでござる。故に、貴殿が自由に立ち回れたのでござろう?」

決まりね……。

「民を苦しめた罪、万死に値するわ。よって、首を討つ」

張譲が青ざめていく。

「剣。貴方が首を討ちなさい」

「曹操殿!剣は執行人ではありません!」

「けれど、ここまでの状況を作り上げたのは剣よ。最後まで、やり通して欲しいわね」

「承知したでござる」

顔色一つ変えずに言い放つ。こうなることまで、予想していたということね。

剣が張譲を兵舎の外に連れ出した。

「秋蘭。見届けてきなさい」

「はい」

「ふぅ……」

息を吐き、漸く落ち着いた。全て、剣の掌の上で踊らされていた感覚。堪らないわね……。

「何なの、あいつ。自分一人で」

「落ち着きなさい、桂花。確かに腹立たしくはあるけれど、犠牲は無し。呂布と相対すれば、私達もただでは済まないもの」

「……それは、そうかもしれませんが」

「今は、それを喜ぶべきでしょうね」

孫策が話に入ってきた。

「何かしら？」

「この一件で、乱世が本格化すると思わない？」

「……ええ。そうね」

恐らく、間違いない。

「剣のこと、貴女はどう見る？」

「剣はこう言っていたわ。乱世が激化すれば、どこかの軍に身を寄せると」

「ええ。そのようね」

「行き先は・・・」

私か、孫策か、それとも・・・。

「華琳様」

「秋蘭。どうだったかしら？」

「・・・何の躊躇いも見せずに、首を討ちました」

剣も覚悟を決めているということね。この先の乱世を生きる為に・・・。

時は一日前。俺は調練を命じていた自分の騎馬隊に戻った。董卓殿を乗せた馬車を連れてだ。

調練をさせているのも、兵の気を緩めない為という名目だ。全ては董卓殿を匿う為。

「剣殿。董卓殿を無事に救出出来たんですね」

「ああ。二人に食料と飲料を」

「はい」

「ちょっと！ここにいれば安全なんでしょうね！？」

「その為に連合軍陣営から離れて調練をしていたでござる」

今も蝶の部隊は調練に励んでいるだろう。絶えずどちらかは隊にいるように言っておいた。交代で調練をしていたのだろう。

「北郷殿から連絡は？」

「まだありません。今こちらの使者を出します」

「解った」

まだ事態は動いていないか。だが、時間の問題だろう。

「剣さん・・・」

「何でござる、董卓殿？」

「私の為に何かをする必要は、もうありません」

「・・・何故でござる？」

「・・・私の所為で、皆さんが苦しんでいたなんて知らなくて。剣さんに助けられた時・・・素直に自害していれば・・・」

パァン！

俯いていた董卓を打った。

「ちょっと！月に何を！」

「黙れ。何を甘いことを言っている？」

「月は自分を責めてるのよ！その仕打ちはないでしょ！」

「自分を責めるな、とは言わない。だが、死ねば何か変わるのか？」

「・・・でも、私には」

「甘えるな。お前は死に逃げているだけだ。死ぬことで誰かが苦しみから解放されるのか？死ねば罪が償われるのか？
逃げるな。生きることから目を背けるな。生きて、自分が何を為せるか考えろ」

「・・・うっ・・・うっ」

「月・・・」

「今は泣けば良い。泣いた後、自らの足で立ち上がって来い」

董卓殿をそのままに、俺は立ち去った。静かに次の準備を進める。

「剣殿。関羽殿が来ました」

「良し。通せ」

愛紗がすぐに姿を見せた。

「どうだ？」

「ああ。宦官張譲。捕らえたぞ」

読みは的中した。董卓殿を救出すれば、張譲は都から逃げ出すと踏んでいた。だが、董卓殿を盾にしていた故、大袈裟な行動は出来ない。そこを、義勇軍に取り押さえて貰った。

義勇軍とは俺が全て計画を伝えていた。北郷殿は快く承諾してくれた。だからこそ、張譲を捕えることに協力して貰った。

～～～～～

「・・・と、いう訳でござる。納得して頂けたでござるか？」

「・・・ええ。そして、今日の流れね」

「何故、我々に言わなかった？」

「言えば信用したでござるか、周喩殿？」

信用するのは、董卓殿を知っている者だけだ。協力した義勇軍の朱里と雛里でさえ、北郷殿の命で動いたようなものだ。無理もないがな。

「よくもまあ、これだけ好きに動いたものね」

「犠牲を出さない為、最善の方法を採らせて貰ったでござる」

「まあ、結果的にはそうなったわね。それで、董卓達はどうするつもりよ？」

「董卓殿は腹心を連れて北郷殿の下へ。配下の将達は既に地方へ散

っているでござる」

恋は大分渋ったが、董卓殿を表舞台に出す訳にはいかない。董卓軍は散開したように見せた方が良い。

「都の歪んだ政の見直しを含めて、やるべきことは多そうね」

「申し訳ないが、その辺りはお任せしたいでござる」

「ええ」

素直に認めてくれたな。俺に政など、出来る筈もないが。

「剣。今この場には、貴方が以前提示した軍が全て揃っているわ」

一瞬、考えた。何のことか。

この場にいるのは曹操殿、荀イク殿、孫策殿、周喩殿、北郷殿、劉備殿。そうか、この者達は・・・。

「・・・この場には、拙者が寄る軍に提示した主要の者達だ」

「ええ。もう解るわね？乱世は、これから激化する。決めなさい。ここで。誰の軍に寄るかを」

「・・・そうか。そうでござるな。しかし、拙者のような勝手気ままなものを必要とするでござるか？」

「ええ。私は求めているわ」

「華琳様・・・」

「私もよ。文句はないわね、周喩？」

「はい」

「俺達もだよ」

「そうですね～」

まあ、一度は誘いを受けたのだ。そうなるか。

「ならば、一つお聞きしたい。拙者に独立行動権を与える気のある軍はあるでござるか？」

聞いてみる価値はあるだろう。楽に与えられるとは思っていない。

「また・・・随分なことを言い出すわね」

「そんな権利、与えられる訳ないでしょ！」

「今回のことでも、好き勝手に動いていたからな」

「まあ、それで目的の乱を治めているんだから、凄いわね」

「俺は良いよ。皆が認めるかは解らないけど」

「認めてくれますよ。皆優しいですから」

「・・・まあ、聞いてみただけでござる。拙者は一度、西涼に戻るでござる」

「・・・結論は？」

「拙者の一存で決めるのは、些か気が引けるでござる。拙者の副官にも聞いてみる必要があるでござるからな」

石幻に蝶、段恵。俺の一存だけではない。皆の意で決めなければな。

「拙者の騎馬隊が軍に訪れた時は、よろしく頼むでござる。では、失礼するでござる」

兵舎を出た。

手を見る。生々しく感覚が残っている。張譲をこの手で斬った。その感覚。解っていたことだ。俺が斬ることになるだろうことは。後悔はしていない。いずれ、人を斬ることになった。早いか遅いかの違いだけだ。

隊に戻った。すぐに石幻と蝶が出て来た。

「西涼に戻る。行くぞ」

「はい」

「準備は出来ています」

速さを求める騎馬隊だ。出動準備は常に整っている。その為の軽装備でもある。

「剣様。如何か致しましたか？どこか顔色が優れない御様子ですが」

「大丈夫だ。行くぞ」

顔色が優れない、か。優れてはいないだろうな。人を殺して気分の優れる者などいない。

西涼へ真っ直ぐ向かう。俺達の行く先はどこになるのか。それは、まだ誰も解らない・・・。

幕引き（後書き）

次回予告～。

剣「反董卓連合についてはこれで終わりだ」

蝶「剣様。わたくし達はこれからどうするのですか？」

剣「どうしたい？」

石「私は民を重んじる国ならば」

段「好きにしな。俺はお前らに付いて行くだけだからな」

剣「いっそ、全てに行くか」

・・・はい？

剣「お前が書けば良いだけの話だろう？」

蝶「はい。事実、そのようなことを考えておられるたのでしょう？」

・・・時間があれば。

剣「やれやれ」

段「剣の愛人は誰になるんだ？」

剣「・・・何のことだ？」

石「剣殿も大変ですね」

蝶「では、これからもよろしくお願いいたします」

剣「・・・ああ。今回は次回の題名は無しだ。次回もよろしくな」

徐州

俺達は義勇軍を率いて徐州に来ていた。先の董卓の一件で、朝廷から指令がきたからだ。その董卓、月は詠と一緒に俺のところでメイドをしてくれてるんだけどな。

暫くは朱里と雛里を中心に政務に忙しかったけど、最近は漸く落ち着いてきた。俺もやっと慣れてきた。

剣さんのことはあれから何も聞いていない。俺達のところには来てくれなかったってことか……。

「ご主人様、どうかしましたか？」

「いや。何でもないよ、愛紗」

ぼーっとしてたみたいだな。

「なぁ。愛紗は剣さんのこと、どう思う？」

「……どういうことでしょうか？」

「好きなんだろ？」

「……はい」

「俺達のところには来ないのかな？」

「剣のことは私達にもよく解りません。剣には憶測など通用しませんから」

剣さんは俺達か曹操、孫策のところに寄ると宣言してる。どう考えても、俺達が最弱だ。剣さんが一緒だと心強いんだけどな。

「剣のことは考えても仕方ありません。今日の政務を」

「そうだな」

さて、今日も頑張りますか。

そう考えて政務室に向かおうとした。けど、見慣れた小さな、それでも頼もしい軍師が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「あわわ！ご主人様！愛紗さん！大変です～！」

「どうした？」

「皆さんもう広間に集まってますので、来てください～！」

雛里に促されて俺達は広間に向かった。確かに、皆集まってる。

「どうしたの？」

「・・・公孫賛さんが袁紹さんに討たれました」

「白蓮ちゃんが！？」

桃香は知り合いだったっけ？

「突然のことだったそうです。宣戦布告もなく、いきなり・・・」

「・・・乱世がとうとう始まったということだな」

「そうね。私達も用心する必要があるわ」

「あたし達もいつ攻められるか解らないからな」

俺達も攻められるのか・・・。

「紫苑と馬超殿の言う通りだが、まだまだ注意力が足りないな」

「はっ！？」

聞き覚えのない声に、皆が警戒する。でも、声を出した張本人は何でもないようにそこに立っていた。

「剣！」

俺は徐州にいる義勇軍、いや、北郷軍を訪れた。隠形の業で潜んでだが。

「剣！」

「久しいな、愛紗」

「・・・どうして、ここに？」

「それ以前の問題がある。この場に潜んで来るとは」

「これは忠告だ、星。
先程公孫賛殿の話があったが、宣戦布告などするものか。既に乱世は始まっている。悠長なことを言っている暇はない」

皆が押し黙った。俺は更に続けた。

「はっきり言おう。ここを急襲するつもりがあれば、一刻後には出来る」

「なっ！？」

「俺が一人でこの場に来る訳がない。俺の騎馬隊がすぐ近くまで来ている」

騎馬隊自体は息を潜めている。既に州境は越えている。

「良いか。乱世は既に始まっている。情報を漏らすな。警戒しろ」

「・・・そうか」

北郷殿が頷いた。それを見て溜息をついた。

「俺を警戒しなくて良いのか？」

お人よしばかりだ。星は若干、警戒しているが。忍ばせている剣を出す構えを見せている。

「剣さんはそんな汚いことはしないと思います」

「朱里の言う通りだ」

信頼されているということか。やれやれ。

「なぁ、剣さん。俺達のところに来たってことは、仲間になってくれるのか？」

俺が来た目的を聞いてきたか。確かに、俺達は思想に最も近いこの軍を選んだ。だが、正式な決定ではない。

「では、拙者に独立行動権を与えてくれるでござるか？」

「はあっ！？」

答によっては、寄る軍を変えるかもしれないな。

「そういえば言ってたな、そんなこと」

「そんなことで済む話ではありません！独立行動権を持っている軍などありません！」

「そうなの？」

「そうです！」

やれやれ。論議が始まってしまったか。

「剣」

静かに皆から距離をとった。

「どうした？」

「徐州に袁術軍が入った」

無呼からの情報。少し表情を変えた。攻めてきたか。

「狼煙を上げろ。その後、詳しく様子を見に行ってくれ」

「解った」

論議が繰り返されている。その論議を聞きながら、機を見て姿を消した。隊と合流する。

「石幻、蝶。問題はあるか？」

「ありません」

「行くぞ」

雷光に乗り、駆け出した。袁術軍がいるという場に向かう。二刻で到着した。まだ居場所は掴まれていないだろう。素早く丘に身を隠した。

「剣」

「何か解ったか？」

無呼の声に耳を潜めた。

「呂布がいる」

「‥‥何だと？」

恋がいるという話だ。旗は見えない。隠しているのか？

「近付けるか？」

「警戒は薄い」

決めた。恋に近付く。

「石幻、蝶。暫く潜んでいろ。少し動く」

「解りました」

「お気をつけて」

静かに動き出した。俺は無呼に従い、恋に近付いた。

陣の警戒は薄い。昼時だからと、敵地で斥候も出さずに食事中とはな。恋の隊に緩みはないが。

「恋」

声をかけ、姿を見せた。傍に音々音がいるが。

「ど、どこから現れやがったですか！？」

「‥‥剣」

「恋。何故、袁術の軍にいる？」

「お前に言うことは何もないのです！」

「・・・仕方がないから」

仕方がない？

「何かあるのか？」

「無視するな～！」

「・・・皆、お腹すいてる」

「兵糧がないのか？」

「・・・（コクっ）」

「れ、恋殿！教えちゃ駄目なのです！」

「・・・剣なら良い」

「そうか。兵糧不足か。だからこそ、徐州を攻めて兵糧を得ようとしているのか」

「・・・（コクっ）」

「辞めておけ。この軍の士気は低い。お前も腹が減っていつもの力は出ないだろう」

「・・・でも」

「北郷殿に降伏しろ。そうすれば、保護してくれる筈だ」

「何を言ってやがりますか！恋殿が降伏などありえないのです！」

「恋。北郷殿や劉備殿なら、お前達を安全に保護してくれる筈だ。董卓殿もいる筈だ」

「・・・・・・・」

「じきに、北郷軍が来る。判断はその時だ。降伏するのなら、軍は動かすな」

「・・・剣は、北郷軍に？」

「まだ解らないが、その予定だ」

「・・・・・・・」

悩むのは解るがな。部隊の命を背負ってもいるのだ。

「俺は行く」

素早く恋の陣を出た。騎馬隊に合流し、暫く待った。身を潜め、静かに機を待つ。

「剣殿。北郷軍が二里先の位置に到着したようです。すぐに攻撃を開始する構えをしています」

「静かに移動する。袁術軍の側面を突く。北郷軍が半里まで迫った時、動くぞ」

移動を開始した。兵には勿論、馬にも木を噛ませ、声を出さないようにする。

側面をすぐにでも突ける位置に移動した。静かに機を待つ。

「剣殿。北郷軍が袁術軍まで半里の位置に。じきに衝突します」

「乗馬！」

声を上げる。俺も雷光に乗った。雷光は自分で木を吐き出した。

「袁術軍の側面を突く！陣を乱すことに集中しろ！そして、生きて戻れ！」

『おおっ！』

先頭で駆け出した。素早く丘を出る。袁術軍の側面に突っ込み、突き崩す。

すぐに袁術軍は混乱状態になった。三百騎が三隊になり、更に数十騎まで別れ、また集まる。掻き回す。

別方向から圧力を感じた。北郷軍だろう。離脱を命じた。素早く袁術軍から抜け出る。

「報告」

離脱してすぐに状況を報告させる。だが、騒ぎが伝わってきた。

「どうした？」

「重傷者が一人いるようです・・・」

近寄る。確かに一人、右腕を深く傷付けている。剣が深く入ったのだろう。

「傷を見せろ」

戦況は北郷軍が袁術軍を潰走に追い込んでいる。既に戦場から遠く離れた。傷の手当も出来る位置だ。

右腕を見た。化膿している。このままでは腕が腐る。

「針と糸を用意しろ。右腕を落とす」

「つ、剣様!?何を・・・」

「生かす為だ。このままでは腕が腐る。腐れば浸蝕され、最悪死に至る。死なせる訳にはいかない」

俺は決して針を縫うのは上手くない。だが、俺以外は処方出来ない。俺がやるしかない。

「剣殿。大丈夫なんですか?」

「解らない。だが、するしかないだろう。腕を落とし、血止めする」

適当に縫う。そして、焼いて血止めだ。火が必要だな。

「火を起こしておけ。始めるぞ」

刀を抜いた。

「つ‥‥剣殿‥‥」

「何だ?言いたいことがあるのなら、今のうちに言っておけ」

「‥‥俺は、死ぬんですか?」

「死なせない。その為に行うことだ」

「‥‥しかし‥‥腕を失えば」

「常に言っている筈だ。死ぬことが最も駄目だ。解っているな?」

「‥‥俺はもう、戦えません」

「だから何だ?死ぬことは許さない。良いな?」

「‥‥俺は」

「死にたいのか?」

「‥‥」

「死ぬことを許した覚えはない。生きる気力を失えば、間違いなく死ぬぞ」

「‥‥俺は!」

「生きろ。俺が言えることは、それだけだ」

数人に全身を押さえ込ませた。動けば針を上手く縫えないからだ。
刀を振りかざし、腕を落とした。出来るだけ傷口が粗くならないように斬った。

「ぎゃあああっ！」

木霊した。腕を落としたのだ。悲鳴は仕方がない。

「しかと押さえておけ。動かせば死なせるぞ」

そう言って、針を取った。これからは俺の速さが問題だ。
血が多く噴き出しているところから手早く縫う。全てを縫う時間はない。血を止められるだけ止める。
既に、血を流し過ぎて気を失った。血が足りなくなれば終わりだ。限界だな。

「切り口を火に当てるぞ！」

火に当てた。皮膚が焼ける音が生々しく聞こえる。だが、傷口が炙られ、固まっていく。血が収まってきた。
完全に固まり、血が収まった。素早く火から離した。首筋に手を当てる。

「脈は……良し、ある。まだ生きている。後は寝かせておけば、恐らく大丈夫な筈だ。水を少しずつ飲ませながら、眠らせてやれ」

息を吐き出した。これで、漸く落ち着ける。

「お疲れ様です。剣様」

「ああ。戦況は？」

「既に袁術軍は潰走しました。先程、北郷軍から使者が来ていました。石幻様が対応しています」

「……そうか」

とにかく、これ以上問題はないだろう。

「剣殿」

「石幻。北郷殿は何か言っていたか？」

「協力感謝すると。礼がしたいから城まで来て欲しいとのことです」

「……石幻。もう一度、使者として行って来てくれ。怪我人の養成をして貰いたいとな」

「解りました。すぐに向かいます」

石幻が再び駆け出して行く。環境の良い場で眠らせてやりたい。今はただそれだけを思う。

暫く待つと、石幻がまた戻って来た。愛紗もいる。

「面倒事は後回しだ。怪我人を運ばせて貰う」

「解った」

隊に乗馬を命じ、城に向かった。すぐに怪我人を寝かせた。眠っ

ている顔色は悪くない。これで良い。命に危険はない。

「助かる。間違いなく血が足りていないだろうが、少しずつ養分を足していけば血も元通りになるだろう」

「もう大丈夫なのか？」

「恐らくな。さて、俺はどうすれば良い、愛紗？」

「ああ。とりあえず、ご主人様のところに行くぞ。楊延と白倫も連れて」

「良いだろう」

石幻と蝶を連れ、広間に向かった。他の者達には休息を命じておいた。

広間には北郷殿を初め、主立った者達が勢揃いしている。全て見知った者達だが。

「剣さん、援軍ありがとう」

「気にすることはないでござる。拙者が好きに動いただけでござる。北郷殿。袁術軍にいた呂布はどうしたでござる？」

楽に潰走させることが出来たのは恋が動かなかったからだろう。ならば、北郷殿に降伏した筈だ。

「・・・ここ」

恋が姿を見せた。傷を負った訳でもなさそうだな。

「恋も俺達の仲間になったんだ。剣さん、貴方も」

「独立行動権は？」

「剣。何故、そこまでこだわる？」

「こだわってはいけないか、星？」

「規律があっての軍だ。独立行動などありえないだろう」

「だから何だ？そういったことは普段から常識に囚われている者に言うのだな」

「・・・確かに、お前程常識知らずは見たことがないな」

「褒め言葉として受け取っておこう」

常識に沿った行動など、何一つした覚えはないからな。俺は俺なりの行動をしただけだ。

「剣さんの今日の行動で、袁術さんの軍を楽に潰走出来ました。その常識外れな、勝手な行動で」

やれやれ。褒めているのか、けなしているのか。朱里に悪気があるとは思わないが。

「剣殿は普通に行動しているだけだ。剣殿に独立行動権を与えれば、俺達の騎馬隊はそれだけの役割を果たしてみせる」

「止めろ、石幻。余計なことは言うな」

確かに、石幻の言う通りではあるがな。それだけの役割は果たすだろう。その自信はある。だが、それは行動で示すものだ。言葉で表すものではない。

「与えるか、与えないか。どちらかでござろう？」

「・・・それ程簡単なことじゃありませんよ～」

「雛里様。剣様の要求に応えられませんか？」

「・・・そう言われても」

「良いですよ。私達の仲間になってくれるなら！」

皆が頭を唸らせている最中、その空気を見事に突き破った。唐突の発言に皆が視線を向ける。劉備殿だ。

「・・・桃香様。事態を理解していますか？」

「だって、その方が全部丸く収まるでしょ？」

「そういう問題なのでしょうか・・・？」

「それに、剣さんはどうせ命令無視するんじゃないかな？」

「・・・くっくっくっ」

つい笑ってしまった。

「これでは信頼されているのか、信用がないのか、解らないな」

「確かにそうですね。しかし、剣殿は良いのですか？」

「構わない。信頼は結果として付いてくる。それに、別の意味で信頼されているのだろう」

「じゃあ、そういうことで決定だな」

「・・・はぁ」

星が大きく溜息を吐き出したが、適当に無視した。

「承知したでござる。では、よろしく頼むでござるよ」

まずは第一歩。乱世は長い。大事なのはこれからだ。

この選択が俺にどのような結果を齎すのか。それはまだ解らない。

だが、後悔はしない。決めた道をただ歩き続けるだけだ。

徐州（後書き）

次回予告～。

剣「さて、まずは蜀に所属だ」

石「はい」

愛「よく来たな。歓迎する」

一「これからよろしくな」

剣「ああ」

蝶「これからの方針はどうなっているのでしょうか？」

桃「ん～、とりあえず皆さんの歓迎会だね」

石「・・・は？」

剣「察しろ、石幻。そういきり立つな」

朱「皆さ～ん！用意出来ましたよ～！」

星「呑むか？」

紫「ええ」

翠「食うぜ！」

鈴「食うのだ！」

石「……私達は来る場を間違えたのでしょうか？」

剣「言うな。息抜きも必要なのだろう」

雛「……寛いでくださいね？」

蝶「はい。解っていますよ」

剣「次回、『昔話』よろしくな」

昔話

俺の騎馬隊は全て北郷軍に合流することになった。完全に自由の権利を持つ独立行動権を有した遊撃隊。最も望む形だ。

軍に寄った以上、俺にも軍務の仕事が回ってくる。その程度はどうということもないがな。

だが、そのようなことは全て後回し。今は、

「じゃあ、始めようか。祝勝会に剣さんと恋の歓迎会を兼ねて」

『かんぱ～い！』

ということらしい。要は騒ぎたいだけだ。

「あの程度の勝利でこれ程の祝勝会をする必要があるのか？」

「そう言うな、石幻。徐州に来てまだ間もない。今まで処理で忙しかったのだろう」

「そうですね。わたくしもそのような印象を持ちました」

「はぁ・・・」

「まだ、心は晴れないか？」

過去に石幻達は賊と称され、愛紗達に討たれた。生き残った者達の中にも、その恨みを抱いている者はいる。石幻も少しはその想いがある。

「私は剣殿に従うと決めてから、そんな想いは割り切っています。ただ、馴れ合う気はありません」

「余り気を張り詰めるな、石幻。お前が気を張り詰めることで、兵達にも余裕がなくなる。それで良いのか？」

「……それは」

「良くありませんね？」

蝶が滑らかな笑みを漏らす。その笑みを見た石幻が大きく息を吐いた。

「すいませんでした」

「いや。解れば良い。責めるつもりはない」

「これから、先の長い戦いの日々になるのです。触れ合っておいた方がよろしいと思いますよ？」

「……気をつけてみる」

注がれていた酒を一息に呑み干した。

「少しずつ慣れれば良い。社交辞令のようなものだ」

俺はゆらりと立ち上がり、席を見渡した。

「剣様？」

「その社交辞令に出向こうと思ってな」

「わたくしも行きます」

「石幻。お前も来い」

「解りました」

二人を連れて向かう。まずは、北郷殿と劉備殿か。

「剣さん。楽しめてる？」

「さあ、どうでござるかな？」

「剣さんって、真名ないんだろ？」

「貴殿もでござろう？」

「まあね」

「拙者のことは剣で良いでござる」

「そっか。俺のことも一刀で良いよ。ご主人様って堅苦しくてさ」

「そうだったの？」

「そりゃそうだろ」

まあ、確かに。解らなくもないな。

「私の真名は桃香です。よろしくね？」

「こちらこそ。桃香殿」

「・・・俺は石幻です。よろしく」

やはりまだ堅さが残るか。少しずつ取れば良い。

「わたくしは白倫です」

「真名は二人共お預けか？」

「そのようでござるな。その程度は二人に任せているでござる。二人の判断次第でござるな」

「まあ、仲間になって間もないしな。少しずつ慣れれば良いさ」

「はい。どうぞ」

桃香殿に酒を注がれた。口に運ぶ。

「美味いでござる」

「剣はお酒大丈夫なんだな」

「まあ、大丈夫でござる」

軽く誤魔化した。俺は酔わない。今回で解るだろうがな。

「では」

石幻と蝶を置いて俺は他の席に行った。

「剣。呑むか？」

「愛紗。済まないな。注いで貰おう」

「ああ」

愛紗が俺の杯を満たす。その杯を口に運ぶ。

「よく来てくれた」

「ああ。とりあえず、俺はこの軍で出来得る限りのことをしよう。その為に来た」

「上手くやれそうか？」

「さあな。治世は朱里と雛里に任せておけば問題ないだろう。軍務はお前がいる。君主の二人も良君だ」

特に案じてもいなかったがな。徳を重んじる国。良いものだ。

「そういえば、一つ聞くべきことがある」

「何だ？」

「徐州に牧はあるか？」

「・・・確か、小さなものが一つあったような。それがどうかしたか

？」

「俺の知人が西涼で牧を営んでいるが、こちらに移動したいらしいのだ」

「成る程な。少し探してみよう。朱里達も何か知っているかもな」

段恵のことだ。西涼に置き去りだからな。

「まあ、これからは何かと大変だろうな」

「お互いにな」

愛紗が注いだ酒を呑み干し、席を立った。次は、

「朱里。雛里」

「剣さん。お疲れ様です」

「ああ」

「よく来てくれましたね」

「ああ」

二人は酒を呑んでいない。まだ呑む訳にはいかないのだろうがな。

「剣さんは心配してないんですが、他の方達が心配ですね・・・」

「何がだ？」

「お酒ですよ～」

「・・・皆さん、癖が悪いんですか？」

「良くはないな。星と紫苑は特に」

「・・・あわ～」

呑むのは構わないが、悪酔いは勘弁して欲しいな。言っても聞かないだろうがな。

「余り気にするな。気にするだけ無駄だぞ」

「あわわ・・・介抱しなくて良いんですか？」

「放っておけ。自業自得だからな」

「それもそうですね」

朱里は一度、痛い目にあっているからな。俺が押しつけたのだがな。

「剣さん。隊に何か必要なものはありますか？」

「愛紗にも言ったが、牧があると助かる。厩より牧の方が馬は喜ぶ」

「雷光もいますしね」

雷光は厩を嫌っている。いや、好きな馬などいないのかもしれな

い。

「牧は小さなものが一つある程度です。何頭入れるでしょうか・・・」

牧はあるようだが、かなり小さいようだな。それも仕方がないか。段恵は徐州に向かって来ている筈だ。馬の面倒は意地でも自分ですると聞かなかった。じきに到着するだろう。馬のことは段恵に任せておけば良い。

「まあ、これからよろしくな。朱里。雛里」

「はい！」

「はい」

俺は席を立ち、別のところに向かう。次は、

「あら。呑んでいるかしら？」

「そうだ、剣よ。お前の為の宴だろう」

「紫苑。星。お前達は既にかなり呑んでいるようだな」

この二人、既に酔っていないか？

「調子に乗って呑んで良いのか？明日も仕事があるだろう？」

「二日酔いになんてなりませんよ」

「ならば良いが」

「ほら。お前も呑め」

星に酒を注がれ、一気に呑み干した。やれやれ。

「やはり、いける口ではないか」

「解った解った。付き合わないとは言っていないだろう？」

「そうでないとな」

三人で杯を重ねた。

～～～～～

「やれやれ」

俺は立ち上がった。倒れ伏している二人を置いてな。

「・・・剣、あんたは大丈夫なのか？」

「何の話だ、一刀？」

「・・・いや、だってあんだけ呑んでたろ？」

「俺は酔わない。幾ら杯を重ねようと、関係ないな」

「・・・で、星と紫苑がぶっ倒れたと」

「そういうことだ」

いつの間にか、注目を集めていたのは知っていた。俺には余り関係ないがな。

俺達が呑み比べをしている間に宴は終わりを迎えていた。寝ている者もいる。

「さてと、片付けるか」

「そうですね、と言いたいところですが、大丈夫なんですか？」

「問題ない。酔わないのでな」

散乱している食べ物や飲み物、食器を片付け始めた。倒れ伏している者はそれぞれの寝室に運んだ。

片付けを終え、俺は一人で与えられた寝室に入った。特に何かすることがある訳ではない。すぐに寝台に横たわった。だが、すぐに体を起こした。誰かの気配を感じたからだ。

「剣。起きているか？」

「ああ。入って構わないぞ、愛紗」

愛紗が部屋に入って来た。俺は立ち上がり、熱い茶をいれた。

「済まん」

「気にするな。酒は充分呑んだのでな」

一口飲み、茶を置いた。

「どうした？」

「いや・・・あれだけ呑んで、大丈夫なのかと思ってな」

「問題ない。あの二人は相当辛かったようだがな」

俺と呑み比べをすることがそもそもの間違いだ。酔わない人間と比べてもな。

「で、何だ？」

「・・・少し話したいと思ってな」

茶をもう一度手に取り、少し口に含んだ。

「何だ？」

「・・・お前の過去に、何があったんだ？」

「・・・随分直球だな。以前お前に言った、好意に応えることが出来ないということに引っ掛かっているのか？」

「・・・ああ」

まあ、無理もないか。

「少し、知人の昔話をしよう。俺の未来を示してくれた者の話だ。俺がまだこの大陸に流れてくる前、俺が住んでいた国は戦乱の世の最中だった。その知人は人斬りだった。世を正しい方向へ導く為、自らの刀を振るっていた」

「・・・・」

愛紗は黙って聞いている。俺は続けた。

「世を正しい方向に導く為、自らの刀を振るい続けていた。だが、人斬りを続ける自らの心情と、民の為と想う心情に矛盾を抱くようになった。

だが、そのような心の矛盾を解きほぐしてくれる者が現れた。そして、その者を妻とした。その経緯は詳しく知らないがな。

だが、敵の策略に嵌まり、妻が攫われた。彼は罠だと解っていながら、意を決して妻を助けに行った。幾多の罠を切り抜け、数多の傷を受けながら妻の下に辿り着いた。

その時点で彼は満身創痍。とても戦える状態ではない。だが、それでも、彼は命をとして最後の戦いに挑んだ」

「・・・助かったのか？」

人は、楽な方向に逃げる。辛いことを考えたくはないのだ。それは誰もが考えてしまう理想像。だが、現実は厳しい。

「死んだ」

「・・・そうか。だから、そういう想いをしたくないから、お前は・・・」

「妻が死んだ」

「・・・え？」

「彼は生き残り、妻は死んだ。自らの夫である彼に斬られてな」

「な、何故・・・？」

「最後の戦いに挑んだ彼に勝機はなかった。だが、そこで諦めるような者ではなかった。

死ぬならば自分。妻は死んでも生かさなければならない。

だから彼は、ない筈の勝機を自らの命を代償に勝機を見出だそうとした。そして、その考えは妻も同じだった。

彼が刀を振り上げ、渾身の力で振り下ろした時、妻は間合いに入り、自らの体を投げ売って敵を抑えた。彼が気付いた時、既に敵と共に両断していた」

「あ・・・」

俺は一息つき、茶を飲んだ。

「互いに愛し合うことが悪いとは言わない。本来それがあるべき姿だということも解っている。だが、それは乱世に身を投じた者があるべき姿ではないのかもしれない」

「・・・だが、その妻に後悔はあったのか？文字通り、愛に生きた人生だったのではないのか？」

「・・・俺には解らない。だが、一人残された彼の想いはよく解る。俺には堪えられない」

「・・・剣」

愛紗の悲愴な声が聞こえる。その声を無視し、残っていた茶を飲

んだ。

「話は終わりだ。明日からまた軍務で忙しくなる。もう眠った方が良い」

「・・・解った」

愛紗はまだ何か言いたそうだったが、渋々出て行った。俺は寝台に横たわり、目を閉じた。

「・・・何だ？無呼」

無呼の気配を感じる。無呼は何か命じていない限り、俺の傍に控えている。今の話も聞いていただろう。

「今の話」

「何か言いたいことでもあるのか？」

「お前の話か？」

「・・・違う。本当に知人の話だ」

「お前にも似た経験があるのか？」

「・・・彼に比べれば、俺はまだ良い。彼は自らの妻を斬殺してしまった。俺は・・・愛する女を護れなかった」

「そうか」

喋り過ぎた。何故、話してしまったのか、束の間考えたが止めた。
もう遅い。

「忘れてくれ。俺はもう眠る」

「解った」

目を閉じた。だが、暫く眠れなかった。
何故、あのような話をしたのか。その疑問だけが頭に残っていた。

昔話（後書き）

次回予告～。

剣「……昔話か」

愛「……」

無「……やれやれ」

蝶「剣様。どうか致しましたか？」

剣「何でもない。気にするな」

星「あ～～～……」

紫「う～～～……」

朱「……聞きたくないですけど、大丈夫ですか？」

雛「……あわ～」

桃「あはは。大丈夫かな？」

剣「次回だな」

段「俺の出番だな」

剣「ああ。次回、『視察』よろしくな」

視察

徐州に来てから一週間が過ぎた。俺達の騎馬隊は一週間で落ち着き、今では調練を繰り返している。

軍の外れに簡単な兵舎を築き、俺の騎馬隊はそこに駐屯している。非常時はいつでも出動出来るように準備はしている。牧が傍にないのが心苦しいがな。

一週間の間に、段恵が到着していた。徐州に牧を造ろうと駆け回っている。だが、段恵は牧だけでなく商業にも心得がある。徐州の商業を活発化させる為にも動いて貰っていた。

俺は一刀がいる執務室を訪れた。

「失礼する」

「剣。どうかしたか？」

「今日の書類だ」

一刀に軽く手渡し、反応を待った。

「……もう終わったのか？まだ昼だぞ？」

「終わった。それだけのことだ」

「あ……ああ」

「相変わらず政務は忙しいか？」

「まあね。大変だよ。軍務はそれ程じゃないのか？」

「あの愛紗が軍務担当だ。それなりに回ってくる」

「それなのにもう終わったのか？」

「まあ、俺の今日の仕事が早かったがな」

「何かあるの？」

「先日到着した段恵が商業を活発化させる為、街に視察に行くらしい。付いて来いと煩いのでな」

「成る程。よろしく頼むよ」

「段恵にそう伝えておく」

退出し、俺は段恵がいる部屋を訪れた。すぐに段恵が準備を済ませ、部屋から出て来た。

「別に構わないが、何故俺を伴う必要がある？」

「護衛だ護衛。商人ってのは狙われやすいんだよ」

「普段はどうしていた？」

「雇ってた。けど、今は全部西涼なんだよ」

「成る程な。解った」

徐州に来てまだ間もない。まだ信頼出来る者がいないのだろう。

「そういえば、お前の下に送った者はどうしている？」

袁術軍との戦で出た怪我人のことだ。俺が腕を斬り落とした者で、自分に出来ることはないか聞いてきた。当然だが、戦に出す訳にはいかない。故に、段恵の下に送っておいたのだ。

「隻腕の奴だろ？馬の世話をやってるよ。よくやってるんじゃねぇか」

「そうか。これからもお前の下に怪我人を送ることになるだろうからな」

「ああ」

戦では死人よりも怪我人が出る。その者達を追放するのは気が引けるからな。

「ん・・・？」

門に小さな二人の影。先客か？

「おっと、言ってなかったな。民政担当の二人が一緒だぜ」

朱里と雛里だ。何故そのようになったのかは知らないが、段恵には都合が良かったのだろう。

「城の外に出て、変な人に捕まって、売り飛ばされちゃったらどうしよう・・・？」

「・・・それ、星さん辺りが言ったことでしょう？」

「・・・うん」

「もう、人をからかうことばっかり考えてるんだから・・・」

「朱里ちゃん。念の為に、お財布は別々に持ってた方が」

「大丈夫。靴の下に隠してあるから」

「流石だよ、朱里ちゃん。備えがあれば憂いもないね」

「・・・成る程。護衛が必要だ」

呟いた。そのようなことを考えて街に出た試しがない。

「あ、段恵さん。剣さんも？」

「お仕事は良いんですか？」

「ああ。もう済んだ。護衛を頼まれてな」

「剣さんが一緒なら安心です」

二人が微笑む。ここまで段恵は考えていたのか？

「・・・流石に売り飛ばされるとかはねぇな」

「当たり前だ」

「殺されるぜ？」

『ええっ！？』

「・・・・」

二人をからかって楽しんでいる。事実、段恵は豪快に笑っている。

「ふぅ。街に行くのだろう？日が暮れるぞ」

さっさと歩き出した。いつまでもこの場にいる訳にはいかない。
時間を無駄にはしたくないのでな。

「何だよ。冗談の解んねぇ野郎だな」

「二人はそれなりに純粋だ。質の悪い冗談でも信じてしまう」

朱里はともかく、雛里はな。

「・・・ぐすっ。大丈夫かな・・・？」

「だ、大丈夫だよ。剣さんがいるんだし」

「・・・・」

「解ったか？」

「・・・解った。俺が悪かった」

やれやれ。だが、二人はついて来てはいるようだ。

「心配するな。万が一の時は、俺が割って入る。そうそう遅れは取らない」

「剣が死ぬ時は俺達も死ぬってことだな」

「……煽るな」

解っていないではないか。二人は不安げな眼差しを向けている。

「俺はお前を信用してんだぜ？運命共同体だろ」

「解った解った」

段恵は軽くあしらっておいた。朱里と雛里を軽く撫で、街へと促した。

街に着いた。街に来るまでの道程がやけに長かったな。

「ふ～ん。それなりに賑わいはあるようじゃねぇか」

「徐州の街に来るのは初めてですか？」

「いや。だが、注意深く観察するのは初めてだな」

まじまじと街を見詰める段恵の目には、先程までのふざけた感覚はなくなっていた。鋭い眼光。この街を隈なく計っているのだろう。

「夜に外出してる奴は多いか？」

「いや。俺が見る限りでは、多いとは言えないな」

「どうして解るんですか？」

「夜によくこの街を歩いているからだ」

遊んでいる訳ではない。それなりの理由がある。

「夜は暗い。その暗さに紛れて、暗躍する奴も珍しくねぇ。だろう？」

「ああ。民もそのことはよく解っている。だからこそ、夜は外出を控える」

「・・・剣さんはそのことに気付いて、夜に見回りを？」

「そういうことだ、雛里。民は夜を不安がっている」

「警邏に不満がある、ということですね・・・」

「ああ。警邏隊は組織しているが、不足しているということだ」

「だとすると、自警団を組織して貰うのが良いですかね」

「警邏隊を増やすことは出来ないか？」

「警邏隊に回せる人数が足りないんです・・・」

「まあ、そうなると自警団を組織して貰うしかねぇな。給金はあんのか？」

「……正直、ぎりぎりです」

だろうな。それ程金に余裕がある訳ではない。民政担当の二人がそう言うのだから尚更だろう。

「他に方法はないのか？」

「あるとすれば、軍の一部を一時的に警邏隊に回って貰うという方法がありますが」

「止めとけ。そりゃ、軍に悪影響を及ぼすぜ。警邏なんざに回されて、嫌気がさしちまう」

「そうですね。軍の志気が下がるのは困ります」

「俺の隊を回そう。恐らく、問題は起こらない」

「お前が今やってんだからな。あいつらが文句を言うとは思えねぇが」

「良いんですか？」

「隊のほんの一部を回すだけだ。大したことはない」

だが、その場凌ぎにしかならない。戦になれば、俺の隊は全て出動する。結局、別の方法が必要になる。

「まあ、時間はあるだろう。朱里、雛里。この件は考えておいてくれ」

「解りました」

任せておけば問題ないだろう。

「段恵さん。他に思い付くことはありますか？」

「そうだな…あるぜ。剣、あの桃を買いに行こうぜ」

意味が解らなかったが、とりあえず言う通りにした。段恵が指差した桃を買いに行く。

「済まない。その桃を一つくれ」

持ち金を売り娘に出した。

「はい。どうぞ。甘くて美味しいですよ」

「なぁ。悪いが、城に持ち帰って皆に配りてぇんだ。それなりに金は払ってんだから、も少しくれねぇか？」

「あ、はい。そうですね」

段恵がそう言い、更に桃を数個貰った。すぐにその店から離れた。

「段恵。何が言いたかった？」

「簡単だぜ。物の値が高いんだよ」

俺は給金を貰ってはいるが、使うことは皆無に等しい。物の値と言われても全く解らない。

「お前は普段から何も買ってねぇから解らねぇだろうが、さっきお前が払った金でたったこんだけの桃しか買えねぇってのはただの笑い話だ」

「そうなのか？」

「・・・確かに、先程の剣さんは払い過ぎだと思います」

「ですが、それ程高いでしょうか？」

「高い。剣は何も使ってねぇから金を持ってるが、普通の民がそれ程持ってる訳がねぇ。
日常生活に必要なものを買う。食料を買う。税を払う。
民ってのは苦労してるもんなんだよ。俺達の気付かねぇところでな。それを楽にしてやるのが政じゃねぇのかい？」

段恵が言うことは尤もだ。民の為の政であり、民の為の国だ。

「・・・私達には、まだ見えていないところが多くありそうですね」

「・・・まだまだ未熟です」

「いや、お前らはまともだ。指摘を聞き、改善する。それが出来るからな。俺が今言ったことも、西涼に比べれば軽いもんだ」

見ている景色が違う。俺が旅をしていた一年であれだけの財を築いただけはある。

「物の値を下げるには、物の流れをよくする必要がありますね」

「商人さんは少しずつ徐州に入って来ています。物の流れは自然とよくなると思います」

「成る程。時間の問題ってことか」

よく見えている。段恵が朱里と雛里を諭しているように見えるが、二人の視野が狭い訳では決してない。

不意に嫌な気配を感じた。間違いなく俺達を見ている。

「囲まれかけている」

無呼の声だ。三人はまるで気付いていない。

「いや、もう囲まれている。少しずつ包囲を狭めているようだな」

「左の店に入れ」

左の店。それは普通の茶店。ただし、一見はだ。

「三人共、立ち話もつまらないだろう。茶店に入ろう」

「そうだな。一服するか」

「はい」

三人は素直に従った。茶店に入ると、すぐに茶と菓子を注文した。

「どうする？」

「少し抜ける。三人はお前の部下に任せて問題ないな？」

「ない」

良し。ならば、

「俺の奢りだ。茶でも飲んでいてくれ。すぐに戻る」

「どこに行くんですか？」

「聞いてやるな。厠だ厠」

段恵の言に朱里と雛里が赤くなり、俯いた。俺はすぐに茶店を出た。

今の茶店は無呼が信頼する諜報員が集まる店だ。二人しかいないが。その店の諜報員は無呼の部下だ。店にいて危険はない。

「十五人」

「包囲を縮めているようだな。俺が叩く」

鞘を帯から外した。抜くつもりはない。

囲みが縮まったところで、俺一人が囲まれた。

「何か用か？」

「一緒に来い」

小刀を背中越しに突き付けられているのを感じる。囲まれたまま何かの店に連れられた。

「金を出せ」

従わずに周囲を観察した。手と足を縄で縛られ、捕らえられている者が多勢いる。人を攫っているのか？

「……潰すか」

鞘で後ろにいる者を突き上げ、背後の小刀を飛ばした。

「貴様！」

逆刃刀があれば、今この場で抜くべきなのだろうが、生憎折れている。鞘のままで充分だが。

再び数人に囲まれたが、鞘で薙ぎ倒した。総勢三十人程いたが、全て倒していた。

「これで全員か？」

「数人逃げた」

「放っておけ」

縄を解き、攫われていた者達を解放した。泣いて喜ぶ者もいれば、感謝を告げに来る者もいた。

「帰るべき者の下に帰れ」

それだけ告げ、この場にいた者達を帰した。全員が出たのを確認し、俺も茶店に戻った。

「あ、剣さん」

「済まない。遅くなった」

俺の茶を注文し、出された茶を飲んだ。

「話は済んだか？」

「ああ。お前も貴重なもんが見れたろ？」

「・・・何？」

段恵・・・気付いていたというのか？

「んじゃ、帰るか」

話を切り上げ、段恵が立ち上がった。俺の話を流す気か？だが、そろそろ日が暮れる。帰る頃合いではある。

俺は余っていた茶を飲み、代金を払った。俺達は店を出た。

「帰るか」

「はい。今日のことはいろいろと話し合ってみようと思います」

「任せる」

民政に口出しするつもりはない。任せていられる筈だ。

城に戻って来た。朱里と雛里は執務室に戻った。

「段恵」

「ああ。街の闇の部分を見たろ？」

「・・・気付いていたのか」

「俺はこれでも死線を幾つか越えてんだぜ。あの程度は見抜けねぇとな」

「・・・成る程な。俺にしつこく護衛を頼むのも理解出来る」

「まあな。俺は自分で身を護れねぇ。用心は常にしとくもんさ」

大した心構えだ。それが商人として必要なのかもしれない。

「どんな店だった？」

「人攫いの店だ」

「えげつない店があるもんだな」

「西涼にはあったか？」

「あったぜ」

「・・・そうか」

どこにでもあるのかもしれない。乱世で生きる為に、手段を選んではいられないということか。

「・・・もう少し、生きやすくならないものか」

「その為に、騎馬隊を組織したんだろ？」

「言ってみただけだ。解っている。その為に調練を繰り返し、戦場に赴く」

気を許せる友がいるということは本当に心強い。時にはこうして弱音を吐くことが出来る。人間、それ程強くはない。

「商業のことは任せておけ。それから、牧のこともな。お前は治安だ」

「徐州だけなら難しくない。だが、大国に攻められれば厳しいかもしれないな」

「大国か・・・。今争ってる袁紹と曹操、どっちが勝つと思う？」

「間違いなく曹操殿だ」

河北で行われている大戦。兵の数だけなら袁紹軍が上だ。だが、兵の練度は曹操軍が遥に勝っている。兵は数でなく質。

「・・・危険だな」

今行われている大戦が終われば、狙われるのは俺達だ。数は勿論、質も劣る。俺達の騎馬隊が敗れることはないが、軍として勝つことはない。

「まあ、なるようにしかならない」

「そりゃそうだ」

勝つ可能性は限りなくない。だが、それは首脳陣が決めれば良い。

俺達の戦はまだ先の話。来るべき時に考えれば良いだけのことだ。

視察（後書き）

次回予告～。

剣「護衛には慣れているが、やはり気を遣うものだ」

段「何だ？気を遣ってたのか？」

剣「護衛の役割として、当然だろう？」

雛「・・・剣さんと一緒だと安心です」

朱「剣さんはいろいろと経験豊富ですね」

剣「まあ・・・何かと大変な身だったからな」

朱「過去の話ですか？」

剣「そうだ」

段「お前の過去か。興味あるな」

剣「話すつもりはない」

段「言ってみただけだ。話すってんなら聞くけどよ」

雛「・・・次回はお休みですね」

段「考えようによっては、まずいことになるな」

剣「休暇に纏わる話という訳だ。働き詰めという訳ではないからな」

段「適度に休むべきってことだ」

剣「次回、『休暇』よろしくな」

休暇

俺達の騎馬隊は北郷軍のどの軍よりも調練は厳しい。だが、休みはある。三隊に分けられている中で、別々に週一の休みがある。俺、石幻、蝶の隊長は軍務がある為、休みは限られているが、休みは当然ある。大事に動けなければ意味がないからだ。

「・・・とは言え、休みにすることはないのだがな」

今日は俺の完全休養日だ。することは何もないが。

街に行く。金は充分ある。だが、欲しい物はない。無駄遣いをするつもりはない。

他の者達の手伝いをするという選択があるが、それは休みにならない。

「・・・寝るか」

他の選択肢を見付けられなかった。雷光を連れ、庭の陽射しが当たる場で共に寝そべり、目を閉じた。

～～～～～

どのくらい時が経ったのか。陽射しはまだ射している。今は昼か。昼飯を取りに行くか。

立ち上がろうとした時、何者かが近付いて来ていた。特に警戒はせず、座ったまま出迎えた。

「剣様。お休みですか？」

「ああ。蝶、雛里。どうした？」

蝶と雛里だ。何をしに来たかは知らないが。

「もうお昼ですし、ご一緒に食べませんか？」

「持って来てますよ」

「済まない」

二人が持って来ていた食物を食べていた。のんびりとした時間が流れている。

「ブルル」

「雷光。腹が減っているだろう？」

秣を与えた。静かに食べ始めた。

「賢い馬ですね」

「ああ。言葉を少し理解しているように感じる」

恐らくは理解しているだろう。俺はそう思う。語りかけもするしな。

「ブルル」

「ああ。そうだな」

注がれていた茶を飲み干し、水を入れた。雷光に渡して飲ませてやる。

「剣さんも理解しているようですね」

「少しはな」

俺と雷光は足だけで想いを伝え合う。その程度は出来なくてはな。

「触れますか？」

「雷光」

軽く声をかけると、雷光は自分から雛里に顔を擦り寄せていった。

「わっ！あはは、くすぐったい」

「懐いているな。触れても拒むことはないだろう」

雛里は朱里の妹弟子。朱里を全く警戒していない雷光にすれば、それだけで充分なのかもしれないな。二人の仲の良さも見ているだろう。

「よしよし」

雛里が雷光を軽く撫でると、気持ち良さそうに首を振った。

「今日は二人とも休みか？」

「私は桃香様に休むよう言われました」

「わたくしは午後からまた軍務があります」

「そうか」

昼飯を食べ終わり、蝶は軍務に戻った。
オレはもう一度寝そべり、雲を眺めた。隣では雛里が雷光と遊んでいる。雷光は随分と雛里に懐いたようだ。

「剣さん」

「どうした？」

「雷光は脚が速いんですよね？」

「ああ。軍馬としては最高峰だろう」

「・・・は～」

「乗ってみるか？」

「良いんですか？」

「雷光」

呼びかけると、雷光が寄って来た。雛里を雷光の上に乗せた。

「わっ！高いです～」

「ああ。雷光は他の馬と比べれば、一際大きいからな」

雷光が歩き出した。雛里が雷光の上で揺られている。

「凄いですね～。楽しくなります」

「少し駆けてみるか？」

「乗るのは初めてなんですが・・・」

「問題ない」

雷光に飛び乗った。雛里の後ろに座っている。

「さて、駆けてみるか」

「はい。お願いします」

雷光がゆっくり駆け出した。広い外へと駆けて行く。

「どこへ行くんですか？」

「そうだな・・・。俺の騎馬隊が調練中の筈だ。行ってみるか」

「はい。剣さんの騎馬隊は調練が厳しいと聞きましたが」

「厳しいだろうな。俺の隊は速さが売りだ。動き回れなければ意味がない」

「考えてあるんですね」

「機動力だな。俺の隊は」

駆け続け、石幻の隊を訪れた。調練中だがな。

「剣殿。今日は休暇の筈ですが、如何致しました？」

「何、暇なのでな。遠乗りついでに様子を見に来た」

「私もです・・・」

雛里は相変わらず、人見知りが治っていないな。

「調子は変わらないな？」

「はい。大丈夫です」

実際、石幻が近付いて来ただけで、今も兵は駆け回っている。厳しい調練は続いている。

「あわ～・・・よく走ってますね～・・・」

「まだ軽い方だ。時には水だけで一日を過ごすこともある」

俺の騎馬隊は常に動き回る。何かを食している時間がないことも考えられる。

「あわ～・・・」

「さて、調練は特に問題ないようだな。戻ろうか？」

「あ、はい」

「では、私は調練に戻りますので」

「ああ」

戻っていく石幻を見送り、俺達は城に戻った。
城に戻ると、雷光を離し、雛里と城の中へ入った。

「剣さん」

「董卓殿」

適当に歩いていると、董卓殿と賈駆殿がいた。一刀が作ったメイド服というものを着ている。

「仕事中でござるか？」

「はい」

「あんた達は違う訳？」

「休日だ」

「お茶を飲みますか？」

「済まないでござる」

「いいえ。それが私達の仕事ですから」

董卓殿が茶を、賈駆殿が茶菓子を持って来た。

「ありがとうございます」

雛里が口を付け始める。俺も茶を口に運んだ。

「あの、剣さん」

「何でござる？」

「言葉遣いを直してくれませんか？」

「何故？」

「私はもう大守ではないので、皆さんと同じように話して欲しいと……」

「ふむ……」

「……真名を教えると、剣さんの口調は直りますよ」

「それはもう公認なのか？」

「……違うんですか？」

確かにそうしてはいるが。

「それでは、私の真名は月です。これで、直してくれますか？」

「……解った。これで良いのだな？」

「はい！」

息を吐き出し、嬉しそうな月の表情を見ていた。茶を飲む。

「全く、月ったら・・・」

「苦労するでござるな、賈駆殿」

「私は教えないわよ？」

「構わないでござる」

「詠ちゃん。頑固者なんだから・・・」

「良いじゃない。別に教えなくても」

黙って茶を飲む。俺自身は特に問題はないので構わない。

「さて、仕事中の二人をこれ以上引き止めておく訳にもいかないだろう。行かなくて良いのか？」

「はい。では」

「ああ」

二人は小走りに部屋を出て行った。俺は残っていた茶を飲んだ。

「さて、俺達も戻るか？」

「はい。今日はありがとうございました」

「・・・何がだ？」

「今日一日、お付き合いして頂いて・・・」

「気にするな。それなりに楽しめたからな」

「それで、その・・・一つお聞きして宜しいですか？」

「何だ？」

「蝶さんのこと、どう思いますか？」

蝶のことだと・・・？

「・・・どういう意図だ？」

「いえ。剣さんが蝶さんのことをどのように思っているのか、聞きたいだけです」

「ふむ・・・有能な副官だ。兵達の掌握、指揮、どれを取っても悪くない」

「・・・それだけですか？」

雛里の困ったような表情を見て更に困惑する。何が言いたい？

「・・・えっと、つまりですね、蝶さんのことを女性としてどう思いますか？」

「…俺はそういった感情を持たないようにしている。蝶は俺の副官だ」

「…そうですか。すいませんでした。変なことを聞いて」

「…いや。では、俺は部屋に戻る」

「はい」

雛里が何故あのようなことを聞いたのかは、考えないようにした。考えたところで答は出ないだろう。

部屋の寝台に寝そべり、静かな時を過ごしていた。

～～～～～

「…ま。…様」

何だ…？呼ばれている…？

「剣様」

「…蝶。蝶！？」

寝台から跳ね起きた。

蝶が俺を覗き込んでいたが、胸の谷間が直接目に飛び込んできていた。完全に目に毒だ。ただでさえ、豊かな胸だというのに…。

「如何なさいました？どこか具合が悪いのでは？」

「……何でもない。それより、どうした？」

「いえ。夕食時ですが、剣様の姿がお見えにならなかったので」

……俺は寝ていたのか。蝶を気付かない程に深い眠りだったのか。

「夕食をお持ちしています。ご一緒に如何ですか？」

「ああ。済まない」

「いいえ」

蝶が微笑む。軟らかい笑み。

蝶が持って来た食物を口に入れる。じわりと口内に味が拡がる。

どこか、食べたことのある味だ。

「……自分で作ったのか？」

「……お気に召しませんでしたか？」

「いや。美味いな。お前が作った物を食べるのは久しぶりだ」

ほっと胸を撫で下ろしている蝶を見て笑う。

「心配するな。美味い」

口に運んでいく。

「剣様。お酒でも？」

「ああ。少しで良い」

明日からまた軍務に調練だ。余り呑み過ぎるのは良くないだろう。例え酔わなくてもだ。

「いつぶりだ？こうしてお前の作った物を食べるのは」

「旅をしていた頃ではないでしょうか？騎馬隊を組織してからは、石幻様や段恵様がいましたから」

「そうだな」

二人というのは久しぶりということか。酒を口に運ぶ。

「わたくしは剣様に出逢わなければ、どうなっていたか解りません。今の日々は充実しています」

「後悔はないか？」

「何がでしょう？」

「争いの日々に手を出したことにだ」

「ありません。わたくしは剣様に付いて行くと決めておりますので」

「そうか……」

酒を呑み干し、杯を置く。

「ここでの生活は慣れたか？」

「はい。将の皆様とも、それなりには」

「ならば良い」

「剣様はどうですか？お知り合いの方は多いご様子ですが」

「いつも通りだ」

何も変わらない。知人が多かろうと少なかろうと、俺の態度が変わることはない。

「剣様」

「何だ？」

「剣様は何かを抱えておられるのですか？」

「何故そう思う？」

「時折、お一人で途方に暮れることがあるのです。今も・・・」

「・・・そうか。気にするな。特に何かがある訳ではない」

「剣様がそう仰るなら・・・」

確かに、物思いに耽ることはある。俺の悪い癖か。

「そろそろ眠らせて貰う。明日は早い」

「…解りました。無理をなさらないよう」

「解っている」

蝶が器を片付け、部屋から出て行った。オレは寝台にもう一度横たわった。

「無呼」

「何だ？」

声だけが聞こえる。俺も姿を探しはしない。

「俺は変わったか？」

「知らん」

「…お前には興味のないことだったな」

「お前は張り詰め過ぎだ」

「…何だと？」

「余裕がない」

無呼の言うことは間違いではない。俺には常に余裕がない。

「弱いと解っている。だが、強がる」

「…お前はよく見えているな」

「お前の影。お前のことは大抵解る」

「‥‥ならば聞こう。俺はどうしている？」

「気付いていながら、鈍感であろうとする。安らぎを求めつつ、突き放す」

「‥‥そうか」

「天の邪鬼」

「‥‥どうすれば良い？」

「拒否しなければ良い。突き放さなければ良い。自ら近付けば良い」

「‥‥簡単に言ってくれるな」

「俺はお前の影。俺のことだとしても、他人のこと」

「それにしては、饒舌だな」

「‥‥ふん」

気遣かっているということか。無呼なりにだが。

「忠告は聞いた。変わるとは思えないが、意識はしてみよう」

「人は変わる。誰でも」

「覚えておこう」

目を閉じた。俺はこれからどうするのか。どうすることを求めているのか……。

翌朝、俺は兵の前に立っていた。

「休みは有効に使ったな？疲れは残していない筈だ」

兵達に声をかけ、俺は雷光に乗った。

「乗馬」

全員が馬に乗る。調練は遠乗りだ。

「剣」

無呼の声が不意に聞こえた。

「何だ？」

「使者だ」

嫌な予感がした。時期が不自然すぎる……。

「全員、下馬。急ぎ、戦の準備にかかれ。石幻と蝶にも伝令を出せ」

兵達は多少、困惑した表情を浮かべていたが、すぐに行動に移った。雷光から下り、使者を待っていると、すぐに来た。

「どうした？」

「そ、曹操が！曹操が攻めて来ました！」

遂に来たか……。

「解った。お前は持ち場に戻れ」

俺は急いで城に戻った。

休暇（後書き）

次回予告～。

剣「休暇の後は戦か。嫌な流れだ」

雛「・・・曹操さんの軍は大軍です。とても私たちでは・・・」

剣「どうするかは上の連中が決める。俺達騎馬隊はその判断に従うだけだ」

蝶「はい」

鈴「戦なら鈴々の出番なのだ！」

翠「暴れてやるぜ！」

一「・・・抗戦するとは決めてないけどな」

剣「しかし二人共、久々だな。何をしていた？」

鈴「出番がないのだ～！」

石「俺達はお前達とは別に調練しているからな。調練中でも関わりがないんだ」

翠「あたしらの出番～・・・」

剣「悪く思うな。出番のない者など、幾らでもいる」

蝶「……厳しい一言ですね」

剣「知らん。次回、『逃亡』よろしくな」

逃亡

城に戻り、広間に入った。既に皆は集まっている。

「剣！」

「曹操殿が攻めて来ているのだろう？」

「はい。冷静ですね？」

「遅かれ早かれ、攻められることは目に見えていた筈だ。今更慌てたところで、何か変わるのか？」

「確かにそうだ。ならば、これからどうするかだ」

「敵軍の数は？」

「……およそ五十万です。こちらは、集めても五万が限界かと……」

「わっ……十倍……」

解っていたことだ。兵力に雲泥の差があることなど。

「どうする……？」

「……こうなれば、いっそ玉砕覚悟で」

「辞めて、翠ちゃん。無駄死にするだけよ」

「じゃあどうするんだよ！？」

「・・・逃げよう」

「・・・何？」

一刀の言葉に、俺は議論に初めて口を挟んだ。一刀に視線が集まる。

「このままじゃ到底勝てない。紫苑の言う通り、無駄死にするだけだ。だったら、いっそのこと逃げよう」

「し、しかし、この国の民は・・・」

「曹操に任せよう。曹操が治世を悪くするとは思えない」

まあ、そうだろう。曹操殿が治世を行えば、悪いようにはならない。

「俺達は逃げて、再起を計るんだ。南の地に」

「・・・荊州の一部は、かつて袁術さんが治めていた地域を孫呉が治めています。ですが、他の地域は劉表さんの地です」

「他にも、蜀の地を治める劉璋さんがいます」

「じゃあ、逃げよう！南に」

再起を計るという点は、妥当かもしれないな。ここで命を落とすつもりは毛頭ない。

「ならば、手早く準備して南の地に向かえ」

言い残し、俺は城を出た。すぐに騎馬隊と合流する。隊を見ればすぐに解る。戦の準備は既に出来ている。

「剣。どうだった？」

「段恵。何故ここにいる？」

「逃げる為さ。負けると解ってる戦の最中に、負け側にはいられねぇぜ」

「そうだな。城も同じ考えだ」

「何だ？城の連中も逃げんのか？」

「そのようだ」

「民を置いて逃げるというんですか！？」

「落ち着け。石幻」

「落ち着けません！ふざけたことを！」

「お前の怒りは最もだ。だが、曹操殿なら治世に問題はない。信頼も出来る」

「しかし！民を置いて逃げるなど、以っての外でしょう！？」

「……再起を計るには、他に手段はない」

「剣殿！」

「ならば、死ぬか？」

「ぐっ……」

「……お前の気が解らない訳ではない。だが、犠牲を無駄に出すな」

「……はい」

頭では理解している。心では理解していない。無理もないがな。

「本題に移りましょう、剣様。わたくし達はどうするのですか？」

「皆、暫し待機。城の連中が逃げるまで、暫し待つ」

軍の殿を受け持つつもりでいる。曹操殿が追撃して来る可能性は充分にある。その守勢に回らなければならない。

「剣。俺は先に行くぜ」

「ああ。荊州に行き、この者に逢いに行け。匿ってくれる筈だ」

「……知人が多いと助かるな。解った。お前らも無事に落ち延びて来いよ」

「ああ。また逢おう」

段恵が荊州に向けて歩き出す。俺達はそのまま待機した。
北郷軍が続々と退却していく。だが、動きが遅い。どうし・・・！

「何だ・・・？」

「民の方々ではないですか・・・？まさかとは思いますが・・・」

「・・・そのまさかだな。民がいる。共に連れる気だな」

雷光に飛び乗り、駆けた。皆がいる場へと駆ける。

「一刀。桃香殿」

「あっ、剣」

「馬上から失礼する。これはどういう状況だ？」

「皆さんが付いて行くって。見捨てることは出来ないから」

「どれ程の苦難が伴うか、解っているのか？」

「見捨てることは出来ないよ」

「・・・良いだろう」

ただでさえ、逃げることは困難を伴う。曹操殿が逃がしてくれるとも思えない。その状況で、民を連れるか。
見たところ、かなりの民が付いて来ているようだ。この進軍速度では荊州までおよそ二日。間違いなく追い付かれるな。

「剣様」

「何だ？」

「民の皆様は・・・・」

「連れるそうだ。見捨てることが出来ないとな」

「・・・・くっ」

「石幻。民を易々と見捨てるような主を選んだ覚えはない。俺達が主を信じずして、誰が主を信じる？」

「・・・剣殿は、民を連れると解っていたのですか？」

「いや。流石に予想外だ。だが、それなりの保証がある上での行動。解らなくもないな」

「・・・解りました」

「剣様。これからどうするので？」

「俺達は殿だ。やることは変わらない」

「はい」

待機を続けた。城の外へ続々と出ていく。最後尾が見えた。

「・・・剣」

「恋か。どうした？」

「……行かないの？」

「後から追う。心配するな」

「……ん」

軍の殿は恋のようだな。恋なら暫くは攻勢に堪えられるかもしれない。恋は軍を追って行った。

「剣様。わたくし達は？」

「徐州で曹操殿を足止めする」

「最初からそのおつもりで？」

「ああ。ただ逃げるのは気に食わない。曹操殿に軽く挨拶しておかなければな」

「解りました」

無呼の情報、伝令の通達を待つしかない。待機を続け、時が流れた。

「伝令！」

「何だ？」

「曹操軍が迫っています！」

「解っている。落ち着け。状況は？」

「は、はい。曹操軍は我等が迎え撃つ構えを全く見せていませんので、不審に思っているようです。その為、先遣隊を放っているようです」

「先遣隊の数は？」

「千騎程だと思われます」

先遣隊で千騎か。妥当な数字ではあるな。

「動くぞ。先ずは先遣隊を崩す」

速やかに動き出す。移動を開始した。

「剣殿。どう動くんですか？」

「身を隠しながら動く。敵の伝令に見付かる訳にもいかない」

「厳しい戦になりそうですね」

「皆に伝えておけ。休む時間はほぼないと思ってくれ」

突き崩す為には、絶え間無く動き続けなければならない。休んでいる時間はないかもしれない。いや、ないだろう。

密かに動き続けた。暫く動き、軽装備の騎馬隊を見付けた。

「剣」

無呼の声だ。俺達を見付けたのだろう。

「指揮官は？」

「夏候姉妹」

「曹操軍本隊は？」

「五里は離れている」

成る程。完全に離れているようだな。先遣隊を叩くには今しかない。

騎馬隊を三隊に分け、隊を丘に潜めた。先遣隊は動いている。そこを突く。この場は徐州である為、地形はこちらが完全に把握している。

「丘の中腹に入った」

「行くぞ！敵軍を乱すことに集中しろ！突き崩す！」

手を挙げた。姿を見せ、丘を駆け降りる。先遣隊の一部がこちらを向き、迎え撃つ構えを見せている。

「ふっ。流石だな。やはり、洗練されている」

手を挙げた。直角に曲がる。ぶつかり合う寸前で躱した。

「・・・掛かったな」

俺達がぶつかり合いを避けた後、すぐに先遣隊が動揺した。石幻の隊が逆方向から突っ込んだからだ。

だが、これで崩れる程夏候姉妹は甘くない。すぐに立て直している。だが、こちらもまだ終わっていない。

また別の方向から動揺が伝わってきた。次は蝶の隊が突っ込んだようだ。

俺は再び手を挙げた。

「行くぞ」

再び別の方向から突っ込んだ。今回は完全にぶつかった。乱した。三度手を挙げた。全隊が一斉に離脱する。さてと・・・。

「剣様。わたくし達はこれからどうするのですか?」

「身を隠すぞ」

俺の考え通りならば、上手くいく筈だ。

近くの丘に身を潜めた。皆には今が休み時だと伝えた。実際、その通りだ。休める時に休んだ方が良い。

「剣様。一人になるのは止してください。いつ曹操軍に狙われるのか解らないのですから」

「ふっ・・・。心配する必要はない」

「ですが・・・剣様に何かあってからでは遅いのです」

「その通りだ。だが、もう起きたことだ」

「どうしたのですか？」

「ふっ」

上を指差した。丘の上を。

「弓を構えるのは止めて貰えないでござるか？……夏侯淵殿」

「……馴れ馴れしいな。剣」

「剣様！」

蝶が俺を庇うように前に立った。

「構うな、蝶」

「……こうなることを読んでいたような口ぶりだな？」

「無論でござる。貴殿がいると解っていたでござる。故に、こうして一人で待っていたでござる」

「……ならば、ここで死んで貰う！」

「そこから射ても、当たらないでござるよ？」

「ふっ……私がここにいることは読めても、全てを読み切れている訳ではないようだな？」

「ふっ……どこからか、他に俺を狙っている者がいるのだろう？」

「その通りだ！」

やはりな……。背後からか。

「貴殿も久しいでござるな。夏候惇殿！」

キィィィン！

「ちぃっ！」

振り向き様に刀を抜いた。鍔ぜり合いになる。

読み通りだ。ここまでは考え通りだ。

「蝶。後ろは任せる」

「承知致しました」

夏候惇殿との鍔ぜり合いを止め、互いに距離を取った。

「貴様と立ち会うのは初めてか！」

「そうでござるな。しかし、貴殿はここで伏して頂くでござる」

「やってみろ！」

猛進。大刀を振りかざしてくる。紙一重で躱し、背後へ回る。

「貴殿の首、ここで献上して頂く」

「こちらの台詞だ！」

打ち合った。刀と大刀では、流石に力の差があるな。だが、速さでは圧倒できる。
躱し、躱す。この場にいるのは夏候姉妹だけだ。相手はな。

「‥‥夏候淵殿。この場にいるのは、貴殿達姉妹だけのようでござるな。だが、この場にいるのは拙者達だけだと思っているのでござるか？」

「‥‥何？」

「拙者達だけだと思っているのでござるか？」

「‥‥くっ！姉者！ここは退くぞ！」

「もう手遅れですわ」

「鈴々、待ちくたびれたのだ～」

夏候姉妹の背後に、紫苑と鈴々が刃を向けている。どうやら上手くいったようだな。待伏せ成功だ。

「よく堪えていたな、鈴々。紫苑、迷惑をかけた」

「鈴々。頑張ったのだ～」

「ああ。そして、大変だっただろう、紫苑？」

「子供の扱いには慣れていますから」

「成る程な・・・。私達をどうするつもりだ？」

「以外と冷静でござるな、夏候淵殿」

「くっ！さっさと殺せ！生き恥を曝すつもりはない！」

「曝して貰うでござる。悪いとは思うでござる。しかし、貴殿らは必要なのでござる」

「・・・全て罠だったということか？」

「その通りでござる。一種の賭けではあったでござるがな。しかし、迫真の演技だったな、蝶」

「お戯れを・・・」

「石幻には無理だろう」

蝶が息を吐いた。蝶の行動は全て演技。一人になったのも狙われ易くする為だ。

ただ、賭けではあった。夏候姉妹が俺達を狙ってくるという保証は何もなかった。夏候惇殿だけなら、何も考えずとも攻めて来ただろう。だが、夏候淵殿が止める可能性は充分あった。鈴々が姿を隠していられるかも、気兼ねではあったが。

紫苑と鈴々は、城で事後処理をしていた。この場に一度寄るよう言っておいたのだ。

「自ら率いる兵くらいは連れてくると思っていたでござるが」

「黙れ！貴様など、私一人で充分だ！」

この状況で強がったとしても、虚しいだけだな。
二人は兵を連れてくると想定していた。故に、石幻に騎馬隊を率いるよう指示を出している。兵達は休息を止め、臨戦体制に入っているだろう。必要はなかったが。

「紫苑。鈴々。ここは任せて貰おう。荊州へ向かった軍を追ってくれ」

「剣はどうするのだ？」

「曹操殿と話をしなければな。すぐに追う」

「・・・剣さんの騎馬隊とは言え、この少数で曹操軍と対峙するのは」

「大丈夫だ。ぶつかり合うつもりはない」

「・・・解りました。鈴々ちゃん、行きましょう」

「解ったのだ。剣達も追ってくるのだぞ？」

「案ずるな。すぐに追い付く」

「待っています」

紫苑と鈴々が騎馬隊から離れ、荊州へ向かった。さてと。

「夏候姉妹。貴殿らに危害を加えるつもりはないでござる。暫し、大人しくしているでござる」

「……どうするつもりだ？」

「どうもしないでござる」

蝶に兵を休息させるよう指示を出した。見張りを立て、曹操軍が来るのを待つ。

「剣」

「夏侯淵殿。何か用でござるかな？」

「北郷に寄ったのか？」

「見た通りでござる」

「何故だ？」

「拙者の仲間の意見でござる」

「袁紹を降し、中原を手にしたのは華琳様だ。華琳様が最も天下に近いのは解る筈だ」

「何が言いたいのでござる？」

「何故、華琳様の下へ来なかった？」

「……信念の違いでござる。目指すものが、少し違っていたかもしれないでござるな」

「……そうか」

一度北郷軍に寄った以上、死んでも道は変えない。主君を裏切ることはない。

「剣様。夜営の準備を始めさせました」

「ああ。蝶、この二人にも食糧を与えてくれ」

「はい」

「捕虜にしては、待遇してくれるな」

「特別扱いするつもりはないでござる」

見張りを夏候姉妹に付け、その場を去った。俺は石幻と蝶を呼んだ。

「これからどう致しましょう？」

「ここで曹操殿を待つ」

「どうするんです？私達には捕虜が二人いますが」

「上手く使わせて貰う。交渉にな」

「戦うつもりではないのですね？」

「曹操軍は五十万。戦って勝てると思う程、自惚れてはいない」

「はい。では何を？」

「曹操殿が本気で追撃をすれば、民を連れている以上まず逃げ切れない」

「その為の交渉ですか。しかし、上手くいくでしょうか？」

「いかせる。犠牲を出さない為にな」

「はい」

夜営は慣れている。火も起こした。明日には曹操軍も姿を見せるだろう。勝負は明日だ。

逃亡（後書き）

次回予告～。

鈴「我慢したのだ！」

愛「・・・何のことだ？」

紫「何でもありませんよ」

剣「やれやれ」

石「しかし、まだ逃げ切れた訳ではない」

剣「何とかするしかないな。その為の人質、曹操殿と正面からぶつかる訳にはいかない」

蝶「はい」

紫「ですが、気をつけてください。曹操が何か仕掛けてくることも」

蝶「夜の闇に紛れて・・・ですね」

剣「奇襲とは奇を衝いてこそ生きるもの。既知において、奇襲とは全く意味を成さない」

石「剣殿？」

剣「次回、『交渉』よろしくな」

交渉

曹操軍本隊が近付いて来ている最中、夜を迎えている。皆は今日、動き続けていた為、眠っているようだ。俺は起きているがな。

「剣様」

「蝶か。どうした？」

「眠れないのですか？明日には曹操軍本隊が到着するでしょう。今眠っておかなければ」

「大丈夫だ。お前も早く眠れ」

「剣様は眠らないのですか？」

「眠るさ。明日も動き回ることになる」

「ですから、剣様も」

「解っている」

目を閉じた。閉じているだけだが。何か予感がする。嫌な感覚が……。

「剣」

「……無呼。何か異変があったか？」

「奇襲隊」

「数は？」

「千程だ」

「距離は？」

「約三里程」

その距離で奇襲隊か。時間がないな。

「蝶」

「・・・やはりまだ起きておられましたか」

「予感が当たった。皆を起こせ」

「・・・何が解ったのですか？」

「奇襲だ。既に近付いて来ている筈だ」

「解りました。では」

蝶が駆け出していく。雷光の首筋を叩く。

「済まない。敵襲だ」

雷光が体を振り、俺は水を少し飲ませる。雷光が歩き出した。

「剣殿！」

「剣様。準備が出来ました。いつでも出陣出来ます」

「石幻。蝶。全員を伏せさせておけ。奇襲を逆手に取り、奇襲をかける」

全員を伏せさせ、奇襲隊が見えるのを待った。土煙は見えない。だが、潜んでいる気配は感じる。そろそろ近いのかもしれない。

「位置は解るか？」

「西に半里。真っ直ぐ近付いているようだ」

半里か。真っ直ぐ近付いているということは、こちらの位置は掴まれているのだろう。ならば、もう少し待つ。

まだ待った。そして、はっきりと気配を感じた。

「全員乗馬！奇襲隊だ！一気に叩くぞ！」

全員が乗馬し、俺が先頭で駆け出した。俺が感じる気配のままに突っ込む。兵の悲鳴が聞こえる。

予感は的中した。無呼の働きが大きいがな。敵中を突破し、皆が付いて来る。反転し、もう一度突っ込む。敵中を掻き回し、また離脱する。

敵が算を乱し、潰走していく。追わずに隊を休めた。

「剣殿。移動しましょう。この場は既に知られています」

「ああ」

三里程移動し、近くの丘に身を潜めた。皆が休み始める。
見張りを残して、そのまま皆が眠る。少しだけだが、眠れるだろう。俺達も少しだけ眠った。
日が上がったのを感じ、俺は目を覚ました。ふと無呼の気配を感じた。

「どうした？」

「眠れたか？」

「ああ。大丈夫だ」

「曹操は五里程離れている」

「・・・そうか」

皆をそろそろ起こさなければならない。曹操軍本隊が到着する。
だが、案ずる必要はほぼなかった。皆は自分で起き始めている。

「剣殿。曹操軍本隊が近付いています」

「ああ。全員を準備させろ。それから、夏候姉妹を連れて来てくれ」

「はい」

少し待っていた。すると、石幻と蝶が夏候姉妹を連れて来た。

「さてと、そろそろ曹操殿が来るでござる。良いでござるかな？」

「・・・私達をどうするつもりだ？」

「どうするつもりもない。そう言った筈でござる」

「貴様！」

「夏候惇殿。落ち着いて欲しいでござるな」

俺はこれ以上のことをするつもりも、言うつもりもない。

「石幻。蝶。出陣するぞ」

「はい」

夏候姉妹を連れ、出陣した。丘から姿を現す。ゆっくりと前進する。

曹操軍本隊が見えてきた。五十万の大軍。流石に圧巻だな。

曹操軍から曹操殿が一人を連れて前に出て来た。合わせて俺も蝶を連れて前に出た。

「久しいでござるな、曹操殿」

「ええ。貴方が何をしているのかと思っていたけれど、天の御遣いに仕えていたのね・・・」

「そうでござる。不満でござるかな？」

「・・・中原を制したのは私よ。天下が手に届く位置にある。

今更かもしれないけれど、私のところに来なさい。貴方の力が加われば、天下を掴むことが出来る」

「・・・それ程までに拙者の力を買って頂けているとは、嬉しいでござるな。だが、拙者は一度主と決めた者を裏切るつもりはないでござる」

互いに目を合わせたまま、きっぱりと言い切った。互いに表情は一切変えない。

「そう。これ以上は言わないわ」

曹操殿が表情を一変させた。手に持っていた鎌を俺の首筋に差し向けた。

「剣様！」

「案ずるな」

曹操殿から殺気は全く感じない。

「拙者にそのような脅しは、まるで通じないでござる。して、拙者に聞きたいことは何でござる？」

「全く・・・貴方には困るわね。ただし、これからの問に答えなければ、容赦なく首を落とす！」

「・・・くくっ。承知したでござる」

「一つ。貴方の主人は既に逃げたわね？」

やはり、既に気付いているか。

「然り。その通りでござる」

「逃げた主人を庇うのは大変ね。それで、精強な貴方の軍が殿を務めているという訳ね」

「そうでござるな」

「成る程。全て解っている上で、起こしている行動なのね」

どこまで見抜いているかは知らないが、俺は全ての問に答えるつもりだ。

「二つ。奇襲隊には気付いていたのかしら？」

「何か仕掛けてくるとは思っていたでござる」

「完全に打ち負かされて、私の将は気を落としていたわ。奇襲隊が奇襲を掛けられたとね」

「それは申し訳ないでござるな」

無呼が気付いたからこそ、奇襲を掛けられた。俺の功績ではない。

「三つ。私の部下はどうしているかしら？」

曹操殿の手に力が込められた。恐らく、無意識だろう。それだけ、夏候姉妹が大事なのだろう。

「無事でござる。何もしていないでござるよ」

手を挙げた。これを合図に、石幻が夏候姉妹を連れて来た。

「……二人が世話になったわね」

「特別なことは何もしていないでござる」

「こうして生かしているということは、貴方に何か考えがあるのね？」

「そうでござる」

首筋に向けられている鎌を手で下げた。

「交渉でござる。二人を返す代わりに、幾つか従って頂きたい」

「何かしら？」

「一つ。徐州の民に略奪行為を行わないこと」

「ええ」

これは言わなくともしなかっただろう。あくまで念の為だ。

「二つ。北郷軍を追撃しないこと」

「何故かしら？今から追っても、荊州に入る方が早い筈よ」

「徐州の民が北郷殿と劉備殿を慕い、共に逃げているのでござる」

「……それで、進軍速度が遅くなっているとでも言うのかしら？」

「ご明察通りでござる」

「……呆れた。それで私の軍から逃げられるとでも思っているの？」

「そこまでは解らないでござるが、民を見捨てて逃げることは出来なかったようでござる」

「だから貴方が、騎馬隊を率いて足止めに来ているのね。それも寡兵で」

「寡兵なれど、兵は精強でござる。無論、貴殿と正面からぶつかるつもりはないでござるがな」

「二つは了解したわ。二人を返して貰うわね」

「解ったでござる」

交渉を破ることを考えられなくもないが、曹操殿に限ってそのようなことはないだろう。

「もし私が貴方の交渉を断ったら、どうするつもりだったのかしら？」

「二人を討ち、速やかに離脱。後は適当に時間を稼いで逃げるつもりだったでござる」

「私の大軍を前に？」

「地の利はこちらにあるでござる。騎馬隊による追撃を防げば、何とかなったと思っているでござる」

それでも、賭けではある。曹操軍騎馬隊の数は俺達の十倍以上はあるだろう。下手をすれば、俺達は全滅さえ有り得る。だが、危険な綱渡りをしなければ、追撃に曝される民を救うことは出来ない。

「交渉は成立ね。二人を返して貰うわ」

石幻が夏候姉妹を解放した。

「申し訳ありません……華琳様……」

「申し訳ありません……」

「貴女達は私の覇道に必要な人材。無茶は程々にすることね」

「はい……」

「はっ……」

曹操殿の両腕と言っても過言ではない夏候姉妹だ。俺にとっての石幻と蝶のようなものだろう。

「では、曹操殿。拙者らはこれにて失礼するでござる」

「次に逢う時は戦場よ、剣」

「その時は、貴殿か拙者が土の味を噛み締めることになるでござろうな」

「貴方よ」

「楽しみにしているでござる」

にやりと二人で笑う。

「では」

「ええ」

石幻と蝶と共に、騎馬隊に戻った。すぐに駆け始める。北郷軍に合流する為だ。

駆けに駆けた。すぐに曹操軍は見えなくなった。

「剣殿。一度休息を取るべきではないでしょうか？兵達に疲れが見えます」

「この二日、動き続けていましたから。曹操様が追っ手を差し向けることはないでしょうし、ここは皆様を休ませるべきではないでしょうか？」

「解っている。だが、日が暮れてからだ。それまでは駆け続ける」

疲労があることは解っている。だが、ここで休息を始めれば、翌日まで休むことになるだろう。それでは追い付くのが遅くなる。北郷軍は翌日には荊州に入っているだろうしな。

が、日暮れは近い。俺も兵達に無理を強いるつもりはない。

すぐに日が暮れた。皆に休息を命じた。火を起こし、簡単に兵糧を採ると、皆はすぐに眠り始めた。

「剣様」

「何だ？」

蝶が近寄って来た。隣に腰を下ろす。

「剣様。どうか、軽率な行動はお控え下さい」

「何のことだ？」

「お一人にならないで頂きたいのです。剣様に万一のことがあれば」

「案ずるな。俺が死のうと、石幻とお前が後を引き継げば良い」

「・・・わたくしには、剣様が必要なのです」

「・・・どうした？」

蝶が俯く。何かあるのか？

「自分を誤魔化すな」

「・・・」

無呼の囁く声が聞こえた。俺はまた自分を誤魔化そうとしている。鈍感な自分であろうとしている。そのようなことは、自分が最も理解している。

「・・・何故、俺が必要だ？」

「剣様はわたくしを導いて下さいました。剣様と出逢わなければ、わたくしは城で無為な日々を過ごしていたでしょうから」

「俺に縋っているのか？」

「違います。慕っているのです」

蝶が真っすぐに俺を見詰める。強い意志の篭った目だ。

「…剣様のお傍にいさせて下さい」

「俺の身を案ずる必要はない」

「確かに、剣様はお強いです。ですが、その御心に疲労は蓄積される筈です」

見抜かれている。俺が溜め込んでいる心労を。

常に気を張り詰めている俺は、体を休めているつもりでも、心を休められてはいない。心労は蓄積されている。

「…蝶。お前に、俺の心労を治せるというのか？」

「…解りません。ですが、わたくしに出来ることならば、何でも致します」

「解った。ならば、お前は俺の傍にいろ」

「剣様…」

俯いていた蝶の顔が上がった。それ以上は何も言わず、寝そべった。

「眠る」

「はい。ごゆっくり」

すぐに意識が遠退いた。疲れていたのか、それとも……。

「はい。ごゆっくり」

剣様が目を閉じました。眠られたかは解りませんが。

剣様が普段の生活から気を張り詰められていらっしゃることには、気付いていました。しかし、わたくしに出来ることは何もありませんでした。ただ見守ることしか……。

ですが、そのようなことはもう終わりにします。わたくしが剣様のお傍で、支えなければ……。

翌日、早朝から駆けている。今日中に北郷軍に追い付けるだろう。

昨晩、俺は浅いが確かに眠っていた。蝶は一時も俺から離れなかったようだ。

「剣」

「何だ？」

「三里先に北郷軍」

三里先か。後数刻で追い付けるな。

「北郷軍までもう少しだ。駆け続けるぞ」

声をかけ、駆け続けた。暫くして、橋が見えてきた。二人が立っているように見える。鈴々と恋のように見えるな。

全隊を停め、俺は石幻と蝶を連れて橋に進み出た。

「鈴々。恋」

「剣！遅いのだ！曹操軍は？」

「もう追っ手は来ない。早く荊州に向かうぞ」

「追っ手が来ないって、どういうことなのだ？」

「俺達が止めた。大丈夫だ」

「・・・解った」

再び全隊を駆けさせ始めた。鈴々と恋も自分の馬に乗ってついてくる。

また暫く駆けると、北郷軍の最後尾が見えてきた。一刀がいるようだ。

「皆、軍と足並みを揃えて進め。馬から下り、民の荷を載せてやれ」

後を石幻と蝶に任せ、俺は一人で一刀の下に行った。

「一刀。最後尾で何をしている？」

「剣！良かった！無事だったのか」

「ああ。で、何をしている？」

「囮役だよ。万が一の時の為のな」

「そうか。もう曹操殿は追って来ない。荊州に向かうだけだ」

「……本当か？曹操は」

「少し交渉してな。手を引いて貰った」

「……そうか」

「俺の騎馬隊は最後尾で進軍を続ける。構わないな？」

「ああ。頼むよ」

俺は騎馬隊に戻った。指示通り、民の手助けをしている。

俺達はこのままゆっくりと荊州に向かった。

交渉（後書き）

次回予告～。

剣「やれやれ。何とか逃げ切ったか」

蝶「はい。民の皆様に犠牲者が出ず、良かったです」

石「全くです」

鈴「追って来てても、鈴々が何とかしてたのだ」

恋「……うん」

剣「そう言うな。争わないに越したことはないだろう？」

一「まあね。次は、やっと荊州だなぁ」

蝶「わたくしが主役ですね」

剣「そうだな。蝶、お前の舞、期待している」

石「蝶の舞を見るのは初めてですね」

蝶「大したことは出来ないのですが」

剣「そう謙遜するな。まあ、蝶らしいがな」

鈴「鈴々、お腹減ったのだ～」

剣「解った解った。次回、『舞姫』よろしくな」

民を連れて進軍を続けた俺達は、荊州に辿り着いた。先行していた桃香殿達が、荊州大守である劉表殿と話を付けていたらしく、民共々すんなりと受け入れられた。

主立った者達は城に集められている。石幻と蝶に騎馬隊を任せ、俺は一刀と共に城に入った。

謁見の間へと導かれた。謁見の間には劉表殿にその護衛、そして桃香殿がいた。

「天の御遣い、北郷一刀です」

一刀が劉表殿に頭を下げた。俺も習って後ろで頭を下げる。

「うむ。天の御遣い殿も無事で何よりじゃ」

劉表殿は温厚な御老体のようだ。老い先も短いのだろう。朱里と雛里がそう話していた記憶がある。

「天の御遣い殿、そして、劉備殿よ」

「はい」

控えていた桃香殿が一刀の隣に立った。

「儂は見ての通り、老いぼれておる。もう長くないんじゃ」

「弱気になっちゃ駄目ですよ！」

桃香殿が声を出す。気持ちは解るが、話を最後まで聞くべきだ。

「優しいのぉ。じゃが、本当に儂はもう長くない。
そこでじゃが、お二方に儂が治めているこの荊州の地を譲り受けて欲しいのじゃ」

成る程。願ってもない提案だ。徐州という地を失ったが、路頭に迷うことはない。

「良いんですか？御子息がいるんじゃ」

「この乱世を儂の子では堪えられん。兵や勇将を抱えるお二方の方が、荊州の民も喜ぶんじゃ」

「・・・少し、考える時間を頂けますか？」

会話は全て桃香殿が行った。俺と一刀は聞いていただけだ。
時間を貰うということで話は終わった。俺達は皆がいるという部屋に入った。

「ご主人様！」

皆が一斉に寄って来た。俺は抜け出し、石幻と蝶のいる場に近寄った。

「兵達は？」

「休ませています。食糧も荊州のものが与えられています」

「それから、段恵様がこの城に手紙を届けられています。剣様宛の

ようです」

蝶から手紙を受け取り、内容を確認した。内容は一刀達の地盤が固まるまで動かないということだった。

段恵は荊州内の知人、水鏡殿の庵にいる筈だ。段恵に水鏡殿を訪ねるよう言っておいたからな。手紙が届いているということは、無事なのだろう。

「剣」

「愛紗か」

「……無事で何よりだ」

「ああ」

「この後、劉表殿が宴会を開いてくれるそうだ」

「俺が参加する必要はないだろう？」

「駄目ですよ～。劉表さんは私達全員を見てみたいそうですから」

桃香殿がそう言う。劉表殿の言ならば仕方がない。

「桃香殿。宴会の件は解った。して、先程の話だが」

「……はい」

「何か想うことが？」

「…はい。突然訪れた知らない人達を、民の皆さんが認めてくれるかどうか」

「それは、大丈夫ではないかと」

朱里と雛里が話に入ってきた。話は聞いているようだ。

「遠からず、曹操さんか孫策さんが荊州に攻めてきます。その時、どうにもならないと解っているんでしょう」

「…荊州は大陸の中央に位置する土地です。激戦区になるのは必至ですから」

「決めるのはお前達だが、天下を狙うなら荊州は必要ではないのか？」

「…でも、同族ですし」

成る程な。それを気にしていたのか。

「蜀…益州の地を治めているのは…あっ」

続きを言いかけた朱里を止めた。

蜀を治めているのは劉璋殿。つまり、桃香殿の同族だ。そのようなことは言わずとも解っているだろう。決めるのは桃香殿であり、俺達はその判断に従うだけだ。

「何してるのだ～？もう宴会が始まるのだ！鈴々お腹すいたのだ！」

「あたしもだ！早く行こうぜ！」

とにかく、桃香殿は自分なりに考えるだろう。仁君ならではの悩みだな。

俺達は宴会の席に座った。俺の隣には石幻と蝶がいる。

「では、劉備殿と天の御遣い殿一行に、乾杯」

劉表殿の宣言で宴会が始まった。俺は静かに酒を呑んでいる。余り政に関わるつもりはない。

皆が騒いでいる中、一刀と桃香殿、劉表殿が近寄って来た。どうやら一人一人に声をかけているようだ。俺達は立ち上がり、会釈した。

「劉表殿。拙者らを受け入れてくれたこと、感謝しているでござる。拙者は剣と申す者でござる。こちらが楊延、そして」

「……白倫殿か？」

俺が言う前に劉表殿が言い当てた。どういうことだ？

「やはり白倫殿なのじゃな？」

「は、はい。わたくしは白倫と申しますが」

「おぉ……死ぬ前に天が儂に与えてくれた奇跡か。流石は天の御遣い様じゃ……」

「ええと、どういうことです？」

「儂を覚えておるかのぉ？」

「…どこかでお逢いしたことがあるでしょうか？」

「覚えておらんか…。もう五年も前じゃからな。諸将が都に集められた時にのぉ、白倫殿の舞を見せて貰ったことがあるんじゃよ」

「…はい」

俺は黙って聞いている。隣で少しずつ蝶の表情が曇っているのを見ながらだ。

「ここで再び逢えたのも何かの縁じゃ。また舞踊を見せてくれんかのぉ？」

「…今は剣様の副官でございます。舞姫ではありません」

確かに蝶は今は舞姫ではない。舞姫として接している訳ではない。

「そこを何とか出来んじゃろうか？あの美しい舞踊を忘れられんのじゃ。是非とも、もう一度見たいんじゃよ」

「…心苦しいのですが」

「年寄りの頼みじゃ。どうか」

蝶が完全に顔を逸らした。それを見て、初めて口を挟んだ。

「申し訳ないでござる、劉表殿。白倫は唐突なことに些か困惑しているでござる。返事は後程するでござるから、今はこの宴会を楽し

むべきではないでござるか？」

「ううむ・・・そうじゃな」

劉表殿が惜しそうに俺達から離れていった。一刀と桃香殿が続く。

「ありがとうございました、剣様」

「気にするな。その場凌ぎにしかならない」

「蝶が芸術に優れていることは知っています。笛の音は聴き入る程でした。舞もそれ程に？」

「俺も見たことはない」

だが、恐らくはそうなのだろう。あれ程執着していたのだからな。

「剣様・・・わたくしは・・・」

「好きにしろ。自らの意志に従えば良い」

「良いんですか？劉表殿の機嫌をとっておいた方が良いのでは？」

「止めろ、石幻。政に関わらせるつもりはない」

「そうですね。私達は政に関わる気はないんでした」

「そうだ。蝶、良いな？」

「・・・はい」

これで宴会はほぼ終わりだった。俺達は与えられた部屋に入った。
俺と一刀、石幻が同室だ。

「なぁ。白倫って何者なんだ?随分綺麗だけど、素性は?」

「素性は本人に話して貰え。他人が素性を話すものではない」

「それもそうか」

「北郷殿。蜀の地にはいつ向かうのですか?」

「あ~‥‥えっとな‥‥」

「一刀。桃香殿とよく話し合え。今後の方針についてな」

「あ、ああ」

やれやれ。荊州に来て早々に問題勃発か。
扉を叩く音が聞こえた。

「開いてますよ」

「失礼致します」

蝶だ。蝶が部屋の扉を開け、顔を見せた。

「剣様。少し宜しいでしょうか?」

「‥‥解った。石幻、任せる」

「はい」

石幻に任せたのは一刀の護衛だ。劉表殿は人柄が良く、暗殺など目論まないだろうが、家臣の者達は解らない。桃香殿にも同様に愛紗か星辺りが護衛に付いているだろう。

俺は蝶に促され、部屋を出た。夜空が見える廊下に出た。

「どうした？」

「いえ。舞についてのことなのですが」

「好きにしろと言った」

「はい。ですが、宜しいのですか？劉表様の印象が」

「想いの篭らない舞を見せたところで、仕方がないだろう？」

「それは・・・」

「蝶。お前の想い一つだ。一任する」

想いの篭らない舞を見せ、劉表殿を落胆させるなら、いっそ見せない方が良い。蝶が全て決めることだ。

「・・・では、もう一つお聞きしたいことが」

「何だ？」

「剣様は、わたくしの舞をご覧になりたいですか？」

「・・・何？」

俺が蝶の舞を見たいか、だと・・・？

「剣様がご覧になりたいと言われるのなら、わたくしは舞わせて頂きます」

己を偽るな。己を騙すな。俺は・・・、

「興味がないと言えば、嘘になるな」

「・・・では、わたくしは舞わせて頂きます」

「・・・ふふ。くくっ、ああ。期待している」

「ふふふ。はい。舞わせて頂きます」

「期日は明後日。明日は好きに使って構わない。良いな？」

「はい」

互いに笑っていた。蝶の自然な笑みなのだろう。俺はそのまま蝶と別れた。

わたくしは剣様に自由にして良いという指示を貰っていますので、

城を出てある庵に向かっています。一人で行動しています。久しぶりな感覚ですね。

目的地に辿り着きました。軽く扉を叩くと、中から出て来られました。

「水鏡様。お久しぶりですね」

「あら。お久しぶりです。お一人ですか？」

「はい。段恵様はいらっしゃるでしょうか？」

「ええ。剣さんの紹介状を持っていました。中にいますよ」

わたくしは水鏡様に連れられ、中に入りました。

「おう。無事に逃れてきたようだな。皆荊州か？」

「そうです。皆様、無事に落ち延びていますよ」

「成る程な。んで、お前は俺を迎えに来たのか？」

「いえ。地盤はまだ固まっておりません。わたくしは別件で訪ねて参りました」

「別件？何だよ？」

「わたくしの舞踊衣装はあるでしょうか？」

わたくしは段恵様に舞踊衣装をお頼みし、持って頂いていました。その衣装を取りに来たのです。

「舞姫らしいことやるみたいだな。しかも気合い入ってるみたいじゃねぇか」

「剣様がご覧になるので・・・」

「はっはっは！成る程な、気合い入ってる訳だ！」

「・・・余り笑わないで頂きたいのですが」

「悪い悪い」

段恵様は笑いながら部屋に入りました。すぐに何か包みを持って戻って来ました。

「ほらよ。舞踊衣装だ。持ってけ」

「ありがとうございます、段恵様」

「おう。剣を打ち落として来いや。はっはっは！」

「・・・余り言わないで頂きたいです」

わたくしは幾度となく言いましたが、段恵様の笑い声が止むことはありませんでした。

夜、俺達は席についている。これから蝶の舞が始まる。
周囲が暗くなった。明かりが一つ、座の中央に燈されている。蝶の舞う舞台だ。
あるかなきかの微かな気配を感じる。蝶だろう。燈されている明かりが僅かに振れ、蝶が現れた。
闇の最中を蝶が舞う。夜目の利く俺にはより鮮明に見えた。いつもの桃色の服装とは違い、桃色に紫が彩られている舞踊衣装。肩がくっきりと出され、すらりと伸びる長い脚がはっきりと見える。蝶の白い肌が闇を照らしていた。
ひらりひらりと舞う姿に、声を出す者は一人としていない。誰もが蝶の舞を魅入っている。それ程までに蝶は自分の世界へと引き込んでいた。俺も例外ではない。
ふと、蝶と目が合った。ふっ……と、何もかも吸い込むかのような軟らかい笑みを向けられた。純粋な、蝶の本当の素顔なのだろう。
蝶が動きを止めた。すうっと闇の中を動く。台座の中央、劉表殿に頭を下げた。これで終わりなのだろう。蝶が闇に消えた。
誰一人として座して動かない。いや、動けないのだろう。その中を、俺は闇に紛れて姿を消した。
城を出た。行き先は解っている。城の外にある小川だ。
速やかに小川に辿り着いた。気配を隠してはいない。その者は立って小川を見詰めている。

「蝶」

声をかけ、歩み寄った。蝶が振り向く。気配を隠してはいなかったが、気付いていなかったのか。

「剣様……」

「どうした?」

「何故……この場に……？」

「昨晩、この場に来ていただろう？恐らく、またこの場に来ると思っていた」

本当の話だ。尾けた訳ではない。偶然通り掛かったところを見掛けたのだ。

蝶は恐らく、台座を抜けてすぐにこの場に来たのだろう。舞踊衣装のままだ。

「……剣様。わたくしの舞は、如何だったでしょうか？」

「……見事だった。その一言に尽きる。誰しもが舞を魅入っていた」

「……良かったぁ」

ふらりと蝶が倒れかけた。俺は多少慌てて蝶を支えた。

「……緊張していました。ありがとうございます、剣様」

「……気にするな」

蝶の柔らかい肌を直に感じる。澄んだ真白い肌だ。騎馬隊の厳しい調練を熟して尚、自らの手入れを欠かしてはいなかったのだろう。

「あのような舞台には慣れていると思っていたが、緊張するものなのだな」

「まあ。わたくしも緊張くらい致しますよ」

「そうか。そうだな」

くすくすと笑う蝶がいる。蝶を支えたままの状態だ。

「今の状態が、素なのだろうな」

「‥‥はい。御不満ですか？」

「いや。俺といる時くらい、素でいろ。互いの為にもその方が良い」

「はい。剣様の心労が和らぐのなら」

蝶の素を見ていると思い出す。あいつを‥‥。

「剣様？」

「ああ、済まない。どうした？」

「いいえ。わたくしの舞踊衣装は如何でしょうか？」

「‥‥そうか。掴んだままだったな」

「いいえ。このままでお願い致します」

変わらずにくすくすと笑う蝶。体は俺に預けたままだ。

「舞姫らしく、肌を出しているな。余り出していると目に毒だ」

「あら。剣様の目にですか？」

「男の目にだ」

「あらあら」

楽しげに笑う蝶。俺の表情も和らいでいるのだろう。

「自覚はしているのだろう?普段着ているものはそれ程ではない」

普段着ているものは脚を出していない。それでも肩と胸元が見えているが。

「ふふふ。普段から舞踊衣装は着ませんよ」

「当然だ」

調練どころではなくなる。兵達が集中しない。

「そろそろ戻るか?夜も深い」

「いえ…もう少し、このままでお願い致します」

「疲れているか?」

「はい…」

無理もない。徐州から落ち延び、荊州では蝶にとっては苦労する連日だ。疲れもするだろう。

「俺が抱えても良いが」

「嬉しい申し出なのですが、目立ってしまいますので」

「そうか。ならば、もう暫く休もう」

俺は蝶を支えたまま腰を下ろした。蝶は変わらず、体に力を入れていない。

「申し訳ありません。甘えてしまいまして」

「気にするな。休めば良い」

「はい・・・」

空を見上げた。今宵は満月か。気が付かなかった。

「星々が煌めき、満月が映える。昨今の夏空は・・・」

「剣様は風流の趣を理解しておいでですね。詩人の物言いですよ」

「・・・ああ」

あいつは蝶に似ている。俺は自然に風流の趣を理解するようになったのだろう。

「剣様が風流なお方なので、わたくしは剣様のお目に敵う芸をお見せにならなければなりませんね」

「お前の芸に文句を付けられるものか」

「まあ。ふふふ」

くすくすと笑う蝶は嬉しそうだ。俺と蝶は夜が更けるまで談笑していた。

久々に素のままの俺でいた。何も考えず、思ったまま行動する。そのようなことはいつ振りなのだろうか？

……あいつが、俺の傍らにいた時か。

舞姫（後書き）

次回予告～。

剣「・・・久々に思い出してしまったな」

蝶「剣様？」

剣「何でもない。気にするな」

一「桃香の気持ちは解るけど、この国を治める為には必要なことなんだ」

桃「それは解るけど、同族の人達を踏みにじることはやっぱり・・・」

朱「ご主人様達はこの様子ですし、荊州での問題は多そうですね」

剣「他勢力が俺達が荊州に入ったことを面白く思う筈もないしな」

雛「はい・・・」

愛「こんな時だからこそ、私達がしっかりしないとな」

朱「そうですね。ご主人様達を支えるのは、私達の役目ですから」

剣「次回、『長沙』よろしくな」

長沙

蝶の舞から数日が経過した。状況は何も変わっていない。

連日、軍議が開かれている。俺は出席するにしても、発言することはない。何を話し合おうと、桃香殿の想い一つだ。

俺の騎馬隊は、まず兵達に充分な休息を取らせた。今では調練を再開している。容量は普段よりも軽いがな。予想が正しければ、この荊州が戦場となる日はそう遠くない。休息も多めにしている。いつでも動けるようにする為だ。

「剣様。お茶は如何ですか？」

「頼む」

城内で俺達個人の部屋が割り当てられた。そうなってから蝶が部屋によく来る。全く拒んではいないが。

「どうぞ」

蝶が煎れた茶を飲む。蝶自身も茶を飲んでいる。

「これからどうなるのでしょうか？」

「さあな。桃香殿の決断次第だ。待つしかないな」

「しかし、剣様の予想では、荊州が戦場になるのでしょう？」

「呉の陣営が慌ただしい」

無呼の部下からの情報だ。無呼自身は荊州に留まっている。魏についても無呼の部下が調べている。魏は治めた地の治安に努めている。

「呉の情報が入っているのですね。薄々感づいてはいましたが、剣様には」

「諜報部隊を抱えている。これ以上は教えられないがな」

「いえ。わたくしにお教え頂けただけで、嬉しく思います」

俺が知っているのは無呼と数人だけだがな。無呼が統率し、纏めて情報を持ってくる。俺はその情報を聞くだけだ。

「呉の陣営はどうなっているのですか？」

「解らない。だが、戦の準備が早急に進められているようだ」

「何故でしょうか？」

「俺達が荊州にいる。それが気に入らないのかもな」

「その可能性はありますね」

俺の適当な予想に過ぎないのだがな。

翌日、騎馬隊には休息を命じている。俺は軍議に出ているが、口を挟むことはない。だが、気になることがある。野放しには出来ないな。

軍議の最中、隠形の業を遣う。密かに近寄り、声をかけようとした。だが、俺に気付いたその者が離脱を試みる。そこを捕らえた。

軍議の部屋から静かに抜け出す。

「間者だな。どこの者だ?」

「・・・」

話さないか。間者としては普通だが。

刀を抜き、峰で首筋を打ち付けた。気を失い、倒れた。適当に牢に入れた。これ以上はするつもりはない。

「剣さん!」

適当に歩いていると、朱里に声をかけられた。少し怒っているか?

「どうした?」

「どうしたじゃありません!軍議をいつ抜け出したんですか!?」

「俺がいようがいなかろうが、それ程変わらないだろう?」

「うう~・・・」

「桃香殿のことか?」

「・・・はい」

「やれやれ。俺に当たるな」

城内を二人で歩いている。俺は朱里の部屋に招かれた。中に入ると、雛里がいた。二人の部屋だったか。

「どど、どうぞ」

雛里が俺を見て慌てて茶を出した。

「済まない」

茶を受け取り、適当に腰を下ろした。

「それで、俺は何の為に呼ばれた？」

「何とか、桃香様を説得出来ませんか？」

「朱里にも雛里にも、そして一刀でさえ説得出来ないのだろう？俺に出来る訳がない」

「・・・確かにそうですが」

「呉の動向が気になるんです」

だろうな。だからこそ、決断を迫らざるを得ない。

「それで？」

「軍を表立って動かす訳にはいきません。だから、独立行動権のある剣さんの騎馬隊に偵察に行って欲しいんです」

「ふぅ。俺の独立行動権を上手く利用するか」

「・・・すいません」

「まあ、呉の動きが気になるのも事実か」

「知ってるんですか？」

「少しな」

蝶には少しだけ明かしたが、他の者に明かす気はない。

「解った。調練と評して、様子を伺って来よう」

「よろしくお願いします」

「・・・くれぐれも戦闘は避けてください」

「三百騎だ。無駄に犠牲を出すつもりはない」

「いえ。それは勿論なんですが・・・」

「解っている。開戦の理由を作りたくないのだろう？」

「はい」

雛里の考えは解る。今は争わないに越したことはない。だが、戦は始まるだろう。呉の陣営から考えれば、戦を始めるのは間違いない。

「とにかく、明日にでも行ってみるとしよう。全てはそれからだ」

「はい」

俺は部屋から出た。
翌日、騎馬隊の調練と評して荊州の南へ向かっている。
「剣殿。三隊合同での遠乗りは解るんですが、南へ行き過ぎではないですか？そろそろ呉の領地です」
「荊州は元々劉表殿の領地だ。呉が勝手に領地だと言っているだけだ」
「しかし、宜しいのですか？呉の陣営は慌ただしいと仰っていましたが」
「その様子を見に行くのだ」
「つ、剣殿！それは」
「案ずるな。戦闘を起こすつもりはない。様子を伺うだけだ」
兵達は調練と思っている筈だ。違和感を感じている者はいるかもしれないがな。
呉の領地との境まで来た。ここから先に行く訳にはいかない。だが、様子は充分伺える。
「剣殿！呉の一団と思われる隊が接近しています！」
「そうか」
動かなかった。砂埃が見えてきた。呉の騎馬隊だろう。その騎馬隊も領地との境で停止した。

「我が名は甘寧！貴殿ら一行は何者だ！？」

「久しいでござるな、甘寧殿。拙者は剣でござる」

「・・・何の用だ？ここから先は呉の領地だ。早急に引き返せ」

「ふむ。このような境に甘寧殿程の者が来るとは。荊州で何かあったでござるかな？」

「・・・貴様に何か言う必要はない」

「それは失礼したでござる」

やれやれ。間違いないな。

「では、引き返せと言われるならば引き返すでござる。また機会があれば、甘寧殿」

「・・・」

甘寧殿が無言で引き返していく。俺達も引き返した。

「剣殿。甘寧が荊州にいるということは」

「ああ。戦の準備が進んでいる。荊州が戦場になる日は遠くないな」

「私達も準備を急がなくては」

「朱里と雛里が少なからず準備しているとは思うが、二人の想定よ

り呉が攻めてくるのは早いかもしれない」

「その為の偵察ですか？」

「そういうことだ」

城に戻り、兵達には休息を命じた。俺はすぐに朱里と雛里に偵察内容を伝えた。

「・・・そうですか」

「戦が始まる。準備は？」

「密かに進めていました。紫苑さんと翠さんに荊州兵の掌握をお願いしていましたし」

抜かりはないな。大したものだ。

「俺達はいつでも出られる。だが、余りに急ではないか？」

「はい。幾つか考えられることはありますけど・・・」

「待て、雛里」

気付くのが遅かった。だが、

「そこにいるのは解っている！」

刀を抜き、峰で打ち付けた。

キィン！

防がれた。相手は、

「・・・成る程。久しいな、周泰殿」

「くうっ・・・・」

鍔ぜり合いをしている相手は周泰殿だ。俺に気配を隠し、初合を受けきったか。

「知人故、逃がしてやりたいが、この状況ではそうもいかないな」

「剣さん・・・。孫呉の為、ここは退かせて貰います！」

周泰殿が強引に鍔ぜり合いを解いた。その瞬間に刀を返し、肩の辺りを斬った。

「くっ！」

斬った瞬間、体制を崩しながらも俺の前から姿を消した。逃がしたか・・・。

「すぐに追撃の部隊を」

「無駄だ。もう遅い」

「・・・今のは呉の？」

「ああ。呉の間者を纏めている周泰殿だ」

「ここで捕らえておきたかったですね・・・」

「だが、傷は与えた。暫くは満足に動けないだろう。それより二人共、自身に護衛を付けろ。暗殺されても不思議ではない」

「・・・私達より、ご主人様と桃香様に」

「その二人には既に言ってある。暗殺は手段を選ばない故に、相当防ぎにくい。警戒していろ」

「は、はい」

しかし、呉は相当本気のようだな。だが、急過ぎる。どういうことだ？

「・・・私達が荊州にいることが、呉にはよっぽど都合が悪いのかな？」

「荊州は中原を一気に狙えるから。呉が荊州を制圧する前に、私達が入って来たって感じかな？」

成る程。一理あるな。

翌日、呉の動きがはっきりしたことで、その動きに対応する為の軍議が召集された。

「呉がこの荊州に攻め寄せて来るのも遠い日ではありません」

「儂はもう老いておる。指揮は天の御遣い様と劉備殿に任せて良い

かのぉ？」

「はい」

劉表殿は俺達に任せきっている。もう表舞台にさえいたくないのかもしれないな。

「じゃあ、朱里。陣立てを」

「はい。先鋒を鈴々ちゃん。騎馬隊を翠さんと蒲公英ちゃん。中軍を愛紗さん、左翼を星さん、右翼を紫苑さん。後軍をご主人様と恋さん。私と雛里ちゃん、桃香様は中軍で指示を出させて頂きます」

「・・・今回の戦は防衛が目的です。皆さん、無理をなさらないよう気をつけてください」

妥当な陣立てか。俺の騎馬隊は独立して動く。その後、様々な指示を出され、解散した。俺は自室に戻った。

「無呼」

「何だ？」

「呉の兵糧庫は解るか？」

「長沙」

「そこを守る将は？」

「凌統」

知らない将だな。

「輸送経路は？」

「まだ解らん」

「戦が始まる前で構わない。輸送経路も調べてくれ」

「解った」

朱里と雛里の読みは当たっていた。急速に戦の準備を整えた為、兵糧を分散していない。兵糧を燃やせば、戦どころではなくなる。奪うのが理想的だがな。

「白倫に俺のことを言っていたな」

「不服か？」

「構わない。正体を明かさなければ」

「解った」

気配が消えた。やはり自身の姿を曝すのは嫌なのだろう。

それから数日が経過した。呉が動き出したとの報が入った。荊州兵を加えた北郷軍はすぐに迎え撃つ構えを見せた。俺の騎馬隊は速やかに移動を開始した。

「北郷軍は持ちこたえますかね？」

「すぐに崩されるということはないだろう。恐らくだがな」

「わたくし達は崩されないよう動き回るのですから」

「剣殿。私達がこの戦で荊州を守り通したとすれば、劉表殿は遺憾無く荊州を渡すのでは？民も安心感を持つでしょうし、力を示すことにも繋がります」

「ああ。民の心は傾くだろう。だが、桃香殿の心はどうだろうな？」

「仁君にこのような障害があるとは思いませんでしたね」

「全くだ。だが、この戦が終われば決断する筈だ」

この戦は何らかの影響を与える筈だ。良くも悪くもな。

移動を開始した翌日。北郷軍と呉軍が対峙したという報が入った。

互いに睨み合う状況だ。

「約三刻後、輸送隊が東二里の位置を通る」

無呼からの報が密かに入った。俺達は斥候の目を眩ましながらその場に動いた。

「剣殿。輸送隊です」

「当たりだ」

狙いすましたかのように襲い掛かった。輸送隊は一目散に逃げていく。

「良し。小休止だ。兵糧も取って良い」

どの道、この兵糧を運ぶ方法はない。俺達が食し、余ったものは燃やすか民に配るかだ。

「それにしても、膨大な量ですね。これでは呉の兵も飢えるでしょう」

「ああ。まだ始まったばかりだがな」

兵達は兵糧を取り、各々で好きに休んでいる。残ったものは全て近くの村に届けた。

「これで民の心が傾くでしょうね」

まだ始まったばかりだ。更に兵糧を奪わなければ、呉は退かないだろう。

翌日、呉の輸送隊は経路を変え、別々に兵糧を運んでいるという無呼からの情報が入った。一度だけで手を打つ辺り、周喩殿には油断がない。だが、ここで退く俺ではない。

隊を三つに分け、行動を開始した。遭遇戦の形にした。見付け次第、兵糧を奪うということだ。

何の保証のない策だが、勝算は充分にある。兵糧を運ぶ遅い輸送隊と、軽装な騎馬隊。特に速さに自信を持つ俺の騎馬隊ならば、優位はこちらにある。

一週間、このような動きを続けた。

「剣」

「無呼か。どうだ？」

「呉の攻勢が弱っている。明らかに呉の兵は飢えている」

「良し」

兵糧攻めは効いている。どれ程の兵糧を奪えたか解らないが、呉の兵が飢えているのなら充分だ。

「兵糧庫はどうだ？」

「呉は兵糧を運ぼうと躍起になっている」

「隙はあるか？」

「運ぶ為に人員を割いている」

上手く狙えそうだな。一息に終わらせる。

「石幻と蝶に伝令！早急に合流せよ！」

伝令が駆け出していく。石幻と蝶の隊がどこにいるかは解っている。絶えず連絡を取り合っていたからだ。

その日の夜、俺達は合流し、兵達を休ませている。俺達は兵を休ませながら兵を動かしていたが、一週間動き回っていたことに変わりはない。兵達を休ませたかった。

「剣様。成果は出ているのでしょうか？」

「充分に出ている。呉の攻勢が弱っているとの報があった」

「では、私達を集めたのは？」

「ああ。呉の兵糧が長沙に集められているらしい。そこを奇襲する」

「成る程。止めということですね」

「いつ行うのでしょうか？」

「明日の夜だ。昼過ぎから移動を始める。それまでは兵達を休ませる」

「はい」

俺は石幻と蝶を連れ、兵達に声をかけて回った。弱音を吐く者はなく、誰もが強い目をしている。

「良い目だ」

「剣殿の騎馬隊ですから」

「お前達はよく兵達を掌握している。お前達の働きが大きい」

「光栄です」

「信頼している」

「はい」

俺は石幻と蝶から離れ、一人になった。雷光に軽く声をかける。

首筋を撫でた。

「剣様。戦場です。お一人にはならないでください」

「お前が一人にしないのだろう？」

「当然です」

蝶が微笑みながら近付いて来た。俺の隣に腰を下ろす。

「疲れていませんか？」

「問題ない。お前は？」

「問題ありません」

「眠るぞ。明日が勝負所だ」

「はい」

俺と蝶はそのまま眠りについた。

翌日、昼過ぎから密かに動き始めた。長沙の城が見えた頃には、既に日が落ちかけていた。近くに身を潜めた。まだ見付かってはいないだろう。

日が落ち、夜が更けるのを待った。城門をこじ開けなければならないが、その必要はない。この一週間で散々輸送隊を襲った為、夜遅くに輸送隊が進発することは解っている。その隙を突けば良い。

「指示を出す」

「はい」

「蝶は城門を確保。俺と石幻は兵糧庫を燃やす。そして素早く離脱する」

「はい」

「他のものには一切目を向けるな。兵糧庫を焼き、勝利を呼び寄せろ」

皆が頷く。姿を隠したまま門が開くのを待った。

静かに時が流れる。誰も声を出さない。ただ待つだけだ。

夜の静寂。それを突き破る音が聞こえてきた。

「乗馬」

音が聞こえた瞬間に声を出した。皆が一斉に馬に乗る。

「行くぞ！」

声を張り上げた。先頭で駆け出す。既に門は開いている。出て来た輸送隊は無視し、門へ飛び込んだ。

「蝶！」

「お任せくださいませ」

蝶の隊に門を任せ、俺と石幻の隊は兵糧庫へ向かう。道順は無呼から聞いている。俺は先頭でひたすらに真っ直ぐ兵糧庫を目指す。皆も迷わず付いて来る。

「ここだ！燃やせ！」

皆が松明を付け、小屋を燃やす。火の手が少し上がった程度で、離脱を命じた。皆が素早く付いて来る。

門を駆け抜ける。後から蝶の隊が付いて来る。城から完全に離れたところで並足に速度を落とした。

城の一部で火の手が豪快に上がっている。消火は間に合わないだろう。

「成功だ」

「間違いなく兵糧庫か？」

「間違いない」

良し。ならば問題ない。しかし、戻って来るのが早いな。

「部下を一人残していた」

合図か何かがあったのだろう。それで判断したということか。

近くの丘に隊を隠した。追っ手が来ることはないだろうがな。

「ここで夜を過ごす。その後、北郷軍に合流する」

これでこの戦は終わりだろう。呉はもう戦線を維持出来ない筈だ。

後は俺達が戻るだけだ。

長沙（後書き）

次回予告～。

剣「呉の唐突な戦、俺達はその真意を掴みかねたまま戦を向かえた」

石「しかし、私達の兵糧攻めは成功しました。これで、呉は退かざるを得ません」

剣「・・・確かにその通りだ。俺もそう思う」

蝶「剣様は何か疑問に思っているのですか？」

剣「何かが引っ掛かっている。考えても答は出ないが」

石「まさか、北郷軍本隊が先に抜かれたなどとは」

剣「それはないだろう。北郷軍本隊を信頼するしかないが」

蝶「雛里様は準備が多少慌ただしかったものの、万全の体制で迎え撃つと言っていました。持ちこたえる筈です」

剣「考えていても仕方がない。早く本隊に合流するぞ」

石「はい」

剣「次回、『戦の理由』よろしくな」

戦の理由

戦況は少し押されてる。皆頑張ってるけど、このままだとまずい気がする。

「朱里、雛里。俺達後軍も前線に出るべきじゃないか？」

「……いえ。今、後軍が動けば、呉軍の騎馬隊に一気にここを抜かれます。そうなれば、戦況はもう覆せなくなります」

「……それに、恋さんにここを動かれると、ここを護る人がいなくなります」

「どうにかならないの？」

「考えられることは二つです。一つ目は、呉軍は兵糧不足のようですから、そう長く攻勢は続かないと思います」

「もう一つは……不確定なことが起こるという程度です」

兵糧不足は戦で捕虜にした呉軍の兵から聞いたことだ。拷問はしてない。腹が減ってたようだったから、飯を与えて懐柔したら話してくれた。何で兵糧不足になってるかは、朱里と雛里の予想だと剣の騎馬隊が動きらしい。実際、剣の騎馬隊はどこにいるのかさっぱり解らないからな。

「はわ！」

「あわわ！呉軍の一団が突破して来ました！」

ここを破られる訳にはいかない。

「恋！頼む！」

「……ん」

恋が部隊を率いて前に出ようとした。その時、

「待ってください！別動隊が間に入っていきます！」

「旗は……剣です！剣さんの騎馬隊です！」

後軍に迫っていた呉の部隊に、剣の騎馬隊が物凄い勢いで突っ込んでいく。次々と呉の部隊を蹴散らしていく。

「……恋の出番……なくなった」

「恋さんの出番がないことは良いことですよ。このまま控えていてください」

「……ん」

剣の騎馬隊が後軍と戦闘が行われている場の間に入った。これで突破してくる呉の部隊はないだろうな。

「見てください！呉軍が退いていきます」

「とにかく、この戦況は防ぎましたね」

これで押し返したのは何回目なんだろ？また対峙になるのか。

俺達は一日かけて長沙から戻って来た。まさか戻った時に、味方本陣に呉の隊が迫っているとは思っていなかったが。

俺達がその隊を蹴散らすと、呉はすぐに退いた。対峙の構えになった。俺はすぐに本陣に顔を出した。

「剣。さっきはありがとう。助かったよ」

「それは良い。状況は？」

「呉軍は兵糧不足によって士気が低下しています。ですが、呉軍は退陣する気配を見せません」

兵糧攻めは成功している。ならば何故軍を退かない？疲弊するだけだと解っている筈だ。

「何故退陣しないか、解るか？」

「・・・いえ。正直、今回の急な出兵に、無理を重ねての対峙。それらに該当するような理由は・・・」

思い当たらないか。俺もそうだ。何か余程の理由があるのか？

「剣さん。呉軍の兵糧は・・・」

「俺が奪っていた。先日、兵糧庫を焼いてきたところだ。だからこそ言い切れる。呉の兵糧は徹底的に不足している筈だ。何故退陣しない？」

「…解りませんね」

「…とにかく、この場を死守するしかありません」

雛里の言う通りだ。ここを抜かれる訳にはいかない。抜かれれば、劉表殿の下になだれ込むだろう。

俺は騎馬隊に戻った。補給を受けている。兵糧に困ってはいなかったがな。

「剣殿。本陣は何と？」

「この場を死守する。俺達はいつも通りだ」

「解りました」

騎馬隊に補給を受けさせているのは、散々動き回っていた疲れを気にしてだ。本来なら充分な休息を取らせたいが、呉はそのような余裕は与えてくれないだろう。

しかし、不可解な点は一点だけだ。何故退陣しない？

「無呼。呉軍に異常はないのか？」

「あれば伝えている」

その通りではある。何も解らないままか…。

翌日、呉がまた動き出した。休息も充分に取らないのか？兵糧不

足で時間がないのは解るが、何をそれ程焦っている？
呉が動き出したのに合わせて北郷軍も動き出す。俺達騎馬隊は本陣付近で影を潜めた。呉の真意が解るまで動くのは危険だと判断した。

「剣様。雛里様の使者が、戦線に参加して欲しいと」

「期を見ると伝えろ」

乱戦の最中では速さを生かせない。介入するのは後だ。
北郷軍と呉軍が衝突した。開戦だ。昨日の戦を見る限り、力の差はそれ程ではない。

「・・・何だ？」

開戦して数刻。見るからに押されている。力は呉軍が僅かに勝っていたように思われたが、これ程顕著ではなかった。

「昨日と今日でこれ程変わるものでしょうか？」

「何かきっかけがあったのだろう。これ程までに力を出すような何かが」

「そのきっかけが、戦線を維持する理由でしょうか？」

「・・・恐らくな」

このままでは押し潰される。ここを抜かれれば、荊州を取られる。

「介入するぞ」

石幻と蝶に短く伝え、駆け出した。ゆっくりと迂回して側面を突こうとした。

「前方より騎馬隊！甘の旗です！」

来たか。甘の旗ということは、甘寧殿か。数は五百騎程か。

呉軍の側面を突く構えから甘寧殿の騎馬隊に向かって方向を変えた。ように見せた。

再び方向を変え、呉軍の側面に突っ込んだ。呉軍に動揺が走る。その隙に前線で戦っている愛紗の姿を確認した。

「愛紗！全軍を後退させろ！このままでは押し潰されるぞ！」

「解っている！解っているが、それでは危険だ！」

確かにただ後退するのは、追撃を受け切れず、大きな犠牲を出す危険性がある。

「頭を使え！星と紫苑を先に離脱させろ！」

「……そうか！解った！」

短い会話を終え、乱戦から抜け出した。すぐ後ろに甘の旗が見えた。会話のうちに追い付かれたか。

石幻と蝶に目配せした。手を挙げる。一斉に三隊に別れた。

甘寧殿は五百騎で俺の隊に真っ直ぐ向かって来た。その判断に迷いはない。流石だ。流石だが、追い付かれることはない。

俺の騎馬隊が機動力で負ける訳がない。更に、数はこちらの方が少ない。少ない方が纏まりがあり、速さは勝る。

追い付かれないまま駆け続けると、前方から別の騎馬隊が見えた。呂の旗。呉の呂蒙という者か。

左に躱した。背後で甘寧殿と呂蒙の騎馬隊が合流し、俺の隊を追って来た。だが、その合流した隙が仇となる。

「行け」

呟いていた。その瞬間、左右から騎馬隊が踊り出て来た。俺は見なくとも解る。石幻と蝶の隊だ。甘寧殿と呂蒙の騎馬隊に突っ込む。

突然の事態に甘寧殿と呂蒙の騎馬隊は対応出来ていない。状況を打開しようと、甘寧殿と呂蒙の騎馬隊が別れた。石幻と蝶の隊は一塊になっている。俺の隊が合流し、元の形に戻った。

甘寧殿と呂蒙には目も向けず、再び乱戦の場に躍り込む。歩兵を蹴散らす。

突っ込んでは離脱することを繰り返した。呉軍が動揺している隙に、北郷軍は少しずつ後退している。先に後ろに下がった星と紫苑が後退してきた兵達を迎え入れている。

「剣様！甘の騎馬隊の騎馬隊が迫っています！」

甘寧殿の顔が見えた。物凄い形相だな。翻弄されたのが余程腹立たしかったか？

「愛紗。無事に後退出来るな？」

「大丈夫だ！」

「騎馬隊の脚は止める」

甘寧殿の騎馬隊に真っ直ぐ向かう。手を挙げ、三隊に別れた。

それを見た甘寧殿が動きを止めた。迷っている。俺達は反転し、後退した。甘寧殿の騎馬隊は全て無視した形だ。

「剣さん。こちらです」

「ああ。紫苑、俺達で最後か？」

「ええ。楊延さんと白倫さんも別々に戻って来てますよ」

一度目の闘争は、甘寧殿の騎馬隊を本気で叩くつもりだった。俺が囮となり、石幻と蝶が回り込む時を稼いだ。呂蒙が参戦したのは予想外だったが、それなりに被害が出ただろう。

二度目はただ脚を止めただけだ。迷ってしまった甘寧殿の失態だろう。今頃歯ぎしりでもしているかもな。

「……さて、これからどうするか」

「鈴々はまだ戦えるのだ！」

「兵達が辛い。お前だけが戦っている訳じゃないんだ」

どの部隊も辛いのかもしれない。あれだけ押されていたのだからな。

「愛紗。どうする？呉はすぐにでもまた攻めてくるぞ」

「朱里ちゃんから伝令が来てるわ」

星と愛紗の会話を遮り、紫苑がそう告げた。朱里に何か策があるのか。

「……冥琳。次で終わりよ……」

「……ああ」

「……姉様」

「後は頼むわね……」

「甘寧。剣を止められるか？」

「この命に代えても」

「良し。次で終わりだ。荊州を奪う！」

「全軍進撃！呉軍の勇姿！北郷軍に見せ付けるぞ！」

呉が再び動き出した。それに合わせて北郷軍が防衛線を引く。俺の騎馬隊は全軍の乱戦から逃れる為、本軍の脇に外れた。

甘寧殿の騎馬隊が俺の騎馬隊に合わせて動いている。どうやら甘寧殿の騎馬隊は完全に俺達に照準を合わせているようだ。好都合だな。

「剣様？」

「甘寧殿を討ち取るぞ」

「無理はなさらないでください」

「するつもりはない」

先の闘争を鑑みれば、恐らく甘寧殿を討ち取れる。想定外のことが何も起きなければだ。油断するつもりはない。兵達の命を背負っているのだからな。

呉軍の攻勢が始まった。北郷軍の防衛線はそれ程簡単には崩れないだろうが、勢いは呉軍にある。その勢いを挫く。

「貴様の相手はこの私だ！」

真っ直ぐ向かってきた。適当に受け流し、通してやる。無駄にぶつかり合うつもりはない。その隙に歩兵の一団を蹴散らす。

甘寧殿の騎馬隊が追い縋ってくるのを確認し、俺達も駆け出す。追い付かれることはない。

だが、状況は刻一刻と変わる。北郷軍が押され、じりじりと下がっている。個人戦では勝っていても、全体では負けている。

北郷軍が押され続け、潰走しかけている。俺達は甘寧殿を気にして、なかなか介入することが出来ない。甘寧殿の狙いはこれか。

「剣殿！隊を別けるべきでは？」

「いや、このままだ」

一刻後、北郷軍が完全に崩れ始めた。一部は潰走を始めている。

「貴様ら北郷軍の負けだ！」

甘寧殿の声が聞こえてきた。そうか、そろそろか……。

ドン！ドン！ドン！

鑼が鳴った。勢いに乗って乱戦に迫る騎馬隊の一団が見える。馬の旗。馬超殿と馬岱殿の騎馬隊だ。

押しに押していた呉軍を次々と蹴散らしていく。伏兵は成功だ。

「反転！これより反撃に移る！」

一斉に方向を変え、三隊に別れた。混乱している甘寧殿の騎馬隊を無視し、歩兵を蹴散らしていく。

後方から北と劉の旗が見えた。本陣だ。潰走した兵達を迎え入れ、戦場に姿を現したのだろう。ここが勝負所だと判断したようだ。

北郷軍は既に攻勢に転じ、呉軍を押し返している。混乱している呉軍は持ちこたえられていない。勝てる。

そう考えた瞬間、背筋に冷たい汗が流れた。すぐに手を挙げ、三隊を集結させた。全力で駆け始める。

北と劉の旗に向けて一目散に駆けている一団がある。真っ直ぐ一刀と桃香殿の首を狙っている。あの二人が北郷軍の大将だ。もし首を討られれば……、北郷軍は壊滅する。

「駆けろ！雷光！」

雷光が全力で駆け始める。少しずつ騎馬隊と距離が開き始めた。

騎馬隊の指揮は石幻と蝶に任せておけば良い。既に呉の一団は本

陣に入り込んでいる。雷光は全力で駆け続けた。
一騎で本陣の乱戦に突っ込んだ。一刀と桃香殿を捜す。迷わず旗下に向かった。

「恋！」

恋が大きな円を作って呉の攻撃を防いでいた。一刀と桃香殿はあの円の中にいるのだろう。呉の将は、

「孫策殿！？」

ここを攻めているのが孫策殿だと！？
熱くなった頭を瞬時に冷やし、恋の傍にいる兵を二、三人斬り倒した。雷光から飛び降りる。
円の中心で必死に指示を出している朱里と雛里の傍に雷光は寄って行った。雷光が二人を護るだろう。問題は、

「・・・何をしている？・・・孫策」

「久しぶりじゃない。また逢えて嬉しいわ」

軽口を叩いているが、目は全く笑っていない。対する俺も、口調に気を回す余裕はない。

「ここに何をしにきた？死にに来たか？」

「ええ。その通り、北郷一刀と劉備と一緒にね！」

どういうことだ？何を企んでいる？
だが、考えている時間はない。今にも呉の兵が円を突破するかも

しれない。
しかし、その考えは杞憂に終わった。石幻と蝶が騎馬隊を率いて突っ込んで来たからだ。呉の兵達を蹴散らしていく。

「‥‥形勢逆転だ」

無謀な行動の結果だ。と、言うつもりだった。

「ゴホッ！ゴホッゴホッ！」

孫策が咳込む。対峙の最中だというのにだ。

「‥‥そうか。貴殿は」

「‥‥ええ。不治の病でね‥‥」

咳込んでいたのを手で抑えていたようだが、その手には血がこびりついている。どうやら本当のようだな‥‥。

「だが、思惑は潰えた。見たところ、本当に不治の病なのだろう。戻れ」

今なら見逃すつもりでいる。長くないのは見れば解る。さほどの影響はないだろう。

「‥‥私がもう長くないのは解っている筈よ。地獄への道案内は、北郷一刀と劉備にして貰うつもりだったけど、貴方で我慢するわ‥‥剣！」

目に再び闘志が宿った。もはや、死ぬまで退かないだろう。ここ

で落とす命と決めているのだろう。

「‥‥剣」

「恋。お前は一刀と桃香殿の傍に行け。二人に万が一のことがないようにな」

「‥‥剣も」

「死なんさ」

死ぬつもりなど毛頭ない。むざむざ地獄に付き合う義理もない。

刀を抜いた。立ち合い。死ぬ間際の人間は強い。今も、孫策の闘気は圧倒的だ。

互いに駆け出した。馳せ違う。刀と剣が一度だけ交錯した。鮮血が飛び散った。

戦の理由（後書き）

次回予告～。

剣「不治の病・・・か」

愛「剣？」

剣「健全な身体があってこそ、何不自由なく生きられる。だが、それは身体を悪くしてからでないと気付かない」

愛「そうだな。その通りだと思う」

雛「・・・そして、今回の戦の特攻」

朱「孫呉の未来の為に、荊州を奪おうとしたんですね・・・」

石「・・・だが、その思惑は俺達によって途絶えた。代わりに・・・」

蝶「・・・剣様」

剣「死ぬ覚悟を決めた人間は強い。何もかもかなぐり捨てて挑まれる」

恋「・・・恋・・・代わりに戦う」

剣「お前は一刀と桃香殿の傍にいろ。二人を護ることがお前の仕事だ。

俺は死なない。全てを捨て、先にあるものは死。だが、俺にはま

だ先がある。生きる渇望がある。まだ為すべきことが俺にはある。

次回、『道筋』よろしくな」

道筋

鮮血が飛び散った。

「くっ……」

左腕を抑えた。血が流れている。

「剣様！」

「来るな」

蝶が俺に駆け寄りかけたが止めた。命に大事はない。勝負も既に着いている。

「……貴殿の命を燃やしたその一太刀、見事だった。確かに俺に届いたぞ」

返答は返ってこない。なぜなら、孫策の命の灯は既に消えている。もう死んでいる。

馳せ違った一太刀、俺は孫策の剣を弾き飛ばした。俺は左腕を斬られたが、俺は斬っていない。それでも孫策は死んでいる。立ったまま死んでいるのだ。

孫策の病は相当に命を蝕んでいたのだろう。そして、最後の力を振り絞り、俺に一太刀浴びせたということか。

「蝶」

「は、はい」

「一刀と桃香殿の安否は？」

「石幻様が」

蝶は俺の下に来たということか。

「剣様。左腕のお怪我を」

「後で良い」

呉の兵は倒してある。もうこの場を攻めるような部隊はない。一先ず、安全か。

「剣殿！」

「石幻。一刀と桃香殿は？」

「無事です。大事ありません」

「解った」

無事か。ならば問題ない。

「石幻、蝶。騎馬隊は任せる」

「剣様？」

「俺は孫策殿の遺体を渡してくる」

戦場は互いに納まりつつあった。愛紗達も慌てて退いて来ている。呉も攻めて来てはいない。また対峙の形になる筈だ。

「剣様！危険です！呉の方々が何をなさるか・・・」

「何もされない筈だ」

確証はない。だが、この遺体は返しておかなければならないだろう。

孫策殿の亡きがらを抱え上げ、呉軍の方向に歩き出した。時折擦れ違う者達に不審な目を向けられたが、全て無視した。一人で呉軍へと向かう。呉軍から迎えは来ない。呉も不審に思っているのだろうな。気にせず、呉軍陣営に辿り着いた。

「北郷軍、剣でござる。孫策殿の遺体を返しに参った」

「・・・のこのことよく来れたな」

周喩殿が一人出て来た。かと思うと、孫権殿が駆け寄って来た。

「姉様！姉様！」

孫策殿に抱き着くので、俺は抗わずに手を離した。泣いているが、声をかけることは出来ない。

殺気を感じた。だが、避けることはしなかった。刃が真っ直ぐ向けられていた。動じることもなかった。

「・・・拙者を斬るでござるか？孫権殿」

「姉様は！」

「死んだ。最期を看取ったのは俺だ」

再び口調はどうでもよくなった。ただありのままに真実を伝える。

「貴様！」

「何だ？」

俺が退くことはない。真っ直ぐ向き合っている。

「・・・貴様が姉様を殺したのか？」

「最後に立ち合ったのは俺だ。だが、孫策殿に斬られた跡などないだろう？」

むしろ斬られたのは俺だ。左腕は今だに処方していない。どうでも良いがな。

「姉様・・・」

「孫権殿。孫策殿を・・・」

そこで止め、刀を抜いた。痛烈な殺気を感じる。目前まで迫った剣を受け止めた。

キィィィン！

「・・・何だ？今はお前に用などないがな、甘寧」

「貴様はここで殺す！それが孫策様への手向けだ！」

「お前が勝手にそう思っているだけだ。死んでやるつもりはない」

「私が貴様を殺す！」

軽く息を吐き、刀を構えた。ただし、左腕は動かない。

「お待ちなさい！」

蝶が馬に乗って飛び込んできた。俺を差し置いて甘寧と向き合った。

「剣様に手出しはさせません！」

「退け！貴様に用はない！」

一触即発の状況になってしまった。前方にいる呉軍からも、後方にいる北郷軍からも飛び出して来ている者達がいる。このままでは再び乱戦になる。そうなれば、

「静まれ！」

一喝する声が飛んだ。その迫力に、誰もが押し黙った。

「……孫権殿」

「……姉様の御前だ」

目には一杯に涙を溜めている。それでも人の上に立つ者として、

堪えているのだろう。この状況で乱戦になれば、亡くなった孫策殿がどうなってしまうか解らない。賢明な判断だ。

「剣殿。姉様を運んで頂いたこと、感謝する」

「貴殿らが戦線を維持する理由は無くなった筈でござる。早く、孫策殿を呉の地に弔ってあげるでござる」

「ああ・・・」

静かに孫策殿を抱き抱え、呉軍へと足を向ける。その光景を痛々しく見ていた。

「剣・・・」

「まだ何か用か？」

甘寧がまだ残っていた。冷ややかに目を向けた。

「貴様は私が殺す。必ずだ」

「勝手にしろ。俺は生きる」

甘寧が俺を睨みつけ、孫権殿を追っていった。俺は静かに後ろ姿を眺めている。

呉軍はすぐに退陣した。孫策殿の命があるうちに荊州を奪うつもりだったのだろう。しかし、予想以上に戦が長引き、孫策殿の死期を迎えてしまった。だからこそ、最後の特攻だったのだろう。

「剣様！お怪我を！」

「ああ。戦は終わりだ。引き上げるぞ」

「剣殿！御無事ですか！？」

「ああ」

石幻が騎馬隊を率いて来た。安堵の息を吐いている。

「俺は大丈夫だ。戻るぞ」

「はい」

北郷軍陣営に戻った。皆も無事なようだ。

「剣。良かった。無事だったんだな」

「ああ。お前も今回は危うかったな、一刀」

「助かったよ」

「何。気にするな」

「剣さん。ありがとうございました」

「いや。桃香殿も無事で何より」

「剣様。左腕の処方を致しましょう」

「ああ。頼む」

蝶に連れられ、空きの兵舎に入った。騎馬隊のことは石幻が纏めているのだろう。

蝶が左腕の血を止め、処方する。それ程深い傷ではないが、放っておくのは良くないだろう。

「済まないな。助かる」

「いえ。傷は深くありませんが、余り無理をしてはいけませんよ？」

「暫くは安静にする」

安静に出来るだろう。一刀と桃香殿がどのような決断を下すかに因るのだがな。

曹魏は内政に努めている。孫呉は孫策殿の死を立て直す時間が必要だろう。これからが好機ではある。裏を返せば、これからの動きで未来が決まる。蜀の地を取るか否か。

不意に何か気配を感じた。咄嗟に刀に手をかけた。

「ほぉ。やはり、出来るものじゃのぉ」

聞き覚えのある御老体の声。何故ここにいる・・・？

「・・・御老体の身で、まだ死してはいなかったようでござるな」

「そう易々とは死んでやらんよ。主もじゃがなのぉ」

ゆらりとオレの前に現れた、以前命のやり取りをした相手。

「何用でござるかな？左慈殿」

「久しいのぉ、剣よ」

警戒は解いていない。蝶が慌てて警戒するが、手で蝶を制した。

「今回は近くまで寄ったついでにその顔を拝みに来たんじゃよ。そう邪険にするでない」

近くまで来た？つい先程まで近隣は戦の最中だった筈だ。

「戦を見ていたのじゃよ。予想通りな」

「何を見にでござるかな？」

「孫策の死に様じゃよ」

何だと・・・？孫策殿の病を知っていたということか？

「孫策の病を知っていたのは呉の中枢だけだったんじゃがな。兵に知らされたのも、最後の戦が始まる直前じゃ」

そのことにはある程度の予想は出来ていた。最後の戦で呉の勢いが明らかに増したのも説明がつく。

「それを何故貴殿が知っているでござる？」

「さて？」

それを明かす程、この御老体は軽率ではないか。

「小娘。おかしな行動はするでない」

兵舎の外に何らかの合図を出そうとした蝶に制止の声をかけた。
やはり、油断はしていないか。

「この場で騒ぎを起こすつもりはないわい。小娘は大人しくしておれ」

「左慈殿。蝶のことは良いでござろう。拙者に何か用でもあったのではないでござるか？」

「主はいつも大変じゃのぉ。常に何かを護らなければならんとは」

そのことを解っていて俺のところに来たのだろうがな。周到なものだ。

「主は道を理解しておるか？」

「…どういう意味でござる？」

「道があるから歩くのか？歩くから道があるのか？主はどう考える？」

何の問い掛けだ？何かの謎掛けか？

「人の道についてじゃ。主の考えを聞かせい」

「…俺達の歩く道筋はない。歩くから道筋が出来、それが道となる」

「歩くから道がある。その考えかのぉ・・・」

「それがどうした？」

「外史じゃよ。解っていると思うが、二人の歴史外の者によって乱れつつあるんじゃ。儂はその外史を導かねばならんのじゃよ」

「・・・それで？」

俺と一刀の存在によって歴史が乱れる可能性は充分にあった。だが、そのことを俺達が知る由はない。今を生きている俺達に、そのようなことまで気にかける余裕などないのだから。

「主がどう生きるか、見定めさせて貰うとするかのぉ。それを伝えに来ただけじゃ」

「俺は生き方を変えるつもりはない。先に見据える乱世の終結、平和な未来の為に、俺は刀を振るう」

「主がいつまでその想いを貫き通せるか、楽しみじゃよ・・・」

すうっと音もなく消えていった。追う気にもならなかった。

「剣様・・・」

頭を切り換えた。今考えれば、蝶に聞かれていたのはまずかったかもしれない。今更遅いのだが。

「・・・何だ？」

「……大丈夫ですか？」

「……さあな」

重たく腰を下ろした。あの御老体は一体何者だ？何故、何もかも解っているかのような口ぶりなのだ？

「……剣様」

「……済まない。一人にしてくれ」

頭を切り換えたつもりでもなかった。あの御老体のことばかり考えている。

「……お言葉ですが、剣様。お一人には出来ません」

「……」

背に暖かい感触を感じる。しっかりと掴まれている。蝶が俺を後ろから抱きしめているのだ。

「……止めろ、蝶。お前に抱きしめられる権利など、俺にはない」

「それなら……わたくしが剣様にその権利を与えます。今の剣様を、お一人には出来ません」

「……俺は」

「剣様、わたくしは何もお聞き致しません。話されたくはないでしょうから。ただ、わたくしは傍にいます」

不思議と、あの御老体のことが頭から消えている。
覚えている。当の昔に忘れたと思っていたあの暖かい感覚を‥‥。

「蝶‥‥」

体を反転させた。真っ直ぐ向き合う。

「‥‥お前は」

あいつに似ている。乱世の最中、俺の世界を明るく照らしてくれたあいつに。

「‥‥いや、何でもない」

「‥‥剣様？」

「何でもない。忘れてくれ」

言うことは出来なかった。蝶は蝶だ。幾ら似ていたとしても、蝶はあいつではない。
だが、俺が落ち着いているのは確かだ。蝶に何らかの安らぎを感じている。

「‥‥お前は、本当に俺の心労を和らげてくれるな」

「はい。そう言いましたから」

「‥‥そうか」

「お眠りになりますか？お疲れだと思いますが」

「……良いのか？」

「はい。寝台はありませんので、わたくしの膝で宜しければ」

「頼もう」

疲れをそれ程感じている訳ではないつもりだった。だが、蝶に素直に従った。頭を蝶の膝に乗せた。柔らかい感触だ。

「お休みくださいませ、剣様」

「……ああ」

意識が少しずつ薄れていく。抗う気はなかった。

「お休みなさい、剣様……」

心地好く夢の世界へと誘われた。

「お休みなさい、剣様……」

剣様が目を閉じました。何度か剣様のお傍で眠ることはありましたが、眠っていると思えたことはありません。

しかし、今は違います。剣様から微かな寝息が聞こえています。

安らかに眠っているようですね。わたくしの膝に乗せた剣様が、ほんの少しだけくすぐったく感じます。
先程の御老体の方が気にならない訳ではありません。話が理解出来ず、お聞きしたいことはあります。しかし、剣様の普段から変化しない表情が厳しくなるのを見ていたので、聞くに聞けません。

「剣殿」

石幻様が兵舎に入って来られました。声を出そうとした石幻様に、わたくしは仕種でお静かにと伝えました。

「…眠っているのか？」

「はい。お疲れの御様子でしたので」

「そうか。剣殿は、弱みを見せない人だからな。眠れる時に眠って貰わなければ」

「はい。何か御用件が？」

「騎馬隊のことを報告に来た。剣殿が眠っているのなら、後で伝えるとしよう」

「申し訳ありません。騎馬隊のことはわたくしも責任がありますのに」

「いや、気にするな。俺には出来ないことを蝶にして貰っている。剣殿のことは任せる」

「はい」

「では、騎馬隊のことは俺が」

「お願いします」

石幻様が静かに兵舎から出て行かれました。

わたくしと石幻様は、役割を分けている節があります。石幻様が騎馬隊を全面的に管理し、わたくしが剣様の補佐をするという具合です。

暫く時が経ちました。剣様は健やかに眠っています。普段から余り睡眠を取られていなかったのでしょう。

「剣殿は今休まれている。言伝なら俺が聞く」

「傷を負ったと聞いたが、大丈夫なのか？」

「大事はない」

石幻様と、恐らく関羽様の声が聞こえます。何かあったのでしょうか？

「うっ……」

剣様が声を出します。起きられたのでしょうか？

「ああ……眠っていたのか……」

「はい。お目覚めですか？」

「くあっ……」

「まあ」

剣様が大きく欠伸をします。普段からは考えられないことですね。

「外で何かあったか？」

「石幻様が関羽様を対応していますが」

「そうか」

剣様がわたくしの膝から上体を起こします。少し名残惜しい気がしますね・・・。

「愛紗のことは石幻に任せておくか」

「剣様。もう少しお休みになられた方が良いのでは？」

「いや、もう充分だ。随分眠らせて貰った」

「剣殿？起きられたのですか？」

「石幻か。今起きたところだ。愛紗は？」

「ここにいる」

「ああ。済まないな。俺に何か用だったか？」

「ああ。出立は明日だ。荊州の城に戻る」

「解った。わざわざ済まない」

「いや。傷は大丈夫なのか？」

「問題ない。すぐに治るだろう」

「そうか。無理はするなよ」

「お前もな」

剣様と関羽様はにこやかに話されています。何故か、胸の辺りが疼いています。この憤りは何でしょう・・・？

翌日、わたくし達は荊州の城に戻りました。

道筋（後書き）

次回予告～。

剣「……左慈、あの御老体は一体何者だ？」

蝶「剣様……」

剣「案ずるな。気にし過ぎることは良くないだろう」

一「呉との戦は、ひとまず終わりだな。何とか守ったな」

剣「一刀、今後の方針はどうなっている？決まったのか？」

一「いや……まだ桃香と話してて」

剣「早く決めるべきだ。朱里と雛里が動けない」

愛「まあまあ、そう慌てるな、剣。もうじき冬になる。魏と呉も動けなくなる筈だ」

剣「まあ、早めに決めることだ。しかし、もう冬か……」

蝶「剣様、どうかなさいましたか？」

剣「冬は良いな、蝶。さて、今冬は見られるか？」

愛「どうした？」

剣「いや。次回、『幻想の世界』よろしくな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1633r/

刀と信念を受け継いだ転生者

2012年1月10日07時49分発行